不思議な恋人

ドーリ・ソージ

革命の娘

ソトァヴルカ

平林初之輔譯

不思議な恋人

革命の娘

ションリード

平林初之輔譯

新潮社版

新潮社版 ¥1.40

ウォルター著

ジョン・リード著

不思議な戀人

革命の娘

平林初之輔譯

新潮社版

不思議な戀人
革命の娘

カルヴァトン
ジョン・リード 著

平林初之輔 譯

新潮社版

平林初之輔譯

不思議な戀人

カルヴァトン著

革命の娘

ジョン・リード著

新潮社出版

目次

不思議な戀人

不思議な戀人……一一

歸宅……八五

御心をなさせたまへ……一一〇

革命の娘

革命の娘……一八〇
忘れてしまつた世界……二〇二
ブロオドウェイの夜……二〇九
アメリカ人――マック……二二〇
エンディミオン……二二八
メキシコ風景……二四一
小國民の權利……二四八
なすべき事……二五四
資本家……二六二
戸主……二七五
情けのあるところ……二八四
正義の味……二九四
お人好し……二九九
もう一つの恩知らずの話……三一六
革命繪卷……三二一

――目次了――

不思議な戀人

カルヴァトン著
平林初之輔譯

はしがき

人、神に言へり、吾を滅ぼすか、然らずんば吾を滿足せしめよ――**ポオル・ヴァレリ**

ヴィ・エフ・カルヴァートン氏は、既にヨオロッパとアメリカとで、羨ましい程の名聲を博してをられる。彼は、文學批評の、これまで閑却されてゐた一面を强調することによつて、文學に重要な貢獻をした。彼の功績は、或る作家の社會學的背景は、その作家の作品を、苟くも念入りに說明するときには、見逃しては危險な要素であるといふことを力强く指摘したところにある。彼はこの事實を指摘したばかりでなく、文學批評界に一つの運動を起して、それは既に、アメリカ、イギリス及び多分ロシアの思想にも決定的な影響を與へたと言ふことができよう。彼の社會學上の著述はフランスにもよく知られて居り、彼は、フランスの定期刊行物に、屢々寄稿してゐる。彼は、社會學上の著作をする途すがら、多くの該博な知識を集めた。そして、この該博な知識を、單純、明澄な一般的叙述にうつしたのは彼の功績であつた。

『三つの不思議な戀人の話』をもつて、カルヴァートン氏は、すぐれた心理學者として、又極めて困難な領域に於ける立派な創造的藝術家としてあらはれた。

この三部作は、既に、ハヴェロック・エリスとシャーウッド・アンダースンとの歡喜に充ちた賞讃を博した。エリス

氏は、この三部作の第一作、『不思議な戀人』をジョルジュ・デュアメルの『サラヴァンの日記』に比較し、しかも、彼はこの方が、デュアメル氏のすぐれた想像的な作品よりも優つてゐると考へてゐるらしい口吻を洩らした。シャーウッド・アンダースンは、この作品は、あまりに良い作品であるために、一般讀者には受けがよくなからうと心配した。だが、カルヴァートン氏の正確な、まざ〳〵と眼に見えるやうな想像は、生き〳〵として、しかもきちんとした繪畫的な鋭さをもつて表現されてゐるために、具體的な人間のうちに、見事に性格が示されてゐるから、この三部作の全體は、私の注意をひいたと同様に、あらゆる讀者の注意をもひくだらうと、私は感ぜずにはゐられない。

私がこれまでにも折にふれて度々指摘したやうに、アメリカの短篇小說とヨオロッパの短篇小說とは、全體的に言つて、傳統的に鋭い對照を示してゐる。アメリカの短篇作家は、一般に、物語の構成と、筋の運びとに主要な力を注ぐが、ヨオロッパの短篇作家は、主として性格描寫と、雰圍氣の描寫とに力を注ぐ。カルヴァートン氏の三部作は、この點で、アメリカの傳統よりもヨオロッパの傳統に從つてゐるといふことを、先づもつて述べておかねばならぬ。

この三部作の各部分は、テーマに十分に肉がついてふつくらとしてゐる。テーマの骨組みに肉づきが施されて、物語りの骨組みはどこにも露はに見られない。カルヴァートン氏は建築家ではない。彼は一刻も對象から眼をはなさない畫家である。彼は靜かに、しつかりと、自分の夢を繪の中へ織り込み、ぐん〳〵迫る力で、彼の目的を實現するやうに、注意深く考へぬいた、多くの巧みな刷毛さばきで、彼の見たものを、眼の前にある紙上へうつ

してゆく。彼がこれ等の物語で取り扱つてゐる三つの主題は、危險な材料である。これを安全に扱ひこなすためには偉大なる藝術的完璧と、多分の含蓄ある沈默とが必要であつた。私は、彼がこれ等の挿話を解釋したしかたは、完全に成功したと信ずるものである。

この三つの物語を一卷の書物に集めることを正當化する統一の原則は何であるか？ それは、エルネスト・セイエール伯が、性のロマンテイック・イムピリアリズムと呼んだところのものに對するカルヴァートン氏の興味である。世の中には、色々な種類のイムピリアリズムがある。政治上のイムピリアリズムは私たち凡てのよく知つてゐるところである。ホブスンからニイチエに至る多くの哲學者たちに定義された權力への意志は、非常に樣々な形態をとることができる。それは、どんな形態をとつても、結局一種のイムピリアリズムであらう。若し、權力への意志が、ある人に於いて、クラシックではなくて、むしろロマンテイックな個人的態度と結びついたならば、そしてその人が藝術家であつたならば、ロマンテイック・イムピリアリズムの或る形態がその個人に現はれるであらうといふことを、一般的原則としても安全であらう。

かやうな人は通常理想主義者として知られるであらう。そして彼の理想主義の特質は、創造的であることもあらうし、破壞的であることもあらう。時としては、それは兩方であらう。或る人のロマンテイック・イムピリアリズムは三つの道——宗教、性、若しくは、一般世界に對する偏狹——の何れか一つをとつて外部へ現はれ勝ちである。非常に複雜な性格をもつた人の場合には、それはこの三つの道のすべてを通じてあらはれる。時々、それは、完全な唯我主義の形態をとることがある。或ひはもつと溫和な場合には純粹數學への沒頭といふ形態をとる

こともある。

私たちは、それに出くわすときには、それと同時に、共通の人間生活の現實に對する個人の著しい不調和にも出くわす。かやうな不調和は、前世紀に、世界の偉大なる作家及び藝術家たちに益々多く見られるやうになつた。アメリカでは、諸君はハウソーン、ハーマン、メルヴィル、及びエミリイ・ディキンスンを見出すだらう。イギリスでは、シエリイ、コオルリッヂ、ブレーク、及びエミリイ・ブロンテを見出すだらう。大陸では、ドストエフスキイ、トルストイ、レオパルディ、ヘルデルリン、クライスト、ウナムノ、ボオドレエル、及びラムボオを見出すだらう。西ヨオロッパに於いて、私の知つてゐるもつと以前の例は、レオナルド ダ・ヴィンチとミケランジエロとに見出される。混淆した形態に於いては、今日でも、ジエームス・ジョイス、アンドレ・ジイド、及びデイ・エチ・ロオレンス等の作家に見られる。

これ以上に、名前を列擧する必要はあるまい。諸君は、ロマンテイック・イムピリアリズムの三人の臨床患者が、本書の中で、カルヴァートン氏によりて見事に示されてゐるのを見出すであらう。ロマンテイック・イムピリアリストが或る種の完璧に對する情熱をもつことは避け難いことである。或る時は、この情熱は、完全な性的感應に對する情熱であり、ある時はスピノザの神に對する渴望であり、或る時は偉大なる淸敎徒たちの宗敎改革の情熱である。そして、屢々それは單なる完全な知識に對する情熱でしかないことがある。その中に含まれてゐる不調和は、アドラーの心理學では、權力への意志が、自己の無力感のために挫かれたものとして說明されてゐる。この無力感は、それを感ずる人が、完全な幻想の世界をつくつて、その中に自分がすんでゐるのだと信じ、若しく

は他日すむことができると考へることによりて埋め合はせされる傾きをもつてゐる。

カルヴァートン氏の第一の物語『不思議な戀人』に於いて、彼は完全な性的滿足に對する渴望の症狀を研究してゐる。『御心をなさせたまへ』に於いては、彼はスピノザの神の渴望と同じやうな性的情熱の症狀を研究してゐる。『歸宅』に於いては、彼は數學者の性的イムピリアリズムの症狀を研究してゐる。

カルヴァートン氏は、彼の文章の、しづかな、催眠的なリズムによつて、えも言はれぬ親しみのある雰圍氣をつくり出してゐる。人の心をなだめ、いたはるやうな反覆は、讀者を彼の物語にうつとりと魅入らせてしまふ。文章の會話風な調子は讀者に、彼が、自分の個人的經驗を語つてゐるのではないかといふ感じを起させる。一つ一つの場面、一つ〳〵の行は、なだらかに進行してゆくので、カルヴァートン氏が、彼の豐富な題材をどれ程壓縮したかを知るのが困難な位だ。だが、よくしらべて見ると、かやうな珍らしい心理的分析の天分は、もつと引きのばして書けば立派なものになるだらうといふことが明白になる。そして私は、カルヴァートン氏が、若し將來長篇小說を書くやうなことがあるとしたら、その小說は、アメリカ文學の重要な示標となるであらうと思ひ望んでゐる。

この三部作は、恐らく、何物をも證明してはゐないと言へるだらう。このやうな批評をすることは、藝術の全疑問の解答を求めることである。藝術家の仕事は疑問を提起し、現實の姿をうつすことである。カルヴァートン氏は、この書物で、哲學者たちをして幾年もの間忙殺させるのに十分な疑問を提起した。私はこの三部作を、近代の私たちの機械的な生活に於ける若干の重要な問題の極めて公平な提起として推薦するものである。カルヴァー

トン氏はまた哲學者でもある。そして、哲學者としては、彼は、疑ひもなく、藝術家として彼がこゝに提出した問題に、小説以外の形で、全力をつくして答へようとつとめるであらう。

一九二九年三月一日

ロカルノにて

エドワード・ジエ・オブライエン

不思議な戀人

私はまたすつかり思ひかへして見た。どうも不思議だ。けれども、いくら思ひ出してもついぞ恐ろしくなつたことはない。私がこのことをすつかり思ひかへしたことは、もう今までに百萬遍、いやそれ以上にも上るだらう。こんな無限の反覆は算へることなんかできやしない。他のことを考へてゐる時でも、きつといつのまにか、この同じ問題を考へてしまつてゐるのだ。それは、もう私の妄執になつてゐるのだつてことを私は知つてゐる。それでゐて、いつでも、もうこの妄執からのがれて自由になつてゐるんだといふ、合點のゆかない、感じがのこつてゐて、それに欺かれたものだ。自由になんか、なつてゐさうにない時でもついだまされた。私は、こんなことはもうこれきり思はないやうにしようと思へばさうできるやうな氣がした。私がしよつちうそれを思ひつゞけてゐるのは、それを思つてゐたいからなのだ。といふわけは、この思ひ出は、他人が殘忍で身慄ひがするといつてゐるところが、私には妙になつかしくて、一種の、痛いやうな滿足を與へてくれるからだ。要するに、私は、私のしようと思つたことをしたのだ。私の考へた目的をはたしたのだ。しかもその目的たるや、私が、生涯のどの時期にやつたことよりも以上のものであつたのだ。一體世間の人は、死といふものを、なぜあんなに重大に、悲劇的に考へるんだらう？ 死は、もはや死のない美の世界につれていつてくれるんだのに。この謎は私には、とても解けさうにない。ことによると、これは他人には謎ぢやないのかも知れない。私には、これがどこまでも追つかけ

て來て苦しめる謎なのだけれど。

いま、私の食事をもつてはひつて來た男と來たら實に面白い。この男が私を狂人だと思つてゐることを私は知つてゐる。何のことはない、まるで道化芝居だ。私に食物をもつて來るなんて——白い着物を着て、ぶく〳〵肥つた家鴨のやうに、よた〳〵歩いてゐる、この馬鹿な小男は、先づ一生涯、物に感ずるとか、美しいことを考へるとかいふやうなことは藥にしたくもなかつたことだらう——まるで私を骨董品か何ぞのやうに、じろ〳〵眺めてゐる。あいつは私を狂人だと思つてゐるんだ。それを考へると私は、妙に何だか、胸がせまつて來る。若し私が彼に、私はどうにもしやうのないセンチメンタリストなんだつて言つたら、彼はどう言ふだらう？　まあ多分噴き出す位が關の山だらうな。さういふ考へは、とてもこの男には及びもつかん考へだからな。彼の世界と來たら、お話にならん程小つぽけだからな。又、私が、美を戀してゐるんだと言つたら、生活の方法として、美にあくがれて、それにまけてしまつたんだと言つたらどうだらう？　彼は親切さうに微笑して、自分の心の中でかう考へるだらう。「かはいさうに、こんなおとなしさうな人が氣が狂ふなんて、氣の毒なことだ。」また、若し私が、選りぬきの美しいものを熱心につかまうとして惱んでゐるんだとか、無常の世界で常住のものを探さうとしてゐるんだとか言つたら、彼は大急ぎで皿を片づけて、こんなわけのわからんことを言つてゐる人が、どうかしたはずみに人殺しをしでかすやうなことになるんぢやないかと心配するだらう。彼は人殺しのことを讀んだことがあるのだ。アーディナで、人殺しが絞殺されたのを見たことすらあるのだ。かういふ人殺しは、みんないかつい顏をしてゐて、彼にもわかる話をしてゐたといふことだ。人殺しのことについて、どうしても話して見ろつて話さしたときに、彼はさう言つてゐた。彼は、人殺しといふものはみんな絞殺にすべきものだと信じてゐた。多分彼は、はじめて私のことを讀んだ時に、私も四つ切りにしなくちやならん代物だと考へたことだらう。だが、今では、私を知つて來たので、氣の毒がつてゐる。少くも彼は私を憎んではゐない。私が狂人だつてことを彼はもう信じきつてゐるのだ。こゝの連中が私を噪暴性の狂人だと彼に思ひこませてしまつたのだ。たつた一つ彼にどうしてもわからなかつたことは、この三週間、私がこゝへはひつて來てから、たゞの一度だつて、少しも暴行らしい素振りを見せなかつたことだ。實際、彼は、彼が手にかけた患者のなかで、私ぐらゐおとなしい、世話のやけない患者は他にないと言つてゐた。たゞ、彼がほんたうに怖はがつて、私が何かやけくそをおつぱじめやしないかと心配するのは、私が、殺人の精巧な技術のことを話して彼をからかつてやる時だ。私は、有名な著述家が、かつて、この問題について、すばらしい、聰明な論文を書いたことがあるつて話してやつた。その時に、彼が、身じろぎをして、私が何か亂暴をはじめやしないかと身構へしたのを今だにおぼえてゐる。だが私はたゞペンをおもちやにしてゐるだけだつた。それで、私が紙の上に、まつすぐな線をひいたり、完全な圓を描いたりしてゐるのを見ると、そんな風にしてをればヒステリーがしづまつて來るのだつてことをだん〳〵信じこんで來たらしい。私は、彼の心に起る反應の變化に敏感だつた。彼は私がおとなしいのを有り難がつてゐた。それでも、時々は、暴行のおそれがあるからこそ私はこんなとこへ閉ぢこめられてゐるんだから、少々は暴行の徵候でも見せてくれ

るといゝんだがと彼が思つたことを私はちやんと知つてゐる。と言つても彼がそんなことを何か口に出して言つたわけではない。たゞ直觀的に私は彼の考へをおしはかることができたのだ。つい昨日のこと、皮肉な冗談のやうな調子で、私は彼に言つてやつた。

「マック、君はほんたうに僕を人殺しだと信じてるのかい？」

「どうも信じにくいですね、かうやつて、貴方を知つて見ると」彼は少しも躊躇せずに答へた。

「ところが僕は氣狂ひなんだよ。」と私は言つた。そして、私の言葉が彼に深い影響を與へたことを認めたので、ちよつと言葉をきつてゐたが、しばらくたつてから、しづかに言葉をつゞけた。「それでゐてやつぱり僕は人殺しぢやないんだ。人殺しでゐて、人殺しでないなんて妙な矛盾だね、さうぢやないか？」

だが彼にはこんな矛盾はわからなかつた。そして彼は、私の狂氣を大したことはないわいと考へかけてゐたのに、これは思つたより重症だぞと見きはめながら出て行つた。

精神病學者たちの診斷も、これより氣の利いたものではなかつた。彼等には、わかりきつたことの外には何一つわかりはしなかつた。彼等は、私も精神病學を研究したんだつてことを知つてゐて、自分たちの學問の淺薄さ加減に氣がついてゐた。彼等は、私が、彼等の出たらめを、わけもなく看破ることができたつてことを知つてゐた。彼等の科學は、ちつとも科學ではなくて、空論であり、僞せ學問だつた。私がそのことを知つてゐることが、彼等にはわかつてゐたのだ。私が狂人だといふことを彼等に信じさせたのは、第一に、私が、裁判所で辯護士に辯護して貰ふのを拒絕したからなんだ。これこそ全くもつて狂氣の沙汰だ。彼等は、私が裁判所なんてものを、

てんで問題にしてゐないこと、私について、いろんな嘘つぱちや、何の興味もないことを證明しようとしてくれる辯護士なんてものを、私が輕蔑してるつてことを、のみこむことができなかつたのだ。私はたゞ、役にもたゝぬ說明をでつち上げてもらつたり、つまらない、虛僞の辯論をしてもらつたりするのはうるさいからいやだと言つたに過ぎないのだ。彼等が私の行爲で、狂氣の徵候ではないかと疑つたのは、私がこんな質問を發した時だけだ。

「だが、皆さん、私が辯護士を拒絕したのは、皆さんに、私を狂人だと思ひこませて、それで處刑を免がれようとする下心から出た、非常に頭のいゝ正氣の行爲だとしたら、どうでせう？」

時には彼等は私を面白がらせたが、時には彼等は自分たちのせゝこましい生活で理解できることより外のものには、まるで無感覺なので、私を苦しめ、私をうんざりさせた。彼等は自分の見なれないものにぶつゝかつたが最後、何とも度し難い馬鹿になつてしまつた。それを分析することができないのだ。それだからこそ、私の行爲を見て、てつきり氣狂ひだと考へてしまつたんだ。彼等は、いつでも、すべての人を、感じの鈍い、のろ〳〵した平凡人の水準へひきさげて、それを正氣だと考へてゐる。もつと程度の高い正氣がわからないのだ。彼等にとつては、正氣といふものは一つきりしかなく、それは彼等が知つてゐる正氣、彼等になるほどと合點のいく正氣だつたのだ。この正氣を輕蔑したり、疑つたり、否認したり、それに反抗したり、それを超越して生活したりする人は、皆狂人なのだ。私がもつと立派な正氣の概念をもつてゐるといふことが、彼等には私が狂人であることの證據だつたのだ。私が彼等の考へ方を斥けることが出來たといふことは、彼等にとつてはたゞ私の精神が、病

的であるといふことの證據に過ぎなかつたんだ。

私が彼等に向つて「皆さん、人生の意義は何ですか？　人生の目的は何ですか？」と尋ねると、彼等はそれを私の氣が狂つてゐる新らしい證據だとしてしまふのだ。こんな質問をする權利を誰がもつてゐるか？　それは狂人だけだ、とかう來るんだ。

「だが、」と私は言ひ張つた。「この問題を解決しなくちや、何とかこの問題に始末をつけなくちや、吾々は死といふことが重大であることも、殺人の意味も、自殺がよいとか惡いとか言ふことも、議論できないぢやありませんか。」

彼等は、私の言葉なんかにはてんで注意を拂はないで、これも亦氣の狂つてゐる證據だと頭から決めてしまつた。こんな事は彼等にはもうちやんと解決がついてゐるんだ。こんな問題を事新らしく眞面目に持ち出して來るのは、たゞ向う見ずな狂人だけなのだ。私は彼等に、ヘゲシヤスや、ペトロニユウスのことを、聞いたことがあるか、また古代には自殺をした者が、德のある人だと考へられてゐたことを聞いたことがあるかと訊ねてみた。この問も矢張り彼等は精神錯亂の、新らしい證據だとしてしまつた。實際、私がもし私自身の正氣と、內心の潔白と、俯仰天地に愧ぢざる正しさとを、十分に信じてゐなかつたなら、私は自分の言葉がはつきりしてゐるかどうか、自分の論理が、辻褄が合つてゐるかどうかを自分で疑ひ出したことであらう。

すつかり思ひ返してみると、私のやつたことは凡て實に正氣で、しかも條理のたつた行爲であつた。私のやつ

たこと、私のとつた手段は、一から十まではつきり理解してやつたことで、高い理想を目指して、よく考へぬいたあげくにやつたことだ。もし私が狂人だとしたら、私にとりついてゐるのは、實に美しい狂氣なのだ。もし正氣といふことが、美に對する愛を失ふことを意味するのなら、私は正氣になることなんか眞平だ。——實際、もしさうであるなら、私は決して正氣になんかなりたくない。こんな正氣は馬鹿氣てゐる。深刻な苦しみも、强烈な歡喜も知らない白痴のやうな精神だ。杓子定規で律することのできる平々凡々な性質くらゐ魅力のないものがあらうか？　こんな杓子定規に照して生きてゐるのは、生きてゐないも同じだ。美もなく、感激もなく、情熱もなく、愛もなく、たゞ存在してゐるといふだけなのだ。身を捨て、理想に挑みかゝつてこそ、理窟一點張りでなくてそれに情熱をこめてこそ、求めてゐるものが見出されないことが分つてゐるので、ます〳〵冒險的になつてゆく熱情をもつて人生の中へ飛びこんでこそ——それでこそ生きてゐると言へるのだ。美しく生きてゐると言へるのだ。私がこのことを陪審官に話し、陪審官から精神鑑定人に話したら、彼等は、私を法律上の責任を負ふことのできない狂人だと信じこんでしまつた。

「なぜ君はあの女を殺したのだ？」と彼等は訊ねた。彼等は千遍一律に、この同じ問をくりかへしてゐた。どうしてもこの問を避けるわけにはいかなかつた。

「あの女を愛してゐたからです？」

その度に私はかう答へた。私は腹立たしいやうな、何が何だか分らないやうな當惑の波が起つて、それが傍聽者の間へ擴がつて行くのを感じた。私は一度だつてこの答へを變へなかつた。といふのは、それは眞理だつたか

らだ。それは實に單純な眞理だものだから、譯が分らないやうに見へたのだ。もし私が、私はあの女を憎んでゐたから殺したんです、とか、或は、あの女の愛情がぐら〳〵してゐたので嫉妬のために殺しましたとか、或はまた、あの女が私を侮辱したから殺しましたとか言つたら、彼等は、私の行爲を理解してくれたゞらう、またもし、あの女が不治の病氣で苦しんでゐたとか、苦痛のために死にかけてゐたとか言ふのだつたら、矢張り彼等は私の言ふことを理解することができたゞらう。だが、一人の女を愛してゐたから殺すなんて、そんなことは彼等には、とても理解できなかつたのだ。私がこの言葉を口にするたんびに、彼等はいつも小さい眼をぱちくりさせながら、どうも分らない、といつたやうな顏つきをして默りこくつて私を見つめてゐた。私はつい鼻の先でふゝんと輕蔑せずにはをられなかつた。「どういふ種類の愛なんでせうね？」彼等はすぐに口を揃へて騷々しく言ふのだつた。「隨分風變りな愛ぢやありませんか、皆さん？」私は殆ど冗談みたいに、極くゆつくりとかう訊ねてやつたことを憶へてゐる。「愛だつて、なるほどね」と彼等は言つた。「君は、他の者が憎みと言つてゐることを、愛と言つてるんだね、」「貴方がたは、實にあきれはてたお人好しですよ。私の感情の名前を變へてみて、それで何かを解決したやうなつもりでゐなさるんだから、貴方がたは實に面白い人だ、しかし私の感情は、貴方がたがどんな名前をつけたつて同じなんです。親愛なるドクトル諸君、私はそれを愛と言ひ、貴方がたはそれを憎みと言つてゐるんです。名前があべこべになつてゐるんですよ。分りませんか、」——私は、私をまるで萬力にかけるやうに、締めつけてゐる彼等の顏をじつと見つめてゐたことを思ひ出す——「貴方がたは、なづかしい事柄を隱して、貴方がたの疑ひを追ひやるために、そんな言葉を使つてゐるんぢやありませんか。

私は貴方がたの智慧のなさ加減に驚きましたよ。」

勿論、私が彼等に、彼等自身の正體を話し出すと、彼等は私を止めた。それは私が亂暴を仕出かしはしまひかと恐れたからだ。私は彼等に、私の思つてゐることを皆話す機會がついぞ一度もなかつた、歩く時にいつでも腰をかゞめて、今にも坐りさうな恰好をする、そして笑ふ時に犬のやうに歯をむき出して笑ふので、つい笑ふ時にはあやしてやりたくなるやうな小男の、ピンクニイ博士だけは、私がどんなに辛辣な皮肉を言つても、いつでも進んでそれを辛棒して私をしらべてゐた。この男は自分を科學のための殉教者になつたつもりでゐる程、素晴らしく正氣な男であつた。彼は少なくとも四晩私と一緒に暮して、私の症狀を研究してゐた。彼は私の症狀を非常に異常なものであると考へて、それについて一冊の著述を書くべきであると思つてゐた。たゞ一度、今まで歯をむき出して笑つてゐた彼が、急に薄氣味悪がつてびく〳〵して來たことがある。それは私が彼に向つて、私の症狀について書物なんか書けるとお考へにならん方がよいですね、と言つてやつた時だ。それでも彼は、私について澤山のノートを取つて、後で編輯者に整理させてゐた。時々私は、全くの悪意から彼を邪魔してやつた。彼は私に何か病毒がありはしないかと思つて、殆ど病的な程熱心にそれを見つけ出さうとしてゐたので、時々私は彼を失望させるのが可哀想になつた。彼は私の膝を小さな槌でこつん〳〵とよく叩くので、私の膝はまるで入墨したやうになつてゐたが、或る時、彼が例の小槌で膝を叩いた時に、私は彼の顎にぶつかる程足を上げて、私の足が異常に敏捷であるといふことを示して彼を驚かしてやつた。これは病毒に對する極度の免疫性に他ならぬことを私は彼に證明してやつた。すると彼はこれを私の狂暴性の一つの證據として記入してゐた。私はまた、私たち

二人が一緒にゐた最後の時に、彼が癲癇について如何に無智であるかといふことを指摘してやつた。それから私はこの病氣のいろ〳〵な症狀について議論を進めてゆき、それが記憶力に影響を及ぼして、それを荒ませることや、數を算へる能力を混亂させることなどを話して、私は初めから癲癇性患者の症狀をちつとも表はしてゐないんだから、そのことはよく分つてゐなくちやならん筈だと指摘してやつた。私の話はよく係が通つて、批難できない程辻褄が合つてゐたので、彼は私が見たところ、正氣らしいのに弱つてしまつた。

彼は呆氣にとられて私に訊ねた。「あんたが氣の狂つてゐるのは何時なんですか？」

「おもに貴方と一緒にゐる時ですよ。」

私はをかしい程唇を歪めてかう答へたのだつたが、彼のユウモアの感じなんてものは、寄席の喜劇くらゐしか分らないので、こんな皮肉はとても分りやしなかつた。彼は、私が又氣が狂つて來たのだと思つて滿足してゐた。

實際、私は白狀するが、こんな馬鹿々々しい話をしたり、問答したりしてゐる間にも、ふと、私は本當に正氣なのだらうか、それとも氣が狂つてゐるために、自分を正氣だと考へこんでゐるのだらうかと、自分で自分に問うてみることがあつた。すると、何故とか、何のためにとかいふ疑問が、止めどなく次から次へと流れて來て、私の全生涯が復もや着々と例の思ひ出の中へまきこまれ、そこへ集中してしまふのであつた。

もし私が正氣でなかつたとしたら、私は、私がやつたやうなことを、決してやらなかつたらう。私はそれを恐れたらう。この世の中で、何か立派な或は美しいことをやつてのけるには、めつたにない鋭い健全さが必要だ。はじめて、この考へが浮んで來た時には、流石の私もこはくなつて來たことをおぼえてゐる。きつと、私の

理智は、それが育てられて來た環境に、時々屈服してしまつたのに相違ない。さうとより外には、私は、あの時私が尻ごみしたことの說明がつかない。私は、どんな災厄にあつても、突然恐ろしい決心をしても、ほんたうに、心の底から恐ろしいと思つたことは、これまでには、たしかに一度もなかつた。私は、常々、どんな考へだつて私を恐がらせたり、身慄ひさせたりするものはないといふことを自慢にしてゐた。子供の時分にだつて、夢を見たときですら恐いとは思はなかつた。私は、母が大變好きだつたので、一年以上もの間、父を×してやらうといふ考へが夢の中へしよつちう現はれて來たのをおぼえてゐる。その夢の有樣をくはしく話してきかせたときに、母が困つたこと。恐ろしがつたことを今だにおぼえてゐる。私はそれをちつとも間違つたことだとは思はなかつた。夢は要するに夢だし、それに、私の父は母を虐待してゐたので、そのために私は父を憎んでゐた。若し、母が父を×してくれと頼んだら、私は、大して恐れもせず、後悔もせずに×してしまふことができたらうと思ふ。それでゐて、私は決してやさしくないことはなかつた。いろ〳〵な動物に對しては、センチメンタルな愛情をもつてゐた。私は馬が蹄で踏みつぶしてしまやしないかと思つて道の草をひきぬいたことが度び〳〵あつた。カナリヤを逃がしてやつて母を困らせたこともあるし、どういふものか鼠が大好きだつたので、鼠にわなをかけるのをどうしてもいやだと言ひ張つたこともあつた。ある時、私の大嫌ひな、猫が、猫に特有な殘忍さで、鼠をなぶつてゐたので、私は、その猫を殺してやつたことをおぼえてゐる。私が物を嫌ふのは、たゞその物が醜いからだ。誰だつて美しい魂をもつてゐる者は、醜惡なものをなくしようとするのが人情だ。私が父を×せたかも知れないのは、父が醜くかつたからだ。その人が私の父であることなんか、私にとつては何でもなかつた。私が猫

を殺したのも、その猫が鼠を苦しめてゐる殘忍さが醜くかつたからだ。年を老ると××を殺す民族が十二もあることを、かつて算へたことがある。今でもさういふ民族が若干ある。私は彼等の處置を、慘酷だと思つたことがない。さう思はないのが變だとは私は思はない。六十歳以上の人間は、苦痛のないやうに、クロロホルムで痲醉さして×してしまふがよいと唱へてゐる醫者があるつてことを、子供の時分に讀んだのを私はおぼえてゐる。この考へは、實に××××へだと私はいつでも思つてゐた。その當時四十に近かつた私の父は、この說を讀んでひどく恐ろしがつてゐた。ショオペンハウエルはとくの昔に、この考へが×××へであることを知つてゐた。彼は、年老は病人よりも醜いと書いてゐる。私はこの問題について、いつか、心理學教室で講義をしたことがある。だが、聞いた連中は、私の論理を恐がつてぢり〳〵してゐた。私は、彼等に、別段餘分の感情なんか現はさずに、五十歳以上になると、同化作用よりも、異化作用の方が優勢になり初めてくるといふことや、體組織の變化が、既に崩壞に向つて來ることや、徐々に動脈硬化がはじまつて來ることや、骨が修繕のきかない程硬くなつて來ることや、神經系統がもう融通のきかないやうに固まつて來ることや、腦の反應がだん〳〵のろくなつて殆んど沈滯して來て、人間は、自分の身を維持したり、全うしたりするために他人の助けを借りなければならなくなつたり、或はまだ沈滯期に達しない他人の活動を邪魔したがつたりして、たゞもう厄介物になるだけだといふことを示したゞけだつた。尤も中には例外もある。だが例外は多くはない。私がこの問題のたやすい解決法を提唱したところが、彼等は、私を、アイルランドの子供の代りに、人間を×××にすることをすゝめるスウイフトの二代目だと考へてゐた。彼等は、いやなものをかくさうとして、人間どもが考へ出したむしずの走るやうな思ひやり

なんかよりも、私にとつては美の方がよつぽど尊いのだつてことを理解することができなかつたのだ。で私は、正直に、六十になつたら自分は喜んで自分の生活の幕を閉ぢるつもりだと言つてやつた。私が何故テスに對してあんなことをしたかを、一人の心理學者も理解できなかつたわけ、私の友人も殆んどすべて理解できなかつたわけはそこなのだ。

尤も、今でも、時々私は、私の求めてゐたことに私が成功したかどうかをあやしむことはある。だが少くも、私があゝしなかつたら、私の失敗はもつと〳〵ひどかつたらうといふことは知つてゐる。若しさうだつたら、美なんてものは藥にしたくもなく、たゞあるものは、相變らずの煮えきらない場面、相變らずの情熱の萎縮と、相變らずのいやな退屈と、相變らずの生ぬるい幻滅と、相變らずの諦らめの單調とだけであつたらう。さうより外にはなりつこはなかつたといふことを知るに十分な程私は生き延びて來た。どこでもこゝでもみんなさうだといふことを知るに十分な程私は旅をして來た。私の知つてゐることで、何が確かだといつて、これ位たしかなことはない。苟くも、生活をして來たものなら、その人が眞理に面と向ふことを恐れない限り、このことを認めるだらう。世間の奴等が、この現實を合理化するやりかたは、はじめには面白かつたが、そのうちに私はそれがちやんちやらをかしくなつて來た。私は彼等のずるさとごまかしとを輕蔑した。どんなに多くの子供等が苦しんだつて、どんなにのろまな時代になつたつてかまふことはない——このごまかしをいつまでもつゞけなくちやならないのだ。社會はその上に築かれたのだ。だが人々は他のことはちつとも氣にかけなかつた。彼等にとつては、美なんてものは他愛のないものであつた。それは、彼等が一度も見たこともない繪の中にでもあるか、それとも、

洗練された耳なら受けつけないやうなセンチメンタルな音樂の中にでも遊離してゐるのだつた。生活の中の美とか、生活の手段としての美とかいふものは、彼等にはとてもわかりつこのないものだつた。たゞ狂人どもが、不道德な詩人や、身持ちのわるい俳優や、義務感のない音樂家や、德といふものを尊敬しない畫家のやうな――こんな墮落した連中だけが、さういふことを口にし、さういふ生きかたをしようと考へたゞけだ。

私がはじめてテスにあつた時、私は、私の愛してゐるものを彼女も愛してをり、私の憎んでゐるものを彼女も憎んでゐることを知つた。私がはじめて會つたときには、彼女は十分な情熱をもつて愛を表現したり、十分に力强く憎みを表現したりするには、少しばかり溫和しすぎた。だが、抑もの最初から不思議な親しみがあつた。私たちは別々の世界からやつて來て、互ひに理解しあふためには爭鬪しなければならぬといふやうな風ではなかつた。私たちの愛は、はじめから狂ひじみた愛だつた。といふよりもむしろ、それは狂ひじみた美の一つだつた。

何故私はあの「狂ひじみた美」といふ文句をいつまでも忘れることができないのだらう？　私はそれがそんなに好きなんだらうか？　世間から閉ぢこめられて、こゝに坐つてゐると、私は、ほんたうに、私がその狂ひじみた美を愛したといふことは、つまり私が狂人だといふことを意味するんぢやないかとあやしむやうになつて來る。だが、「戀愛上の狂氣と、生活上の狂氣とは、まるつきり別のものだ。」

私のペンはまたインキがきれてしまつた。それに私はこのことを五十べんも繰り返して書くことに疲れてゐる。それはちよつと夢にでも見るのがずつと容易だ。それでもそれはほんたうにもはや夢ではない。もう一度、もつとよく書きなほしてみたら、ことによるとこれを見るのがもつと樂しみになるかも知れない。頭の中で騙け足のやうに考へたのでは、つい考へもらすやうな微妙な事柄でも、文字に書けば、いくらか書き表はせるかも知れない。

「マック」

マックは相變らず同じ樣子をしてゐた。私がどんなことを考へてゐたつて、彼には金輪際分りつこはないのだ。私が本當に狂人で、彼を殺さうと計畫してゐたつて、私がいよ〳〵殺しにかゝるまでは、彼には私の考へは分らないであらう。自分の考へは自分だけにしか誰にも分らないのだつてことは、よく考へてみると實に面白い。自分の考へてゐることは、自分の言葉によつてしか誰も知ることはできはしないんだ。沈默は人間の城砦だ。沈默してさへゐれば、人間は金城鐵壁だ。つい言葉を口にするもんだから、人間は奴隸になつてしまふのだ。だが、自分の考へを行爲に表はさないやうにするのも、これでなか〳〵むづかしい。人間の一生には、自分の考へを本當に知らせたいと思ふ時、自分の考へを誰か他の人に傳へたいといふ欲望が、居ても立つても抑へきれなくなる時といふものは、ほんの僅かな瞬間しかない。といふのは、自分の考へを完全に他人に傳へるといふことは、自分の魂を感情で賣ることになるからだ。それは、肉體上の接觸ではとても望めないやうなやり方で自分を心の奥底まで他人にしばりつけることを意味する。それは、自分を暴露し、自分の人格をまる裸かにし、凡ての人が自分と世界との間に立てゝゐる障壁をぶち毀し、自分たちに分りもしないことを喜んでゐる下卑た、淺薄な連中に、自分を誤解され放題にしておくことを意味する。それだから私はめつたに小說を書かないのだ。私がこの欲望を感じたのは、この接觸を欲したのは、テスの場合が初めてだつた。私は自分を、自分の考へを、彼女の考へと結

びつけ、二人の魂を結合することに少しも躊躇を感じなかつた。

マックはまだそこに立つてゐる。彼は私がうと〳〵昏睡でもしてゐると考へてゐるのだ。物を考へてさへゐりや彼には昏睡だと見へる。私が物を言はないと彼は、私が彼にとびかゝつて行きはしないかと考へる。だが、彼はそんな風に考へるのだらうか？　勿論、考へるのぢやない。――何となくそんな氣がするのだ。彼は他の患者とひき合せて、私に斷定を下してゐるのだ。一つ默つて身動きもせずにゐて、彼をからかつてやらう。手をふるはせもせず、膝をわなゝかせさへもしないでゐてやらう。私は銅像のやうに突つ立つた。彼はだん〳〵そは〳〵し出して來た。おゝ――かはいさうな奴だ。――一體何が彼を苦しめるんだらう？　實際、もう殆んど冗談ごとではない。

「マック、すまないが、ちよつとインキを取つてくれないか？」

彼は返事もしないで去つてしまつた。彼はこゝの連中が、私の指環を取つて行つてしまつたものだから、私がインキを飲んでしまやしないかと心配してゐた。彼は又やつて來た。口では何にも言はなくても、顏にその恐怖があり〳〵と見えてゐる。どうして私にこんなに澤山のインキがいるんだらう？　誰にしろどうしてこんなに澤山書くことができるんだらう？　一體何が書けるんだらう？　勿論これも私の氣が狂つてゐる一つの證據だ。彼は私にインキを飲んぢやいけないと言ひたがつてゐる。だが、そんなことを言ふとかへつて私が氣がついて、ほんとに飲みはしないかと恐れてゐる。私は、彼を見てにやりと冷笑を浮べた。彼を驚かすのは實に雜作のないことだ。彼は肉體的に暴行を働きかけることなんかちつとも恐れてはゐない。私は彼が危險な狂人をものの五秒と

たゝぬ間に格鬪で打ちのめしてしまつたのを見たことがある。彼が氣にかけたり、怖がつたりするのは、もつと摑へどこのないやうなことを言つたり、したりする時だ。私は何時でも彼を嚇かすことができる。まあ見てゝごらん……。

「マック、このインキを飲んだら死ぬだらうか？」

彼はてつきり私が思つた通り胴ぶるひをした。彼にはどう言つていゝか分らないのだ。氣の毒な程まご〳〵してゐる。彼の頭の中の法典には、かういふ場合に、どう言つたらいゝか、どうしたらいゝかといふ指圖が書いてないのだ。若し私が彼を打つたら、その時には彼はどうしたらいゝかといふことをちやんと心得てゐる。又私が窓から飛び出さうとしたら、その時も彼は何なく處置をつける。或は又、本當に私が、彼の眼の前でインキを飲まうとしたのなら、その時にも彼は矢張りどうしたらいゝかを知つてゐる。だが、私が何もしないでゐて、彼に質問を發したゞけの時には、彼は呆氣にとられて病的にどぎまぎして來るのである。彼は何と言つたものだらうか？　私は不意に彼に質問を發したのだ。しかもそれは、彼が内々恐れてゐて、思ひきつて口に出すことができずにゐたことなんだ。それを私が、彼の心の中から摑み出して、彼の代りに言つてやつたのだ。それだけで、もう澤山だ。

「えゝと……むゝ……勿論、死にはしませんよ。」

何といふ馬鹿氣た答へだらう！　彼もこの答が馬鹿氣てゐることを知つてゐるのだ。それでゐてどうにも仕樣がないのだ。彼は何か他のことを言ひたいのだ。私に何か警告を與へたいのだ。かつて、インキを飲んだことの

ある誰か他の患者のことを私に告げたいのだ。だが、そんなことを言へば、なほさら馬鹿氣てゐやしないかと彼は恐れてゐるのだ。今、私は彼の眼つきで、彼がインキを持つて行つてしまひたがつてゐることがわかる。だが彼は私を憤らせずに、インキを持つて行くには、どうしたらいゝかわからないのだ。彼は私に腹を立てさせまいと思つてゐる。私はそれを知つてゐる。それは私に腹を立てさせると、私があばれ出すかも知れないし、さうなると、彼がその責任を負はねばならないことになるかも知れないからだ。私は又微笑せずにはゐられなかつた。私はいつまでも彼をこんな風に惑はせておきたくない。

「ねエマック、このインキを持つて行つてくれ給へ、でないと僕は飲むかも知れないからね。」

私がかう言つたので、彼はすつかり安心した。そして、もとの通りに落ちついて、口元に温和しい微笑をたゝへながら出て行つた。

「勿論、お飲みになるやうなことはありますまいが、」

それでも彼は矢張りインキを取り上げた。私のペンの中にはひつてゐる位の分量ならもう心配はない、何といふ氣狂ひだ、氣狂ひだと考へながら、彼は、書き物をしてゐる私をのこして出て行つた。

若し、サイアナイドの指環さへ返して貰へたら、私は、もつとしつかり書けたらう。さうしたら、私はすつかり自分を支配することができて、破壞することも、創造することもできたらう。結局、破壞も創造の一つの形式に過ぎないのかも知れない。私の心は他のものを考へてゐること、あの指環の代りになる他のものを考へてゐることが屢々ある。私はいつまでも際限なく生きてなんかゐたくない。そんなことをしたら、私の行爲の美しさが

打ち壞されてしまふ。決してそんなことがあつてはならない。それでも、私は、何をやるにしても、此の上なく美しい手際でやらなくちやならぬ。でないと冒瀆になる。折角前にやつた美しいことを汚すことになる。

ことの起りかたは、最初は實に奇妙な、氣まぐれな工合に起つて來た。まるで思ひもかけぬ嵐のやうにその考へが私たちに起つて來た。私には、それは、水などは少しもない古い林だとばかり思つてゐた林の中で、突然、水の音を聞いたやうなものだつた。前にも言つたやうに、私は、最初それを面と向つて直視することはできなかつた。ずつと後になるまで、その現實性を信ずることができなかつた。私がしよつちう恐れてゐたのは、そのことではなくて、その反對のことだつた。私は、ずつと前から、物を言へばそれが嘲笑になる程、ひどく苦しんで來た。私は三十になるまでに、人が何代もかゝつてもわからないやうなことを知つてしまつた。もはや議論の餘地はない。それはさうだつた。悲しくもさうだつた。このことはすべて私の新しい決心の一切だつた。

私たちは、そのことを、まるで、愈々實行するまでに少ししらべておく必要のある何かの計畫でゝもあるかのやうに、すつかり語りあつた。私たちは、いつも、この考へがすべて、全く偶然に起つた考へと見えさせるやうにつとめてゐた。この點で、私たちの態度には無論、多少のわざとらしさはあつた。欺瞞さへもあつたかも知れぬ。少くも、テスの方にはそれがあつたのはたしかだと私は思ふ。私たちが、あんまり、はつきりと、それを偶然らしくしようとしたために、却つて不自然になつてしまつたのだ。時々私たちは、今、夢を見てゐるので、私たちの抱いてゐるとてつもない考へは純然たる幻想か、それとも、突然映畫のために工夫した思ひつきに過ぎないんだなどゝ語りあつた。草叢の靑い光りの中で、不意に人間と虎とがでくわした時、互に見かはすであらうや

うな、異樣にぎら〳〵光る視線で、二人が顏を見合はすやうな瞬間が時々あつた。だが、その次には私たちは、につこり微笑して、落ち着き、また親密になつた。この瞬間の異樣な氣持は、明るい情熱の抱擁で忘れられてしまふのだつた。

「テス」と私は數へ切れないほど度々言つた。「生活といふものは病氣と幻滅とだね。そして戀愛は、ほんのしばらくの間、短い、ちよつとした瞬間だけ、生活を超越してしまふことがある。その瞬間は數日にのびることもあるし、數ケ月にのびることもあるけれども、それがすむと又生活の中へ吸ひこまれてしまふんだ。僕たちは生活に降伏したらいゝのだらうか、それとも、戀愛に生活を征服させるべきだらうか？　戀愛と生活とは、しよつちう爭鬪してゐるんだよ。そして過去に於いては、いつも生活の方が勝つたんだ。一體、戀愛が危殆に瀕してゐるときでも、生活がそんなに値打ちのあるもんだらうか？」

こんな言葉は、こゝに書いて見るといやにセンチメンタルに見える。それに大多數の人には空虛な修辭に過ぎないやうに見えるだらう。ところが、私には、この言葉は、非常に身にしみて痛切な、意味のある言葉だつたのだ。

はじめには勿論、彼女は、私の言つたことを、十分に、底の底までおしはかることはできなかつた。彼女は、私の言葉の裏にかくれてゐるらしい意味を説明してくれと私に頼み頼みしたもんだ。私の言つたことが、あまり簡單で薄氣味が惡いので、彼女にはそれが信じられなかつたのだ。といふよりもそれをうけがふことができなかつたんだと言ふべきかも知れぬ。それから私は、私の不思議な身の上話と、それが私の理想をつくり上げる上

にどんな意味をもつてゐたかといふことゝを、よく話してきかせた。それを私は彼女に幾度び話したことだらう！　又彼女は自分の身の上話を幾度び私に話してくれたことだらう！　私たちはお互ひに、自分たちのことばかり話して暮した。間もなく私たちは、私たちが二人とも澤山の自我をもつてゐることを發見した。それは夢の自我で、それ〴〵私たちの人格の特殊の部分の中に生きてゐる、特殊の分裂した小部分だつた。だが時々は私たちの人格が全體一つになることもあつた。二人は、お互ひの顏をよくしらべあつて、めい〳〵が色々澤山な顏をもつてゐることを發見した。或る時は私たちはある一つの顏をもつてゐた。それから別の時には、私たちの顏は誰か他人の顏のやうに見えた。私たちは、私たちの顏が、どちらも、均齊がとれてゐなくて、いつでも微笑するときには、一方の頰が度外れに、殆んど重もさうに一方にまがることを發見した。この點では、私たちの顏は、信じられない程よく似た顏だつた。私たちは、時々向ひあつて坐つて、この顏のよく似てゐることを不思議がつたものだ。二人は、互ひに、寫眞をとつてさへも見た、ある時はかういふ風、ある時はあゝいふ風にといふ工合に。私たち自身と、私たちの顏とは、憑きものゝやうになつた――夕陽が沈む頃、二人は互ひの眼に見入りながら、何か言はうとして、何も言へなかつたことが、どんなに度々あつたことだらう！　私たちは、話がしたくてしたくてたまらなかつたんだ。何かしら、心の中にあるものが、大波のやうに、潮の逆流のやうに、嗚ぎながら起ち上つては、また力がつきて倒れるのだつた。聲では話をしてゐたが、言葉は唇にひつかゝつてつまづくばかりだつた。豐かな感情は燃えさかり、强い衝動はこみあげて來て、話をしろしろとせきたてるやうに思はれたが、それでも、私たちは、いつも、無慚にも沈默に追ひかへされるより外はなかつた。私たちは、動物が今にも

自分をなめつくさうとしてゐる山火事のために、叫んだり、咆えたり、唸つたりする力を失ひ、逃げ出す力さへも痲痺してしまつて默つてゐる時のやうな氣がするのだつた。

「テス」――私の聲は、私たちが坐つてゐるそばを流れてゐる河のやうに靜かだつた。それでゐて、急に高まつて、たうとう、鋭い叫び聲のやうになつて私にせまつて來るやうに思はれた。私には、それが、何時間も何時間もの間、河の渦巻く流れや、向う岸から、湧き上つてはまた消えてゆくのが聞えた。

「テス」――私はたうとうまた言つた。私は私の侮蔑的な口調を實によくおぼえてゐる！――「人生といふものは途方もない狂ひじみた出來ぞくないだよ。しかしこれに打ち勝つには、これを否認するより外に道はない。貴女や僕に、この人生が與へてくれるものは幻滅と絶望との悲劇だけだ。深く強く生きる者、人生の美しいものだけを強く感ずる者にはみんな、この人生が與へてくれるものは、はてしのない闘爭と苦しみとの流れだよ。情熱は苦痛のために傷つけられてゐる。でなければ、逃げだしてしまひたいやうな陰鬱な、いやな退屈のために片輪にされてゐる。美といふものは瞬間に生きてゐるもので、永遠に生きてゐるものぢやないんだ。それでゐて、テス、貴女と僕とは、美をいつまでも生き殘させようとしてゐるんだね。僕たちは、このはかない美が何ともいゝやうのない優れたものだつてことを認めてゐながら、せつせとそれを打ち負すことに力をつくしてゐるんだ。何といふ途方もない、どうにもならない矛盾だらう！　人生は僕たちにはもう澤山過ぎるんだ。僕たちは、移りゆくものゝ中に永劫を求め叫んでゐるんだ――馬鹿々々しい無駄なことぢやないの！」私は彼女が恐ろしがつてしがみついた指がまざ〳〵と私の肉の中へ、喰ひこんでゆくのをまた感じる。遠くの方の飛沫の匂を帶びた風に顏をな

ぶられながら、彼女が私にしがみついた時の、彼女の魂の痛みと、やつれとをまた感じる。

「テス」――私はいつまでも私の言葉を忘れることができないのだらうか？　若し私の言葉が、こんなにもほんたうで、こんなにもたしかでなかつたら――それに少しでも疑ひがあつたら、ちよつぴりでもそれが間違つてゐるおそれがあつたら、極く少しでも希望の切れつぱしでもあつたら、私はあんなことをしなかつたらうに。だがそれは、實にたしかで、眞實で、のがれつこのないものだつた。そして、彼女も私と同じやうにそのことを知つてゐたのである。

「テス――ほんの少しでも見込みがあつたらねえ！　一體見込みがあるだらうか？　どうだらう、言つておくれないか？」

そして私はまた彼女のためにそれをすつかり話してきかせるのだつた。話すたびに、何か新しいものが私の言葉の中へはひこんで來た。それでも言葉は同じだつた。彼女は私と同じくらゐ、私の言葉を知つてゐた。それでゐて、私たちは、同じ言葉を、思想と行爲とを淨める呪文か祈禱でゞもあるかのやうに何べんでも繰り返した。

テス、この事件のそも〳〵は戰爭の最中にはじまつたんだつたね。その時私は十八だつた。その時分には、あんなにも恐ろしい程生々しかつたことが、今では、どうかすると幻覺のやうな氣がすることがある。その頃私が感じた苦悶がこみ上げて來るのはほんの合ひ間合ひ間にしか感じることができない。貴女もそんな氣がすることがありますか？　死んでしまつた記憶を、思ひ返さうとして見ても、どうしても思ふやうに思ひ出せないことがありますか？　でもその方が、ことによると幸福なんだらう。私はその時分には若くて、生き〳〵した希望と理

想とに充ち〳〵てゐた。世界は、美と年中絶え間のない情熱とを約束してゐた。私は生を愛し、生きる歡びを愛してゐた。私は、私たちを屢々不幸にかりたてる强烈な創造欲にせきたてられて生きることをおぼへた。何もかも忘れ、何もかもふりすてゝ。一圖に狂氣じみた情熱をもつて物事にうちこむことを學んだ。母に對する子供らしい愛着に打ちかつた。幼い時分の周圍の拘束や壓迫に打ちかつた。そしてもう既に、非常に熱心に物を書くことに夢中になつてゐた。私は書いた、書いた。まるで人生が、とても堰きとめることのできない勢ひのよい文學の冒險にでもなつたかのやうに書いた。言葉も、文章も、章句も、頁も、これ等のものがみんな、超自然の力をもつた生き物のやうになつて來た。電氣のやうなエネルギーをもつて來た。その混亂の中に、人生そのものがどこにあるのかわからなくなつてしまつた。

マックがまた來てゐる。私は彼のゐることなどは、殆んど忘れてしまつてゐた。私はまた昔の世界に生きてゐるかのやうな氣がした。いま、私は、テスが死んぢまつたんだなんて、殆んど信じられない。私はマックを、もつとそばへ寄つて見なければならない。彼の顏つきはどうも變つてゐるやうだ。あゝわかつた、あいつは、まだ私がペンの中のインキを飲んぢまつたかどうかをあやしんでゐるのだ。いま、あいつが、何故微笑してるのか私は知つてゐる——彼は私が實際書きものをしてゐたことを見てゐるのだ。私は、こゝに書き物をしてゐたのだ。今しがたまで、テスに話しかけてゐたのだ。少くもそのやうに思はれる。今では、世界中の何もかもが、そのやうに思はれるとしか言へない。テス、彼女はよくわかつてくれたね。凡てが實に美しかつた。完全無缺だつた。闘爭さへも靈感に滿ちてゐた。

「まあよく聽きたまへ、マック——言葉も、文章も、章句も、頁も、これ等のものがみんな、超自然の力をもつた生き物のやうになつて來たんだ。電氣のやうなエネルギーをもつて來たんだ。」

何といふ囈語だ！　と私の言葉をきいてゐる時に、彼の顏が言つてゐる。狂人といふものは、妙な言葉で、自分の狂氣を言ひ表はすもんだ。彼は、いつまでこんな言葉をきいてゐなければならんのだらうと惑つてゐる。それでゐて、まだ私に腹を立てさせたくないのだ。突然出て行つたのでは、私が侮辱されたと思やしないかと恐れてゐる。彼は私の機嫌をとるつもりで、私のペンの先きから出た無意味な囈語（うはごと）をきいてくれてゐるのだ。そこでちよつとからかつてやる。

「生が踊り狂つて囈語を言ひ出す。死が氣絶した生をとらへて、肉のあるものになりたがつてゐる亡靈のやうに、それを手玉にとつてゐる。狂人が悲しさうな音樂を奏でる。惡魔がしやつくりをする。すると宇宙がどつと手を打つて喝采する。今日はお祭りだ。ボオは、自分の亡靈と一緒に眠つてゐる。君はエヂプトの神がバビロンの小娘にいちやついてゐるのを見て月が笑つてゐるのを見たかね？　ニイル河がその岸を埋めてゐる。カルタゴがニユーヨオクの夢を見てゐる。アフリカが眼をさます。火山が呻る。火山は地質時代から胃弱を病んでゐるのだ。氣狂ひが海の岡を踊りまはる。何といふことだ、猿が人間の赤ん坊に歌を歌つてきかせてゐるではないか？　一體これは何といふ世界だ？」

マックの顏は變らない。彼は、私が、こんなことを紙に書いて、それを讀んでゐるのだと思つてゐる。これは私の書いたものだと思つてゐる。どつちにしても彼には同じらしい。私は、今、彼をからかふために、こんなこと

をつくり上げたのだ。だがそれが何の役に立たう？　言葉が、超自然の力をもつた生き物になるといふことも、彼にとつては、悪魔がしやつくりをしたり、ヒマラヤ山が踊り出したりするのと同じやうに無意味なのだ。私はもうおとなしくしてゐた。すると彼はまた出て行つた。

私はいまどこにゐるんだらう？　扉に鍵をかけることにしよう。そうすれば、私はまつたくテスと二人きりになれるから。ところで、鍵がない！　さうだ、まさか私に内側から鍵をかけさせるやうなことをする筈がない。もつともなことだ。私は暴暴性の患者なんだから。もう少しで私はそのことを忘れてしまふところだつた。

さて私は何と言つたんだつけ、いや、こゝに書きかけがある……闘爭さへも靈感に滿ちてゐた。だが、さうだ、私が十八の時分にこの世界がどんな風に見えたかを話す前には、さうだ、その當時、私には、物を書くことが信仰だつたんだ。狂ひじみた宗教だつたんだ。私は、その中へ、私自身よりももつと深いある物のために投げこまれた。それは、もう一つの自我、といふよりも、私自身のもう一つの部分、見なれない、殆んど他人みたいな部分を探して、私自分の遙か上を滑走してゐたのだ。

夜になると、私はぢつと家の中にゐて夜明けまで書き物をし、一時間か二時間眠つて仕事に出かけ、歸つて來ると、また前にも優つた熱心をもつて書きつゞけた。私は物語りや、小說や、戲曲や、叙事詩さへも書いた。私は、だん〳〵外へ出ることを少くして、外部の世界を否認しようとつとめた。多分、私は、もしニイナを變見しなかつたら大藝術家になつてしまふか、それとも實にみじめなやくざものになつてしまつたことであらう。ニイナが私を生によびもどしてくれた。いや、彼女は私に愛をもつて來てくれた。私は、自分が逃げ道を探してゐた

生よりも、愛の方が餘つ程大きなものであることを見出した。ニイナは風變りな娘だつたよ、テス、多分その風變りなところに魅力があつたのだらう。彼女はアラビア人だつた。勿論、ほんたうにアラビア人だつたわけではないが、そんな風に見えた。顏色は淺黑くて、いつも變らない黑檀色の生き〳〵した眼をしてをり、柔い、黑い絹糸のやうな髮をしてゐて、東洋味をたつぷりもつてゐた。彼女を見たとき、私は、何かしら、夢の中で見たことのあるものを見たやうに思つた。私たちは、最初、じつと情熱を抑へつけることも、危險を警戒することも、一切無頓着で、異教徒のやうに愛しあつた。二人の生活は一緒になつちまつた。私は物を書くこともやめ、夢の世界もすて、自分自身もすてゝしまつた。その時だよ、テス、私がはじめて驚くべき戀愛の淨化の力を知つたのは。私心のない戀愛は、自分自身よりももつと偉大なものに自分を讓り渡してしまふ。偉大な、美しいものゝ中へ自分自身を見えなくしてしまふ。それで、私は、しばらくの間幸福だつた。私たちは未來を語り、永劫を語つた。そして、有頂天の歡喜の渦卷の中に時のたつのを忘れてしまつた。貴女に會ふまでほね、テス、私は二度とそんな戀愛はできなかつたよ。私はえも言はれぬ宿命的な耽溺に心を傷めて、弱つて、この戀愛に征服されてしまつた。考へることも、決心することも、斷定することもできなくなつてしまつた。私には何もかも無意味になつてしまつたと同時に、どんなものにもあらゆる意味がこもつてゐるやうになつて來た。

その時に、だしぬけに戰爭がやつて來たんだ――そして彼女は行かねばならなくなつた。私を離れてだよー從軍看護婦になるために。私は、いま、私の心の指をのばして、その時に感じた氣持ちを探さうとしてゐるのだよ、テス。そんなことをしても何の甲斐もないかも知れない。多分、何の甲斐もない方が、私には幸ひなのだら

う。おゝ、その頃、その時分――もう一度あの頃のやうな生きかたをしたら狂人になつてしまふだらう。もう何年も何年も前のことだが、今でも、私の恐怖を思ひ出さうとすると、いくらか慄へて來る位だ。私にはたゞもうそんなことは信じられなかつた。私はどうしても信じなかつた。ニイナが！　いまになつてはじめて私は、彼女が、あんな美しさをもつてゐる彼女が、どうしても理解することができなかつたといふことを知つたのだ。實に恐ろしいことだつたのよそれは。私はそれを承知しなかつた。いやだと言つた。笑つた。嘲つた。そんなことがほんたうであるわけはない。ほんたうであるはずはない。それはほんたうぢやなかつたんだ。貴女は、ニイナが何故私と別れねばならなかつたのか合點がゆかないでせう？　だがそんなことはどうだつてよい。私は、何十度でも、手をかへ、品をかへて貴女に話したぢやないか。その理由には全く意味はないんだ。たゞ、どんなことだつて、彼女を私から去らせることができたといふわけになるだけだ。若しも世界が――若しも何もかもが――大破滅に脅かされてゐるのだつたらどうだらう？　少くも私たち二人なら一しよに死ぬことができたらう。私たちは、それにまけてしまはねばならぬといふやうなことはなかつた。私が今言つてゐるのはね、テス、貴女と私とだけが知つてゐたあの狂氣のやうな戀愛なんですよ。それでも、私は彼女を病的に、狂的に愛してゐた。いつか私は、町の通りで、彼女が電車の踏段を昇つてゐるところを見た。私はその電車のあとを追ひかけて、一哩以上もかけた。そしてたうとう、力がつきて、路上にぐたりと倒れてしまひ、警官に助けられて歩道へつれてゆかれねばならなかつた。それは實に恐ろしい日だつた。私はぐんなり疲れてしまつたので、一時の張りつめた恐怖、しめつけられるやうな、窒息しさうな感じから醒めた。しばらくの間、安らかな氣持ちで道を歩いた。彼女が去つてから數

日間、私は何故自分があんな氣狂ひじみた行爲をしたのか、考へて見ようとつとめた。――私は私の心を、色々樣々な他のものに集中しようとつとめた。或るとき、私は私の屋根裏部屋の瓦斯に身を向けたことがある。だが向う側の壁に、鉛筆でグロテスクな輪畫をつけたやうな彼女のまぼろしが、無理矢理に、私の決心を蹴へさした。「彼女は私を愛してゐる！」私はかう叫んだ。そして、彼女が私を愛してゐたことを信じこまうとつとめた。彼女のために生きなければならぬと信じてしまはうとつとめた。だが私の言葉の下から、私は、さうではなかつたといふことを知つた。また二度とさうなる氣遣ひはない。さうなれるわけがない。私はまた物を書かうとつとめた。私の昔の習慣にかへり、私の昔の生活にかへらうとつとめた。だがもうそれは不可能だつた。紙にもペンにももう魅力はなかつた。かういふものはもう生命のない死物だつた。私はそれらの物を嘲笑した。言葉にはもう力がなくなつた――私はもはや言葉に對する興味を失つてしまつた。おゝテス、若し、貴女が、私をとらへたこの全くの空虛、この、途方もない、何とも言ひやうのない心の恐ろしさを察知してくれたらなあ。私には何もかも興味がなくなつたのだ。何もかもが、私をがつかりさせ、私を窘しめ、私をいぢめつけた。私は一つの物語を書きはじめた。だがそれをつゞけてゆけばゆく程、私は馬鹿にされたやうな氣持ちがした。時々私は癇にさはつてそれを引き裂いてしまつた。戰爭は進んで行つた。私は大學の醫療隊に選拔された。だが私の身體はそこへ行つても、私の心は、いつも、目前に起つてゐる事柄とは、ずつとかけはなれたところをさまよつてゐるやうに思はれた。私は怠慢のために譴責を受け、あれやこれやの罰を警告された。だが、私は叱られたり、脅されたりしても平氣だつた。或る晩私はこつそり陣地を拔け出して、酒を飲んで自分を忘れてしまはうとした。しかし醉つ

拂ふと益々私のやるかたない絶望的な氣持ちが募る一方だつた。ニイナは私に手紙を寄越した。私にあへなくて淋しいこと……私が小麥で踊つてゐる農園や、罪のない、ちよつとしたことに興味をもつて笑ひ、はしやいでゐる黒人等を、はやく見られるやうになれたらいゝといふやうなことなどを書いて寄越した。それでも、兎に角、彼女も、彼女なりに私に會ひたがつてゐたのだ。彼女はさう言つたのだもの。人生は、退屈な、ぼやけたものになつて、なやましい夢魔のやうに、私の周圍に立ちこめてゐた。私は、もはや、第二のニイナを愛するやうなことは絶對にないつてことを知つてゐた。

テス——

「夕飯は、いかゞで？」

「出て行け！」——私がマックに荒々しい口のきゝ方をしたのはこれがはじめてだつた。彼は不作法に私の魂の中へ闖入して來たんだから、どなりつけてやるのが當然だ。

テス——凡べては、此の上ない奇妙な、何とも言ひやうのない結末をとげたのだよ。私には、それは證明できない。私の知つてゐることの凡べては、私がこの苦しみのために、何週間も、何ヶ月も惱まされたといふこと、それから、何の警告もなしに、私がまだ苦しんでゐる最中に、その苦しみがまるで、とぎれとぎれの泣き聲の反響のやうに、すうつと消えてしまつたといふことだ。世界はがらりと一變してしまつた——それとも變つてしまつたのは私自身だつたのだらうか？　私は呻くやうな苦しみから解放されたやうな氣がした。突然いましめを解かれたやうだつた。私は、もはや、生れ變つた人のやうになつて歩きまはつた。

それでも、この事件の慘酷さが、犇々と私に迫つて來たのは、それからだ六ヶ月もたつて、ニイナが歸つて來た時だつた。その時に、はじめて、私は十分にその悲しみを身に覺えた。どうして私は、いつになつたらそれを貴女にわかるやうに言ひあらはすことができよう？　テスよ、それは言ひ表はす方法がないのだ。こんな事柄はとても言葉で傳へるわけにはゆかない。これは、到底口で話すことのできない大悲劇なんだ。たゞ〳〵經驗によつてのみ、知つたり、感じたりすることのできるものだ。私が二度目にニイナに會つた時に、私は何かしら非常に恐ろしいことが私の生活に起つたことを知つた。大切なのは彼女を見たことではない。彼女といふものゝ意味をすつかり知つたことだ。幸ひにも、その時に彼女の兄が居あはせてくれたので、つまらない話をして、その場を濁すことができた。彼女はそのそばに微笑しながら立つてゐた。姿にも變りはない。眼も、髪も同じだ。それでゐて、私は何かしら彼女から逃げ去つてしまつてゐることがわかつた。何も變つてゐなかつたが、それでゐて、何もかも變つてしまつてゐた。どう言つたら貴女にわかるだらうね、テス？　彼女は私が度々聞いたことのある、あの同じ聲で私に話した。しかしそのリズムにはちよつと切れ目があつて、その朗らかな調子に、全く魅力がなくなつてゐた。その潑剌たる言葉の調子に何かなくなつたものがあつた。私は昔の面影をつかまうと思つて、もう一度見つけ出さうと思つて、つまらないことを、幾度でも幾度でも彼女に話して見た。だが彼女の聲は急に老けたやうに思はれた。私の名前を呼ぶ呼び方にさへ、昔のやうなやさしい響きがなくなつてゐた。

「ニイナ、」——私は、もう一度自分の聲を聞いて比較して見ようと思つて、自分で彼女の名前を呼んで見た。私の聲も矢つ張り變つたやうな氣がする。私も、昔のやうに「ニイナ」と言ふことができなかつた。ニイナといふ

名前は今でも可愛い名前だ。「ニイナ」私はまた獨りで言つて見た。そして、また繰り返して聲を出して呼んで、その響きを聞いて見た。だが私の「ニイナ」と呼ぶ聲にさへ、もう昔のやうなやさしさはなかつた。

私は彼女の眼を、もつと深く見つめた。彼女の眼をよく探して見た。昔のきらめきはもう消えてゐた。その眼はまだ踊るには踊つてゐた。けれども、何かしら冷い音樂にあはせて踊つてゐるのであつた。

何處かで、何かしら、めき〳〵とこはれるやうな音をたてゝゐた。彼女のもつてゐた驚異はもうなくなつてゐた。魅力はもうこはれてゐた。彼女は美しいには美しかつたが、それは昔のやうに、私の心をひきつける、何とも言ひやうのない美しさではなかつた。彼女は、また通り一ぺんの女になつてしまつてゐた。

ニイナは、彼女が分れてゆく時までに、二人すてゝしまつた愛をつゞけようと望んだ。だが私は、もうそれは駄目だつてことを知つてゐた。彼女は私に何一つ變つたところを認めなかつた。何もかもが彼女にもとの通りだつた。かはいさうに、彼女は一生懸命になつて、私に、彼女がもとの通りだつていふこと、彼女の愛は變つてゐないといふこと、二人の愛はまだ、私たちがかつてはぐくみ育てた、貴い、輝きをもつてゐるといふことを感じさせようとつとめた。だが私の接吻は風のやうだつた。そして、私の指は彼女を抱擁する時にもはやむづがゆいやうなほてりを感じなくなつた。彼女は子供の時分に愛讀して大きくなつてから讀み返して見ると、氣の拔けたやうになつてしまつてゐる書物のやうだつた。

私は行つてしまつた。そして心の中で、彼女を葬つてしまつたといふことを知つてゐた。もう二度と彼女に會ふ勇氣はなかつた。彼女を見るのは、生きた姿をしてゐる死を見るのと同じだつた。その時に私ははじめてかう

いふことをさとつたのだよ、テス、「まだ生きつゞけてゐる死は、永久に終つてしまつた死よりももつと恐ろしいものだつてことを。それからまた、私が、「死は萬事の終りであり、自己の終りであるといふこと——それは此の上もない美の經驗であるといふことを知りはじめたのもその時だ。その時、私は、ニイナがまだ死んでゐないのを殘念だと思つた。ニイナが死んでしまつたら、私はいつまでも彼女を愛してゐたらうからね。いまでは、濃い思ひ出の霧をとほして見ても、やつぱり、彼女は、生きた死の姿としか見えないのだ。

いま、このことを書きながら、私は、私の經驗したことを、到底言ひ表はせないといふことを感じてゐるのだよ、テス。だが私はこれを貴女に隨分度々話したので、どういふものか、かう本能的に、貴女はわかつてくれたつてことがわかつてゐるのだ。私はこのことを精神病學者たちに話し、それから更めて、ブリンクニイ博士に特にさし向ひで話したが、彼等はみんな、これを興味のある狂氣の病狀だとみとめてしまつた。彼等が、この、私の狂氣の新たな證據を書きつけた時の樣子は實に滑稽の極みだつた！　彼等の生活は、それ〴〵皆、生きた死の姿だつた。——世間にはさういふのがうじや〳〵してゐる——だが、彼等は、それを慣習とカムフラージュとの技巧でかくしてゐたのだ。多分、彼等には、凡ての人の生活が、生きた死の姿だつたのだらう。彼等は人生といふものは、生命のある、生き生きとした、電氣のやうなものだといふことを知らなかつたのだ。そして、戀愛は、彼等にとつては通り一ぺんの經驗で、多分、結婚前からそのことを感じてゐたのだらう。

「死んだものは一體何だらう、テス？　それは、美と、切烈と、熱心と、法悅と、感情の自發性と、高まりゆく衝動の渴望と、殘憾と、欲望と夢との激動とだ。貴女は、ニイナも私と同じやうに苦しんだと思ひますか？　ニ

イナは、私の愛を失つたために苦しんだのです――だが、私は愛以上のものを失つたために苦しんだのだ。私は、愛が生きた屍にかはつてしまつたのを見たのだ。それは何とも言ひやうのないものだつた。それの現實の姿が、日となく夜となく、私の見た人々の顏にも、多くの家々の窓にも、廣い車道にも、淋しい街路にも、電車にもバスにも、部屋の中にも廊下にも、私を追ひかけて來た――私はどこへもそれから逃れることができなかつた。精神病學者の言葉でいふと、それは私の妄念になつた。おまけに、彼等がさう書いてゐたのを私は見た。私は、私の身の上話を彼等に話してゐたとき、一寸話をやめて、彼等に、妄念といふ言葉を敎へてやつた。そしてこの字を大きい字で書いておいてくれるやうにせがんだ。私はゆつくりと次のやうに書いて見せた。

妄　念

「ところで、皆さん、妄念の精神病學的樣相をすつかり話してあげませうか？」私は彼等に、病的な親切ぶりを示して微笑しながら、かうたづねてやつた。だが、今はこんな細しい事柄を思ひ出してゐてはならない。それが妄念だとしたところで何だらう？「大藝術は妄念から生れることが屢々ある。それは妄念以上だつた。長い間それは恐ろしい妄執だつた。私は、ニイナを、この生きながら死んだニイナを、私の心からとり出すことができなかつた。私は幾百千の女の容貌に、彼女の寫しを見た。だが、彼等はみんなだまつてゐた。

彼等は、世の中にニイナなんて女はゐなかつたかのやうに、にこ〳〵笑ひながら、つまらない彼等の仕事をしに行つた。それでも、彼等はみんな、どこかゞ、ニイナだつた。この名前が一つの象徵になつて、私につきまとつた。これ等のニイナがみんな、彼女等の殆んどわかりもしない世界、どちらを向いても彼等を壓倒してしまふ世界に、ちら〳〵動きまはつてゐた。彼等は、若し美に直面したら、それを恐れたゞらう。

この時だよ、テス、私が、人生といふものは、ちやうど、嵐が、きら〳〵と縱橫に閃めく稻妻のために美しいやうに、又、夢がはてしのない、眼のくらむやう一種の不安でおど〳〵させるために美しいやうに、貪婪な、冒險的な意味でのみ美しくなれるんだと決めたのは、「人生に於いては、何物も終りと見做してはならないんだ。凡てが新らしいはじめでなくちやならんのだ。」でないと、何事でも、退屈になつて來て、それが成長しないまへに滅ぼされてしまふ。人生には里程標も到達點もあつてはならないのだ。何物も靜止してゐてはならないのだ。凡てが絕えず變化してゐるものとして、不斷に流れてゐるものとして見られなくちやならないのだ。熱心が退屈になつてはならない。美が無刺戟なものになつてはならない。こんな風にして、はじめて人生は、選ばれた人にとつて親しいものとなることができるのだ。

ニイナがね、テス、「生きることは物を書くことよりも偉大だといふこと、愛は叙事詩よりも立派なものだといふことを私に敎へてくれたんだよ。私はもう、生活の形式として文學に歸つてゆくことはできなかつた。私は生きねばならなかつた。物を書くにしても、それは、もつと强烈に生きてゆくため、生活に何物かを附け加へるためで、生活を消費するためではなくなつたのだよ。

それから以來といふもの、私は戀愛に生命を探し求めたんだよ。テス、「愛することは生きることだつた。」生活が、これまでと異つた、何とも言へず、樂しいものになつて來た。私は受動的ではなくて能動的になつて來た。

爬ふ代りに踊つて來た。希望で輝いて來た。オータムの愛は、最初、ほのかな接吻の囁きでやつて來た。夏は無我夢中の崇拜のうちに費されてしまつた。私たちの情熱の野生的な過剰のうちに何もかも忘られてしまつた。私たちはお互ひの熱で相手をやきつくしあつた。私たちは、二人の結合を邪魔しようとするものは何でも容赦しなかつた。又もや、私はニイナとはじめてあつた當時のやうに生きて行つた。私は、あの不思議な、威壓的に迫つて來る熱切さが生活に返つて來ることを切望した。私は毎朝眼をさまして、日毎に新しくなり、日毎に活氣を增して來る世界を見た。私の散歩には、再び、あの輕快さ、あのいそ〳〵といそしむ氣持ちが歸つて來て、それが私の肉體にさはやかな衝動を與へた。オータムは、私たち二人の愛の中にその聲をひそめてしまつた。彼女の舞臺に出たいといふ欲望は褪めてゆき夢は野心や名聲よりももつと深いものに變つて行つた。何事にしろ、私たちがしたことは、それを愛するからこそしたのだつた。その他には理由はあり得なかつた。私たちはたゞ私たちの戀愛にばかり沒頭した。たゞそればかりのために生きて行つたのだよ、テス。そればかりが私たちに附きまとうてゐたんだ。彼女が一度死に脅かされたことがあつた。私は氣がゝりで、心配で氣が狂つてしまつた。私は信じてゐる、彼女よりも私の方がひどく苦しんだつてことを。彼女が一番ひどい苦しみをしてゐたときでも、矢つ張り、私の方が彼女よりもひどく苦しんでゐたつてことを。私は、彼女が病んでゐた時、二週間といふもの、一度だつて彼女の傍からはなれなかつた。私は、狂人が、一生懸命に、まだ自分にもわかるたつた一つのものにしがみつかうとするやうに、彼女の生命を見まもつてゐた。人生が絶望的な叫びになつた。彼女の病氣が治るまでに數ヶ月もかゝつた。私は一度、二三日旅をしようと思つて出かけた。これは何週間もの間、しなくてもすむやうにと思つ

てのばして來た旅だ。でも、オータムがそばにゐないために、痛いやうな淋しさが一時間毎に募つて來て、出發したその日にひき返して來たのだよ。私は彼女がゐないので、ひどい苦しみをなめたのだ。このことは、すつかり私は知つてゐた。私たちは二人とも知つてゐた。私たちは、その時分、こんな風に、二人が全く一つになるやうな戀愛をしてゐたのだ。

その時だよ、テス。だが私はそのこと書いてはならぬ。どうぞ聽いておくれ、そして、私が口で言へないことを、どうにかして理解しておくれ。私はその時のことを考へると今でも身體が慄へて來るのだ。テス……おゝ私は何故この扉に鍵をおろすことができないのだらう？ 若し、いまマックがはひつて來たら、そして又私の邪魔をしたら、私は彼を殺してしまふ。この、おとなしい、痛いことは思つたゞけでもぞつとする私だけれど……。

一體何が起つたといふのだ？ いや私はかう言はなくちやいけない。一體、こんな美しいものに何が起つたといふのだ？ と。その時に起つて出來事は、その筋道を辿つてゆくことも、それをおしはかることもできはしない。又どうしたつてはつきりと說明することはできない。私たちは常々、非常に意味の深い事柄は筋道を辿つて考へてゆくことができさうなものだと感じてゐる——そしてそれがどういふ風に變つて行つたのか說明できさうなものだと感じてゐる。だが、どうも滅多にさうは行かないらしい。私たちは、言ひ表はすことができるよりもずつと前から、又それを思ひきつて言ひ表はすよりもずつと前から、感じてゐる事柄が澤山ある。何でも、さういふ事柄は、恐ろしいものだから、ちよつとした、無言の戰慄する恐怖を通じて、人は先づそれに感づくものと見える。しばらくたつと、それは、その人の個性の方々の隙間へ擴がつて行つて、遂には、その人の魂をすつか

り變へてしまふらしい。この緩漫な、微妙な、そして、屢々氣のつかないうちに積み重なつてゆく變化が一番怖ろしいのだ。突然の變化は、このやうな、不思議な、いつともなしに變つてゆく變化に比べると、その結果が、それ程慘酷なものではないよ、テス。突然、たつた一つの行爲によつて、お互ひに赤の他人になつてしまつたり、ひどく救かれた瞬間に完全に信じあつてゐたのがけろりとさめてしまつたり、また、死のために、親しみが思ひがけなくばつたりなくなつてしまつたりする男女は、喜びよりも速く決心をくじいてしまふ衰頽が、ひた〳〵と忍び寄つて積み重なつてゆくのだけを經驗してゐる數限りない多くの男女よりも、遙かに幸運だ。彼等には、變化は、全く夢にも思ひがけない時にやつて來ることが屢々ある。それは眼に見えぬやうに、音のしない足どりでやつてくる。この變化は時には、ぢつと物を見つめてゐる時にちらりと見た眼の中にも見られるし、唇のあたりのかすかな線にも見られるし、ことによると歩きぶりに見られることさへある。私は、オータムのこの變化にはじめて氣づいた時のことをおぼえてゐる。私は彼女と或る街角で會ふことになつてゐた。そしてそこへ行きがけに、車の中で、彼女を追ひ越した。彼女はゆつくりと、しづかな足どりで歩いてゐた。私は何百ヤードか離れたところから彼女の姿を見つけた。私は彼女の派手な、人眼につく帽子でそれが彼女だとわかつた。

彼女の歩きぶりに一體何事が起つたといふのだらう。テス？　彼女がこれまでにその道を歩いてゐたのを、見たことがなかつたせゐだらうか？　そんな筈はない！　彼女が歩いてゐる後ろ姿を見たことがなかつたせゐだらうか？　これまでに私たちが會つたときには、彼女はいつでも私の方へ向いて歩いて來て、はやく私に握手したさに、美しい、さう世間にざらにない顏で、私の顏をみつめてゐたせゐだらうか？　そのためだつたのだらう

か？　あのためだつたのだらうか？　でなければ何のためだつたのだらう？　私の知つてゐることの凡ては、彼女の歩きぶりが、もはや忘れられないといふことだけなんだよ、テス。それは私には、何とも言ひやうのない程醜く見えた。まるで材木が歩いてゐるやうだつた。重々しいよた〳〵した歩きぶりだつた。その瞬間に私の心から走り出た考へは、あまりに慘酷で、こゝで打ち開けられない位だ。私はあんな歩きかたをする女を愛してゐたのだらうか？　どうして、あんな動きかたをするものに精神的に親しむことができたのだらう？　私は、最初彼女の姿を見たときに、車の中から彼女を呼びとめようと思つた。だが彼女の歩くとこを見てゐると、私は魂消てしまつて、とてもそんなことはできなくなつた。尤も彼女の歩くのを見てゐたのはほんの二三秒の間だつたらうが、それが何時間ものやうな氣がしたのだつた。そこで、私は、私の友人たちに、その街角まで車をやつて貰つて、そこに立つて彼女の來るのを待つてゐた。これ等の事はすつかりで、ほんの一瞬間の經驗だつたとも言へよう。そして私は、すぐにどうしてもそれを忘れてしまはうとつとめた。それでも、その日一日ぢう、何かにつけて、しよつちうそのことが思ひ出された。勿論、私たちの生活に決定的な刻印をきざみつけたのは、彼女の歩きぶりぢやなかつた。彼女の歩きぶりは、その前の澤山のもつと微妙な事柄がだん〳〵積つて來て生じた一つの結果だが、その事柄は、それが起つた時には私は氣づかずにゐたのだ。つまり言つて見れば、さういふ事柄ははつきりと起つたわけではないのかも知れない。ことによると、それは事柄とも言へないものなのかも知れない。つまり別々の、判然とした、それ自身で獨立した事柄ではないのかも知れない。多分それは、他の事柄の部分、小さい部分、とるにもたらないやうな斷片なのだらう。そして、これ等の小さい事柄の中で、もつと大切な部分である、

もつと美しい事柄のために、蔭にかくされて見えなくなつてゐたのだらう。何しろ凡てが非常にこんぐらかつてゐた。といふのは論理の助けを借りようにも、どちらを向いて見ても論理がなかつたからだ——何もかもが實に不合理で、非論理で、混迷してゐて、謎のやうだつた。彼女の歩きぶりは、それ等の事柄のうちのほんの一つで、それが特別に強く私に迫つて來たに過ぎないのだ。それ等の事柄は、私がいやでたまらなかつたものといふわけではなく、たゞ、魅力がなかつたといふだけのものであることも屢々あつた。私はその時でも、これ等のものがどんな意味をもつてゐるのかわからなかつた。今では、勿論、私もあまりによく知りすぎてゐる。それ等のものは、この緩漫な下り坂のはじめであつたのだ。それ等のものは、やがて生きた姿をした悲劇になつたものゝ先觸れだつたのだ。

困つたことには、それつきり何事も起らなかつたんだよ、テス。若し何か恐ろしいことでも、何か恐ろしく美しいことでも、何か恐ろしく下卑たことでさへも起ればよかつたのに、なんにも起らなかつたのだ。オータムと私とはその頃一年以上も一緒に暮してゐた。深い、隅々まで行き亙る美から生れた歡喜の一年だつた。私たちは二人とも永久に愛し合はうと、狂氣のやうに切望してゐた。私たちは二人とも相手がゐないとぢつとしてゐられなかつた。何か變化が起つて、私たちが苦しんだり、私たちの愛が埋もれたりするやうになりはしないかと心配してゐた。私たちは凡ゆるものにしがみついた。私たちが何より貴いものだと考へたものを、守るやうな凡ゆる理窟を探し求めた。しばらくすると、いさかひのために形勢が慘酷なものになつて來た。私たちの愛してゐたものを永久化しようとする欲望のために、私たちは、戀人同士よりもむしろ敵同士になつた。力の押し引きがあま

りに破壞的で、どうにも手がつけられなかつた。若し私たちが、不眞面目で、欺瞞してをれるのだつたら、私たちの失敗は簡單なものだつたらう。だが、さうではなかつた。それは、簡單どころの騷ぎぢやなかつた。私たちはその試みがくぢけて氣が狂つてしまつた。それでも私たちはそのことについては何も言はないやうにつとめた。そして、互に、相手が知つてるんだといふことを知りながら、それを口に出し得ないで、ひとりで思ひ惱んでゐた。それから私は、月もの間、戀愛をなだめて生活の中へよびもどさうと思つて、互ひに苦しめあつた。私たちはその試みがくぢけオータムに何の苦痛もなしに別れられるやうになつた。彼女が病んでゐる時でも、彼女にやさしくしてやつても、胸をときめかさずにをれるやうになつた。彼女の身體に觸つても少しも感動しなくなつた。私たちの切なる思ひは鎭まり、昂奮はおさまり、そして二人の愛は死んでしまつた。まだ彼女にやさしくしてゐたのなら、やつぱり愛が生きてゐたのぢやないかと言ふ人があるかも知れない。だがこのやさしさは情熱で燃えることのできないものだつた。それは死んだ愛だつた。そして、私は、又もや、生きた屍に面と向きあつてゐる自己の姿を見出して、子供のやうに泣いた。別だん、亂暴な言葉で言ひあひをしたり、ひどくいさかひあつたり、毒意を含みあつたりしたわけではない。おとなしく、上品にしてはゐたのだが、熱がさめてしまつたゞけなのだ。情熱がもはや沸き立たなくなつたといふまでだ。私たちはもうがつかりしてへと〳〵になつた。美の中には、強さも力もなくなつてしまつた。

それから私は復、物を書きはじめた。私は長い間苦しんだのだよ、テス。貴女なら、この苦しみを克己的な沈默とでも言つたことだらうね。私は私よりもオータムの方に氣の毒だつた。だが、何といつても一番氣の毒だつ

たのは死んでしまつた愛だ。死んだ愛なんだよ、テス！　私は、我と自分を分析し、自分をせめさいなんだ。私はあちこちへかけずりまはり、凡ゆる物、凡ゆることをやつて見た。私は愛をすてることができたらうか？　愛なしに生きることができたらうか？　一體人間といふものは、そして、私は、愛なしに生きることを愛することができたらうか？

私が氣が狂つてゐるので、こんなことを言ふんだらうか、テス？

生きた屍といふ考へが私につきまとつて來た。陰鬱な、怪訝な樣子をして、ニイナとオータムとが私を、見つめてゐる顏が、私に見えた。彼女たちの聲は、闇の中で聞える、物に怯えた囁きのやうに私を追ひかけて來た。私がこの苦しみからのがれ、この出來事の意味が成る程と合點がいつたのは、それから隨分たつてからだつた。私たちは、私たちの情熱に火をつけてくれた熱によつて、こん度は、その情熱を燒きつくしてしまつたのだよ、テス。私たちは、私たちの魂がやきつくされるまゝにしてゐた。二人が親しみあはうと焦れば焦る程、その親しみに、魅力がなくなつて行つた。親しみが妄執になつてしまつた。私たちはあまりに深く互ひの生活を見すぎてしまつた。未知のものゝもつ神祕が、知りつくして、だん〳〵散文的な――魅力のない、極度に散文的なものになつて行つた。愛といふものは、こんなに張りつめた苦しみに堪へるには、あまりにやさし過ぎるものだ。それは、何物にも拘束されない、壓迫されない、それ自身のリズムに從つて、もつと自由に、ゆつたりと生長すべきものなんだ。

「この男は戀のために氣が狂つてゐる」――精神病學者たちはかう言つたものだ。私は、いくら何でも、彼等の

うちに一人位は、私の言ひたいと思つてゐることをわかつてくれる人がゐるかも知れんと思つて、いつもこの話を彼等にしたものだが、私の分析をこの部分まで進めてくると、いつでも、彼等はみんな、私の診療表に「不明」と記入するにきまつてゐた。この表と來たら、實に滑稽な代物だ。無意味なことばかり澤山書きこんで、意味のあることつたら、何一つ書いてないんだからね。個性のはかり知れない微妙な事柄は、この表にはまるきり書き記されてゐないのだ。私は、彼等が私についてどんなことを書いてゐるか知らんと思つて、そのうちの一枚を盜んでやつた。それは水雷のやうな形をしてゐて、要項や日附を記すために、晴雨計のやうな目盛りがついてゐた。若し私がそれをまだ手許にもつてゐたら、貴女は、その中に書いてある、注意書きや診斷を見てきつと噴き出すだらう。――腺の專門家は、私の病氣を、腺に關するものだと信じきつて、生殖器の檢査や治療をすゝめてゐる。フロイド派の學者は、私の疾病は、エヂポス症狀群（コンプレクス）の形で外部に現はれてゐる母親の氣鬱症の影響から出た精神病だと信じこみ、もう一人は、私の病氣を子宮内から出た、內氣性のフラストレーション症狀群（コンプレクス）のせゐにしてゐる。また、或る者は、私のやつたことはすべて、私の作家としての無力さを埋め合はせるわかりきつたやり方だと感じてゐる。彼等の少しばかり書きとめてゐる解決の或る物ときたら、まるで緣日の見世物のやうに千差萬別だ。彼等は何もかもありつたけのことを書いてゐるくせに、私のことはなんにも書いちやゐないのだ。私の正體、或は互に矛盾し、十文字に交錯し、重なりあひ、侵しあつてゐる澤山の、私の正體を、彼等は、たつた一つの範疇に、しめくゝつて、それで滿足してゐるのだ。といふのは、それが彼等に、言葉の形で、一つの精神が、他の精神材料を支配する力をもつてゐるといふ嫉妬的な感じを與へるからだ。彼等は本質的に動的なものを靜的

に說明し、解剖してゐる。私が、例の表を盜んで何分間かたつたあとで、私がそれをもつてゐるのを發見すると、彼等は、早速吃驚した。

「盜心狂(クレプトマニヤ)だ！」と彼等の一人が昂奮して叫んだ。だが私は、その男に「それは正氣の沙汰ぢやない、盜心癖(クレプトマニア)の患者は私の徵候よりもちがつた症狀をあらはすもので、診療表なんかより、もつと別のものを盜む傾向をもつてゐると言つて聽かしてやつた。

彼等は吃驚した。といふのは、彼等は、彼等の分析の意味が大體私にもわかるといふことを知つてゐたので、彼等の分析のために私が心を亂して、餘計に私の精神が動搖を受けるだらうと考へたからだ。だが、實を言へば彼等が吃驚したのは　私が彼等の祕密を知つたからなのだ。私が彼等の眼かくしを知つたからだ。私は、彼等のごまかしの診斷を看破つてしまつたのだ。

私がこれを書いてゐる時に、貴女はそばにゐることもあるし、ゐないこともあるんだよ、テス。時々私には貴女が見えるんだ。パッチリと眼をみはつて、微笑を浮べて、私と同じやうに、ちやんと生きた姿でゐる貴女が見えるんだ。貴女は、私の顏を見て、この學者先生どものことを笑つてゐる。その時私は、貴女を抱擁することさへ出來るんだ。貴女の、生きた、溫い指が、ふるへながらさはるのを感じるんだ。指はまだ美しい。それは、今では美しい、といふより外に言ひやうがない。指には實に色んなものが隱されてゐるもんだね。指は實に多くの、深い、意味深長なものをあらはしてゐる。指は、僅かな努力で、實に、多くのことを語るものだ。指と手のひらとの抱擁で、もつと完全な抱擁からでも生じないやうな、不思議な、親しみが生じ得るものだ。世間の多くの人

は、自分の指についてあまりに考へが足りない。指の、美しい、やさしい形と意味とを忘れてしまつたり、最初から知らなかつたりして、その愛らしさを安つぽくしてしまつてゐる。彼等は、指なんてものには神聖な意味はまるでないかのやうに、彼等の指を見さかひなく、ふりまいてゐる。唇や肩にはさはらせない人にでも、平氣で手を握らせてゐる。彼等は、かよはい植物の細い莖のやうに、掌から出て、先へ行くほど細くなつてゐる指の、柔かな、眞白な、しなやかな美しさを愛したことがないのだ。指の感觸から初戀が湧き出るものだつてことを彼等はまだ知らないのだ。また戀愛がはじめて過ぎ去つて行くのは指の間からだつてことも、殆んどわかつてゐないのだ。指に、感激のためのわなゝきが失せ、かつては指の感觸に胸をときめかせたのが、さうでなくなつてしまふと、戀愛は既に下り坂に向つたのだ。ねえ、テス、私たちの感觸はにぶりはしなかつたね。熱のない通り一ぺんなものに變つてはしまはなかつたね。ぞつと身にしみ渡るやうな感じを失はなかつたね。私は今でも、貴女の指が、私の掌をぎゆつと包むのを思ひ出すと、貴女の指の間から、貴女の力が、私の身體の中へ傳はつてしみ渡つて來るやうな氣がする。指ばかりぢやない。貴女の全身がさうなのだよ。テス、私は貴女がこゝにゐないことを知つてゐるのに、貴女の美は少しも褪めないで、もとの通りだ……。

あまり突然だつたので、私は左手で私の書き物をした紙にしがみついた時、私の肩を壓へつけた、彼の腕の壓迫を感ずるまで、自分が彼を打つたことを知らずにゐた。色んなことが、すさまじい渦卷のやうに、私のそばを通り過ぎた。私の思ひ出すことのできるのは、私がテスと夢見心地の中に包まれてゐたとき、マックが私の机か

ら、私の原稿を奪らうとしたことだけだ。私は彼の姿を眼で見ない前から、彼が室の中へはひつて來てゐること
を感じてゐた。けれども彼に出てゆけと命令するために私の思ひの絲を中絶したくなかつたのだ。それから、は
すかひに、私は彼が、私のベッドのそばのテーブルに小さい食物の盆をおくのを見た。私の原稿は、机のまはりに
散亂し、中には床の上へ落ちたのもあつた。最初彼の手がそれに觸れようとした時、何かしら私の心中でかつと
燃え上つた。一瞬のうちに、それが私の肉體を燃やして焰にしたかのやうであつた。私は彼にその書類をとらせ
るくらゐなら、それをぼろ〳〵に嚙んで、呑みこんでしまつたゞらう。今でも、私がその時に書いた紙を出して
見ると、このいさかひのために、くしや〳〵に皺だらけになつたのがある。

その翌日、私はマックに、彼の策戯がまんまと失敗つたことを話してやつた。いろ〳〵と彼を問ひつめて、たう
とう彼に、ピンクニイ博士から、私の書いたものは何でも事務所へもつて來るやうに言ひつかつてゐたのだつて
ことを白狀させてやつた。

「馬鹿な連中だ、」と私は言つた。「そんなことをすれば、おれがあのことを實行した理由がわかると彼等は思つ
てゐるのか知らん？」

マックは、自分はたゞ命令に服從してゐたばかりだといひわけした。私は、眠るときも原稿を肌身からはなさぬ
やうにした。その上に、私はめつたに眠ることもなかつた。それで、私は、彼が盜む機會が殆んどなかつたのだ
つてことが合點がいつた。彼は、まだ私を怒らせたくなかつたのだ――少くも私にはそのやうに思はれた。だが
私があんなに怒つたので、彼は、矢つ張り私は、診療簿に記してあるやうに噪暴性の犯人だつたのだといふこと

が、餘計にたしかになつたやうに感じた。以前には、彼は、何かの間違ひぢやないかと疑つたことが屢々あつた
と私は信じてゐる。一人の人間が、自分の物を書いた紙を他人が拾つたといふだけの理由で、その人を打つなん
てことは、彼が噪暴性狂人であることの明白な證據だつたのだ。

數日間私は、このことについて書くことができなかつたのだよ、テス。それは、この出來事のために、神經が
いら〳〵して落ちつきがなくなつたからだ。もう一度、このことに立ち返ることは難しいだらう。たゞ、私は、
このことをすつかり何囘となく、繰り返し、繰り返し、考へたことがあるお蔭で、何一つ忘れてしまつたことは
なからうと安心してゐるのだ。私は貴女にオータムのことを話してゐたんだつたね、そして、私たち二人の愛が
終りを告げたことを。精神病學者どもが、この私の書いたものを讀む機會があつたにしろ、それがどうなるだら
う！　彼等は、私が言葉で、これをすつかり彼等に話してきかせた時以上に私を理解するだらうか？　勿論そん
なことはないのだ。だが、あとをつゞけなければならぬ。

私がはじめて、ヴァイオレットに惹きつけられたとき、私は、それは彼女の名前のせゐだと思つた。私は平生、
最も不可思議な花として菫（ヴァイオレット）が好きだつた。菫の、暗い、殆んど毒々しいやうな色は、いつも、
私の心の中にある、ある物をやはらげてくれて、さめ〴〵と、痛いやうに泣かせるのだつた。人間の顏といふも
のは、名前にしつくりあてはまつてゐることがよくあるもんだね、テス。私の言ふことがわかるかね、テス？
小さい子供の時分に、私は、よくキャリイといふ名前の女に會つたものだが、いつも、この女の名前は他の名前で
あつてはいけなかつたにちがひないと思つたものだ。勿論、この名前と顏とを私に聯想させたのは、ほんの一時

の思ひつきだつたのだか、それでゐて、私には、それは、その人の一身に特有な物であるやうな氣がしたのだ。時々、私はロオズといふ名前の女の顔や、ルイズといふ女を顔を見て、顔と名前とがいかにも不釣合だと感じたことがある。かうした女はエンマとかアンとかいふ名前でなくちやいけなかつたのだ。私は、エンマ型の顔やアン型の顔の輪廓を、ほゞ自分の頭の中でこさへてゐたのだ。ヴァイオレットはヴァイオレットといふ名前より外につけやうのない女だつた。他の名前をつけたりしたら、あの女の美しい顔だちを冒瀆し、それを汚したにちがひない。だが、私は、ヴァイオレットを、その名前や顔よりももつと深く愛するやうになつて來ると、だん〳〵、私たちの愛を何か新しい叡智と溶け合はせてしまひたくなつて來た。その叡智を私はもつてゐるやうな氣がしたのだ。私はもう生きた屍を怖れなかつた。あんな不幸なことが繰り返されるのを怖れなかつた。私はニイナとは別な愛しかたでヴァイオレットを愛していつた。愛しかたが少ないのではない、たゞちがふのだ。もし、オータムと私とが同棲さへしてゐなかつたら、私たちの愛は今だに生きてゐたらう。私はこのことを何べんも何べんも繰り返して言つたので、頭の中で口癖になつてゐる。私たちがあまり親しくしたゝめに、情熱を犧牲にしてしまはなかつたらう、私たちはいつまでも愛してゐたゞらう。私たちの愛は今だに生きてゐたゞらう。容易に近づけるとなると情熱が死んでしまふ。いつも親しくしてゐては情熱はつゞくものでない。相手の生活が何から何までわかつて來ては情熱はつゞきつこはないのだ。情熱はその歡喜にうか〳〵と醉うてゐるとひとりでになくなつてしまふ。そして情熱のない愛なんてものは全くもつて、びつこの、ちんばの代物だ。情熱のない愛は決して愛ぢやないのだ。それは老いぼれて魅力のなくなつた片輪の愛だ。私は、ヴァイオレットを、今度こそは生きた屍にすまい

と思へば、これと戰はねばならないのだ。

そこでヴァイオレットと私とは、新しい希望をもつて、二人の愛の旅に旅立つたのだつた。私はまた小さい子供になつた。私たちは以前には征服者だつたものを征服しようとしたのだ。私たちは、すばらしい、稀有な幻影でもつて、私たちの愛を強めようとしたものだ。驚くべき恒久を達成して物事のはかなさを否定しようとしたものだ。私たちはこの高い理想に身を捧げたのだ。それをなしとげるために生きて來たのだ。ねえ、テス、この間の爭鬪はもう記す必要はあるまいね、親しくしたいといふ切なる願ひをもちながら、それを强ひて抑へつけ、いつまでも離れずにゐたいと切望しながら、どうしても離れようとし、すつかり行くところまで行きつきたいと願ひながら、中途でやめねばならぬその心の爭鬪は。私たちは毎日々々、毎週々々これを實行して行つたのだ。はじめのうちは苦しくてとても辛棒しきれなかつた。だが、そのうちにあきらめがつくやうになつて來た。そして私たちは情熱は保存して來た。だが、その代りに魂を苦しめたのだ。或る時は幸福が苦痛だつたし、又或る時は苦痛が幸福だつた。私たちはこの顚倒した矛盾に慰安を見出したのだ。自己をせめさいなみ、自ら苦痛を求めて、その中に刺戟を見出したのだ。私たちの愛は純然たるマゾヒスムになつて來たと思ひこんだことが時々あつた。私は、幾晩も、幾日も、睡りもせず、物を食べたくもなかつたことが時々あつた。ヴァイオレットは、この張りつめた生活のために見る〳〵弱つて行つた。彼女の姿は見違へるやうになつて、しまひには、物凄い死人のやうに眞つ蒼になつてしまつた。さうなつて來ると、ニイナやオータムよりも、もつといけなくなつたのだよ。テス、今度は、樹の葉から色が褪せてゆくやうに、美しさが褪せてゆくのを私は見たのだよ。テス、まるで、美しさが、

私の眼の前で、干乾びて消えてゆくやうな氣がしたのだ。私はがつかりしてそれを見まもつてゐた。あまりいゝ夢を見ると、醒めるのがをしさにもつと眠つてゐたいと思つてあせることがあるね。それでゐて、その夢の美しさは黄色い霧のやうなものになつて消えてしまひ、何もかも雲のやうに散つてしまふやうな氣がするでせう。ちやうどそんな風だつたのだよ。私は彼女の身體と心とにどんなことが起つたかを彼女に打ち開けて言ふ勇氣もなかつたし、私の身に起つた出來事を、言葉で承認する勇氣も、その時はなかつた。愛は見る〳〵生きた苦しみになつて來たんだ。私たちは二人が一緒になつて生活した。そして一緒にゐると、苦しかつた。といふのはそのうちに時がたつと、別れねばならぬことを知つてゐたからだ。それは連續的な苦惱だつた。私は彼女と別れる時に、みじめなあつけなさを感じないことはなかつた。たまに、ちよつとした喜びが私たちの生活の中へ忍びこんで來る時は、お門ちがひのまるで、他人の家へ侵入するやうな風にはひつて來るのだつた。時とすると私はそれを疑つた。それを喜びだと氣がつかずに、苦痛の少し變裝したものだと思つた。一年たつと、私たちはもはや煩悶しなくなつた。だが、私たちは何とすることができたゞらう。テス？　私たちの衝動に降伏して、二人が一緒になつて暮せば、情熱はなくなつてしまひ、いやが應でも顔をつきあはせてゐるために退屈になつて來る。緊張はなくなつてしまふ。その結果としてやつて來る單調よりも、まだはげしい苦しみの方がましだつたのだらうか？　なれ〳〵しく親しみあふために白々しく無感動になつて、情熱がなくなつてしまふのよりも、まだ苦しんでゐる方が美しかつたんぢやなからうか？　どつちへころんでも、どの道私たちは災厄に直面してゐたのだ。又もや生きた屍といふ考へがやつて來て、私を苦しめた。情熱の死はつまり戀愛の死なんだ。しかも、こんなはげしい苦

しみをつゞけて行くことは、戀愛を永續させるための此の上もない慘酷な方法だつた。こんな風では、結局戀愛そのものが、苦悶のうちに死んでしまやしないだらうか？　しかし、たとひ死ぬとしても強い死にかたをするだらう。そういふ死に方には美がある。それはぢり〳〵野たれ死にするやうなことはないだらう。癌のやうに、ずるく、ちく〳〵嚙むやうに、美を蝕ばんでゆく、のろまな死にかたはしないだらう。多分、はげしい憎惡のうちは、燃えるやうな怒りのうちに、猛烈な衝突のうちに、或は堪へがたい、物狂ほしい苦痛の危機のうちに死ぬだらう。その方が、ずる〳〵べつたりな死にかたよりはましだつた。私はどうせ愛が死ぬものなら、さういふ風に死なせたかつた。それだのに、ヴイアオレットはだん〳〵弱つて行つた。そして、私たちの情熱の瞬間さへも、苦痛のために緩どられるやうになつて來た。それは先へ進むことができなかつた。私たちが二人の眼の飢ゑた苦しみの中に見たのはたゞ絶望だけだつた。それで、私たちは、たうとう屈服して逃げ出すことに決めた。別の世界へ行かうとしたのだ。私たちは一年中で一番暑い八月に船出することになつた。何故八月を選んだのか私にもわからない、他の月でなくて、この月に私たちを出發させたのは、ことによると或る不思議な豫見だつたのかも知れない。將來の色々な計畫が、いくらか苦痛をなくしてくれた。數週間の間、私は、この新しい運試しによつて、私たちのみじめさから逃れられるんぢやないか知らんと思つた。私は一種の熱心をもつてその計畫に身をうちこみさへした。私は私自身を忘れ、私の恐怖を忘れ、これまで、私の心をおさへつけ、おびやかしてゐた凡べてのものを忘れてしまひたくてしやうがなかつた。私は、まだ取りかへしのつかない程私たちの間が白けきつてしまつてゐなければよいが——まだあの强烈な美、私たちがあんなに盲目的にこがれてゐた、苦しみはなくて、それ

でゐて熱烈な戀愛をする餘地が殘つてゐればよいがと望んだ。旅へ立つ當日でも、私はまだ心の中にやさしくのこつてゐる希望で眼覺めてゐた。だが、その朝だん〳〵時刻がたつにつれて、何かしら不幸なものが私の心の中へやつて來たのを知つた。私はそれを分析して見ようとしたが、勿論かうした事柄の分析は全然無駄だつた。この感じはだん〳〵生長して行つて、正午にヴァイオレットに會つたときには、もう一つの氣分になつてゐた。私はそれを彼女にかくしてゐようと骨を折つた。でないと彼女を苦しめるだらうと思つたからだ。だが彼女が私の腕をとつて二人で道を歩いてゆく時分には、益々その感じは嵩じて行つて、殆んど偏執(マニア)になつてしまつてゐた。私は、そんなことになりはしないかとどれほど私が恐れてゐたかを知つてゐた。それで私はまるで敵と戰ふやうにそれと戰つた。今日はこんな風ぢやいけないと私は言つた。ヴァイオレットは私が機嫌の惡いのを怪しんでゐた。

私はあの時の光景を、どんな細かいことまで、隅から隅までおぼえてゐるよ。テス、そして時がたつにつれて、その記憶はだん〳〵ぼんやりしてくるどころか、却つて益々はつきりして來るやうな氣がするのだ。私には、それをどう說明していゝかわからない。私はたゞ、自分のしたことを話すことができるばかりだ。それでも、貴女は私を知つてゐるんだから、私のやつたことを理解するやうにつとめてくれなくちやいけない。それは、突然私につかみかゝつて來て、その意味を私が十分のみこむことができない前に、私を壓倒してしまつたんだ。私は今なぜそれが急にあんな力を獲得したかつてわけを思ひ出す。私たちは、汽船が出發する一時間半前に甲板に立つてゐた。空氣は霧を含んでゐた。忙がしさうに歩きまはる人々の、せゝこましいさはぎが妙に氣になつた。私たちは、ちやうど、私たちの船室の方へ通ずる廊下の眞上に立つてゐた。ポーターが私の右を通り過ぎて、船室(ケビン)の

階段を降りかゝつた。はじめのうちは、私は殆んどこの男に氣がつかなかつた。そのうちに、この男は、急に身體をねぢつて、人間といふよりも怪物のやうな顏で、私の方を振り向いたやうな氣がした。實際は、彼は振り向いたのでも何でもなく、たゞ、大きな、重さうな、立派な葬式の花輪をかついでゐる肩をちよつと動かしたゞけだつたのだ。さういつたわけでこの船には、死人があつたのだ。しかもちやうど私たちが眠ることになつてゐる邊にゐるのだ。勿論、實際は、そんな筈はない。でも、私はすぐに、ひどく氣持がわるくなつた。欄(ヒヂリ)につかまつて、やつと息をつかうとしてゐた時の私の顏は、あとで聞いたところによると、チョークのやうに眞つ蒼だつたといふことだ。ふと見ると、ヴァイオレットも、顏から姿から、すつかり、傷ましいかはり方だつた。二つの眼は何とも合點のゆかない程小さくなり、顏は、ずつと昔の面影のやうに褪せてゆくやうな氣がした。私は又もや彼女の中に、生きた屍の姿を見たんだ。私は、殆んど息をすることもできなかつた。だん〳〵氣分が惡くなつて來るので、私は彼女の手をつかまへて、急いで船から降りた。暫くの間といふものは、彼女は、私が氣でも狂つたんだと思つてたのだよ、テス。彼女は私をとめようとした。私にいろ〳〵と道理を說いたり、私にさからつたりした。だが私は我無者羅に强情を張つだ。この旅のために、既に今までに何百弗も金をかけたのだが、そんなことはかまつてをられない。金の損害なんか問題ぢやないのだ。旅へ出ることが、矢つ張り、苦しみであり、惱みであるとしたら、そんなことにかゝはつてをれないぢやないか？ 私に我慢のできないことは、私はやる氣がない。通りへ出ると、身體の方はいくらかよくなつて來たが、心の苦しみは前にもましてひどくなつた。ヴァイオレットの手が觸れても、ひやりとして、ぞつとした。それは不自然な力で私の手にからみつくやうだつた。私たちは車

に飛び乘つて、全速力で、彼女のアパートへ走らせた。その夜私はおそくまで慄へてゐた。――この慄へるのは寒いからではない。慄ひがはじまると、寒氣がするどころか、却つて身體がぽつとあつくなつた。これは心のせゐで、それが肉體的にあらはれると、こんな裏腹な表現をとるのぢやなからうか？　だが、船が出帆したことを知ると、慄ひの、度數は減らなかつた、幾分弱くはなつた。でも、夜が明けるまで、私はヴァイオレットのとこを去らなかつた。

貴女の知つてゐるやうに、私はそれつきり彼女に會はなかつたのだよ。テス。私は彼女に長い手紙を書いた。私は彼女からの返書を開いて見る勇氣はなかつたが、それでも、何か妙な方法で、苦痛で看破つて、彼女は私の氣持ちを理解したにちがひないと私は信じてゐる。何となく彼女が理解してくれたやうな氣がする――たゞそれだけだ。私たちの戀は破れてしまつた。そして、かうした危機をもつて、最後の悲劇的な形式にとびこんでしまつたのだ。私たちはもはや先へ進むことができなかつた。彼女も亦、生きた屍の姿になりはてゝしまつたのだ。

それからといふもの、私は、私の生活から、變愛をしめ出してしまつた。私は戀を戀することを斷然やめた。私は一個のつむじまがりになつた。私は、戀を暗示するやうなものや、それに、そゝのかすやうな美しさを與へるものをすべて信じなくなつた。美さへも何か惡いものゝやうな氣がした。私は本能的な恐怖感でそれを避けた。それには魅力のある一面があつたが、それに禁制の不吉の一面がひきはなすことのできないやうに混つてゐるやうに思はれた。それが私には恐ろしかつたのだ。又もや私はとぢこもつて書物に向つた。私は、私の古い熱心な知性が、一度計畫して、後にすてゝしまつた新しい仕事に私の心を服從さした。私は、復哲學に身をうちこんで、

冷やかな論理では見出せなかつた逃げ道を神祕主義の形而上學の中に見出さうとつとめた。私は書物を著さうと計畫した。哲學をあみ上げようと目論んだ。何でもかでも貪り讀んだ。たうとう、生活そのものが、一つの觀念の微妙な具現に過ぎなくなつてしまつた。私は自分が一つの觀念にかはつてしまつたのを見出した。尤もそれは生きた觀念ではあつたが、觀念は觀念にちがひなかつた。私は殆んど信仰的に、その觀念に一身をさゝげた。羅馬加特力教でさへも、その觀念の統一された概念のせゐで私をひきつけるやうになつた。私は敬虔な熱心さでニユウマンを讀んだ。フランシス・トムソンとアリス・メイネルとは、その宗教的な情熱で私の魂を奪つた。ウナムノの『人生の悲劇的意味』が、私の方向を失つた魂の新しい聖書になつた。私は、まだ十分に私の言葉に飜譯されてゐなかつた古い事柄を貪り食ふために新しい言葉を自修した。ドストエフスキイは、私の魂に對する彼の超自然的な理解力をもつて私にたえずつきまとうた。まるで彼は、私を彼の書物のペーヂの中を歩かせるやうに思はれた。時々私は、私の魂の亡靈が、彼の創造した不思議な人物の中へつき進んでゆくやうな氣がした。私はカラマーゾフ家の一員になつた。彼のキリスト教的神祕主義は、人殺しや狂人やに對してさへも、やさしい寛容と慈悲とをもつてゐるので、私を壓倒した。トルストイは、ひどい自暴自棄な生活のあとで、老いぼれた道德をもちだしたり、默りこくつた百姓のやうな諦らめを承認してゐるので、私はひどくいやだつた。ドストエフスキイを讀むと、何かしら高尚なもの、宇宙のやうに柔かくて句容的な神祕主義の中に身をしたして、個人が宇宙の中に溶けてしまひ、この世界よりも、もつと立派な永遠の世界の廣大な空間の中に埋もれてしまつて、高い個人でも低い個人でも、なほ一層高まつてゆく。トルストイを讀むと、百姓のやうに卑屈になり、恐怖に迫ひたてられ

て小さくなり、生活を下劣にすることによつてその不幸を少くするといつた風ののろまに下落してくる。トルストイの精神主義は私にはあまりに實用的なものであり過ぎた。ロザノフの奇妙な不可知論と宗教的感情、彼がキリスト教を承認しながら、それを誹謗する矛盾は、私を物狂ほしくしたが、それでゐて私には魅力があつた。そのうちに、東洋の思想が、カルマの概念として私をおそつて來た。私はドストエフスキイの中にさへ見られなかつたものを發見した。數ヶ月の間、私は佛教の信者になつてしまつた。ガウタマが何かしら强烈なものに具現されて、私の心の中で急に動きはじめた。私はかうした宇宙的なあこがれを感じはじめた。それが東洋人の十字架なのだ。萬物の永刼輪廻の思想が私の魂に不思議な勇氣と落ちつきとを與へた。涅槃を探し求める心が、まもなく、私を强制的にじつとしてゐられないやうにした。私は夜も眠らずに、熱心に、ウパニシアッドを讀んだ。何日かの間、晝も夜も、私はこの高い洞見の奥儀を探究した。私の魂のかうしたもがき、こんなに遠くの事柄まで私をつれて行つたかうした研究は、ちやうどこの時に、私が貴女に會はなかつたら、しまひにはどうなつたらうか、私にもわからないのだよ、テス、まだ何もかも不たしかで、幻のやうに混沌としてゐるのだ。それでも、私は、その頃何となく新しい確信ができて、强くなつたやうに感じたものだ。この確信は何物も搖り動かすことも、變へることもできないものゝやうな氣がした。そして實際、テスよ、貴女以外のものでは、この確信はびくともするんぢやなかつたのだ。私は新しい生活への途上に立つてゐたのだ。苦闘をうしろにふりすてゝ進まうと決心してゐたのだ。

私がはじめて貴女に會つた時に、私の心の中に何事が起つたかは、私にはとても言葉では表はしきれない。苦

痛がえも言はれぬ樂しいものになることがよくあるものだが、貴女は、私にさう言つたやうな妙な感じを起させたのだ。貴女はまるで過去のものが、思ひがけなく起ち上つて、世にも稀なる美しさをもつて、大膽不敵に、私の新しい決心に挑戰して來たやうだつた。

私は貴女の前へ出ると弱くなるやうな氣がした。殆んど貴女が怖いやうだつた。泥だらけの谷間や、麓の小山の間をうね〳〵くゞりぬけたあとで、突然、大きい山のそゝりたつた嶮しい山腹から、ちらほら見えそめる星の空へ、さつと夕日のさしこむ時に、何となく弱さと恐怖とを感じるものだね、テス。私が感じたのはちやうどさういつた風のものだつた。それは神々しさから生れる弱さと怖はさだつた。かういふ時には生れつき備へてゐる破壞の力と、强烈な美の力とが私たちを捉へるものだ。私は、一眼見たとき、貴女の中にさうしたものがすつかりそなはつてゐるのを見たのだよ、テス。私は、その頃私の心を奪つてゐた情熱がすつかり霧散してしまひ、私の新しい理想が、突然、苦々しい焔をあげて燃えつくしてしまふのを見たのだ。私自身が、復もや、浮浪的な、混沌なる魂になつたのを見たのだ。ぢつと貴女を見てゐるうちに、私が、だん〳〵そは〳〵して、身體が震へて來たのが不思議だらうか？　私はその場から身をひかうとしたのだが、さうすることができなかつたのだ。貴女の中にある何物かゞ私をひきとめたのだ。それは何か破壞的なものだつたのだらうか？　その當座は、私はさうだと思つてゐたが、それは、破壞的なものよりも以上のものだつたのだ。それ以上に微妙なものだつたのだ。私がどんな道をとつて來たかを思ひ出してね。私にはもう同じことを繰り返すことはできなかつたんだよ。復もや、――もう一度、それははてしのないものに見えて來たのだ。逃げ出したい欲望は一層强くなつて來た。私は貴女にあちら

へ行つてくれと大聲で叫びたかつた。私のそばからはなれてくれ、貴女の顔、貴女の姿、貴女自身をかくしてくれ、――私の眼に二度と觸れないやうな、何處か暗いところへかくしてくれと叫びたかつた。ところが、それどころか、私は貴女に話しかけたのだ。貴女に微笑しかけたんだ。そしてすぐに貴女の身體を私の身のまはりに感じたんだ。私は、私が徐々に貴女に征服されて來るのを知つてゐた。私にはニイナや、オータムやヴァイオレットの顔が、みんな、たしなめるやうに、不平をいふやうに、いやな樣子をして通りすぎてゆくのが見えた。私は、これ等の顔をもう見てゐることができなかつた。私は貴女を見ねばならなかつたのだ。恐ろしい弱さだと、私は心の中で思つた。そして、手もなくずる〳〵べつたりに降服してしまふ自分が恥かしくなつた。その時から、私の心中の爭鬪がはじまつたのだ。おぼえてゐるだらうね、テス、私が貴女のとこへ行くときは、いつも苦しみに苦しんだ揚句だつたつてことを。はじめのうちは、私は貴女のゐるところで戀愛を罵倒しようとした。私は、つとめてセンチメンタルな文句には疑をはさむやうにし、ちよつとした事柄にも、疑ひをもつやうにした。私のやうな風變りな戀人がかつてあつたゞらうか？　私は、何時間もかゝつて、貴女に、私を愛しちやいけないと話したものだ。どんな戀愛でもみんな苦しいものだといふことを書き送つて、私たちがどんなに苦勞をせねばならぬかつてことを力をこめて說いたものだ。或る時は、貴女に、もう私に會はないやうにしてくれなんて相談をもちかけて、どうしたら二人が容易に別れられるかなんてことを話しあつたものだ。私は自分のことよりも、貴女のことを餘計に考へてゐたんだよ、テス。だがさういふ私の言葉は言外に恐ろしい意味を含み、恐ろしい豫言を含んだものであつたに拘らず、却つて、私たちを近く引き寄せたのだつた。時々貴女はどう言つていゝかわからな

いことがあつたね。貴女は私たちが心の中でもがき苦しんでゐた事柄とは、似もつかない、ショオペンハウエルのことを、とつてつけたやうに言ひ出したことがあつたね、まるで子供のやうに、私たちには、もう、言葉なんてものは、たゞその場の體裁をつくらうごまかしだつてことが、わかつてゐたのだ。それから私たちは言葉といふもの、言葉が不十分なものだつてことを誹議しはじめ、言葉ではとても傳へることのできない微妙な事柄や、他人に傳へることのできない態度などを語りはじめた。その時だよ、テス、私たちが、もはやのつぴきならぬところまで進んで來たつてことを二人ながらさとつたのは、私たちは、既に、互ひに相手の中へ侵入しあひ、互ひの衝動と渴望とに、私たち自身の情緒をからませてしまつて、互ひの人格を、破滅的ではあるが、何とも言ひやうのなく樂しいやうな風によりかゝらせあつて、個性の自律を失つてしまひ、それが遂には、詩的痙攣に變らざるを得なかつたのではなからうか？　私にはその意味が貴女よりもよくわかつてゐた。私は、その目前の有頂天な歡喜と、その次にさし迫つて來てゐる恐ろしさとを感じた。

私たちは、隨分屢々、大洋の岸や、眞夏の暑さのために水氣を失つた樹蔭に立つて、互ひの眼に見入りながら、それでゐて、見たことを口に出して言ふことのできないことがあつたものだ。貴女が何か言つても、貴女の言葉は、私の耳には、全く無意味だつたものだ。何かしら、超自然な、殆んど解しかねる親しみと言つたやうなものが、私たちの間に生長してゐたのだ。それでも、私は、これは溫室的な親しみであつて、あまりに強いために陰慘な氣持ちのする香氣で、今にも私たちを窒息させるものだと考へてゐた。貴女は死の香氣といふものを知らないんだから、貴女の感じは、私の感じとはちがつてゐたわけだがね。

「明りを消さなくちゃいけませんよ、」

私は最初マックの言葉の意味がわからなかつた。どんな明りだらう？　明りだなんて。テスよ――私は十時になると消燈しなくちやならんといふこゝの規則の一條を犯してゐたことに氣のつくのに一分間かゝつたのだよ。十時過ぎると何もかも暗くなるのだと考へられてゐるんだね――だが人間の心は別だ。人間の心は取締規則に抵觸することなしに、煌々と輝いてゐることができるのだ。私の心は、暗がりの中で、相變らず熱烈な力ではたらいた。私は月の光で物を書くことをおぼえた。そして、空に月の見えない時でも、何べんも繰り返し努力して、どうにかかうにか、眼に見ることのできない、文字の形を感じ、文字の想像の線を感ずることができるやうになつた。どうしても暗がりの中で書かずにゐられないやうなことが度々あつた。暗い時だと、日中にはペンで書くのが恐ろしいやうなことでも書けるやうな氣がした。暗い中で、こつそり、おとなしく書いてゐると、どういふものか、ごつ〳〵した言葉が、しなやかにはならないまでも、角がとれてくるやうだつた。渦卷や尻尾のある文字が、厚かましく、じろ〳〵と、にらみつけるやうなことはなかつた。それに、明るい晝間なら、アルファベットの文字で書くことさへできないやうな、色んなことが、暗いときには言へるものだ。私は前の晩書いたことを翌くる日讀んで見てぞつとしたことが幾度もあつた。

テスよ、私は、いま、私たちがやつてのけたあの偉大な事柄のとこまで來て、明りが消えたのを喜んでゐるのだ。私の書くことが闇と一緒になるのを喜んでゐるのだ。今夜これから書くことを明日讀むのが恐ろしいからぢ

やないのだよ。テス、誤解しないやうにしてね。又、何かかくすことがあるので闇が必要なのでもないのだよ。たゞ闇の中だと、私の魂がくつろぐのだ。邪魔するものをなくしてくれるのだ。私がこれから書くことは、貴女も私と同じやうに知つてゐることだ。それでも私は、これを最後に紙の上に記しておきたいといふ欲望を滿足させるために書かねばならんのだ。私はもう一度凡てのことを、あつたとほりのまゝで感じたい。もう一度、回顧的に經驗して見たいのだ。事實を隅から隅まで思ひ出して、よく考へて見て、その美しさを生き〳〵とさせたいのだ。もう一度、あれを決行した時の歡喜に浸りたいのだ。闇が私を助けてくれるだらう。といふのはあのことが起つたのは闇の中だつたからね。うつとりとするやうに取りまいてゐる闇の中だつたからね、テス。貴女は、まだ私の聲をおぼえてゐる？　私たちは貴女の部屋の次にある玄關の間にゐたのだつた。格子作りの棚に藤がはつてゐて、まるで小さい庭園のやうな部屋だつた。何となく恍惚とするやうな雰圍氣だつたね。身動きでもしたら、この不思議な魅力が壞れてしまひさうで、動くのがこはいやうな氣がした。私の聲は、花の中から聞えて來る、しづかな音樂のやうだと貴女は言つたね。その聲が、私の咽喉から出ると、藤がそれをとらへて、私たちの耳のそばから逃げないやうにしておいてくれた。その柔かい、震へをおびた、聲の響きには、何かしら、聽きなれない、不たしかなものがあつたので、私は話をしてゐるのはほんたうに私なのかどうかあやしくなつて來た。でなければ、これは何といふ私だらうと、私はあやしんだ。貴女は、そこに坐つて、私の言葉を聽くといふよりも、むしろ、私の言葉に見入つてゐた。私たちは二人とも最初のうちは勇敢だつた。私のうちにある何物かゞ、一種の魔法のやうな浸透作用で、貴女の中へ移つて行つた。聲を出してゐるのは私で、物を言つてゐるのは貴女

のやうな氣がした。時々私にはどちらが私で、どちらが貴女だか、わからなくなつて來たやうに思ふ。もはや互に知りあふなんてことは問題ぢやなかつた。たゞ互にどちらが自分で、どちらが自分でないかを見わけるのが問題だつた。私たちの魂は神祕的に一つになつてしまつたのだ。

「テス、」とその晩に私は言つたんだつたね。「今夜は私たちの一番幸福な晩だよ。私たちはこれ以上に幸福にはなれないんだ。一生生きてたつて、此の數時間生きてゐるだけの價値はないんだ。」

貴女はたゞ私の眼に見入つて、狂ほしくなるやうな無言で、あわてゝ私にしがみついただけだつた。

「世間の人は、色んなことをするのだと考へられてゐる。藝術家は物を創造するのだと考へられてゐるし、凡ての人は、めい〳〵努力して他人の上に出るのだと考へられてゐる。これが凡ゆる野心の基礎としていつでも述べられて來たことだ。他人の上に出たり、他人がしようと思つてもできないことをやつて喝采されたりすることの快感と名聲とは、私には常々何の刺戟にもならなかつた。もつと立派なこと、もつとずつと稀れな、そして高貴なこと——自分を追ひ越すといふことを考へた人が誰かあるだらうか、テス？　私の言つてることが貴女にはわかる？　自己の上に出るといふことは、人間の魂にできる事のうちで何よりも偉大なことなんだ。生活は私たちをみんな、衝動と要求とをもつた安價な道具にしてゐる。私たちは、その笑ひと怒りとによつて、否でも應でも投げまはされてゐる。私たちは、私たちの住む世界の奴隷にされてゐる。といふのは、私たちめい〳〵を、世界の影響に對して敢然と戰ふことのできない、卑怯な、病弱な、よぼ〳〵にしてしまつてるからだ。他人の上に出ることは、世間から許されてゐるから、容易な、都合のいゝ努力になつてゐる。ところが、自己の上に出ること

は、世界の上に出ることだ。世間が打ち碎いて殺してしまはうとしてゐる、私たちの内部にある要素を強めることだ。私たちは皆、美に對する欲望、熱心なあこがれをもつてゐる。美しい形を切望してゐる。いろんな希望をもつてゐる。この希望は、世間の價値を嘲つて、世間と衝突するが、早かれ晩かれ、經濟生活の必然や、稱讃されたり、喝采されたりしたいといふ空しい熱心のために犧牲にされて、忘れられてしまふのだ。世界は私たちにとつてはあまりに強すぎる。それは、私たちに、私たちが嫌つてゐるものと妥協することを強ひる。私たちは世界によつてつくられてゐるんだから、それが私たちの本性なんだ。私たち自身の上に出ることは、妥協したり、屈服したりすることではない。それは、苦痛をとほしてのみ、偉大な目的をかたく信ずることによつてのみ達せられる仕事だ。すべての人が死を恐れてゐるやうに見える。だが、この恐怖を否定したり、又これをものともしないで、自己の上に出た人もある。すべての人が戀愛を求めてゐる。しかし、自己の上に出て、戀愛に身を獻げた人は殆んどない。彼等は妥協してゐるのだ。そして、彼等が探してゐたものが見つかつたと信じこんでゐるのだ。偉大なる戀愛は、自己の上に出て、もつと美しい、もつと立派なものに身を獻げることだ。私たちのやうな愛しかたをするのは、他人の上に出ることではなくて、私たちの上に出ることなんだよ。テス。それは戀愛の中に、私たちよりも偉大な或る物を見出すことだ。わかつた？

「私たちは、私たちの愛を、生活と世界とに支配させておくべきだらうか、それともむしろ生活と世界とを否定して私たちの愛に身を獻ぐべきだらうか？」

私が貴女にこんな風な話しかたをしたのは、この晩がはじめてだつたね、テス。貴女はまだおぼえてる？　私

の話したことを、といふよりも私たち二人の話したことを、貴女は眼で、私は唇で？　私たちは三晩ぶつつゞけてこんな風に話したのだつたね。宿命的な――宿命的に美しい――三晩の間。その時私ははじめて生きた屍のことを貴女に話したのだつた。その時、私は、私の過去の、烈しい、ひどい苦しみを貴女に聞かせたのだつた。

ニイナとオータムとヴァイオレットとは、姿は生きてゐたが、魂は死んでしまつてゐた。私は彼女たちのうちにある死を貴女に感じさせた。私は私たちをとりまいてゐる空氣そのものにさへ、いやな、陰氣な香ひをたゞよはせた。さういふことがもう一度起るつてことを考へただけでも、貴女がぞつとするやうにしてしまつた。私は、貴女にその恐ろしい幻滅、それによつて呪ひ出される敗北と死とを貴女に感じさせた。貴女の魂そのものが、恐怖のために萎縮しはじめたかのやうに感じさせた。私はそれを生きた姿にかへて、殆んど、人間の着物を着て、私たちの間を、私たちの身體と心と魂との間を、實際聞えるにはちがひないが、それでゐてとらへどころのないやうな、ぞつとする、しづかな忍び足で動きまはつてゐる物の怪のやうにしてしまつた。何もかも、息づまるやうで、混沌として來た。私たちは、また二人とも默つてしまつた。貴女の眼ですら物を言はなくなつた。恐怖のために物を言はなくなつた。それは死んだやうな、氣味の悪い沈默だつた。ちやうど夕方に鐵砲の音がしたそのすぐあとのやうな沈默だつた。

突然、私は、貴女をつかまへて接吻した。それは、はげしい、燃えるやうな接吻だつた。私はその時の一度の接吻をいつまでも忘れることができない。それは、それがやむことを考へただけでも胸の痛くなるやうな狂暴な接吻だつた。今でも私は、唇にこの時の接吻の壓力を感じることができる。

「テス。」と私は、二人が唇をはなしたあとで、息もつかずにわなゝきながら、身を起して叫んだ。「私たちは、この接吻をいつまでも損なふことはできないんだよ。それは損なつたり、死んだりするには、あまりに美しい、あまりに稀なものだからね。」

その時だつた、貴女が、私の眼が私の聲になつたと言つたのは、私が話してゐるときに貴女は私の聲を聞いてゐるのではなくて、私の眼を聞いてゐるのだと言つたのは。

「いつも同じなんだよ。テス。美の魅力を奪ふものは、いつも、倦怠といふ病氣だ。何百萬といふ人たちが、世界の何百萬の場所で接吻をしてゐる。だが彼等の接吻は、いつも死んだ接吻なんだ。でなければ死にかゝつた接吻なんだ。接吻を死んだ形式にかへてしまふぐらゐなら、むしろ接吻なんてものをおぼえなければよかつたんだ。接吻は情熱で生きてゐるんだ。しつかりと心をとらへる强さで生きてゐるんだ。肉體の道が魂にまじりあふので生きてゐるんだ。その情熱と、强さと、靈肉混融の悅樂がなくなつてしまへば、それはもはや接吻ではなくて無味乾燥な愛情に過ぎないのだ。この眞理がよく私を惱ましたものだよ、テス。私はあまりにも多くの生きた屍を見たんだ。あまりにも多くの死骸になつた唇を見たんだ。

「貴女のこの唇もね、」――私には今でも長い爪のついた私の指が、貴女の上唇の緣をなでたのが見えるやうだ――「今では生きた魔法の力で、びく〳〵動悸を打つてゐるが、そのうちには、氣の拔けた、何の刺戟もない肉塊になつてしまふのだ。もはや磁石のやうに人をひきつけなくなつてしまふのだ。私が接吻をしても、私に新しい力をふきこんでくれなくなつてしまふのだ。私の唇が、もとは貴女の中に生きてゐたかのやうに、貴女の唇のあ

たりにたゆたうてゐても、もはや私をとらへなくなつてしまふのだ。その張りつめた力は去つてしまふのだ。その美しさは、白けきつて、そつけない冷淡さが、その接吻に爬ひよつて來るのだ。」

貴女は身慄ひしましたね――まだおぼえてゐる、テス？　私は急いで言葉をつゞけた。それは思ひやりのない仕打ちだつたにちがひない。私は貴女にすつかり知つてほしかつたのだ。

「そして貴女の乳房も、貴女の脚も、貴女の身體の凡ての魅力、貴女の肉體の生き〳〵した、はげしい要求も――さういつたものがみんな小山から朝霧が消えてゆくやうに消えてしまふのだ。山はもとのとほりだがそれを包んで、それに魅力を與へてゐる美はなくなつてしまふのだ。そしてこの魅力は、一旦なくなりだしたら、それをとめることはできないのだ。一度なくなつたらもう取りかへすことはできないのだ。その時に恐ろしいことが起つて來るのだよ、テス。魂を裸にして十字架にかけられるやうな、傷ついた、果しのない苦悶の夜がつゞくのだ。せめて美の名殘りでも、情熟の思ひ出でも救はうとして、いたいけにも、人爲的な手段を求めるのだ。殘忍に欲望を抑へつけようとして狂ひじみた工夫をこらしたり、もはや此の時になつては何の魅力もないポンパドウルの嬌態を演じて見たり、新奇なものに走つたり、さま〴〵な抱擁を試みたり、常規から逸れたり、珍奇なものに歸つたり、變つた物質的の魅力を追及したり、他人のつくり事に興味をもつたりするやうになるのだ――みんな褪めてゆく衝動に新らしい生命を吹きこまうとする、最後の無駄な努力なんだよ、テス。これが、恐ろしい執念のやうに、私にとりついて、私をだん〳〵弱らしてくるのだ。かうしたものは、たゞ言葉として生きてゐるのぢやなくて、思ひ出しただけでも魂を鞭打つ、生き〳〵した現實として生きてゐるのだ。かうした事が、すべて、妥

協のはじめなんだ。そして妥協は、やがて屈服を意味するのだ。人爲的な手段も、制慾も、嬌態も、さま〴〵な抱擁も、常規から逸れることも、珍奇なものも、物質的な魅力も、他人のつくりごとも、どうせ失敗に了るにきまつてゐるので、そこへ、あの何と言ひやうのない倦怠が侵入して來るのだ。それは常に失敗よりももつと、悲劇的なものなんだ。かうして生きた屍と一緒にゐることになつて來るのだ。

「そんなことにはさせない！　そんなことがあつてはならない、ね、テス！」

私は書いてゐるうちに、ついこの言葉を聲をあげて叫んだ、まるでさうしないと紙の上へ書くだけでは十分に力がはひらないかのやうに。私は馬鹿ぢやないんだらうか？　私は、結局失敗したものゝやうなまねをしてゐる。貴女は、いま、永遠に美しいぢやないか、テス？　私たちはこの悲劇を否定したのぢやないか？　それだのに何故私はこんなに神經的なんだらう？　私は、精神病學者たちに、この言葉を繰り返して言つた時に私の感情が昂奮したのを今でもおぼえてゐる。私が試驗された間を通じて、自分の聲を制御することのできなかつたのは、この時だけだと私は信じてゐる。この言葉は私には千萬無量の意味をもつてゐた。そのはげしい決意の叫びは、今でも私をしつかりとつかんでゐる。

「どうしたらいゝんでせう？　どうしたらいゝんでせう？」

貴女の言葉はまだ鈴のやうに響き渡つてゐる。その響き渡る美しさは、まだ私の心の中に、貴女の魂の一部分として生きてゐる。それは、言葉に姿を變へた貴女自身だつたのだ。私はその一つ〳〵の言葉を貴女の一部分だと思つた。そして突然、打ち消すことのできない絶望の叫びをあげた。

「どうしたらいゝんだらう？」私は繰り返した。

私は話してゐるうちに、私自身がどうしてか、貴女の中へはひつてゆき、私の眼が貴女の眼になり、私の言葉が、私の咽喉からと同樣に貴女の咽喉からも出て來、私の手が貴女の肉の中にあるやうな氣がした。その瞬間、私たちを別々にする何物もなかつた。何物も私たちを分つことはできなかつた。

「私たちは生活と打ち破るために生活を否定しなければならん！」と私は叫んだ。それから私は極くしづかな調子になつたが、それでもきつぱりとしてゐた。「私たちは私たち自身を超越して、美と愛とに身を獻げねばならん。ねえ、テス、私たちは生活を滅ぼして、生活が私たちを滅ぼすことができないやうにしなくちやならないのだ。生活に私たちをのろまな馬鹿にさせないで、生活をぼろ〳〵の道化者にしてしまふといふことが、私たちの第一の決心なのだ。」

私の言葉は催眠術のやうな力をもつてゐたと彼女は私に言つた。それは彼女をせめさいなんで、熱に浮かされたやうにしてしまつた。彼女の舌は硬ばつて痙攣した。彼女の身體は、その實質がどん〳〵蒸發して行つたかのやうに輕くなつた。

「生活は戀愛を生きた屍にしてしまふ。戀愛の美しさはすつかり死んでしまつて、醜さに變つてしまふ。私たちはさういふことが起らないやうにしなくちやならない。私たちの戀愛は偉大な戀愛でなくちやならない。それは、生活のために犧牲にされて、醜いものになつてはならない。私たちの戀愛は、愛のないものになつてしまつてはならない。生溫い、生氣のない、無力なものになつてはならない。屍になつてはならない。だが、私たちは、

生きてゐる限りは、それを防ぎとめようとしたつて無益なんだよ。生活は私たちにはあまりに強すぎるのだ。世界は私たちには、あまりに澤山すぎるのだ。私たちは生活と世界とを超越しなくちやならない。さうする以外に醜惡と屈服とからのがれる方法はないのだ。醜惡な生活が、美の死よりも値打ちがあるだらうか？　私は貴女をあまりにも愛しすぎてゐるので、貴女までが、生きた屍になるのを見るに堪へないんだ。私はあまりにも貴女を必死になつて愛してゐるので、そんなことを考へることすら忍びないのだ。私たちの戀愛は魂を奪ふやうに美しい。この戀愛が、他の戀愛と同じやうになるのを見るのは、私たちの住んでゐるこの世界をほんたうの癲狂院にしてしまふやうなものだ。私はもはやそれには堪へられない。あまりに恐ろしいことだ。私にとつて、いま、貴女は驚く程貴いものだ。私は貴女なしには生きて行くことができなかつた。貴女とはなれてゐる時間は、悉く苦しみの時間だ。貴女にちよつと觸られても電氣のやうに感じる。私は貴女を崇拜してゐるのだ。貴女は、此の上なく美しい、愛らしいものだ。ところが、貴女が生きてゐると、貴女の美しさは褪せてゆき、貴女の愛らしさは朽ちはてゝゆくのだ。かうして生活は私たちを離破させ、戀愛を愚弄してしまふのだ——さうして人生をのべつ暮なしの葬儀にかへてしまひ、私たちを私たち自身の葬儀屋にしてしまふのだ。貴女が死んだ姿に褪せてゆくのを考へることができなかつたのだよ、テス。そんなことはこれからも考へまい。私は先づ貴女を自分の手にかけて殺してしまはう。私は貴女をいつまでも美しくさしておきたいんだ。さうでなくさせたくないのだ。聞いてゐる、テス？　貴女は、現在と變つたものになつてはいけないのだ。いま、私たちの生活はすでに生活以上なんだよ、テス。何故かつて、それは偉大なる愛に充されてゐるからだ。私たちは生活が戀愛にとゞめをさす前に、生

活にとゞめをさゝなくちやならない。私は生活がまだ戀愛で輝いてゐるうちに、それを終つてしまはなければならない。これが私たちの最大の事業でなければならないのだ。滿開の戀愛が生活を飾つてゐる時に生活を終つてしまへば――さうすれば、もはや情熱が褪せることも朽ちることもないのだ。これは美を破滅から救ふことだ。老年と愚鈍とで萎んでゆく唇から生活をもぎとることだ。この老年といふのは、凡ての女を、おばあさんにしてしまひ、醜い女にしてしまひ、愛らしくない女にしてしまふ、普通の老年のことではなくて、もつと微妙な老年のことなんだ。それは、若い女を、急に老けさせ、美しい女を急に見るかげもなくし、その愛らしさを、愛らしくなくしてしまふ老年のことなんだよ、テス。」

「私たちは死なゝくちやならないんですの？」

これが何時間もの沈默のあとで、はじめて貴女の唇から洩れた言葉だつた。はじめのうちは貴女は話をすることができた。でも、その時でも、貴女の舌は、言葉につまづいて、まるで、心の中で言ひたいと思つてゐることを言ふのが臆劫な樣子だつた。

「さうではない。」と私は言つた。「私たちは自殺しなくちやならないのだ。

私がこゝの部分を話すと、いつもきまつて精神病學者たちの間に長い議論が起るのだつた。私は、眞實を告白して、まるで、自分で自分を告發してゐるやうだつたのだ。私は、彼女に催眠術をかけて、抵抗することも、決意することもできないやうな精神狀態に陷れたのだから、たしかに、殺人犯だつたのだ。

彼女が大聲で叫んだのはその時だつたらうか？　いや、もう少したつてからだつた。いや、まてよ、もつとず

つとあとからだつた。だが、正確な時間なんかはどうでもよいことだ。彼女の叫びは、ずつと前から出さうとして準備されてゐたのだ。私はこの叫び聲が彼女の中でだん〳〵脹れて行つて、彼女の全身がそれに囚はれてしまつたやうな氣がした。

「さうしなくちやなりませんわ。」彼女はかう叫びながら、二つの腕を私の首に投げかけ、爪で私の皮膚を殆んど血の出るまでひつ掻いた。彼女の顏は奇蹟的にかはつた。遙か彼方の幻を見つめるやうに、ぢつと眼をすゑて見つめてゐるその顏は、神祕的な、心もそらなる歡喜のために言ひやうなく美しかつた。私は彼女のすばらしさを禮拜した。私は彼女がすばやく決心をした――彼女が私の言つたことを驚歎する程すつかり理解してくれたので、たゞ無言で、眼が眩んだ。彼女は突如として至上の生き物になつた。彼女は全世界に唯一人であつた。彼女は此の世を超脫した。彼女は、此の世のものとしては、餘りに偉大であり、餘りに美しかつた。

私は、彼女の右手の、長い、細い指に、小さい指環をやさしくはめてやつた。私があんまり、そつと、物やはらかにさうしたので、彼女は、私が言葉をかけるまで、指環をはめられたことに氣がつかない位だつた。

「テス、」と私は言つた。私の聲は震へてはゐなかつた。靜かで、落ちついて、しつかりしてゐた。「私たちは生きて來たとほりに死なゝくちやならないんだよ――美しくね。私たちは美しく愛して來た。だから、少しでも醜いもので私たちの死を汚しちやならないのだ。

「四秒間たてば、これで、何もかもすつかりすんでしまふのだ。」

すると彼女は、私が彼女の指にはめてやつた指環を見た。そして、同じ一瞥で、それと同じ指環が私の手にあ

るのを見た。二つの指環は、白い、ピラミッド型の異樣な形をして私たちを見つめてゐた。しばらくの間怖ろしい不安が彼女を捉へた。彼女のはげしい叫びの記憶は、突然の恐怖の囚はれのうちに消えた。私は彼女がだん〳〵弱りはじめてゆくのを見ることができた。

「テス、」と私は、彼女の腕をつかんでゐる手先に力をこめて叫んだ。「私たちは死を恐れてはゐないのだよ。死が私たちを恐れさすやうなことがあつてはならないのだ。私たちは生死の上に立つてゐるのだ。死はこしらへごとだ。そして生を私たちは侮蔑してゐる。テス、私を見てくれ！　見てくれ！」

彼女は今度はたゆたひがちな眼差しで私を見てゐた。私は彼女の魂の中で、不安と恐怖とが戰つて、彼女を苦しめてゐるのを看てとることができた。私は彼女の頤をつかんで、じろ〳〵と鑒るやうに彼女の眼を見た。

「テス、私たちは失敗してはならないんだよ、今度こそは。」

二人の眼は殆んど互に打ちあつた。彼女は言葉もなく私にしがみついた。

「テス――」

私は指環のはまつてゐる彼女の指を、彼女の口の方をおしやつた。彼女はまだ怖はがつてゐた。彼女は、私の手をふりほどかうとするやうに逆らつた。あゝもうたまらない。

「テス、」と私は叫んだ。「今度はもう大丈夫だ。貴女は生きた屍になりつこはないのだ。さうなつてはならないのだ。」

彼女の身體は私の腕の中で震へた。私は、苦しい思ひをしてこれ以上待つてゐることはできなかつた。

「もう一度大きな聲で叫んでね、テス、」私は頼んだ。「そしてこの指環のまん中を嚙んでおくれ！　これを嚙んでおくれ、さうすれば貴女は、いつまでも愛らしいものになれるんだ！」

月は私たちの上に照つてゐた。そして玄關の間は、藤棚を洩れる月の光でちら〳〵輝いてゐた。私は、彼女の唇の間へ、指環をおしこんだ。私たちはもはや大丈夫だつた。こんなに美に接近し、こんなに偉大に接近してゐたのだもの、今となつてはもう失敗の餘地はなかつた。

「テス――それを嚙んで！」

彼女は、ぞつとする程美しい眼差しを私に向けた。指環は既に彼女の唇から血を流してゐた。彼女の眼のまはりには、あまりにも異樣であるためにあまりにもぞく〳〵する、えも言はれぬ凄さがあつた。それは宇宙の醜さと恐ろしさとを殘るくまなく、はじめて見た時の眼のやうな凄さだつた。それは驚くべき、莊嚴な凄さだつた。私は指環を彼女の下唇におしつけた。

「あたしたちは氣が狂つてゐるのね！」彼女は私語よりも少し高い位の聲で叫んだ。しかしその聲は瀏朗と反響した。

「さうだ、美と愛とで氣が狂つてゐるのだ。」

私は、その後に起つた出來事をすつかり書き記すことはできないのだよ、テス。それに書いて見たつてしやうがないのだ。それは言葉で表はすにはあまりに美し過ぎるのだ。それは私たちのみのもつてゐる美しさなんだよ、テス。それは、神聖な、褻せることのない美なんだ。私はいまこゝに坐つて、私の書いた言葉を見なほして、

言葉といふものが、實に、それを表はす力のないものであることをつく〴〵さとつてゐるのだ。世間の人々にとつては、言葉が凡てなんだ。現實はどうでもよいのだ。この世の中のけちな快樂と、けちな安易と、けちな妥協とを彼等は愛してゐるのだ。美なんてものは彼等の魂には赤の他人なのだ。底を割つて見れば、彼等は美を憎惡してゐるんだ。

あゝ、私の腕に抱かれてゐる貴女が、どんなに完全に見えたことだらう、テス！　私はベンチの端に腰をかけて、何時間も何時間もさうしてゐなければならなかつた。いやそんなに長い間ではなかつた。だが私は、何か偉大な呪文をかけられたやうに、恍惚としてゐた。私は手足を動かすことができなかつた。少くも、動かしたくなかつた、私はいつまでもそのまゝにしてゐたかつた。私は驚くべき美に醉つぱらつてゐたのだ。私たちは生活を打ち敗つたのだ。

貴女はもう生きた屍になりつこはないのだ。私たちの戀愛は、もういつまでも美しいだらう。死によつて私たちは醜さを粉碎し、絶滅してしまつたのだ。貴女の肉體は、永久に、生き〳〵と記憶の中に殘つてゆくだらう。貴女の唇の感觸は、その世にも稀なる初戀の情熱の美しさの故に、いつまでも新鮮で、いつまでも美妙であることだらう。貴女にかゝはるものは、何一つ退屈になつてしまふことはないだらう。貴女に對する私の愛の中へ、悲しい、いやな、衝動の變化がしのびよつて來るやうなことは、もはや金輪際ないだらう。貴女の明るい、生き生きした眼が、尋常一樣のどんより曇つた眼になるやうなことはもはやなくなるだらう。貴女の指から愛が消えてゆくのを感じるやうなことはなくなるだらう。私のそばに眠つてゐる貴女の身體が、見なれて、無關心になつ

て、それを見ても何の興奮も起らねば、むづ〳〵した感じで慄へるやうなこともなくなるのを、もう知らなくてすむだらう。私はもはや、魅惑と愛らしさのなくなつたのに心を痛めなくてもいゝだらう。

貴女はもはや完全だつた。私がこのことを繰り返して言ふのは、今でも貴女がさうだからなんだよ、テス。私は貴女の身體を玄關においた。そして、古代の人々が神を禮拜するときに、きつとそんなだつたらうと思はれるやうな神々しい氣持ちで、それを見まもりながら坐つてゐた。

「貴方は後悔を感じなかつたんですね？」ピンクニイ博士の質問を聞くといつも私は大笑ひした。

後悔だつて！　一秒間だつて私は後悔を感じたことはなかつた！　一瞬間だつて、後悔に似たやうな感じにすら襲はれたことはなかつた。むしろ私は、私たちがやつてのけたすばらしい仕事について、强い歡喜を感じてゐたのだ。私は貴女の顏に觸つて見た。それは貴女の最後の決意の偉大な熱情のためにまだ溫かかつた。私は貴女の髮を撫でた。そして、靜かに、安らかに、じつとしてゐる貴女の指に接吻した。私は貴女の顏を動かして、物柔らかな藤の花間を洩れる美しい月光が、一面にその上に降りそゝぐやうにした。大理石のやうに靑白い貴女の顏は、女神の顏にも似つかはしかつた。

私は、その晩、夜つぴて、貴女のそばに坐つて、貴女を見まもり、貴女を崇拜してゐたんだよ、テス。貴女はもはや年を老らないのだ。貴女はもはや私の心の中で變ることはないのだ。私は幾度びも、私の指環を見て、物を亡ぼすやうに思はれてゐる毒の中にも、物を永久に生かす不思議な力をもつたものがあることを考へた。幾度でも私はその指環を嚙みたくなつた。だが、貴女の美しさに壓倒され、魅惑されてのばしてゐた。私は、私を囚

へてゐた歡喜を引き渡さねばならぬ時が來るのを考へるのが厭だつた。それは、私がこれまでに感じたことのない最大の歡喜だつた。私はまた貴女の手に觸つた。それは、これが狂ひじみた夢ぢやないのかどうか、ためして見るためだつたのだよ、テス。私は、しばらくの間、夢が醒めて、何もかも、空しい夢魔に過ぎなかつたことがわかりはしないかと心配した。だが、貴女の物しづかな愛らしさ、貴女の、冷やかな、神々しい姿が、これはみんな現實で、みんな完全だといふことを確信させてくれた。

その時なんだよ、テス、私が朝まで指環を嚙むのを延ばさうと決心したのは。私は、この比類ない美しい一夜が明けるまで生きてゐようと思つたのだ。世間の人は、これを私の卑怯な證據だと考へた。何て彼等はわからないんだらう！　まるで、私が今でも死を恐れてゐるかのやうに！　貴女がやつてしまつたあとで！　死ぬことは容易だつたのだ。今では、私が今生きてゐるやうに生きてゐるのが時々つらくなるのだ。だが、貴女がやりとげたあの偉大なことを考へると、何でも、易々たるものになつてしまふ。こんな風に、生きてゐることですらもだよ。私はもう既に貴女の中に生きてゐるので、私の中に生きてゐるのぢやないのだから、もはや生きてゐるとは言へないのだけれど、こんな生きかたをしてゐることですらも、易々たるものになつてしまふのだ。

その朝女中がやつて來たときに、私は、貴方の氣高い美しさをそつくりそのまゝ彼女に見せた。彼女は普通の女のやうに叫び聲をあげた。その叫び聲で私は逮捕されたのだ。それから、あのくど〳〵しいうるさい訊問と、審理と、拘禁とがはじまつたのだ。それから、私のことが新聞に書かれ、ドクトル連が、私をきつと新しいタイプの狂人だらうと考へて、それを見るために駈けつけて來たのだ。私は醜い姿を殘さずに死ぬことさへできれば、

こんなことにならぬ前に自殺してしまひたかつたのだ。私は私が貴女に言つた言葉を思ひ出したんだよ、テス。

「私たちは、私たちが生きて來たとほり死なゝくちやならない——美しく死なゝくちやならない。」

私が逮捕された時に、私のサイアナイドの指環は沒收されてしまつた。——實際私は、持ち物をすつかり强奪されてしまつた。私たち二人の碑文にと思つて、明け方に書きかけた斷片的な詩の文句さへも。私は、種々樣々な自殺の方法を考へた。だが、どれもこれも、醜い、思はしくないものばかりだつた。私は死を怖れたのぢやなくて、醜い死を怖れたのだ。醜いやりかたで自殺をするのは、折角貴女がやりとげた美しい仕事を冒瀆するやうに私には思はれたのだよ、テス。そんなことは決してしてはならないのだ。

既に天の一角から、又、夜が明けはじめてゐる。夜が明けると、又世界が眼を醒ますだらう。彼等は私たちに、健康や、靴や、着物や、人や、行商人や、政治家や——特に保險屋などが眼を醒ますだらう。ドクトルや、商ウイスキイや、家や、政治を賣りつけるだらう。だが、保險屋は——私に、死に對する保障をして、生命を賣りつけるのだ。愛すべき道化者だ、私が笑ふのに何の不思議があらう？　それはいゝ冗談ではないか、結局？

だが、私は、この數日のうちに、美しく、自殺するつもりだ。

歸宅

彼はそこに立つてゐた。彼女の歸りを待つて、彼の部屋の暗い隅つこに立つてゐた。彼は窓を避けようと思つ

だ。靑いブラインドが、カーペットの上に重い影を投げるのが、彼には閉口だつたのだ。ピアノは、薄暗がりの中だので、殆んど窓にもたれてゐるやうに見えた。

彼女の扇子は、彼女が神經的に默りこくつて嚙んだために、襞がぼろ〳〵になつたまゝ、まだ彼の机の上にひろげないで、そのまゝになつてゐた。

彼女は、急ぎ足で、音もたてずに、階段を降りて行つた。彼女がふんで行つた跫音の憎ましい反響が、彼にはまだ聞こえた。階段にはまださら〳〵と足を運んでゆく音が殘つてゐるやうだつた。それは澤山の足だつた。それは彼女の足だつたのだらうか？　それとも、彼がまだその人の身體を見たこともない、誰か眼に見えない女の足だつたのだらうか？　一體彼は彼女の足をおぼえてゐるのだらうか？　彼をこんなに怖がらせたのは、彼女の足が去つて行つたことなんだらうか？　それとも彼が、その中へ澤山の美をふきこんだために、もう足ではなくなつてしまつた足が去つて行つたゝめだらうか？

彼にはわからなかつた。彼は殆んど思ひ出すことができなかつた。彼にわかつてゐたことのすべては、彼が、この足の音を二度と聞けようなどゝは思つてないといふことだけだつた。それでも、彼には、その足の歸つて來るのを、そこに待つてゐなければならぬといふことはわかつてゐた。彼は何時間も待たなくちやならないかも知れない、ことによると何日も待たなくちやならないかも知れない。――それでも、彼は矢つ張り待つてゐなくちやならないのだ。彼はその跫音を聞くまでは、その場を動くことができないやうな氣がした。彼はピアノのキイの端にあるフライ・ステイツを打ち毀したくなつた。だが、彼は、實際、身を動かして、それを實行することはでき

なかつた。彼女はたつた今出て行つたばかりなのに、もう既に彼女の跫音が聞えるか聞えるかと思つて、彼は耳を傾けてゐた。彼はまだ時計の秒を數へてゐた。彼は、いつまでも、寄せ算で眼が眩むか、或は疲れて眠りこんでしまふまで算へてゆくだらう。いや、彼は眠つてしまふやうなことはあるまい。それに、長い間秒を算へてゐることもあるまい。彼にはそれがわかつてゐた。そんなに算へてゐたら、彼は氣が狂つてしまふだらう。さうなれば彼は、ほかにどうもしやうがないので、やめてしまふだらう。彼女はどの道歸らないだらう。もし彼女が歸らないとしたら？　だがそれは、彼が豫期してゐたことではないか？　彼は何を期待してゐたんだらう？　若し彼女が歸らなかつたら？　彼は氣が狂ふだらうか？　氣が狂ふ？　決してそんなことはない。彼女が歸らなかつたから氣が狂ふなんて？　何て不合理な考へだらう？　さうなれば、彼には彼女がどんな女かつてことがわかるだらう。さうなれば彼には、彼女の態度がわかるだらう。すつかり彼女を罵倒し、侮蔑して彼女を捨てゝしまふだらう。彼は以前にも彼女を罵つたことがあつたではないか？　彼女のけちさ加減や、おしやれを罵つたことがあるではないか。そして彼女の頭の空つぽなのを嫌つてゐたではないか？　勿論それにはちがひない。だが、それはその場限りの罵倒であり侮蔑であつたのだ。彼にはそのことがわかつてゐた。何故彼は、それを一貫した氣持ちに變へなかつたんだらう？　だが彼女が若し歸らなかつたら、彼はさうするだらう。さうなれば彼にも、さういふ元氣がついてくるだらう。さういふ力ができて來るだらう。彼は、それを考へて見たゞけでも、その力がむづ〳〵と湧いて來るやうな氣がした。だが、その力もやがて拔けて來て、指に力がなくなり、彼の心の中へ空おそろしい不安がしのび寄つて來るやうな氣がした。彼は彼女が歸らなかつた場合、ほんたうに彼女を罵倒する

ことができるだらうか？　彼女を憎むことができるだらうか？　彼にはその勇氣があつたゞらうか？　それとも、彼女の方では心を決めてゐるのに、彼は、センチメンタルな鼻下長のやうに彼女の尻を追ひまはすだらうか？いや、彼はそんなことはしまい。この午後から先は、どうしてもさういふことはできない義理合ひだつたのだ。彼は、彼女を愛したはじめには強かつたではないか？　事態をこゝまで運ばせて來たのは彼ではないか？　こゝまで來ておいて彼が弱くなるつてことがあり得るだらうか？　あんなに強かつた彼が？

彼女が出て行つてから、どの位時間がたつのだらう？　かれこれ一時間はたつたらう。彼は時計を見た。彼は吃驚した。なんだ、たつた十六分ではないか？　彼は、この位なことで、ついあまりに落ちつきを失つてゐたのだ。彼は、落ちついてゐるやうに、取り亂さないやうに、我と自分に誓つたではないか？　彼はだらしのない若僧のやうに弱くなつて來たのだらうか？

「出て行け！」彼はかう言つたものだつた。彼の聲は震へを帶びてはゐなかつた。それどころか、いつになくしつかりして、朗らかに、彼の耳に聞えたのであつた。そして彼は吾ながら、その元氣を自慢してゐたのだ。こんなに彼が強くて、きつぱりしてゐたことは、これまでについぞなかつた。彼よりも彼女の方がもつと驚いたのだつた。彼女は、彼にそんなところがあるのを知らなかつたのだ。そしてまた實際彼にもそんなところはなかつたのである。だが人間といふものは、或る場合には、自分で自分がわからないやうな非常に不思議な行爲をするものだ。これまでには彼女の方がいつでも勝つてゐた。彼女は、いつでも、彼を丸めこんで、彼を自分の意志に從はせてゐた。彼女のいふとほりになつてゐると悪いといふことがわかつてゐる時でも、彼は、どうしても彼女の

言ひなりになるより仕方がなかつた。彼女は、彼の決心を弱めるべきちやんと知つてゐた。彼女は、彼を、自分の力ではどうもできない奴隷にしてしまつてゐた。彼は自分の力と判斷とをもつてゐなかつた。時とすると、彼は彼女を一思ひに殺してしまはうと思つたことすらあつた。だが彼女の涙がいつでも彼を思ひ止まらせた。彼女はそれを知つてゐた。ちやんと勘定に入れてゐた。それは、わけもないことで、いつでも自分の自由自在になるといふことを知つてゐた。

どんなに彼女は彼を苦しめたことだらう。どんなに彼女は彼の無力につけ上つてゐたことだらう。どんなに彼女は彼の理性を打ち毀してゐたことだらう。一體どうしたわけなんだらう？　どうして彼女は彼にこんなに振舞ふことができたんだらう？　それは彼女が美しいためではなかつた。彼女は美しくはなかつた。彼女がもつてゐたのは一つの魅力だつた。それは屢々醜さの魅力のやうに思はれた。それは鋼鐵の鎖のやうに彼にからみついた。そして、彼がそれを引きちぎらうと思ふと、彼女は、それをだん〳〵かたく彼の魂のまはりにしめつけた。かたくしめられゝばしめられる程、彼は彼女を憎んだ。それでゐて彼がこの憎悪を吐き出さうとすると、彼女は、愛嬌たつぷりな愛撫でそれをぐにや〳〵にしてしまつたのだ。

ところが、今度は、今日の午後は、彼はこの形勢を逆轉してしまつた。彼は彼女に、彼の意志に無理矢理に從はせた。彼は部屋の中の暗い側をあちこち歩きはじめた。彼は、今では別に困難なく動きまはることができた。彼はもはや自分自身になれるのだ。また獨立した魂になれるのだ。彼はもはや女の意志に屈服しなくなるだろう。彼は男ではないか？　彼は思想家ではないか？　彼は、數學の問題を研究して、一年足らずの間に有名にな

つたではないか？　彼は書物を著して、彼の名を有名にしたではないか？　彼の論理は實に完全で、一點の誤りもなかつた。ポアンカレでさへそれを推賞したのだつた。彼は數學の方程式に接するときの冷やかに澄み渡つた彼の心境を愛してゐた。何故彼は、その澄み渡つた心持ちを彼の生活の中へひき入れることができなかつたのだらう？　何故彼は數學の難問を解いたやうに、たやすく、完全に人生の問題を解くことができなかつたのだらう？　彼の生活を複雜な定理のやうに巧みに動かしてゆくこと、彼の感情を、入りくんだ方程式の記號のやうに、なだらかにはたらかせること、彼はそれを試みたことがあつた……多分彼はもう一度それを試みるだらう。彼が彼女の記號にしたxはどうもうまくゆかなかつた。それは彼女を代表してゐながら、代表してゐなかつた。紙の上では彼女を代表してゐたが、人生では彼女を代表してゐなかつた。彼は、彼女の記號を動かしたり、あやつゝたりしたが、實際には彼女をさうすることはできなかつた。彼自身を代表させたyすらもどうもうまくゆかなかつた。xプラスyは、どんなにその式や關係をひねくりまはして見ても二つが一緒にならなかつた。ことによると、或るxを九乘にしたら、或はyを――いや、どんなにやつて見ても、此の方法では何も解決することができなかつた。或るとき、彼は彼女の腕と足とを後ろに曲げて、彼女を人間のxに似せようとしたのをおぼえてゐる。その時、彼は方程式を解くことができたかも知れないのだ、ちやうどその時だつた、彼女がカーチス事件のあとで、彼に扇を投げつけたのは。その時、彼は、完全な數學の答へを得るために彼女の兩腕を折ることでもできると信じた。だが、たとひさうしたところで、彼女は、簡單な方程式になつてはゐないだらう。彼は彼女を此の上なく憎んでゐるときでもそのことを知つてゐた。彼女を此の上なく愛してゐるとき、此の上なく彼女に夢中にな

つてゐる時には、多分彼は最も深くそのことを知つてゐたのであらう。彼女を單純化しようとすると、彼女はいつもするりと辷りぬけた。彼女は單純といふことをひどく嫌つてゐた。だからどんな記號でも、彼女の矛盾を包容するには不十分だつたのだ。彼女の個性は一つの言葉では現はせないやうに思はれた。だが、今日といふ今日は、彼はそれを發見したのだ。今日といふ今日は、彼は、彼女の正體を暴露したのだ。だがほんたうにさうだらうか？　何時かしら？　七時十二分過ぎだ。かれこれ一時間たつた。たしかに彼女は今までに歸つてゐるべき筈だ。彼女のしなければならぬことは、チムホルツに出てゆくといふことを告げることだけだ。チムホルツはもうそれを知つてゐた。彼は理解するだらう。とめさへもしないだらう。だが、ほんたうに彼女は出て行くだらうか？　勿論、今となつては行つたにちがひない。自分で行かうと思はなければ行かなかつたにちがひないんだから。しかし、彼女は、彼が命令したから行つたのかも知れない。彼が「出て行け」と、きつぱり、取りつく島もないやうに言ひきつたから出て行つたのかも知れない。だが、そんなことは、彼は百も承知ぢやないか？　勿論そのために彼女は出て行つたのではないか？　それなら、彼は、何故彼女が歸つて來ないのを氣を揉んでゐるのだらう？　たしかに彼女は、彼が、出したから出て行つたのだ。たしかに彼の力が彼女をまかしたのだ。たしかに勝利者は彼だつたのだ。だが彼女は實に妙な人間で、……彼女が何を思つてゐるのか、誰にもわからなかつた。彼女は一言も言はずに出て行つた。そして彼の机の上に扇を殘していつた。彼女は、ことによると、別れのかたみに扇を遺していつたのかも知れない。まつたく……それは彼女のやりさうなことだ！　彼女はきつとそのつもりなのだ。おゝヂュデイス、お前は歸つて來ないのか？

「ヂュデイス！」彼女の名前が低い叫聲となつて彼の唇を洩れた。

黒い珠數玉のサフラン色の纖き目のついた彼女の扇は、室内の他の物はみんな闇につゝまれてゐるのに、その闇の中にまだかすかに見えた。彼は机のそばへ行つて、長い、細い指でそれに觸つた。指を通じて、それに物を言はせることができるかも知れないかのやうに。それを彼の掌の上にのせると、情熱に襲はれた昆蟲のやうに震へた。いや、震へてゐたのは扇ではなくて、彼の指だつたのだ。彼としたことが何といふ不合理なことを考へたものだ。彼はしばらくの間、それは幻覺ぢやないかと恐れた位だつた。彼は扇を彼の顔にあてた。

「ヂュデイス、」

彼女は歸つて來ないだらう。彼は今度こそ遂にそのことがわかつた。そのことが明瞭になつた。これが彼女の別れだつたのだ。彼に彼女の形見として接吻してくれと言はぬばかりに、彼女の齒のあとがそれにのこつてゐるではないか。

彼はピアノの横の壁についてゐる小さい枝附燭臺に灯をつけた。それは室内を、おぼろ氣な、神祕的な色にした。彼は蠟燭の灯のちら〳〵する光へ扇をさし出した。彼女がもしやそれに何か書きのこしてゐやしまいか。それはまだ彼の指の間で震へてゐた。外の風ではなくて、扇の中に起つた風で搖り動かされるかのやうに。彼はまだその白い小さい柄の縁に彼女の指紋のあとを見ることができた。それはまだ彼女の觸感で生きてゐた。ヂュデイス……何故お前はこんなことをしたのだ？　彼は扇を掌で、ばり〳〵碎ける程握りしめたが、急に、痛くなつたのではなした。ことによると扇をこはしたのかも知れない。これは彼女がのこしていつた最後の品だ。彼はど

んなに大事にそれをしまつておくことだらう！　彼は人目に觸れないところへそれをかくしておくだらう。彼以外の者には、もはや誰にも見せないだらう。それを入れるために寢をこしらへるだらう。そして、その中へ彼女の思ひ出とゝもに埋めておくだらう。時々、多分毎日そこへ行つて、ちよつとそれを見るだらう。いや、彼等の愛の最後の品をいつまでも生かしておくために彼はそれを抱きしめ、それに接吻をするだらう。彼は、彼女以上にこの扇を愛するだらう。チムホルツもこの扇を知つてゐた。ことによると、いま彼がもつてゐるやうに、チムホルツもこの扇をもつたことがあるのかも知れない。何だつて……そんなことがあり得るだらうか？　さうにちがひない。ひよつとすると、彼がこの扇を彼女に與へたのかも知れない……

彼は怒りの發作に捉はれて扇を投げつけた。扇の上の縁が壁にあたつて折れた。彼は自分で何をしたのか殆んど知らなかつた。彼は床の上に折れて投げ出されてゐる扇を見ながら、何故それを投げつけたのか、しばらくの間忘れてゐた。その行爲は彼をびつくりさせた。要するにそれは彼女の扇ではないか。それには彼女の齒のあとゝ指のあとゝがついてゐた。彼はそれを拾ひに行かうと思つて立ち上つた。だがすぐにチムホルツのことを思ひ出した。……きつと彼がそれを彼女に買つてやつたのにちがひない。彼は彼女に何もかも買つてやつたではないか——着物も、寶石も、本も、家も、身體も、魂さへも——どうしてこの扇を買つてやらないわけがあらう？　たとひ彼女が買つたにしたところで、彼の金で買つたのだ。……どの道、彼が買つたことになる。それは彼女の扇といふよりも彼の扇だつたのだ。……彼女の身のまはりのものは、みんな、彼女のものといふよりも彼のものではないか？　彼が彼女を憎んだ一つの原因はそれだつたぢやないか？

彼は折れた扇を、床の上にうつちやつておいた。最初、彼は蠟燭を吹き消さうかと思つた……だがさうすれば、もし彼女が歸つて來ても見えないかも知れない。馬鹿なことを考へたものだ。彼女の姿を見るよりもずつと前に音が聞えるぢやないか？　彼女が家へつくよりもずつと先に、氣のせゐで彼にはわかるのだ。それから階段に彼女の跫音が聞える。おゝ、そのうれしい音！　その時の彼の心臟の躍動！　今、それを豫想したゞけでも、彼の心臟はどきん〳〵と動悸しはじめた。彼には、まるで、彼女の跫音が踏段に聞えたやうな氣がした。何だらう？　彼は耳に手をかざして聽きいつた。さうぢやない……まだ歸りはしない。まだ七時半だもの。……いや、ほんたうは八時に二十分前だ。だが彼の時計は多分少し進んでゐるらしい。それにしても彼女は、今歸り道についてるだらう。どんなに、彼が口說いたつて、きつと彼女はもう今時分は、それからのがれることができてるだらう。彼等の家からこゝまでは歩いて十四分しきやない……彼等の……いや彼の……しかしやつぱり彼等の家だ……さうだ、それは彼等の家だつた。尤も、家の中のものは何もかもチムホルツが金を出して買つたのだが……彼はチムホルツの金をどんなに嫌つたらう……といつて別にそれが妬けるわけではない。決してさうではない……金なんてものは彼には何の價値もないものだつた。だが彼女は容易に金の力で動かされた。この方面にかけては彼女は實にけちくさい女だつた。彼女の心をそゝのかしたのは實際の金ぢやなくて、金のもつてゐる心理的な力だ。彼女は自動車や、美しい着物や、泉水のある家や、夏の別莊やがすきだつた。それを愛してゐたのではないことは彼も知つてゐた。——彼女が何かをほんたうに愛する時のやうに、たとへば、彼女の一番機嫌のいゝ時に彼を愛してゐたやうにはそれ等のものを愛してゐるのぢやなかつた——だが彼女はさういつた物が好きだつた……さ

うだ彼女はさうした物が非常に好きだつた。さうした好きなものゝために、色々な愛するものを喜んで犧牲にする程好きだつた。ひよつとすると彼女は、自分で考へてゐる以上に、自分で認めてゐる以上に、さうしたものが好きだつたのかも知れない。それで、彼女のやつた色々な事柄が說明できる。それで彼女の謎が解ける。だが實際のところは、彼女はそれ程ひどい俗物ではなかつた。彼女は兩方のものを欲してゐたのだ。……だが、この容易なものゝ方が、もつと立派なものに對する彼女の決心をくじいてしまつたのだ。さうした物は、實際彼女の意志の力を痲痺させてしまつた。彼女は、それを心の中ではよく知つてゐた。いつでもよくわかつてゐた——それでゐて、實際生活になると、そこまでもちこたへきれなかつたのだ。どうしてさうなんだらう？　このことについて、さうした物に對してどんなに屢々彼女は心の中で戰つたらう？　どんなに屢々彼女はチムホルツのくれる物を斷らうと約束したことだらう？　そして彼女は屢々斷つた……と彼は信じてゐた……だがほんとうに斷つてゐたんだらうか？　彼女はさう言つてゐた。だが、その時は、彼を苦しめまいと思つて彼に事實をかくしてゐたのかも知れない。彼女は……彼にそれを話した時には……きつと斷つたにちがひない。……その時は實に、驚く程、眞面目な時だつたから。どうして彼女の眼を疑ふことができよう？　それは實に澄み渡つて熟心がこもつてゐた。あの驚くべき眼……それは千萬無量のものを語つてゐた……彼は彼女の眼をぢつと見つめてゐる時には、いつでも、自分が彼女の一部分になつたやうな氣がした？……凡ゆる疑ひは消えてしまつた。心配も惱みも何でもなくなつた。たつた一度だけ、彼が彼女の眼に見入つてゐた時、彼は、彼女も矢張り同じやうに澤山の男の眼に見入つてゐるのを見て、身慄ひして、そつぽを向いたことがある。だが彼は、すぐに、自分はその澤山の男の

うちの一人でもないのかも知れないと思つて、ちらりと視線をもとへ返したのであつた。彼女の眼はいつも彼をまよはした。彼が彼女に出て行けなんて言ふことが出來たのは、彼が彼女の眼をじつと見つめてゐなかつたからのことだつてことを彼は知つてゐた。彼女は、出てゆく少し前まで、彼にもう一度彼女の眼を見つめさせようとつとめた——だが、彼は强かつた。彼はそつぽを向いて彼女の視線をさけてゐた。結局、强いといふのはみなそれだ。弱くするものを避けることなんだ、……强くなることの祕訣は、すべてそれに歸する。彼はそのことを知るのに隨分長くかゝつた。だが今日はそれを實行してしまつたのだ。彼女の眼は、これまで彼の身を滅ぼすものだつた。しかしこれからはもうさうではない。これから先は、彼女に抵抗しようとさへ思へばいつでも……だが一體これから先があるだらうか！　彼は階段に、音を聞いたのではないか？　たしかに彼女の音にちがひない、ヂュディスにちがひない。

彼は熱心に耳をかたむけた。若しあれが彼女であつてくれさへしたら。おゝヂュディス。彼は扉のとこまで行つた。そして彼の眼は、廊下の闇の中をすかして見た。何の音も聞えなかつた。急に、重苦しい憂鬱が襲つて來た。彼女はもはや歸つて來ないのだらうか？　彼はそんなつもりだつたんだらうか？　ヂュディス。いや、彼は、彼女を見るためになら、どんな犧牲でも拂ふ。さうだ、彼女の眼をじつと見つめることですら辭さないつもりだ。あの眼を。おゝヂュディス。これでもう二度と彼女に會へないとしたら……彼女が、これつきり歸つて來ないとしたら……若し……おゝ、彼は、もう一度彼女の眼を見つめるためになら、何物もをしまないだらう、何物も……さうだ、今日の午後の勝利をさへ見すてゝしまふだらう。……あれはきつと彼女の跫音にちがひない。彼は廊下へ出

て呼んで見た。

「ヂュディス！」

答へはなかつた。たしかに誰か扉をあけたに相違ない。彼は階段を半分降りかけた。彼女がそこにかくれてゐた……さうだ……彼女のやりさうなことだ。

「ヂュディス、冗談はおよしよ、ね。」

矢つ張り返事はなかつた。して見ると矢張り、彼女はそこにゐたんぢやないのだ。だが、ゐなくちやならん筈だ。彼はたしかに扉の開くのを聞いたのだ。まざ〳〵と。たしかに、風のせゐといふわけはない。こんな暑い、そよとも風のない晩に。彼は階段の下まで降りきつた。入口の扉はしまつてゐた。きつと彼女が中へはひつてからぴしんとしめたのに相違ない。しかし彼女はふだんはそんなことはしなかつたものだが。だが今日は別だ……今夜は彼女だつてしめるだらう。彼女は廣間のすぐ玄關先きにある外套掛けのうしろにかくれてゐるにちがひない。彼は彼女のラヴエンダーの着物が外套掛けのうしろからはみ出してゐやしないか見ようとした。勿論見える筈はないのだ……闇の中でラヴエンダーが見える道理はないのだ。彼は、今にも彼女が見つかるぞといふことを知らせて、彼女をはら〳〵させようと思つて、わざと躓いた。彼は彼女とからかひあひをしたかつたのだ。それほど彼女は美くしくて、いたづらずきだつた。彼女はごとりとも動かなかつた。益々もつて彼女らしいやり口だ。彼女は、彼がやつて來るまで待つてゐるのだらう。そしていきなり飛びついて彼に接吻をするつもりなんだらう。その手はくはぬと今度は彼の方が彼女をおどかしてやる。彼の方からからかつてやる。彼は、くるりと向き

直つて、ゆつくりとした足どりで階段をのぼりはじめた。彼は一段づゝ大きな音をたてゝ踏みしめた。そして足を停めて、彼女にまちがひなく聞こえるやうにした。何故彼女は彼を呼びかけなかつたのだらう？　おゝ、彼女は自分でならうと思へば、實にこましやくれたいたづら女になれるんだ。人の悪い、箸にも棒にもかゝらぬいたづら者になれるんだ。

「ヂュディス、僕はもう行くよ。」

矢つ張り彼女は、とめもしないで、彼の行くまゝにさせておいた。もう我慢ができなかつた。どうしてこれ以上からかつてをれよう！　彼は、別のやり方で彼女をびつくりさせてやらうとした。彼はまた階段をずん〳〵下まで降りて來た。それからマッチをつけた。マッチの小さい火が廣間を照らした時には、彼の唇は、既に彼の感情をあらはしてゐた。

「そんなとこにお前は……」

だが彼女の唇は、心の中に思つてゐることを言ひ終らなかつた。彼女はそこにゐなかつた。そこには誰もゐなかつた。何物も、たしかにこれは彼の思ひ違ひに相違ない。誰か、たしかにはひつたのだ。彼はたしかに扉の開く音を聞いた。彼は廣間の端から端まで歩いて見た。たしかに誰もゐなかつた。彼は帽子掛けの下がしらべて見たくなつた。だがそれは馬鹿げたことだ。そんなとこへは子供でなくちや這つてはひることはできない。彼のマッチは消えた。で、彼は急いでもう一本つけた。彼は、自分のあわてゝゐることに氣づいて驚いた。彼は闇を恐れてゐたのだらうか？　その反對だ。彼は闇の中で誰か襲ひかゝつて來てくれゝばいゝがと思つた。さうすればせめ

て元氣が出る。こんなにひつそりとしてゐてはまるで死んだやうだ。どんな人間よりも、この靜けさが彼には恐はかつた。一體彼はどうしたといふんだらう？

彼は氣のせゐで誰か扉を開けたやうに思ひこんだんだらうか？　そして、實際は、誰も扉を開けたりなんかしなかつたんだらうか？　彼が階段の下に立つてゐる間に、マッチはもとまで燃えきつてしまつた。指が火傷をしてづき〳〵痛んだ。ひよつとすると廣間の別の側をさがせばよかつたのぢやないか知らん。そこへ彼女はかくれてゐたのかも知れない。いや、彼女はあんな咄嗟の間にそんなとこへ行けるわけがない。しかも彼に見えないやうに行けるわけがない。

おゝ、彼はまた、彼女に馬鹿にされてゐた。こんなことはきつぱりやめなくちやならん。彼は今までにもつとよく知つてゐた筈だのに。一體どうして彼はそんなに彼女のことを氣にするんだらう？　彼女は何者だ？　金物製造業者のアンソニイ・チムホルツの細君で、もとは畫家のサム・ペルマンの情婦だつたんぢやないか、尤もペルマンから彼女を奪ひとつたのは彼だつた。ペルマンは立派な藝術家だつたが、ヂュディスのやうな女をもつことはできなかつた。彼女は男たらしだつた。さうだ男たらしだつた。だが彼女は、それに手際よく成功した。彼はそのことを認めねばならなかつた。けれどそれは慘酷な成功だつた。どんなに屢々彼女の成功が彼を苦しめたことだらう。さうだ、彼は彼女の成功を羨んだ。しかもそれでゐて……それでゐて、さうだ、彼女の成功が、彼を彼女にひきつけてゐたのだ。だが、たしかにさうだらうか？　さうだ、たとひさうだとしても、それがまた彼に彼女を虫酢の走る程いやがらせもしたのだ。

彼は一本だけ殘して、あとの蠟燭の灯をみんな消してしまつた。一本の蠟燭には、弱い、眞直な灯がちよろちよろ燃えて、壁にうつゝたその影はビザンチンの短刀に似てゐた。數ヶ月前そのことに最初氣のついたのはヂュデイスだつた。何故彼は、彼女のことを思ひ出させるやうなことばかりするのだらう？　だが、さうしないやうに、彼はどれだけつとめたことだらう。彼女はもはや歸らうとしてはゐないのだ。彼はそれを確信した。彼はまた自分の時計を見た。

八時十分！

「ヂュデイス！」

彼は自分の叫び聲にびつくりした。何故彼はこんなにセンチメンタルになるんだらう？　何故また彼女の名を呼んだんだらう？　彼女は彼をもうすてゝしまつてゐる。そして彼も彼女をすてゝしまつてゐる。彼は、彼が病氣だつた時に、彼女が彼をおいてきぼりにして出歩いた時に、彼女を憎んだやうに、彼女を憎むことを學ばねばならぬのだ。否、彼女に無關心でゐることを學ばねばならぬのだ。さういふ風に態度をきめるべきだ。だが、そんなことを留んだつて何にならう？　彼はどうしても無關心ではゐられなかつた。彼女は、彼が無關心でゐられるやうな女ではなかつた。彼女は憎むか愛するかよりできない女だつた。「どうでもよい、」といふわけにはいかない女だつた。彼は彼女を憎まうとしなければならなかつたのだ。さうだ。彼は彼の嘲りと侮蔑とを、深刻な、斷乎たる憎惡にかへねばならなかつたのだ。彼女の顏は時々非常にきつかつた。彼は、いつも彼女の顏をそのきつい顏であるやうに思つてゐなければならなかつたのだ。實際よりも、より以上にきつくさせねばならなかつたのだ。

彼はきつい顏をいつも憎んでゐた。それはかういふわけだ。彼は先づ第一に自分自身を理解せねばならなかつた。それから彼を傷つけ、彼を破滅させる物に對して自分を護らなければならなかつた。彼は今日の午後、どうしたら彼女の眼を避けられるかを知つたではないか？　今や彼はそれ以上のことを知らなければならない。彼は彼に力を與へ、確信を與へるものを誇大することを會得しなければならない。たとひ、それを彼の精神に信じこませるために想像の力を借りなければならぬとしてもだ。今日の午後は彼の勝利だつた。彼は彼の殘りの生涯を勝利たらしめなくちやならない。彼は彼の全生命を如何なる人物にも打ちこんではならない。彼はいつでも自己のうちに一種の自律をしつかりと保持してゐなくちやならない。男は、破滅が愈々自分を襲つてくる迄それに氣がつかずに女に破滅させられるものだ。女といふものは、本能的に手管に長けてゐる。彼等は男のしようと思はないことを男にさせ、そのために時として何年も何年も戰はせ、それをしてゐる時でも何か高尚な目的のためにやつてゐるのだと信じさせる。男がその過失に氣がつく時はいつも後の祭りだ。涙といふものは、時としては、强い男にでも理想を犧牲にさせるものだ。彼女に屈伏するのは彼が心の最も奥深くに抱いてゐた主義の見苦しい降服であることを知つてゐる時でも、ヂュデイスは彼を屈伏させたことが幾度びあつたらう。男は女のもつてゐるかうした力と戲はねばならなかつた。彼はその戰ひをはじめた。もう二度と降服することはない。そのことを彼は今確信してゐる。彼の考へねばならぬことは、彼女が彼に加へた慘酷な仕打ちだけだ。彼女の冷酷な性質……彼女があんなにも度々彼の心に與へた惱みを思ひ出して見るがいゝ。あゝ、彼女はどんなにも彼を苦しめたことだらう！　彼は決してそれは忘れはしないだらう。これまでにだつて、ほんたうに彼がそれを忘れてゐたのは、彼女

の眼で見つめられてゐた時だけだ。さうなると先のことは何もおぼえてゐられなかつたことを彼は知つてゐた。その時の彼の生活はそんなにも力强く、現在の彼の生活はそれ程にも力がつきはてゝゐるのだ、だが彼女の眼は、ひどく相手をまよはす眼だつた。今では彼にそのことがわかつた。何故彼は、彼女の眼を見つめてゐるときにそれがわからなかつたのだらう？　だがこれから先はわかるだらう。でも、そんな機會にぶつからない方がもつとよいだらう。彼女の眼など見つめないやうにするのがもつとよいだらう。彼はさうしようと思つてゐるのだ。彼女の眼の寿生！　彼の母か死んだあとで、彼の心がすつかり盲目になつてゐたとき、彼が彼女に來てくれといつて呼びにやつた日。その日が彼に忘れられるだらうか？　彼女は行きますと言つたのだ。さうして來もしないでヴインセント・ペルスと芝居を見に行つたのだ。その日の午後彼女はどんなに胸を痛めたらう。彼はその時の苦しかつた時間、無我夢中に待ちこがれて、待ちぼけをくつて、物狂ほしい程失望した時間を、決して忘れないであらう。その日彼が氣が狂はなかつたのが不思議だつた。彼女は彼にとつて、世界の凡ての物を意味してゐた。彼女はそれをちやんと知つてゐた。その彼女が知つてゐたといふことがいけなかつたのだ。それだから彼女はそんなことをしたのだ……彼女が彼を支配する力を自分が持つてゐることを、知つてゐたものだから、そんなことをしたのだ。彼女は、彼が全く彼女に目がないことを知つてゐた。彼女は、どんなことをしたつて彼が彼女から逃げることのできないことを知つてゐた。彼はどうしても彼女から離れることができなかつたのだ。あゝ、何と正確に彼女の見當はあたつてゐたことだらう！　彼は、その日彼女の裏切りを呪つた。彼女を無慘悲に罵つた。彼は、もう二度と彼女を愛するやうなことはしまいとかたく決心してゐた。ところが、次の日彼女が彼に逢ひにやつて

來ると、彼は、彼女の愛撫に降服してしまつたのだ。彼は今でも、その時の降服を思ひ出すと、自分で自分が厭になつた。だが、彼は、彼女が來るのが四時間もおくれて、彼がヒステリーにとつゝかれたあの日の午後も、矢つ張り同じことをやつてしまつた。彼女は雪のためにおくれたのだと言つてゐた。彼は、彼女が嘘を吐いてゐるのだといふことを知つてゐた。その日は、彼女の眼でさへも、それをごまかすことができなかつた。それでも彼は、彼女の魅力に抵抗することができなかつた。何時間もの間、口では言へない程苦しみぬいたあげく、又もや彼は降服してしまつた。さういふことは何べんもあつた。何故、彼は、彼女が嘘を言つておくれたり、いゝかげんな口實を設けてごまかしたりした時に、彼女を追ひ出してしまはなかつたらう？　何故だらう？　どんなに屢屢彼は、吾と自分にこの問を發したことだらう。何故だらう？　勿論、初めはほんたうの事實に直面することを怖れたからに他ならぬといふことを、彼は知つてゐた。いつもそれは、彼女を失ふやうなことになるのを彼が怖れてゐたからであつた。もし、彼が彼女を追ひ出したら、彼女はそれつきり歸つて來ないかも知れない。彼女なしの生活は、とても耐へられない。彼女は、彼を苦しめる女としてゞも、その當時は、彼にとつて何より大切なもので、彼女を失ふといふことを考へたゞけでも、氣が狂ひさうなくらゐであつた。だが、その頃はもう過ぎ去つてしまつた……彼はかたくそれを信じてゐた。

あれは彼女だらうか？　彼は又そは〳〵しながら細い指で机の端をこつ〳〵たゝきながら、聽き耳をたてた。今度は一杯くはされるやうなことはないだらう。彼は時間を確かめるために、もう一本マッチをつけた。九時十二分だつた。彼女は、もう歸つて來ないだらう。一體彼は、何故彼女を追ひ出したのだらう？　一體彼はどうした

と言ふのだ？　彼はたつた今、かつて彼女が、彼をやつゝけたやうに、彼女をやつゝけてしまつたつもりでゐたではないか？　彼女は、以前とは變つてゐたに違ひない。それとも……勿論、彼の方は變つてゐた。彼は、彼の母が死んだ時や、彼がヒステリーに襲はれた時の彼ではなかつた。彼は、今ではすつかり變つて、前よりも強くなり、前よりもきつぱりしてゐたのではないか？　彼は、彼女に、彼も彼女と同じやうに強くて、きつぱりしてゐるつてことを、知らせてやらうと思つてゐた。それを、彼は今日やつたではないか？　今日は、彼の生涯に於ける革命の起つた日ではないか。實際さうだつた。そして彼は、終に彼の決心をなし遂げたことを、ひどく喜んでゐたのだ。彼はもはや、ヂュディスの奴隷ではなかつた。

彼は椅子から立ち上つて、パークトンの丘の後から、うね〳〵と曲つてゐるデイズン街の方を窓から眺めた。通りには人影は少しもなかつた。彼は、彼の家がもつと人通りの多い、もつと騷々しいアヴロン街にあればよいと思つた。とき〴〵彼の心の中にある凡ゆる物が、毎晩、デイズン街や、パークトンの丘の近所に擴がつてゐるまるで田舍のやうな靜けさから逃れるために、何かの騷がしさを求めることがあつた。もはや、彼女を待ちまうけてゐたつて、何にもならない。彼は賭をして負けたのだ……それだけだ。だが、彼の失つたものは……一體何だらう？……ヂュディスを失つたんだ！　彼が、彼女のことを考へるといつでもこんな恐ろしい不氣氣な感じにうたれるのは何故だらうか？　彼が失つたのは、一人の男たらしにすぎなかつたのだ……彼女はそれつきりの女だつた。それ以上の者ぢやなかつた。だが、何故彼はそれつきりだと自分で信ずることが出來なかつたんだらうか？何故彼は、口では反對のことを言つてゐながらも、以前に彼をしよげさせ、彼を失望させた女が、すぐにも歸つ

て來ればいゝと心の中で感じずにはゐられないのだらうか？　彼の心は一體どうしたといふのか？　いや、それは彼の心ではなくて、彼の身體だつたのだ。彼は、あの女から逃れることに出來なかつたのだらうか。彼は自分の手が慄へてゐることに氣がつくにつれて、ます〳〵それを自分に隱さうとした。彼は、自分で自分が恥かしくなつた。何といふ滑稽な大失敗だらう！　しかも、他の夜なら兎も角、今夜……今日の午後のことがあつた後で、彼はほんたうに、彼女に結局歸つてほしいのだらうか？　彼女が歸るといふことは、彼の苦しみが續くといふことを意味するだけだ、もし、彼が彼女から逃れることができたら、もはや苦しみがなくなるだらう……永久の苦しみになるのだらうか。彼女が自分のものでなくなるといふ苦しみ、自分のものではなくて、誰かのものになるんだといふ苦しみを、永久に持たねばならなくなるのだらうか？　それは、とても耐へられぬであらう。彼は、それは我慢することは出來なかつた。彼は、以前よりも、もつと卑屈なやり方でさも、彼女の後を追つかけたであらう。もし、彼女が死んだら、その時は話は別だ。もしかして、彼が彼女を殺したら、……だがどうして……いや、もし……もし、彼がどうにかして彼女を征服することが出來たなら。今日の午後……いや、ありもしないことを考へて、自分で自分をごまかしたつて、何の役にもたゝない。彼女は決して征服されたのではなかつたのだ。彼女は歸つて來ない。それは、彼の敗北だつたのだ。すつかり敗北してしまつたのだ。それだのに、つい今まで彼は、彼が勝つたのだと考へてゐた。彼は勝ちたいのが胸一杯だつたものだから、自分で勝つたと信じてゐたのだ……それがほんたうのところだ……何といふ馬鹿者だらう。

彼は狂ほしい程、彼女に逢ひたかつた。そんなことはないと、自分で自分に言つて聞かせることに、もう疲れ

てしまつた。彼は、彼女なしに生きて行くことはできなかつた。彼は彼女をすつかり自分が獨占しなくちやならないといふことを知つてゐたゝめに、彼女に出て行けなんて言つたのだ。彼女がまだチムホルツと一緒に生活してゐるとすれば、それがどうしても出來ないからさう言つたのだ。チムホルツと一緒だと、彼女はいつも彼をだました。彼は彼女についぞ安心ができなかつた。もし彼女が彼と一緒にゐるやうになればそんなことはすつかりやんでしまふ。それはやまずにはゐられなくなる。さうすれば、彼には彼女を支配する力ができて來る……何だつて？……彼はほんたうに或る女を支配する力を求めてゐたんだらうか？　力……さうだ、何故それをごまかすのだ？　それこそ彼の求めてゐたものではないか。彼女が彼をそこまで追ひつめたのだ。彼は彼女を征服しようと希つた。ほんたうに彼女を征服しようと……今まで彼女が彼を征服してゐたやうに。彼女を彼の意志に屈伏させる。彼女を彼の力に從へる。それが彼の欲してゐたことだ。彼女がエインスリイの舞踊會へたうとうやつて來ないで、彼をひどく困らせ、ひどく苦しめてからといふもの、彼が一圖に希ひ求めてゐたことはそのことだつたのだ。要するに、彼が今日の午後のやうなことをやつてのけたのはそのためなんだ。彼はひどい大賭博をして負けてしまつたのだ……ヂュディスを賭けて失つてしまつたのだ。おゝ、一體彼はほんたうにヂュディスを失つたのだらうか？　おや……彼はまたセンチメンタルになりかゝつてゐるぢやないか？　彼には、自分のしたことがわかつてゐた。これまでやつて來たやうなことをつゞけるのは、同じ苦しみをくり返すことだ。だか、彼女にチムホルツを捨てさせること――彼女に彼以外の凡てのものに、見切りをつけさせてしまふこと、彼女に彼だけのものになることを同意させること――そんなことが出來ることだなどゝ、彼はこれまでに考へることができたゝ

らうか？　それは、出來得べくあまりに驚くべきことであつた。もし彼女がほんたうにそんなことをしたら、それでも矢張りヂュディスだらうか？　勿論ちがふ。それは別の新らしいヂュディスになつてしまふ……びく〳〵してゐるヂュディス……彼の箸の先で從へることのできるヂュディスになつてしまふ。彼女は、自分でも自分がわからなくなつてしまふだらう。彼女が、そんな風に變ることができるなんて、どうして彼に信じられよう？　ヂュディス……彼女をそんな風に變らせる機會を彼が持つてゐるなどゝ想像したのは、馬鹿の骨頂だつた。彼女の性質は、一から十までそれに反してゐる。だが、さういふ時もあつた……そして、近頃では彼女は、チムホルツが厭になつて、ひどく憂鬱になつてゐた……彼女はペルマンにはもはやちつとも逢はなかつた。どうにか彼女をチムホルツに結びつけてゐたのは、彼女の子供だけだつた……それからひよつとすると、彼の愛のためでもあつたかも知れない。だが、近頃では、彼女は變つて來た。彼女は、だん〳〵金なぞは欲しがらなくなつて來てゐた。すくなくも彼はさうだと思つてゐた。だが、ヂュディスは、愛に無頓着になるなんてことがあり得るだらうか？

何時だらう？　おや、十時だ。もう彼女は歸つて來はしまい。多分、彼女はもう床に就いてゐるだらう。ことによると眠つてゐるかも知れない。それが彼女のやりさうなことだ……彼のことなどは忘れてしまつて、夢でも見て……きつとチムホルツの腕に抱かれて眠つてゐるんだらう。でぶ〳〵太つた黄金の悪魔の腕に。

おゝヂュディス！　彼女は何故彼がこんなに彼女を愛してゐることを知らなかつたんだらう？　いや、さうぢやない……彼女は知つてゐたのだ。もし彼が彼女を愛してゐなかつたのなら、問題はわけなく解決したゞらう。彼は自分でさう考へたことがどんなにたび〳〵あつたか。彼は彼女のことを超越してゐたことはないのだらうか？

だが、誰が一體彼女に超越することが出來るだらう……それ程にも、彼女は何ともたまらない女だつたではないか？　それで……もし彼女が歸つて來なかつたら、彼はどうして今夜を過ごすのだらう……どうして過ごすことができるだらう？　彼は、明日の朝まで生きてゐることができるだらう？　彼は自分をどうするだらう？　彼は自分をどうすることができるだらう？　十時だ！　十時だ。時間が既に彼の頭の中で、どき／＼と動悸してゐた。彼はもう一本蠟燭をともした。それからもう一本、でもそれは、今となつてはたゞ部屋の中を照し、明るくするだけに過ぎなかつたけれども。彼はどこへ行くだらう？　彼はそこにぢつとしてゐることができなかつた。だがどこへ……どこへ？　どこへも彼の行けるところはなかつた。もし彼が、酒を飲むことができたのなら……さしあたり彼は醉つぱらつたゞらう。いや、今になつてはどんなに酒を飲んだつて彼の心は鎭まりはしない。ヂュデイス！　ヂュデイス！　彼が彼女に出て行けなんて言ひさへしなかつたら！

街は、むし／＼暑い夜の中で、うつろな洞穴のやうであつた。彼の部屋は蠟燭の火で、息苦しくなつた。だが、彼が彼女に出て行けと言つたのは、たゞ歸つて來て欲しかつたからなのだ。しかし今では……おゝ、何故彼は、たつた一つの動作であんなに危ない博打を打つたのだらう？　何故？　おゝヂュデイス！　彼にはもはや彼女の小さい足音を、階段で聞くことができないのだらうか。彼女が彼のところへ歸つて來るのがもはや見られないのだらうか？　彼女の驚くべき眼が、その情熱を彼の眼の中へうづめるのをもはや見られないだらうか？　恐ろしい恐怖が彼を襲つて來た。痛いやうな空虛が彼の心を荒された酒宴のやうにした。ヂュデイス。彼はどこか

へ行かねばならなかつた……どこへも行くところはなかつたけれども、彼は兎に角行かねばならなかつた。彼の部屋を見てゐると氣が狂つてしまふ……何もかも……そしてそこにある扇も……

おや、……ドアが開いた！　今度ははつきり彼に聞こえた。閉き間違へた氣づかひはない。だが、こんなに夜おそくなつてから彼女は歸つて來る筈がない。いや、ドアが開いたなんて筈がない。あまり氣をもんでゐるために、又だまされるやうなことがあつてはならない。よし！　彼はそは／＼する身體を鎭めようとつとめた。彼は自分の身體の中で何かゞ今にも爆發しさうなやうに感じた。彼は耳をすますことすらできなかつた。彼はものを聞くことができなかつた。彼は、彼の部屋のドアのところまで行つた。何も見えなかつた。手をかざして耳をたてた。何も聞こへなかつた。いや、何か聞こへる……たしかに階段に足音がする。非常にとりすましたものやはらかな足音がする。おゝヂュデイス！　足音は階段を上つて來た。今度こそ間違ひではない。今度は思ひ違ひしてゐる氣づかひはない。足音が階段のまがり角の足溜りで立ち止つた時に、彼はもう少しで彼女の名前を呼ばうとした。彼は部屋の中へ身をひいた。彼は彼女に通り路を開けてやらねばならなかつた。だが、彼は何故、部屋の入口で彼女に逢はないのだらう？　彼は彼女が部屋へはひつて來た時に、彼女に逢ひたかつたのだ。彼女は彼のもとへ歸つて來た。たうとう彼が勝利を得たのだ。彼女はチムホルツを捨てゝ彼のところへ歸つて來た……彼女は自分でさう決心したのだ。彼は勝利だ。彼は彼女の足音を數へた。おゝ、ヂュデイス。彼は又彼女の眼を見るだらう。彼女は彼の……凡てになるだらう……

彼は、ドアの傍まで突き進んだ。彼の熱心は高まり、彼の感情は加はつて行つた。彼は、彼女の足が、彼の部

屋の方へ通じてゐる小さなローマ式階段に觸れるやいなや、彼女を摑まへて、いきなり接吻をしようと思つてゐた。彼は、本棚の端にわく〳〵した喜びで慄へてゐる兩手をおいた。

次の瞬間、妙な風に身體を捻つて彼は、驚きと恐れとで後へとび下つた。彼の右足がすべつて、書物の並んでゐる壁に向き合つてゐた盆栽棚にあたつた。

アンソニー・チムホルツは、殆ど部屋の中をちらりとも見ないで、口を開いた。どうやら薄暗い部屋の中で、殆ど何も見えなかつたし、又何も彼には興味もなかつたらしい。

「家内が、」——彼の聲は白ばつくれて馬鹿丁寧だつた——「家内が扇を返していたゞきたいと申しますので、」

御心をなさせたまへ

一

空氣は早く降つた雨で、まだしつとりと濕氣を帶びてゐる眞夏の夕暮のすが〳〵しい匂ひで、さわやかだつた。松や、楓や、ポプラの樹の間から、淡紅色の霧が爬ひ寄つて、かすかな、消えかゝつてゐるしみのやうに、丘々を横ぎつてひろがつて行つた。その中の一つの高い丘の頂きの緣端で、アンゼロは、とある水溜りの前に立ちどまつて、暗くなつてゆく空を眺めた。何といふわけもなしに、彼は足を進めたくないやうな樣子だつた。彼

は、まるで大戰喜に醉つたやうにその場の風景の中の人物になつて立つてゐた。彼の眼は、代る代る不思議にそは〳〵しながら、水溜りから空に移つて行つた。水溜りは、眞ん中の部分の外は、大して大きくなかつたので、難なく跳び越すことができた。それでも彼は、まるで、突然、見なれない動物が、彼の行く手に立ち塞つたかのやうに、ぐづ〳〵してゐた。やがて、このどつちつかずの狀態から醒めて、彼は、水溜りのまはりをぐるりと歩いてまはつて、なほもつゞけて進んで行つた。

水は、いつでも彼の心に異常な效果を與へた。それで、しばらくの間彼は、彼が歩みをとめたのは、水溜りを見て言ひ知れぬ氣味惡さをおぼえたゝめか、それとも、彼が心の中で考へつゞけてゐたことのために、急に立ちどまつたのであるかをあやしんだ。だが歩きつゞけてゆくうちに、まもなく、ミリヤムのことに心を奪はれてしまつて水溜りのことは忘れてしまつた。彼は、たゞ一人で、田舍の廣々とした野天の下で思ひに耽つてゐる間に彼女の問題を解いてしまはうと決心してゐた。彼女の問題は極度に彼の心を惱ました。實際、彼が牧師として聽きとつた樣々な懺悔の中で、彼女の懺悔くらゐ不思議な、心を打つ懺悔を彼は知らなかつた。どんな人でも皆それ〴〵苦しみをもつてゐる。だが彼女の苦しみは氣狂ひじみた苦しみだつた。或る時は、ぞつとする程恐ろしいかと思ふと、或る時は、有頂天に樂しいやうな苦しみだつた。その苦しみの告白そのものすら、どこか變つてゐた。密閉された懺悔室の靜けさは、いつも彼女の言葉を和げて、私語にする、何とも避けがたい力をもつてゐた。一つ一つの言葉が、光のやうに、眼に見える繪畫になつた。彼女の言葉の中の或る物、言葉よりも深い或る物、この或る物が、魂の苦悶を傳へるために、言葉より以上のものを發明することのできなかつた人間のみじめさを

嘲つた。彼女が、その苦しみを懺悔しようとして、一所懸命になつてゐるときよりも、彼には、慄へながら彼女が默つてゐる時の方が、よく彼女の苦しみのわかる時があつた。さういふ時に、彼女の顏は、苦痛と情熱とのためにまだ固くなつてはゐたけれど、殆んど祝福するやうな表情を帶びて、聖者のやうな風貌をそなへて來るのだつた。彼に、彼女を苦しみから救つてやりたいといふ氣を起させたのは、その顏つきだつた。かうした時に彼女を見ると、彼は、淫賣婦の肉體の中にも天使の魂があるものだと信じたのだつた。彼女はたゞの女以上のものだつた。

はじめには彼は、彼女の身の上がこんなに大袈裟に、複雜に考へる値打ちのあるものだとは信じなかつた。彼はまだ彼女がはじめて、痛ましい心をかゝへて彼の所へ來た頃、彼女のことについて自分で自分に言つて聞かせたことをおぼえてゐた。彼女が長いこと懺悔室へ來なかつたので、彼は、彼女が眞面目なのかどうか少し疑つた。彼女の事件は實際、彼の心中に、一種の壓迫的な責任感を眼ざました。とりわけ、彼は、おとなしく、公正であらうと志した。思ひ違ひをして相手を批難することはこれまでにあり勝ちだつた。そして懲戒を加へても、ひきつゞき相手がそれを無視したり、苦しんでゐる當人がそれを不眞面目にとつたりするときは、動機を思ひちがへることが餘計に有り勝ちだつた。彼はさういふことをしないやうにしようと思つた。これまでにさういふ間違ひをしたことが、彼は二三度あつた。だが、さういふ事件は、どういふわけかよくわからないが左程彼を苦しめなかつた。勿論彼は自分の輕率を悔いるには悔いた。だが彼は、自分でひそかに贖罪をして、この苦しみに打ち勝つたのであつた。そして、かうした贖罪が間もなく彼の靈を慰さめてくれるのであつた。ところが、ミリヤム

の場合は、もつともつと眞面目だつた。どういふものか、彼女に對して間違ひをしさうな氣がした。そして若しそんな間違ひをやつたら、彼の罪は彼女が犯したどの罪よりも遙かに大きいといふやうな氣がした。

他の牧師仲間が、多少冗談半分にしよつちう彼に言つたやうに、實際彼は、感傷的ともいへる位、極度に良心的だつた。彼の青年時代が彼をそんな風にさせたのかも知れない。だが、若しさうであるなら、彼はいつまでも若くてゐたいと思つてゐた。彼にとつては僧職といふものは、神聖な使命だつた。人生に於ける彼の目的は人々の魂を救濟することだつた。彼は他の人たちの住んで動いてゐる世界からはなれた別の世界に生きるやうになつた。彼は世俗的な書物を讀んだり、世間的な遊びや、樂しみにふける僧侶たちを、どうしても理解することができなかつた。さうして、或る意味では許しもしなかつたこともたしかだ。アシシのフランシスはさういふ生き方をする人ではなかつた。そして、彼に神聖な理想の美しさをふきこんだのは聖フランシスの生活だつた。若し凡べて僧侶が、フランシスのほんたうの使徒にならうとつとめさへしたなら、世界は、どんなに罪に滿ちてゐるにしても、忽ち、あくせくと人間の道を追究するかはりに、神の道を追究するやうになるだらう。彼はこのことを通り一遍の道理としてゞはなく、深い、神祕的な確信として信じてゐた。それは彼の心中に、この世ならぬ信仰の白熱で燃えてゐた。

此の信仰を他人に傳へる能力が、彼に不思議な力を與へたのであつた。男でも女でも、彼と話をしたあとでは、自分が神聖になつたやうな氣がするのだつた。彼の手で觸ると、不安な魂も不思議とをさまるのであつた。彼の許しの言葉は相手を元氣づけ、慰撫し、いたはるやさしさをもつてゐた。自分では嚴格な禁慾生活を送つてゐた

が、他人には決してさういふ生活を期待しなかつた。彼は人間の弱さをよく知りぬいてゐたので、罪人が懺悔しようとする先を見拔いて、それを口に出して恥しい思ひをしないでもいゝやうにしてやつた。時によると、彼は、他人が罪を犯せばゆるしてやることができるので、實際他人が罪を犯すのを喜んでゐるやうに思はれることがあつた。彼が斷乎としてその非を鳴らすのは、たゞ僧侶に對してだけだつた。僧侶たちに對する彼のかうした態度と、彼等が無邪氣な氣晴らしであり、人間的な樂しみであると思つてゐることに對する彼のかうした態度とのために、僧侶たちは、宗教上の仕事の場合を除く外は、婉曲に、そして多分無意識に、彼を避けるやうな傾きがあつた。或る一人の老牧師は、彼を聖者だと思つてゐたが、大部分の牧師たちは、彼を狂人扱ひにしてゐた。それでも、彼等は、彼が話しをすると傾聽した。そして彼の言葉の力は、どんな口論でもしづめるに十分だつた。

まだ子供の時分に、父親と話をしてゐた時、父親をひどく怒らせたことを彼はおぼえてゐた。だが、この時の話と、その時に父親が彼に亂暴をしたことゝのために、彼の人生觀が深刻な變化を受けたのだつた。「羅馬で二番目になるよりも、小さい村で一人者になれ、」といふのが、彼の父が口癖のやうに、間遑へて引用するシーザーの言葉だつた。少年の彼は、此の言葉を、幾度びも考へめぐらしてゐるうちに、たうとうそれが彼の人格の一切になつてしまつた。だが、しばらくすると、彼はその意味に疑を抱きはじめた。その時だ、彼が、父親に向つて、此の言葉の新しい解釋、しかも一層高尚な意味の解釋を父親に話したのは。「羅馬に於いて最後たるとも、神の眼に第一人者たれ、」彼はだん〳〵强まつてゆく青春時の確信をもつて、この方が一層立派な心掛けだと主張した。父親は、彼の行動を若氣の向う見ずであり、傲慢であると誤解して、ひどく叱りつけて、こんな冒瀆な自惚れはや

めてしまへと警しめた。イエスと羅馬法王の外は、誰だつて神の眼に第一人者にならうなどと、望むことはできないのだ、と彼の父はたしなめた——そして彼は無理矢理に、この罪のために何週間かの懲戒を課せられたのであつた。だが、彼は心の中では自分で罪を犯したとは思はないものだから、苦行はたゞ形式的にやつてゐたゞけだつた。それでも彼の父親の意見に逆らふのを恐れてゐたので、彼は、自分では罪人でなくても、罪人のやうに振舞つてゐた。だが、その時から、彼は、神の眼に第一人者になることを、彼の一つの希望にしようときめた。彼は人間の身體で、神の生活をしようとつとめた。イエスのやうに、ほんたうに神の子にはなれなかつた。けれど、系圖に於いて缺けてゐたものをせめて行爲では、競爭することができた。彼はあたかも、自分が物質でできてゐるのではなくて、精靈でできてゐるかのやうに生活することができた。彼は、神の姿を見ることはできなかつたにしても、神の本質が、彼の心の中で動いてゐるのを感ずることができた。しよつちう斷食したので、彼は、恍惚狀態に陷つて、何もかもが、形を失つて、ぼんやりした影のやうになつてしまふことが屢々あつた。さういふ時には、彼は、新しい自己が、古い自己の中に動くのを感じた。そして、それは、神が彼の魂の中へ降りて來たのだといふことは彼は知つてゐた。

此の大きな變化を、彼は他人の心にも起さうとし、今では、それをミリヤムに傳へようとしてゐたのだ。この精靈が現はれると、彼の人格が、磁石のやうな牽引力をもつて來るのであつた。彼の心の中にあるこの精靈が、他人に傳はり、他人に力と決意とを與へたのであつた。時には、やさしく愛撫するやうな聲が、時には、殆んど薄氣味の惡い程の力を帶びて來るのであつた。彼は、彼自身のうちにあるこの超自然の力が、他人の中へはひつて

ゆき、僅か一時間のうちに、すつかりその人の人格をつくり直して、かへてしまふのを見た。その當時、ミリヤムが彼の言葉ですつかり變つて、彼女の全身が、突如として理想の光に照されたやうに見えた時、彼は、德が勝利を得、神性が彼女の魂にしみわたつて、柔かな靈の神髓で、彼女の魂を和げたやうに思つた。その當時、彼女が彼の許を去つた時、彼は不思議な歡喜の輝きを經驗した。彼女の、美しい、しなやかな姿が、寺院の人氣のない側堂を、しづかに降りてゆく時に、彼の眼は喜びに輝いたのであつた。

彼が困つたのは、いつでも彼女が歸つて來る時だつた。彼の訓戒が失敗するたんびに、彼の疑惑と恐れとは益益ひどくなつた。今日の夕方、丘の中を歩いてゐる時、彼は、何か理想の幻が、彼のとこまで降りて來て、彼の心に新しい希望を齎してくれゝばいゝがと望んでゐた。その日の朝早く、彼女は彼の許へ歸つて來て、同じ罪の懺悔を口にしたのであつた。彼の赦免の言葉は少しも彼女を變へてゐなかつたのだ。彼女の自責は、空しい、僞りのものゝやうに思はれた。勿論、一個の僧侶としては、彼は、彼女がいつまでも懺悔をしたり悔いたりしてる限りは、これを許すことはできなかつた。——彼自身にすらもそれを許すことはできなかつた——だが、彼の魂の中では、彼はそれは、ほんの形式であつて、神を發見しない多くの人の魂は、毎日祈禱はしてゐても墮落しきつてしまつてゐるのだといふことがわかつてゐた。彼は、彼女が今日も懺悔に來たのに、それでもまだ救はれると信じてゐたのだらうか？　彼女の中には、彼女の行爲よりも、もつと深い、言ふに言はれぬ或る物が、まだ殘つてゐたのだらうか？　もしかしたら、彼は、思ひ違ひをして、そんなものがあると思ひこんでゐたのではなからうか？　だが、どうしてそんな筈があらう？　何といつても、彼女は、大して驚く程聰明な女ではなかつた。た

しかに、彼女は、男をまよはす以外には並はづれた才能をもつてはゐなかつた。たとひ、彼女が改心したとしても、そのために、彼女が人類に、非常に役に立つやうなことがあり得るだらうか？　まあ、尼僧になる位なところだらう。いや、尼僧などになれば尼僧を墮落させようとするだらう。墮落といふことは、彼女の辯けることのできない持ち前のやうに思はれた。たゞ彼の力で、彼女のこの墮落を淨めることができさへしたら、さうすれば、少くもジョセフは有難く思ふだらう。いや、どうも、ジョセフは、彼女が自分で信じてゐたやうに、何も知らなかつたらしい。だが、少くも惡が征服されることにはなるだらう。神の道が、認められることにはなるだらう。

アンジェロが、今、半ば姿を隱してゐる星の下をさまよひ歩いてゐた時、彼の心の中では、かうした考へが戰つてゐたのだつた。アンジェロの搜せた、眞つ直ぐな姿が丘の上をあちこち動いてゐるのは、異樣で、氣味が惡いやうだつた。或る時は、それは地の一部分のやうに見え、また或る時は、空の一部分のやうに見えた。

二

その翌日、アンジェロは懺悔室の椅子に腰を下して、又もや彼女の顏を見たとき、彼は突然自分で自分が腹立たしくなつた。といふのは、彼が話しはじめた時、知らず識らずの間に、まん更、うれしくなくもない感じが、彼の心の中にこつそり這ひこんでゐたからだ。彼は、彼女が歸つて來たのを、ほんたうに喜んだのだらうか？　彼にはそんな風に考へることは堪へられなかつた。彼女がまた罪を犯したことを意味してゐる。彼女が、彼の前に跪くのは、そのたんびに、新しく犯した罪の赦しを乞はんがために外ならなかつ

た。それでゐて、やつぱり、彼は、彼女に話をしたかつたのだ。もう一度、彼女の惡いことをしたがる欲望を弱めてやりたかつたのだ。そして、その機會が、早速やつて來たことを彼は喜んでゐたのた。勿論、彼女が、また罪を犯したのを喜びはしなかつた……だが、若し彼女が今日彼の言ふことをきゝ、彼の頼みをきゝさへすれば、彼女は、永久に清い身體になれる。彼は、昨夜、さう確信したのだつた。そして、たつた今、彼女が、細い、ひよろ〳〵した姿を、殆んと、うづくまるやうにして、顔を上げて、彼の方へむけながら懺悔するのを見た時、彼は、彼の決心の效力を疑ひはじめたのであつた。彼女の、痩せた、細い鼻は、彼女自身が低聲で言ふ言葉を嘲笑してゐるやうに見えた。彼女の眼の下には、のろく曲つた環ができて、彼女の眉墨を塗つた黑い眉が、時々懺悔室のカーテンの隙間からしのびこむ日の光に照らされるたびに、それが、廣く、深くなつてゆくやうに見えた。さういふ時に、彼は、彼女を繪にかいた魔女のやうに思つた。彼女の美しさは、眼窠の中へ落ちこんだ眼の中に消えてしまひ、惡德のためにけはしい相を帶びて來た。彼女の姿態や、動作そのものが、罪の娘のしるしであるやうに思はれた。彼女の微笑の下には嘲笑がひそみ、彼女の一擧一動にずるい底意がひそんでゐた。

だが、彼女が、正直に話をしはじめる時、物柔らかい、うね〳〵した波形をつくつて高低する彼女の聲が、彼女の言葉に、切々と人を動かすやうな美しい、眞率な哀調をにじませる時、彼女はすつかり別人のやうになつた。醜さが、氣のつかぬまに、何とも言ひやうのないものに變つてゐた。まだ眼のふちの隈もあつたし、眉も、眼も赤いちゞこまつた頰ももとの通りだつた。だが、何かしら、その外觀をすつかりかへてゐたのだつた。此の變化が起るのを見るたびに、彼は、それを、不思議な、不吉な變化で、この女が、その身體と精神との中に、人知れ

ず養つてゐる、薄氣味のわるい魔法の一種だと信じた。だが、彼女が話しをつゞけてゆくうちに、彼女が新しい姿を帶びて現はれて來るので、この魔法のことは忘れてしまふのだつた。彼のうちにある凡ゆるものが、彼女を助けてその本能と戰はせようとした。彼のうちにある凡ゆる物が、彼女を彼女自身といふか、それとも彼女の中にある屢々罪に屈服する自我から保護しようと希つた。

「あたしどうにもならなかつたのでございますのよ、牧師樣」と彼女は言つた。すると彼は、又彼女が同じ罪を懺悔しようとしてゐるのだつてことを知つた。それはいつも變らなかつた。たゞ繰り返されるたんびに別の姿を帶びてくるだけだつた。

彼は彼女の懺悔を、冷淡な風を裝つて、冷かに、大して氣にもとめてゐないやうな樣子できかうとつとめた。だが、實際は、彼は一語々々に深く注意をしてゐた。時々、ちよつと聞えなかつたやうなふりをして、自分で聞いたことはわかつてゐながら、もう一度聞きたいことを、彼女に繰り返して言はせることすらあつた。

「だが、何故貴女は最初その男に話しかけたんです？」と彼は訊ねた。勿論こんな質問をするのは、牧師として權限を超えたことだといふことを十分承知の上なのである。何故なんていふことが、どうして關係があるのだ？彼女は罪を犯して、それを許されるためにやつて來たのだ。この場合には、どんなに氣が進まなくても、許すといふこと以外には、彼には何にも用はないのだ。彼は彼女を苦しめてやりたいと思つた……だが、どうして彼にそんなことができよう。そんなけちな考へを起すことは、神の道を說く者にはふさはしくない。それでゐて何かしら彼の心の中で、彼女を心配のために苦しませてやりたいとするものがあつた。苦しむことによつて、きつと彼女の

汚れた魂が潔められるに相違ない。しかし彼女は、てんで苦しみなんかしないだらう。以前に彼は彼女の肉體を苦しめてやれば、彼女の魂が救はれるだらうと信じて、彼女に三日間斷食をして、明け暮れ繰り返して彼女のアベ・マリアを念じるやうに命じたことがあつた。ところが彼女は、それをやらなかつた。そして彼は彼女の辯解を攻擊することができなかつたのだ。斷食の第一日目がすむと、彼女は今にも死にさうな氣がしたので、つい食べずにはゐられなかつた。尤も彼女もアベ・マリアの名を稱へることはつゞけてゐたのだけれど。彼はその時、彼女が嘘をついてゐたことをたしかに知つてゐたのだが、何とも說明することのできない理由のために、それを彼女に思ひきつて言へなかつた。彼は、彼女の前にこのやうな鏡をかゝげて、彼女に氣まづい思ひをさせるのを恐れたのだらうか？　彼の教會へ來る他の信者たちに對しては、彼はそんなことを感じたことはなかつた。勿論彼女の聲は、いつも彼の決心を弱めた。それにまた彼は、彼女が教會を去つてから最後に、又教會の懷に歸つて來る何年も前から彼女を知つてゐた。彼女が教會に歸つて來たことは、たしかに彼女の魂を變へたかは知らないが、彼女の行爲を變へはしなかつた。彼は、彼女の魂を變へたかどうかさへも疑つてゐた。だが、それは彼女の聲がいつも證明してゐた。誰だつてそれを否認することはできなかつた。他の牧師なら恐らく、ずつと前にいつまでも行を改めることができないのなら、もう歸つて來ないやうに、彼女にふくめてゐたであらう……だが、どうして、誰にしろ特に彼のやうな人が、いつでも自分の罪を懺悔して、罪を犯した後でそれを後悔してゐる人を、そんな風に取り扱ふことができようか？　たとひ彼女が、嘘をついてゐるんだといふことを信じきつてゐても、そんなことができようか？　だが、彼は、彼女が彼の前に跪いて懺悔してゐる時には、決してそれを信じきつては

ゐなかつた。彼女が出て行つて、もはや彼女の聲を聞くことができなくなつたときに、はじめて彼は彼女の不眞面目を信じたのだつた。何故彼女は彼女の懺悔僧を變へなかつたのだらう？　また何故彼は彼女をボール長老の方へまはさなかつたのだらう？　彼は何度もそのことを考へたことはあつたのだが、自分の失敗を認めたくなかつた。彼は彼女の魂を自分の手で救ひたかつたのだ。彼のために心を入れ變へた者が何百人となくある。それだのに彼女はどうして改心しないのだらう？　彼女の場合は實に不想議な場合で、それにずつと前から彼女を知つてゐたので、彼は彼女を救ふことに異常な責任を感じてゐたのだつた。これは他の牧師には、全く理解することも氣のつくこともできないことだと彼は信じてゐた。

「矢つ張り同じなんですのよ。牧師樣、」――彼女の言葉は鋭どい悲しさうなひゞきをもつてゐたにも拘はらず、口速やに出て來た――「心を入れ變へようと思ふんですけれど、矢つ張り駄目なんですの、ゆうべもいつもの晩と同じやうでしたの、どうにも仕樣がございませんでしたわ。私を救つてくれるものは何もございませんの。貴方のお力でも。」

「あんたを救ふのは、私ぢやなくて神樣ですよ。ミリアム。」

彼の言葉は妙なひゞきをもつてゐた。何だか機械的に出た聲のやうだつた。それでも彼は、今自分の言つた通りのことを信じてゐた。すつかり彼はさう信じてゐたのだ。たしかに、彼にしろまた他の誰にしろ、凡ての人間は、神の前では無力だ。いやしくも宗教家である以上は、そのことを疑ふ者は一人もない。それはさうなければならないのだ。さうであるのを彼は殘念に思つてゐるのだらうか？　そんな許すべからざる罪を彼は犯したのだ

らうか、その罪は彼女の犯したどの罪よりも最も深い罪だ。突然、恐怖が刃物のやうに彼を突き刺した。彼は神を嫉妬してゐたのだらうか？

「あたしがそんな風に感じだしたら、どうしてもおさへることができないんですの、牧師様、それがあたしは恐ろしいんですの、聖母様でも、あたしをとめて下さることはできないんですわ、あたしは珠數の珠を數へてゐましても、その珠の一つ〳〵が欲望のために生きてきて、あたしの指は情熱のためにむづがゆくなつて來るんですの、あたしは、自分で自分が恥かしくなつて、あたしのアベ・マリアをつぎ〳〵に稱へはじめるんです。それでもあたしの心は鎭まらないで、その言葉の一つ〳〵が、あたしの唇で躍り出しますの、さうするとあたしはもう駄目なんですの、あたしの心は熟く燃え上つて、もの狂ほしくなつて、どうにもおさへることができなくなつて來るんですの、ゆうべも矢つ張り同じやうでしたわ、あたしたちは、客間で坐つてゐました。ジョウとお祖母さんとあたしとで、ジョウは本を讀んでゐました。將來の人間がどんな風になるかつていふやうなことの書いた妙な本を讀んでゐました。あたしは、あたしがこしらへたいと思つてゐる着物の話をお祖母さんにしようとしてゐたんです。部屋の中は退屈で、話をしてゐる中にも、あたしはそは〳〵と落ちつかなくて、何かあたし自身から逃れだすやうなことがしたくてたまらなかつたんです。ジョウは、あたしがいつまでも着物の話ばかりしてるもんだからとき〴〵あたしの方を見て顏をしかめてゐましたわ。あの人はいつもあたしに、カール・マルクスを讀ませたがつてゐるんですのよ。あの人は、自分が社會主義よりいゝものはないと思つてるもんだから、あたしも社會主義を理解しなくちやならないと信じてゐるんです。でも、貴方は社會主義なんてものは罪惡だとおつしやいましたわ

ね、牧師様、勿論あたし、ジョウにはそんなことは言へないんですけれど、だつてあの人は、あたしが宗教を信じてるのを憎んでるんですもの、あたしが懺悔をしに來たなんてことを知つたら、きつとあの人はあたしを殺してしまひますわ。」

アンジェロは、不精無精首をふつた。そして、指をはげしくふつて非難の意味をつけ加へた。

「いや、あの人はそんなことは決してしますまい。ジョセフさんのことをそんなに惡く想像しちやいけません、貴女がほんたうの愛をあの人に捧げたら、きつとあの人もまだ教會へ歸つて來ます。」

アンジェロは、自分の言つたことをほんたうに信ずることができればよいと思つた。ジョセフ・ブラッカウに對する彼の同情は、とき〴〵、殆どセンチメンタルになることがあつた。

「いゝえしますとも牧師様、ジョウは一たん憤つたら恐ろしい惡魔になるんです、いつかあの人が土曜から日曜へかけて、外出してゐた時に、あたしがあの人の小切手にサインをしたといふので、あたしを半殺しにしたことがございますの、それが結婚する前には、さうです、結婚のほんの二週間前に、あの人はあたしに、あの人の金をどうしてもいゝ、小切手にサインをしても、何をしてもかまはないと言つてゐてのことですよ牧師様、それが今はどうでせう、汚ないけちん坊になつちまつて。」

「そりやいけないミリアムさん、ジョセフさんのことをそんな風に言ふのは罪です。貴女は許しを乞はなくちやなりません、でなければ私は貴女を許してあげることはできません。」

「さうでしたわね、まことに申譯ありませんわ牧師様、だけど、ジョウがあんな風だとあたしどうすることもでき

ないんですの、結婚してから二週間こつちといふものは、あの通りなんですもの、御承知でせう委しいことは、前にすつかり申し上げましたから。」

彼女はしばらくの間躊躇して、遠くの方からアンジエロの眼をじつと見つめた。

何故彼は彼女の話を止めて、許しを乞はせるやうにしなかつたのだらう？　こんなに易々と彼女に罰を免かれさせるのは間違ひだつた。彼はまた彼女の聲に惑はされたのだらうか？　それとも彼は彼女のもつと大きな罪を知りたかつたためだらうか？　勿論彼は、彼女の罪を聞いて、それを許すためにもつと話の先が聞きたかつたのだ――と言ふのは、こんなちよつとした疳癪よりもその方がずつと重大だつたからだ。彼は今度こそ彼女にもつと嚴しい懲罰を加へようとするのだらう。

彼は彼女に話をつゞけるやうにせきたてた。

「で、さつき申し上げましたやうに、あたしたちは、そこに坐つてゐたんでございます。そしてあたしは、今にも大きな聲で叫び出したいやうな氣がして、もしジョウが、あたしをつれて出てくれなかつたら、一人で出てしまはうと思つてゐました。ジョウは本が讀みたいんだと言つてゐました。そして、今夜は一晩皆で家にゐなくちやいけないと言ひました。あたしは、あたしの家がどんなに嫌ひかといふことは御存知でせう牧師樣、そしてジョウがアンダーシャツを着て、靴をぬいでそこに坐つてゐるのが、いやで〳〵、むしずが走るくらゐでしたの。とてもあたしには耐へられなかつたんです。とき〴〵何かしなくちや氣が狂つてしまひさうに、感じることがございました。」

アンジエロは、相手の言葉を非難するやうに小指をあげた。

「あたし、ジョウのことを又こんなにいち〳〵何から何まで申し上げちやいけないんだつてことはわかつてますわ牧師樣、でも、矢つ張りあの人は我慢ができないんですの、そして夜ベッドの中で、おくびをしたり、いびきをかいたりしてゐるのを見ると、あたしはきつといつかあの人を殺すにきまつてると思ひますの。」

「ミリアムさん！」

アンジエロの聲はいつになく鋭く力がこもつてゐた。　彼はもう二度とジョセフのことについて、こんなことを聞きたくなかつた。もうこれつきり聞きたくなかつた。既にもう二十ぺんもそのことは聞いてゐたのだ！　彼はジョセフのことを、彼女にこんな風に言はせておくことができなかつた……特にこの懺悔室の中では、だが、彼はきつと厭な人間に相違ない。それでも、どんなことがあつても彼等二人を、もつと仲よく結びつけてやるのが彼の義務だつた。要するに、神が結びつけた者を、彼がひき離すことはできなかつた。それでも、ジョセフはもつと思ひやりがあつてもいゝ筈だ。しかし彼は彼女を叱責した。彼は殆ど忘れてしまつてゐた。

「ミリアム、貴女はジョセフさんのことをそんな風に言つてはなりません。」

何故彼は貴女の御主人と言ふことができなかつたんだらう？　何故彼はいつも御主人と言はないでジョセフさんなんて言ふのだらう？　彼は冷たい眼で彼女を見た。それは慘酷な眼で、いくらか侮蔑も含まれてゐた。彼女は、彼が知つてゐる罪人の中で、最もひどい罪人の一人だ。それに彼女は冷酷だつた……その點には疑ひの餘地がなかつた。かういふ女が、この世の立派なものをどんなに澤山汚してしまつたか知れはしない。だが神は彼女

よりも、もつと惡い者でも救つた……多分救つたんだらう。

しかし彼は、これ以上彼女に優しくしてやることはできなかつた。それでゐて彼は、矢つ張り彼女に話をつゞけさせようとした……そしてその後で……

「こんな恐ろしいことを貴方樣に申し上げちやいけないんだつてことは、あたしわかつてますわ牧師樣、貴方はあたしを許して下さらなくちやならないんですもの、でも、もし貴方は、あたしがどんなに苦しんだかつてことを知つて下すつたら、きつと理解して下さると思ひますわ。」

彼女は、ほんたうに敎會を愛するやうになつてはゐなかつたのだ。彼女の懺悔は……だが彼女は、今ほんたうに苦しんだ人のやうに見えた、おゝ、彼女は苦しんだのだ！　どんなにひどく苦しんだことだらう！　一體彼は、彼女を氣の毒になつたんだらうか、この神を知らない罪人を？　しかし彼女は神を知らないことはなかつた。いま彼女の顏を見るがいゝ、それは涙で淸められてゐる。彼女の眼は……さうだ、彼女の眼は、彼女の罪を悲しくも證明してゐる……だが彼は彼女の言葉を一語も聞きのがしてはならない……

「で、あたしはもう我慢ができませんでしたの牧師樣、あたしはジョウに短刀を突き刺してやらうと想像してゐました。だけどあの人は相變らず、馬鹿げた本を讀みつゞけてゐました。あたしは默つてあの人に唾をひつかけてやりました。でもあの人は眼を上げさへもしませんでした。氣の毒なお祖母さんはあたしの唇の音を聞いて、何をしたんだと問ふやうにあたしの方を見ました。お祖母さんが盲目だつたのがどんなにその時嬉しかつたか牧師樣、貴方にはおわかりにならないでせう。あたしはほんたうにその時、あたしのしたことを恥ぢました。あたし

はあんなことをしちやいけなかつたんだつてことは、よくわかつてゐます。貴方のお聲さへ聞けたら、だけど貴方はそこにゐらつしやらなかつたでせう。それであたしはたゞジョウが憎らしい〳〵つてことだけしか考へることができませんでしたの。だけど、あたしに自分を恥かしく思はせたのは、氣の毒なお祖母さんでした。あたし、爭ひが今にも始まることがわかつてましたので、お祖母さんの腕をとつてベッドへつれて行つてあげようと思つて立ち上りました。恰度その時ですわ、ベルが鳴つたのは、おゝ牧師樣、何といふベルでせう！　まるで天國のひゞきのやうでしたわ、誰だかわかりませんでしたけれど、そんなことはかまひませんでした。とにかく誰かだつたんです。何かだつたんです。あたしは、自分で何をしてゐるかもわからないうちに、手を叩きました。既にもうお祖母さんの腕を離して、玄關へ驅けつけました。ジョウはあたしがはしやいでゐるので苛々してゐました。『何をそんなに大騷ぎしてゐるんだ？』とあの人は叫びました。お祖母さんは何事が起つたかもわからずに部屋のまん中に立つてゐました。この數秒間の間にあたしの頭の中を、無數のあゝではないか、かうではないかといふ考へが通りすぎました。あたしは、クリスマスの日に、サンタ・クロースが、どんな立派なお土產を持つて來たかと思つて、客間へ驅けつける子供よりももつと幸福に感じました。あたしは、誰か來てくれたことがわかつた嬉しさを、もう一度味ふために玄關へ行く中途でちよつと立ち止りました。あたしはドアのノッブを、指で握らうとしました。そしてほんのちよいと指先きをあてゝ、それを廻さないでゐました。ノッブはあたしの手の中で、滑らかに心地よい感じを與へました。あたしがどんな氣がしてゐたかつてことがおわかりになりまして牧師樣。」

「わかりますよミリアム、」とアンジエロは彼女の顏から眼を移さずに言つた。「だが、貴女はそんなに委しいこ

とをお話しになる必要はありませんよ。尤もお話しになつて貴女の魂の重荷が輕くなるんなら別ですけれど。」

彼は、彼女に果しなく話させておくことはできなかつた。彼女のおしやべりは、彼女の注意を枝葉の方へ向けて、肝腎の行爲がどれなのかわからなくして、その罪を十分に悟らせないやうにしてしまふことが屢々あつた。彼女は選擇することができなかつた。彼女は何もかも話さねば氣がすまなかつた。だが、それは、彼女がこれまでにいろんな罪を犯してゐるにも拘はらず、彼女の心底に眞面目な氣持ちのあるせゐかも知れなかつた。彼女が話してゐる時、彼は彼女の心の中にこの眞面目さが燃えてゐるのを、たしかめた。

「それが誰だつたとお思ひになつて牧師樣、こんなに何ヶ月も〳〵來ないでゐて？」

彼は、彼女の話しぶりが氣にいらなかつた。それはあまりに厚顏ましくて、無禮とまでは言へないにしても、お轉婆な、いたづら好きな話しぶりであつた。

彼女は、既に彼に對してあまり自由な態度をとりすぎてゐたので、早速それを抑制しなければならなかつたのだ。だが彼はとき〴〵彼女に無制限にその自由を許してゐたではないか？　さういふ風にしておけば彼女の魂に一層近く觸れることができるだらうと彼はほんたうに信じてゐたのだ……彼女の假面を見破ることができると信じてゐたのだ。彼は彼女がいつも假面を被つてゐることを信じてゐた。初めて彼女が罪を懺悔しにやつて來た時ですら、幾分假面をつけてゐたと信じてゐた。だから、彼女の態度や言葉が自由になりすぎたのは、或點まで彼に責任があるのかも知れないのだ。彼は、彼女に對する態度を變へなければならない。彼女は、神聖な僧職を輕んじてはならないのだ。だがさうなると彼女は、自分の中へとぢこもつて、彼は彼女の魂を理解することもでき

ねば、救ふこともできなくなるかも知れない。さうなればもつと惡くなる……だが……

彼は顏をしかめたが、一言も言はなかつた。

「ジャック・ラーモンだつたんですよ。あたし彼を見ると、いきなり彼の兩腕の中へ飛びついてやりましたの、でも、その時あたしは、ジョウがすぐ後にゐることを思ひ出しました。ジョウもあたしと同じやうにジャックに逢ふのが嬉しかつたんですわ、尤も逢ひたい理由は違つてたんですけれど。ジャックは、つい最近ロシアから歸つて來たばかりだつたもんですから、ジョウはロシアの情勢を聞きたがつてゐたんですの、そりやもう何もかも情勢、情勢なんですのよ、牧師樣、あたし、情勢つて言葉ばつかり聞かされてゐるんですのよ。ストライクの情勢だの、炭坑夫の情勢だの、被服工業の情勢だの、あの情勢、この情勢つて、貴方どうお考へになつて？　何もかも情勢なんです。それでゐて二人ともあたしの情勢のことは考へてくれたことはないんです。あの人たちの書物には、そのことはちつとも書いてないんです。ところでジャックはそこに坐つて、一時間もジョウに話してゐました。初めからしまひまでロシアの情勢のことばかり、そんな話を聞いてゐたらきつと厭になつちやつたでせうけれど、あたし一言も聞いてなんかゐませんでしたわ。あたしはたゞそこに坐つて、ジョウがあたしの方を見てゐない時には、ジャックの顏ばつかりじろ〳〵見てゐました。いゝえ、そんな風ぢやなかつたんですわ牧師樣！　初めは、何も他のことを考へてゐなかつたものですから、さうでしたの、何もかもが恐ろしくて、だけど、ジャックをじつと見てゐるうちに、突然貴方のお言葉を思ひ出しましたの、すると貴方のお顏が、あたしの顏と、ジャックの顏との間へにゆつと出て來ました。貴方はだん〳〵背が高くなつて、しまひには貴方のお姿が見えないくらゐになつて來ました。貴

方のお足が竹馬に乘つてるやうになりました。たゞ貴方の黑いお召物だけが、貴方が見えなくなつてからも空中にぶら下つてゐるやうな氣がしました。全く不思議でしたわ、あたし、しばらくの間どうしていゝかわからなくなりましたが、やがて自分でも氣がつかずに、アベ・マリアの名を稱へはじめました。そして、それと同時に、あたしの指の爪を嚙んでゐました。あたし、きつと馬鹿のやうに見えたに違ひありませんわ、ジャックがあたしを見て、妙な樣子をしてゐるなあと言ひたさうに笑つてゐましたもの、あたし指の爪を嚙むことはやめましたけれど、アベ・マリアだけはつゞけてゐようと思ひましたの、でも、あたしの眼は一刻もジャックから離れませんので、しばらくたつとアベ・マリアもやめちやひました。それでもあたし貴方のおつしやつた言葉は忘れませんでした。そして聖母樣のことを思ひつゞけてゐました。あたし、ジャックの顏を見まいとして、どんなに骨を折つたか知れませんわ。わざと眼をつぶつて、眠さうな樣子をしても見ましたの牧師樣、あたしは兩手を眼にあてゝ、指で眼尻を痛くなるまでこすりました。でも、まだあたしの眼はジャックを見たがるんですの、ジャックはほんとに男ぶりがよくて、身體は丈夫で、優しうございましたわ、牧師樣、けれどもあたしはまだ斷念しませんでした。あたしは立ち上つて浴室へ水を飲みにまゐりました。さうすれば一人つきりになつて、すぐそばにあたしを惹きつけるジャックの顏を見ないでゐることができると思つたものですから、あたしは、すくなくも十分間程、自分で自分と戰ひながらそこにゐましたの、あたしは彼を見てはならないんだと言ひました。あたしは彼を見ないやうにしなければならない、あたしは寢室へ行つてやすまうと決心しました。でも、さうするためには、まづおやすみの挨拶をして來なくちやなりません。あたしは、それがあたしにできる一番いゝ方法だと決心しました。あたしはジ

ヤックがあまり强くとめなかつたらきつとさうしたに違ひありませんわ牧師樣、それはもうあたしがこゝで脆いた。けれど、手をのばして、グッドナイトを言はうとした時、あたしの眼はばつたりジャックの眼と合つてしまひましたの、それでもうあたしはいけなくなつちまつたんです。ジャックがその時、あたしをとめなくてもあたしはどつちみち行くことはできなかつたと思ひますわ。それに勿論ジョウもあたしをとめましたの、あの人はあの人の友達がゐる間は、その場に殘つてゐるのがあたしの義務だと思つてゐるんです。あの人があたしと結婚をした、たつた一つの理由は、あたしが美しかつたからなんですの、それであの人はあたしを誰にでもかれにでも見せたがつてゐるんです。あの人が誰かにあたしを紹介する時には、いつでもあの人のしよぼ〳〵した小さい眼が、どうですいゝ女になつたでせう、と言つてゐるんです。あたしはあの人が大嫌ひです！　あの人がそんな……まあどう言つていゝかわかりませんわ！　とにかくそれから、あたしは何にも他のことは手につきませんでした。あたしはもはや戰ふこともできなくなりました。何事か起つて來て、あたしを戰ふことのできないやうにさしてしまつたんです。その何事かつていふものゝ正體を貴方がおわかりになつて下されば、牧師樣、だけど貴方は牧師樣でしたわね、貴方は純潔な方でゐらつしやるんだから、そんなことはおわかりにならないでせうけれど――だけどそれがわかつて下さりさへしたら、」

彼は、彼女に人間といふものは凡て、牧師でも牧師でない者でも、惡に對して戰はなくちやならないんだといふことを告げることができたゞらうか。彼が强いのは、靑年の時分から戰つて來なければならなかつた夥しい惡

の力に對する驚くべき抵抗力のためだといふことを、言つて聞かせることができたゞらうか。惡德と戰つて、きたへられた美德が、ほんたうの美德であり、戰ひを知らない善は、ちつともほんたうの善ではないのだといふことを言つて聞かせることができたゞらうか。

だが、彼女はそんなことは理解することができなかつた。さういふことは彼女の齒に合はなかつた。さういふ話はたゞ彼女を混亂させるだけで、むづかしい言葉で混亂させられると、彼女の信仰の一部分が失はれるかも知れないのだ。

「それであたし、何分間か、そこにぼうつとして坐つてましたの牧師樣、身體は熱くなつて、頰は赤くそまり、手はどうしてもじつとしてゐませんでした。あたしは自分で自分を抑へつけようとしましたが、それは駄目でございました。かういふ時に、人がどんな風になるかといふことは、今考へても恐ろしうございます。あたしは、情慾のためにまるで虎のやうになつちまひましたの、牧師樣、あたしの眼は今にもジャックを呑みさうになりました。そしてしばらくするとジャックもそのことに氣がついたのでした。牧師樣、あたしは貴方にあんなにたび〳〵說き聞かされてゐながら、又このやうな懺悔を致しますのは、ほんとに恥かしいんですけれど、あたしジャックがそれに氣がついてくれたので、嬉しうございましたわ、あたしの方からは氣がついてほしかつたんですの、あたし、もし氣がついてくれなかつたら、どんなことをしたかわかりませんわ。あの人にあたしをちよつと見てもらはなくちやならなかつたのです。あたしは欲望で燃えてゐました、もの狂ほしくなつてゐました。自分で何をしてゐたかわからないんでございますよ。牧師樣、ほんたうにわからなかつたのです。ジョウは相變らずしやべりつ

づけてゐまして、何事が起つてるのか知りませんでした。あの人はソヴェット・ロシアの婦人がどうなつてゐるかといふことを、興味をもつて論じてゐました。それにもしあの人が、ジャックがあたしを見てゐるのに氣がついたところで、あの人は、ジャックが精神的にあたしに惚れ〳〵してゐるのだらうと思つて、多分それを誇りに思つてたかも知れませんわ。牧師樣、あたしはまだ何も起らないうちから、既にもうあたしの眼で、ほんたうはジャックと罪を犯してゐたに違ひないと信じてゐますわ。あたしの申し上げることを信じて下さるかどうかわかりませんが、あたしたちは、お互の眼で、お互に身體を抱き合つてゐたも同じですわ。あたしにはそのことがわかりましたの。話をつゞけてゐるのがあの人には辛かつたんです。あの人は、自分の席を窓のそばの椅子へ變へて、あまりジョウに氣づかれないやうにあたしの方を見ることができるやうにしました、あたしはそれから何事が起るのかわかりませんでした。あたしは情慾で氣が狂つてゐました。自分が自分でなかつたのです。誰か他の人になつてゐたのです。全く今になつてみると、自分で恥かしくなりますわ、どうしてあたしはそんな風になつたのでせう牧師樣！」

彼女がアンジェロを見た眼には、何かしら恐怖の色がきざまれてゐた。それはきら〳〵光つてゐたにも拘はらず、その表情に後悔の色がまじつてゐた。アンジェロは彼女の懺悔にあまり熱心に聽き入つてゐたゝめ、その時彼女をたしなめることを忘れてゐた。彼は、彼女になほも話をつゞけてほしいと思つた。さうすれば、彼女の罪の深さが十分にわかつて、どの位嚴しい懲罰を加へたらよいか決めることができると思つたからだ。

彼は何にも言はないで、彼女に懺悔をしまひまで話すやうに手眞似でうながした。

「でも今になつてそんなことをお訊ねしたつて何にもなりませんわ。どうにも仕方がないんですもの、今ならできますけれど、その時はどうにもできなかつたんですもの！　あたしは、どうしたつて言ふんでせう。わざと膝を組み合せて坐つて、あたしの足の肌をジャックに見せて、喜ばせようとしてゐたんです。そればかりぢやありません。ほんたうに今になつてみると、お恥かしいですわ牧師様、自分で自分が呪はしくなつて來ますわ。その時何があたしの心の中へはひりこんで來たのでせう？　罪ですつて、惡魔ですつて、さうですわ、貴方のお唇でそれが讀めますわ牧師様、で、あたしは强くなつて、又清らかになつて、貴方にそれを懺悔することができますのよ！　あたしは、貴方にすつかりお話しなかつたら生きてはゐられませんわ。まあ、なんてあたしは罪人なんでせう！　あたしは靴下止めを締めなほしたんですの牧師様、さうすれば××××××、あたしの足をもつとよくジャックに見せることができると思つたものですから、おゝほんとにあたしは今になつてみると、あたしを憎みますわ。ジャックのあたしの方を見る眼は、殆ど燃えるやうでした。あたしたちは二人とも、これ以上あまり長いこと我慢してゐることはできないことが、あたしにわかりました。しかもその間中、ジョウはソヴェット・ロシアの新道德のことを話しつゞけてゐたんですのよ牧師様、滑稽ぢやありませんか、あの人はそんな馬鹿なんです。ジャックもあたしも、あの人にちつとも注意を拂つちやゐなかつたんです。たゞ二人の顏色や、そぶりをあの人に見られないやうにすることのほかは、あたしはたゞもう何かしなくちやゐられなかつたんです。牧師様、でないとその部屋の中で、×××××になつて、ジャックがもう×××なくなつて狂氣のやうにあたしに飛びかゝつて來るまで、すつかり×××××しまつたでせうと思ひますわ。かういふ時のあたしの感じかたは、全く恐ろし

うございますわ牧師様、こんな時にあたしは、ほんとに人殺しだつてやり兼ねませんの。あたしほんとに恥かしくなりますわ、でもどうにも仕様がないんですものね牧師様、あゝいふ時にあたしは狂人みたいです。もしジャックがあたしに飛びついて來て、ジョウがあたしたちの抱擁を邪魔しようとしたら、あたしはきつとジョウの×××××××やつたと思ひますわ。」

「ミリアム」――アンジェロの聲は非常に遠方から聞こえて來るやうに思はれた。それは實に氣の拔けた聲で、氣の拔けた反響をした。彼は、どうしてそんな風に響くのかと自分で怪しんだ。それはしよつちゆう見なれてゐる人が、ついぞ聞きなれない聲を出した時のやうだつた。それが自分の聲だとはどうしても思へなかつた。それにしても何故彼は彼女の名前を口にしたのだらう？　さうだ、彼はその邊で彼女をとめて、そんなに感情をたかぶらせないやうに、警告するのが當然だと感じたのだ。だがこれは、狂人の女だ、全くさうだ。で、もしこの女の狂氣を救はうと思へば、彼女を無理に默らせるのはよくない。さうだ。彼は、彼女に後をつゞけさせることにした。

彼女はちよつと話をとめて、彼の眼を見た。彼の熱心に注意してゐる眼は、彼の聲を裏切つた。

「牧師様」彼女は、大きく息をしてゆつくりと言つた。「あたし、かういふことになつたのは、ほんとに悲しうございますわ。何べんも同じことを申し上げるやうですけれど、全く、悲しうございますわ。ですけれど、その時は、さうせずにゐるくらゐなら、死んでしまつたと思ひますわ。あたしは皆でアイスクリームを食べたいから探して來て頂戴と言つて、ジョウを椅子から立たせましたの、近所の店はもう皆しまつてゐるから、アイスクリーム

を買ふためには、四つも先の通りまで行かなくちやならないことをあたしは知つてたのでございます。それからあたしはまたコーヒーも飲みたいとねだりましたの。それは他の店へ行かなくちやないので、そのために、又時間が長びくといふことが、あたしにはわかつてゐたんです。それからついでにお菓子も買つて來るやうに、あたしはすゝめたんですの、もつと他の物も買つて來て貰ふやうに頼みたかつたんですけれど、そんなことをしては怪しまれるかも知れないと思つて、やめましたの、なんて慘酷なやり方でせう牧師樣、でもあたしは、一秒間の中にすつかりそれを計畫したんですのよ。こんなことをしてゐるのに、あの人があたしの眼がどちらへ踊つてたかを氣がつかなかつたのは不思議ですわ、少しでもあの人が物わかりのいゝ人なら、きつと氣がついてゐたに違ひありませんわ。あの人の心は、たゞ本にばかり向つてゐたんです。それつきりなんです。たつた一つ、あたしが心配したのは、もしかするとお祖母さんが眼を醒まして、あたしかジョウかを探しに、のこ〳〵歩いて來やしないかといふことでした。あたしたちは靜かにしてゐなくちやなりませんでした。ジョウがドアを閉めると、あたしはすぐに、それに鍵をかけてジャックの方へ向きなほりました。あたしは動物かなんぞのやうに、彼を×××しまひたいやうな氣がしました。あたしの齒で彼の身體をひき裂いてやりたくなりました。もし、彼の耳まで口が屆くなら、それを××××んで、すつかり×××になつて、×××と頭から下るやうにしてやりたいやうな氣がしました。ジャックがあたしに飛びついて來なかつたのが、腹立たしくなりました。彼は恐れてゐるのだらうか、と、あたしは吾と自分に問ひました。彼にはわからないんだらうか？　あたしはちらりと彼を見ました。女優のやうに首を横へまげて、イヴの眼のやうに恥かしさうな眼をして、一聲叫びました。『ジャック』それだけで十分でした。あ

たしは彼が立つたまゝ慄へてゐるのを見ることができました。彼はまだ、多分そんなことをしてはならないと思つてゐたのでせう。あたしの考へでは、ジョウの友達である、といふ考へがあの人を愚圖々々さしたんだと思ひますわ。ですけれど、あたしが、彼の××××××時には、彼もあたしと同じやうに狂氣のやうになつてゐました。彼はたゞ、あたしを×けんばかりに自分の身體に××××ました。」

「おゝミリアム！」アンジエロの叫びは、自分に對する驚きの叫びだつた。彼は、彼女が懺悔をする間中、かうした言葉を感じてはゐたのだが、それを口に出すつもりはなかつた。それは、知らず識らず、獨りでに、彼の唇から洩れて出たのであつた。彼は彼女の話に、あまりに強く動かされて、自分の聲を制する力を失つてしまつてゐたのだ。彼女が彼に懺悔をするたびに、彼は、罪といふものゝ大きな力が、だん〳〵とわかつて來た。彼女は、凡ての女への一つの教訓だつた。彼は罪といふものが、そんなに誘惑的で、そんなに人間の魂を毀ち得るものだといふことを知らなかつた。彼は、彼女にその情慾の動きを細大洩らさずに、罪といふものを描いてもらつて、罪の深さと大きさとを、十分に理會したいと思つたのであつた。他の牧師たちが、たいていの場合にするやうに、また彼自身もミリアムの事件に直面するまでは、大部分やつて來たやうに、駝鳥のロマンテイシズムの仲間入りをするのは賢明ではない。人間の魂の中にある惡の力を十分に理解するためには、人間の邪惡の深淵を知らなくてはならない。神の人は、罪からかくれてはならない。それに直面しなくてはならない。十分に身を武裝してそれを打ち破り、それを魂から殲滅しなければならない。

「十分間ですつかりすんでしまひましたの、牧師樣。どうぞゆるして下さいませ、お願ひいたします！　それが

すんでしまふと、あたしは別人のやうになりました。驚異の世界に生きてゐました。何もかもが、輝かしく躍つてゐるのでございます。そしてあたしの心臟は、あたしの身中で、不思議な曲を奏でゝ鼓動しました。だがそれから何時間かたつと、あたしは、また悲しくなつて、こんな罪人である自分がいとはしくなつてまゐりました。あたしのしたことが、ほんたうに恥かしくなつて、あたしの心の中の邪惡が、憎らしくなつて來たのは、やつと今朝になつてからでございました。ゆうべは一晩中ジョウが歸つて來てからも、そしてジャックが行つた後で、××の中で××××××××るやうに、何べんもすゝめた後ですらも、あたしはあの物狂ほしい××の怪しい十分間を思ひめぐらしてゐました。ジャックの腕、あゝあの人は、あの人の魂の中へとぢこめられてゐた力が、すつかり火か何かのために放たれたかのやうにはげしくあたしの方へ、さし伸しました。あたしはあの時なら、死んでも本望でございました——そんな大それた罪を犯すなんて、どんなに恐ろしいことだつたでせう！　だけどその時はあたしは、そんなことは氣にもとめてゐませんでした。だからあたしはそれが懺悔したくなつたのですわ牧師樣、さうすれば、貴方がすつかり理解して下すつて、許して下さることができるだらうと思つたものですから、あたしはジャックに呼び醒まされて、初めて生氣づいたのでした。ベッドの上のカバーをのばしたり、ジョウが歸つて來るまでに、あたしの顏を冷たい水で洗つてくれたりしたのも、皆ジャックでした。あたしには何にもできなかつたのです。あたしには何もしたくなかつたんです。動くのも厭だつたんです。いつまでもその場にじつとしてゐたかつたんです。ジョウが、その中に歸つて來るのが、あたしには憎らしくなりました。それでもあたしは、すつかり何事にも無感覺になつちまつて、ジョウをひどく憎む氣力さへありませんでした。天井は見なれない

色をした天の渦卷のやうでした。壁にかけてある油繪の人間が、皆生きて、夢の中の人のやうに動きまはりました。あたしは指をのばして、その人たちに觸つてみることができるやうな氣がしました。それ程にも生きてゐたんです。何故ジャックは、ものも言はないで仇かなんぞのやうにつつ立つてゐたんでせう？　あたしは彼をじつと見ました。そして、貴方には想像ができまして牧師樣、あたしは彼があたしに立ち上つてくれと頼みながら、そは〳〵してそこに立つてゐるのを見て、殆ど彼を輕蔑したいやうな氣持ちになりました。彼はジョウが歸つて來て、あたしたちを見つけやしないかと、それを恐れてゐたんです。あたしは彼を嘲つてやりました。何のかまふことがあるものですか？　今度はジャックも厭で〳〵たまらなくなりました。あたしは彼にも見きりをつけてしまひました。彼を見ても何の氣も起らなくなりました。もう彼のことなんかどうでもよくなりました。あたしは、あたし自身の肉體と、この裸體、その中に埋もれてゐる愛と美とを眺めるのが好きになりました。おゝ、牧師樣、あたしはその時、あたしの心に起つた變化を今思ひ出しますと、あれがほんとにあたしだつたのかどうか、わからなくなるくらゐでございます。あたしのやうな女でも救はれるのでございませうか？　あたしのやうな女でも罪から清められるのでございませうか？」

「貴女は信仰をもたなくちやなりません。ミリアム」アンジェロは靜かなふるへ聲で言つた。彼はすくなくも後で彼女がジャックを嘲つたのを喜んでゐた。それはよい兆候であつた。ジャックといふ男は、こんな罪を犯すくらゐだからきつと輕蔑すべき人間に違ひない。だが、彼をさういふ風にしたのは彼女だつたのだ。しかし彼は、彼女に對して戰ふべきであつたのだ。男は何故惡に誘惑される時に、それを征服することを學ばないのだらうか？

だが、イヴはアダムを誘惑して、アダムがそれに陷つてしまつた。女は惡の化身なのだ。それなら何故彼はジャックが誘惑に陷つたのをそんなに憎まねばならぬだらうか？　だが、彼はジャックを憎んだのではない。ジャックの弱さを憎んだのだ。何故彼はジャックと比べて別にいゝところのないジョウに對して、こんなに同情を感じたのだらうか？　何故彼は、彼女の行爲にこんなに苦痛を感じたのだらうか？　何故、この新らしい罪が、他の罪よりももつと彼に苦痛を與へたのだらうか？　彼女は、前にもこのやうな罪を、何百とは言はないまでも、何十も彼に懺悔したではないか？　彼女はいつも、男に對して情慾を燃やしてゐたではないか？　しかも新らしい男に對して、見も知らぬ男に對して？　彼は、どんなに強い心でも傷つけるに足る程の刑罰で彼女を罰したにも拘はらず、その中の少しだつて、彼女が實行したことがあるだらうか？　彼は、そんなにしやあ〳〵として、彼の命令を破る彼女の懺悔を聞くのを、もはや拒絶してしまふのが當然ではないか？　この上彼女を改心させようと努め、たつて、何の役に立つだらう？　彼女はしよつちゆう同じやうな罪を繰り返してゐながら、何故今だに懺悔にやつて來るのだらうか？　彼女は恥といふものを全く知らないのだらうか！　だが待てよ、こんな考へ方は、人間の考へ方だ。神に仕へる牧師の考へ方ぢやない。彼女は、神が何でも許して下さる力があることを、知つてゐるから來るのだ。どんなに、惡い罪でも許して下さることを知つてゐるから來るのだ。神の惠みの中では、どんな毒でも清められるといふことを知つてゐるからやつて來るんだ。だが、彼は彼女に、情慾は貞節でなくてはいけないと語つた。その時には、そのことを彼女に忠告することさへも、どういふわけか彼には心苦しかつた。彼は、彼女に、彼女がどんなに彼を嫌つてゐても、彼女の思ひを、法律で決められた、そして神に許された彼女の夫に

向けるやうにすゝめた。彼女は、約束をして自分で決心をした他に、しよつちゆうそのことを思ひ出させるやうな、いろ〳〵な、悔い改めの苦行さへもした。それでゐて、矢つ張り前と同じやうに、恥知らずにそれを破つたのだ。

彼が昨夜決心したことは、大僧正のやうな勇氣を要する決心だつた。それだのに彼は今彼女を見、彼女の話を聞いてしまつた後でも、それを言ひ出すのを躊躇した。それは、最後の切り札のやうなものであつた。もしそれが失敗したら、後にはたゞ絶望が殘るばかりだ。彼はそれを認めることは厭だつたが、しかし、それはさうなつた。彼は一體どういふつもりなんだらう。今度罪を犯したら、神が彼女を許さないといふつもりなんだらうか？　それは冒瀆だ。彼は一體何をしてゐたんだらうか？　魂の救ひに、彼の一個人の感情をさしはさんでゐたのではないか？　彼は、神の地位を、僭奪しようとしてゐたのではないか？　彼は大いそぎで十字を切つた。そして、彼の罪の許しを請うた。それでもその考へは彼の心を去らなかつた。まだ彼の前に跪いて、彼の裁きと、許しの言葉を待つてゐる彼女をじつと見てゐると、その考へが彼につきまとつた。その晩にでも、機會さへ來れば、同じやうな罪を犯すにきまつてゐることを知つてゐながら、その人を許すなんてことは、まるで道化芝居のやうであつた。だが、彼はそんなことを言つてはならなかつた。彼女は罪を悔い改めた人として、彼のところへやつて來たのだ。彼女は、苦しみ疲れ、悔い悲しめる胸を、彼のところへ持つて來たのだ。だが、實際さうなんだらうか？　彼女は僞善者ではないか？　しかしそれなら何故、彼女は懺悔室へやつて來るのだらう？　たしかに、彼女は悔い悲しんでゐないのならやつて來ない筈ではないか？　彼を懺悔室へひき寄せたのは、たゞ〳〵神の清

め、許す惠みの力なのだ。たしかにそれ以外のものである筈はない。他に何が彼女を此處へひき寄せて來る力があるだらうか？

だが、ことによると、彼女は、許して貰へるといふことを、確信してゐるために、こんなに何回も〳〵罪を犯すのぢやなからうか？　いやそれはほんたうではない。もし彼女がすがりつく教會がなかつたなら、彼女はもつともつと惡くなつて、彼女の心の中は、邪惡ばかりになつてゐたであらう。今ではすくなくも彼女は、自分でしたことを憎んでゐる。彼女の心の中にある何かしら尊いもの、宗教から生れた美しい靈の力が、彼女を邪惡な欲望に對して戰はせたのだ。もし彼が彼女を救ふことができたら！　もし彼の力で……彼だつて、一體彼といふのは、どういふつもりで彼は言つてゐるのだらう？　いかなる人間も彼女を救ふことはできないのだ。救ふことのできるのは神のみだ。彼女はたゞ神と聖母との前においてのみ裁かれるのだ。

さうだ、彼は彼女にそれを說きすゝめようとしてゐるのだ。それが殘された唯一の望みだ。彼女はこの一つの決心によつて導かれなくちやならない。彼女はその實行に身を捧げなくちやならない。

「ミリアム」アンジエロは彼の手で彼女の顎を持ち上げながら言つた。そして病的な熱心さをもつてじつと彼女の眼を見つめた。「貴女に殘されてゐる唯一の苦行は、完全に自己を否認することです。貴女は、絕對的な制慾によつて、貴女自身を征服しなくちやなりません。」

アンジエロは自分の口から出る一語、一語に自分が强くなつて行くやうな氣がした。彼は前の晩に自分が決心したことを、現在口に出して言つたゝめに、以前のやうな不思議な力が彼に歸つて來るのを感じた。彼は、彼の

人格の潔白な信念の力で、彼女を神の道へ否應なしにつれて行つた。そして、彼女の眼をじつと見つめて、彼の言葉が彼女の肉の中へ浸み込んで行くのを見た時、たしかに成功したと思つた。

彼は一時間も彼女と話をしてゐる中に、自分が、自分の言葉の中に生きるやうになつた。そして、彼の言葉が、彼女の心の中にも生きて來るやうな氣がした。ときゞ〳〵彼女は、彼が不思議なことや、思ひがけない災ひを告げて、戒めるのを聞きながら、殆ど氣絕しさうになつた。彼の怒りがはげしく燃え上るのは、正に美觀であつた。彼は魂の中にある、ありと凡ゆる立派なもの、珍らしいものに挑戰した。彼は恐ろしいぞつとするやうなものゝ姿を呼び起し、それから又自分で呼び起した恐怖を鎭めるやうなものの姿を呼び起した。彼は狂うた幻にとりつかれた豫言者のやうであつた。

「貴女は、貴女の肉體を二度と男に觸れさしてはなりません。何日も、何週間も、おそらく何年間も、さうすることによつてのみ、貴女は、底の底まで淸められるのです。ミリアム、貴女は處女のやうに罪のない者にならなくちやなりません。貴女は、貴女の肉體を支配して、それを神聖と純潔との道具になるやうにすることを學ばなければなりません。貴女は絕えず、さういふ不思議なことをする力が、天から貴女の身に降りて來るやうに祈らなければなりません。貴女は罪あるものを凡て否認しなければなりません。罪といふ考へすらも厭になるやうにしなくちやなりません。貴女は神聖な決意をもつて、朝から晩まで絕えず罪と戰はねばなりません。決して氣をゆるめてはなりません。でないと惡の力が、知らず〳〵の中に貴女の心の中へはひつて來て、貴女の決心を覆がへしてしまひます。神樣はこの戰ひによつて、貴女を强くして下さるでせう。神樣は、貴女が、貴女の心の中へ、

神樣をとり入れさへすれば、貴女を神聖な生き者にして下さるでせう。貴女は妥協することはできません。妥協してはなりません。ミリアム、神との妥協といふことはあり得ないのです。貴女はすつかり神のものになるか、でなければ神の外へ出るかです。貴女はすつかり罪を退けなくちやなりません。そして貴女は、貴女の身體を神聖な殿堂にして、その中へ下品な、獸的な、肉感的なものが、侵入して來ないやうに、することによつてのみ、それができるのです。貴女の肉體は、降つたばかりの雪のやうに白くて、汚れのないやうにならなくちやいけません。貴女の魂は日光のやうに美しくて、天使の息吹きのやうに清らかにならなくちやなりません。」

彼の顏は、彼が話してゐる時に、彼女の顏のそばへ寄つた。そして彼は、彼女の身體が軟かく、殆どそれとわからないくらゐに、だん〳〵氣が遠くなつて、深い無我の狀態におちて行くのを感じた。彼が痩せた角張つた、殆ど死人のやうな指を上げた時に、その指は優しく、極く優しく、彼女の既に閉ぢかゝつてゐる瞼の上を撫でるやうに見えた。そして彼は、この想像の國で、何か別世界のものをさはつてゐるやうな氣がした。彼女は聖靈のやうに美しい、この世のものと思はれぬものゝやうになつた。

それから何時間か經つて、彼女が行つてしまつた後でも、彼は、彼女が霧の中に包まれて彼の前に跪いてゐるのを見た。それは人間の姿をした、神々しいもの、彼の言葉によつて罪人から聖者になつたものゝ姿であつた。

三

それから數日間、アンジエロは、この幻を抱いて、一人で生きてゐた。彼はありふれた日常の事柄や、たゞ通

り一遍の儀式的な仕事に煩はされないために、病氣だと佯つてゐた。彼は全く獨りぼつちでゐたかつた。彼はしづかに、無言で、言葉には言へないやうな天上の思ひにあくがれてゐた。

彼は、幻想の中で、ミリアムが、すつかり一變した生活を瞑のあたり生きてゐるのを見た。彼女の古い自己は、その最後の姿と名殘とをふりすてゝしまつた。彼女は純潔無垢の權化になつた。彼女は罪のとゞかぬところにゐた。彼女の肉體は、その醉のやうに、柔く、やさしく、美しくなつた。まことに、彼女は天使の化身だつた。

アンジエロは、三日間、食もとらず、水も飲まなかつた。

數日の間、彼は、雲のやうな夢の世界を爪先立ちで歩きまはつた。

だが、そのうちに、日が重つて週となり、週が重なつて一ヶ月となるにつれて、幻は次第に褪せて恐れにかはつて來た。彼はもはや彼女が神々しい姿をして、彼の前に跪いてゐるのを見ることができなくなつた。彼はもはや、有頂天の靈感を與へる彼女の姿を感じることができなくなつた。それでも彼女はまだ歸つて來なかつた。そして、それは良い兆候であつたのだ。過去に於いて、彼女が歸つて來ることは、いつでも、彼女が罪に歸つたことを意味してゐた。それにも拘らず、彼は、彼女がもう一度歸つて、新しい生涯にはひつたことをたしかめさせてほしいと自分が考へてゐるのだと信じはじめた。彼は、魂を入れかへて、彼の理想に身をさゝげてゐる彼女が見たかつた。彼女のさういふ姿を見るまでは、彼は、不安と恐れとに惱まされつゞけるだらう。彼は、他の人の懺悔を聽きながら、自分が彼女のことを考へてゐることに氣がついて、どぎまぎすることが屢々あつた。これは

重大な罪だつた。それは眞面目な考へであつたし、さういふ時には、自分で自分を責めたのであつたが、それでも、さういふ考への歸つて來るのを妨げることができなかつた。彼は、彼のうちに、罪がめざめて來るのをおそれた――すつかり神に身をさゝげた彼、アンジエロともあらうものが。

夜になると、彼はミリアムの夢を見た。最初、斷食して獨りぼつちで閉ぢこもつてゐた頃には、彼女は、彼の夢の中に、天使の姿をして現はれた。その頃、彼女は、清らかな白い、聖なる天國の光の中に、おとなしく、しづかに、無言でゐた。彼女をとりかこみ、彼女を包んでゐたのは、福音書の美であつた。最初にこの白さがだんだん褪せて、ところ〴〵黑ずんで黃色つぽくなり、彼女は次第に眩いやうな光輝を失つて、人をまよはす妖婦にかはつて來た。一線々々と彼女の姿は、はつきりして來て、彼女の顏は、益々惡魔のやうに誘惑的になつた。はじめの幻から後光がとれて來た。彼女は、今では、他の男を見て微笑する時と同じやうに、そゝのかすやうな笑ひかたをするやうになつた。彼女は、彼の僧衣を輕んじ、嘲つた。彼女は、彼の夢の夜の中を、すつかり天上のものゝ面影をなくして、空氣のやうに自由に歩いた。神聖なものは悉く虛無の深淵の中へ沈んでしまつたやうに見えた。彼は、自分が彼女と一緒に動きまはつても、自分の靈が變つて來るやうに感じた。彼が雲のやうな斷崖の縁を彼女のあとをつけてゐる自己を見出すとき、或は彼女と一緒に、見なれない小山の中に埋もれてゐる洞穴の中へ渦を卷いて沈んでゆく自己を見出すとき、これが彼の心を惱ます種だつた。彼等は二人とも、歩きまはつてゐるとき何物をも氣にかけなかつた。この記憶が彼を苦しめた。彼は、いつも、自分でも知らないもの、或は思ひ出すことのできないものをなくしたやうな、見失つたやうな感じを經驗した。だが夢が續いてゆくにつれて、

この感じはだん〴〵あやふやになり、遂にそれは、甘い、蕩然たる思ひ出に溶けてゆくのであつた。それでも彼は、彼の夢のとつてゆく方向を恐れてはゐなかつたが、そのうちに、たうとう、彼女が彼を迷はしてゐることに氣がついてゐながら、彼は一向それに逆らはうとしないで、却つてその感覺を樂しむやうになつてゐたことに氣がついた。その時、彼は、彼の夢が有毒な罪に感染してゐることを知つた。けれども、彼がほんたうに、心の底から恐ろしくなつたのは、或る晩、明け方に、彼が彼女と二人きりで小さい部屋の中にゐて、彼が歡喜に醉うて、××××××××××てゐる自分に氣のついた時だつた。彼は、このことを經驗したあとで、ひきつゞき五時間も、この恐ろしい惡のおとづれから彼の魂を淨めるために祈つた。三晩の間、彼は少しも眠ることができなかつた。彼は眠るのが恐ろしかつた。彼は藥を用ゐたり、色々と心を碎いて工夫をしたりして、眠らないやうにしようとした。そのために彼の身體は苦しみの部屋のやうになつた。彼は、少しも眠らないでゐられるやうに、眠らずに生きてゐられるやうに祈つた。彼は、ちく〴〵身體をさす毛のシャツを着た。時々彼は、空の窓に靠れて居睡りすることがあつた。またつまづいて倒れると、そのまゝ倒れた床の上に、一時間以上も、ぐつたり疲れて眠つてしまふことがあつた。そこで彼は、自分の身體を鎖で縛つて、ちよつと動いてもうづく程痛むやうにした。

彼の肉體を、强制的にびく〴〵した意識狀態において、眠るといふことを、恐ろしい病氣のやうにして、絕えずそれと戰はなければならないやうにすることに成功するにつれて、今度はミリアムの顏が、ます〴〵まざ〴〵と、彼の醒めた考への中へ、追うても〴〵侵入して來て、彼の決心を崩して行つた。眼を閉ぢると、すぐに彼の

暗い瞼の端に、彼女の姿が浮び上つて、躍りながら彼を苦しめた。眼を上げると、彼女が牧場や、芝生の向うから彼に飛びかゝつて來たり、或は窓ガラスやドアに彼女の姿がおしよせて來て招いたりした。彼女は何處にでも現はれ、そして摑みどころがなかつた。指をのばして彼女に觸らうとすると、すぐに彼女は霧のやうに渦卷いて消えてしまつた。だが、指をひつこめると、又霧の中に澤山の顏が現はれて來て、それが彼の眼の前で、眼のくらむやうに亂舞してゐるのが皆ミリアムに似てゐた。彼は一日以上もかゝつて、宗教上の犧牲の、一つの形式として、彼の眼を刳り拔いて盲目にならうとたくらんだ。イエスは病に犯された身體の部分はどこでも切り去つてしまへと言つたではないか？　だが、彼の決心は堅いものではあつたが、ナイフを用ひて自分の眼に突きたてることはできなかつた。一日の中に四度も彼は部屋の中にある細長い、まつすぐな鏡の前に立つて、痩せたひよろ長い姿を寫して見た。それが細長い鏡に寫ると一層甚だしくなつて、痩せ衰へたお化けのやうな、異樣な姿に見えた。彼はナイフを手に取つて、犧牲を完成しようとしながら、かうして鏡の前に立つたのだつた。彼が、ナイフを眼の下の方の軟かい皮膚にあてると、彼の手に急に力がなくなつて、ナイフを握つてゐる指が、がた〳〵慄へて來た。或る時、彼がナイフを眼の白い膜に、ぢかにあてると彼は氣が遠くなつて、ばつたり床の上に倒れた。

彼は、彼女が彼に邪惡な力を及ぼしてゐることを悟ると突然、彼が彼女に言つた最後の言葉の、ほんたうの意味がわかつて來た。そんなことがあり得るだらうか？　彼はそれを信じまいともがいた。だがいくらもがいても無益だつた。彼は彼の訓戒から、現在個人的な快樂を得てゐたのだ。彼は今それをよく憶えてゐた。彼は今にな

つてみるとよくそれを思ひ出した。だがその時には、それを信じてはゐなかつた。もし今でもそれを信じてゐられるのだつたら！　だが、彼女が姿を現はすと、それはすつかり彼の心を奪つてしまつて、それ以上否認してみても何の役にもたゝなかつた。そのことを考へれば考へる程、それはます〳〵、生き〳〵とした現實になつて來た。それは彼の魂の隅つこに隱されてあつたところを露はに照らし出す、明るい光りのやうだつた。その時彼は他の男たち、澤山の男たち、何百人とない男たち、彼女にさはつた凡ての男たち、さうだ、ジョセフさへもが、うらやましくなつた。してみると、彼が彼女のことをこんなに執拗に、追求して來たのはそのためだつたのだ。さうだ、と認めることは慘酷だつた。彼は知らず〳〵彼自身の言葉と行爲との中に、はひりこんでゐたごまかしのために自分を憎んだ。もし死によつて、この何とも言ひやうのない罪をとり除くことができるならば、彼は最後の神に對する犧牲として死なうと思つた。

彼は、彼女が彼のために――神のためにではなく、彼のために純潔であることをほつしたのである！

《彼のために》

この言葉が冷たい幻影のやうにじつと彼を見つめた。それは現實のものでない幻影のやうに彼の方へ進んで來て、その線がだん〳〵長く細くなつて、うるさくつきまとふ指のやうな形になり、やがて空間の中へ消えてしまつた。

たうとう、彼が彼女にジョセフを捨てさせたいと思つたのは、彼のためだといふことさへもはつきりして來た。悲しくもはつきりして來た。彼は自分をジャックと對抗させた。なほ惡いことには、彼女の夫と對抗させた。彼は

自分を、一個の罪深い牧師を、神に對抗させた。

神に！

彼はそれから逃れることができなかつた。

彼は、彼女を自分のものにすることができないことを知つたので、彼女を他の誰のものにもならせたくなかつた。そのために彼は凡てのものに挑戰した。彼女の夫にも、神にも。

このことをすつかり認めることは、怪しい妖怪かなんぞのやうに、彼の心を惱ました。それは、恐ろしい程現實味をもつてゐたからではなくて、もしそれがほんたうになつたらといふ恐ろしさが、非常に強かつたからである。そのことを考へると彼は、人が恐怖の絶頂に迫ひこまれた時に、最後にそれを夢であつてくれゝばいゝと願ひ、殆ど夢に違ひないと信じることがあるやうに、もの狂ほしい心配で慄へたのであつた。

最後に、たとひ盲目になつても、彼女の姿が彼の心の幻の中へ、ちら〳〵現はれて來るのを防ぐことができないことがわかつて來ると、彼は絶望のあまり名僧たちに救ひを求めた。彼は聖なるものに眼を向けようとした。だが、彼女の顏は、神聖な書物や、神聖な人々をも、ちつとも尊敬しなかつた。彼女は、アンブローズや、アキナスや、オウガスチンや、タータリアンの言葉の中から、出たり隱れたりした。彼女は、彼等の智慧を嘲笑つた。彼女は、タータリアンが、女について言つたもの〻凡てだつた。彼はかつて神の眼には凡てのものが美しい、女さへも美しい、と考へたときでも、彼女を蔑視しなければならなかつた。だが今では彼は、それ以上のことを知つてゐた。今では、前には知らなかつた女の姿をした罪を知つてゐた。それは、ものすごい、何もかも亡

ぼしてしまふ暴風雨のやうに、彼に襲ひかゝつて來た。

「汝は知るや、汝等は各々イブなることを？　汝等は悪魔の門なり！」タータリアンのこの言葉は、實に眞理をうがつてゐる。ところでこの言葉を裏書きするやうに、この言葉の間に、彼女の顏がくす〳〵笑つてゐるのだ。ミリアムは――いや、女は――悪魔の門なり、凡ての女がさうなんだ。彼にとつてはそれはミリアムだつた。男にとつてはそれは世界中のミリアム――世界中の女だつた。永遠の女（ザ・エーウイフ・ヒ・リイブリツ）――かの永遠の誘惑者。

「悪魔の門！」この言葉は、彼の心の中で口癖のやうに繰り返されるやうになつた。彼はこの言葉を、苦しい音樂のやうに繰り返した。その間に、彼女のくね〳〵した身體は、彼の身のまはりを放縱に、悔蔑するやうに、ちら〳〵つきまとつてゐた。彼はこの言葉の、昔の作者のやうに、烈火のやうに怒つて、彼女に向つてこの言葉を怒鳴りつけた。彼はタータリアンの化身のやうになつた。彼はこの言葉を、苦しい音

凡て、叡智ある信仰ある人たちは、女を罪と見てゐた。イヴの罪！　タータリアンの言葉のそばに記してあるソロモンの言葉は實にうまく言つてある。

「女をもてる者は、蠍（さそり）をもてるもの〻如し。」

蠍！　彼女はそれよりも、もつと悪かつた。彼女は悪魔の獸だつた。彼女は人を市場へつれて行つて、彼等をあざむいた。さうだ、ソロモンが言つたやうに、「彼等は、たゞ美しき顏のみを見たるが故に、」

そして、彼は狂氣のやうになつて、又キリスト教詩人に眼を轉じた。アンセルム、カンタベリーのアンセル

ム、クラニーのオドン等は、凡て女を惡蛇のやうな嘘つきと見てゐた。さうだ、その通りだ。

「女は、美しい顏と、優しい姿とをもつてゐる。彼女はすくなからず汝を樂しませる。(何といふ眞理だらう。そして何といふ罪惡だらう！) かくの如き、乳のやうに白き生き者である。されどあゝ、もし彼女の腸、及び彼女の肉の他の凡ての部分を切り開けば、この白い皮膚の下に、どんなに穢ないものがはひつてゐるかゞわかる！」

何といふ驚くべき言葉だらう！ アンジエロはこの言葉を何べんも〳〵彼の魂の中で、それが歌ふやうになるまで繰り返して讀んだ。ミリアムもこの通りだ。彼は、彼女が、彼のまはりで、そゝのかすやうにじやれついてゐるのを、又捕まへようとした。

「汝は、」と彼は叫んだ。「汝は、汝は——汝は恰度この中味のやうなものだ！ もつと厭なものだ！」

彼は狂氣のやうになつて全身をゆすぶつた。彼女は、彼の言葉にも、凡ゆる聖者の言葉にも、無頓著だつた。彼女は惡魔の改宗者だつた、彼は心の中で、彼女の腸を切り開いて、彼女の恐ろしくねじ曲つた醜い正體を見て、殆ど笑ひ出した。彼女は脂粉と、皮膚との下に毒を隱してゐる惡魔だつた。彼女はタータリアンの女よりももつと惡い女だつた。

詩人たちは凡て女をありのまゝに見てゐた。こゝにも或るキリスト教詩人の言葉がある。

「女は男を困らす者、狂へる獸、棘あるバラ、悲しき樂園、甘き毒、甘美なる罪、苦き甘さ！」

さうだ、それ以上だ、

そして、マアボードは——さうだ「狡猾なる敵が、吾等のために、世界のありと凡ゆる野山の上に、撒き散らしてゐる數限りなき陷穽の中で、最も恐ろしきもの、そして何人も殆ど避けることのできないものは女である。氣味惡き塵、邪惡の根、惡の泉——女は色慾の炎をもつて、これらの物を貪ぼり食ふ、」

彼は彼の舌そのものが、呪ひになつてしまつたやうに思はれるまで讀みつゞけて行つた。クレメント、エヒファニュース——これ等は皆、新らしい福音書のやうに、彼を襲つて來た。彼等は、この「甘き毒」、この「甘美なる罪」、この「邪惡の根」、この「狂へる獸」から彼を救ふために、これ等の言葉を書いたのだ。

彼は不思議な力で笑つた。彼はこの幻で氣が狂つて來た。彼は、凡ての人類を「色慾の炎」から救ふ全人類の豫言者にならうと思つた。

彼は椅子から飛び上つた。毛のシャツも、もはや彼の肉を苦しめなかつた。彼の感じたものは無上の歡喜のみだつた。彼の肉體を恐ろしい苦しみに燃やした、凡ゆる猛烈な苦痛からの解脫だけだつた。

すでにもう暗くなつてゐた。彼は狂人がこの世のものならぬ夜の何も見えない空間の中へ足掻きながらはひつて行くやうに、暗の中へ出て行つた。

四

ミリアム・ブラカウが、それから一週間たつて、寺院へ歸つて來たとき、アンジエロは、もうすつかり迷ひからさめて、神の道へ歸つてゐた。歩く足元はまだいくらか心もとなかつた。そして平生の習慣にかへつてゆくのが隨分ひまがとれたので、まだ顏には、自然の色と生氣とが回復してはゐなかつた。眼はじつとすわつてゐて、

その飢ゑた熱心さは、殆んど他界のものゝやうだつた。指はいつまでも慄へてゐた。話をするときに、顔がしよつちうふるへた。

アンジエロが、聖器室の中で、懺悔室へはひる準備をしてゐると、突然扉にノックが聞えた。すると、アンジエロは、思ひがけなく邪魔をされたので、少々ときまぎして、大急ぎでそれに答へた。

それがミリアムだつた！　はじめて彼女を見たとき、彼は、びつくりし、憤慨した。彼女は、まだ彼の心に對して死んでゐなかつたんだらうか？　彼はまだ彼女を凡ての記憶から葬つてゐなかつたんだらうか？　彼女は彼の前に身を投げ出した。すると、彼は自分で氣のつかぬまに、またもや彼女に話しかけてゐたのだ。彼の舌は、彼の心と同じやうに、最近數日間の爭鬪の間に制御できなくなつてしまつて、それを抑へるのに、ずゐぶん骨が折れた。

「貴女はボオル牧師に懺悔しなくちやいけません。」と彼は彼女の肩越しに、聖器室のすぐ向うにある廊下を見ながら見つた。

「牧師樣、それはあたしにはできませんわ！　あの方にはわからないんですもの、こん度は、この前よりも、もつと惡いんですの。いつよりも惡いんですの、牧師樣。あたし恐ろしうございますわ！　あたしをお見捨てになつちやいけませんわ！」

彼女の聲は太古の聲のやうだつた――永劫のイヴの叫びのやうだつた。彼はまたこの聲にそゝのかされるのだらうか？　だがそれから逃げ出すことは、その力を承認することになる。それは彼が征服しようと誓つた人間の

弱點だ。イエスはゲッセメエンで凡ゆる誘惑にたへたではないか？　彼はたつた今、自己のゲッセメエンから、彼の力を搖がさずに出て來たばかりではないか？　イエスは惡魔から逃れたことがあるだらうか？「惡魔よ、汝は吾が後より來るべし」といふ命令は勇敢だが、「惡魔よ吾を汝より逃れしめよ」といふのは卑怯で弱い。それに、彼女が今までに言つたこと以上に恐ろしいことが、どうして彼女の生活に有り得よう？　少くもボオル牧師が彼女を理解しないことはほんたうだ。

彼女に恐るゝところなく向へば、彼は強くなれる。彼女は、彼が二度と渴のために誘惑されてはならない「邪惡の泉」だつた。どんなに、變裝したつて彼を欺くことはできない。彼はソロモンであり、タータリアンであり、アンセルムであり、マーボードであり――これ等の人々を一つにしたものだ。

「では貴女の魂の罪を話しなさい。」

牧師として何と妙な言葉を口に出したものだらう！　だが、彼は今では普通の牧師以上のものだつた――彼は神の選ばれた人だつた。彼は偉大な幻の力を呼吸した。彼の中には天の目的が生きてゐる。

彼は聖器室の扉をしめて、彼女に跪くやうに命令した。

彼女は、彼が彼女につゞいて話をさせようとしたので感謝してゐた。彼女の感謝はとても大したものだつた。彼女の唇、彼女の眼、彼女の顏ぢゆうの筋肉が、感謝の意を强めてゐた。

「またずゐぶん澤山罪を犯してしまひましたの、」彼女の言葉は簡單だつたが、その聲は一語毎に震へてゐた。

して見ると、彼女はこゝへ來なかつた間にひきつゞき罪を犯してゐたのだ！　それだのに彼は、一時、彼女が

聖者にかはつたと思ひこんでゐたのだ。先天的な罪の人間である女性が變るなんて――そんなことをかりそめにも考へたのは純然たる彼の狂氣の沙汰だつたのだ！　それはみんな惡い幻影だつたのだ。

「牧師樣、もう十二度も罪を犯したでせうと思ひますわ、そして後の程だん〳〵重い罪でございましたの。あたし、二日の間、貴方が仰言つたやうに、純潔にしてゐようとつとめてゐましたの、そしてジョセフさへゐなかつたら、あたし今だにさうしてゐられるかも知れないのですわ。あたしが、あの人をそばへ近づけさせないやうにしますと、あの人は貴方のことをとてもひどいことを言ふんですの、そしてあたしを貴方の戀人だらうなんて。」

この言葉は、何の氣もなく、出まかせに言はれたのだつたが、アンジェロは、それを聞くと呆氣に取られてしまつた。彼はその驚きをかくすことができなかつた。心の中の弱點が彼を壓倒した。それで、彼は、急に昂奮して息づかひがせはしくなつたのをまぎらすために身を起さうとした。一體どうしたのだらう。ジョセフが彼の苦しみを見破つたのだらうか？　ことによると夢にでも見たんぢやなからうか？　彼は、彼女の眼をまともに見ることができなかつた。彼は全身が眞つ赤になつたやうな氣がした。

「ジョセフは全く根も葉もないことに怒つてゐたんですね、ミリアム、」とアンジェロは言つた。だが彼の聲は震へて吃つた。彼は自分の話にどぎまぎした。

彼女はきまりわるがつてゐる彼を見た。彼の聲には力がなかつた――それで彼女は心配した。彼が話をつゞけようとしても、何か呪ひをかけられたやうにつゞけられないのを見ると、彼女の不安はだん〳〵增して來た。

「牧師樣！」彼女はこの不思議な狀態から彼を救はうと思つて叫んだ。「あの人はほんたうにひどいんですの！

まつたく、あのジョオは、汚ない卑怯な男ですわ。それでもあたし知らん顏してゐましたけれど、昨夜になつて、もう我慢ができなくなりましたの！　それであたしこちらへ伺つたのですわ。もうどうなつてもいゝと思ひましたのよ、牧師樣。あたしこはいんですの。貴方のとこへ來ずにゐられなかつたんですの。この恐ろしい罪をあたしの胸から拂ひ落さなくちやなりませんの。みんなあの人のせゐですけれど、あたしは、あたしのしようと思つたことを考へるとぞつとしますの。あれからあたし、こちらへお伺ひしなかつたでせう。それに今度のことさへ起らなければ、今日だつてお伺ひする筈ぢやなかつたのですわ。お伺ひしてもなんにもならないつてことがわかつてたんですもの。あたし何べんも罪を犯しては貴方のとこへ歸つてまゐりましたけれど、何のきゝめもなかつたんですもの。あたし、またあたしの罪を申し上げて貴方をお苦しめしようとしなかつたのを恥ぢてゐますわ。その勇氣があたしにはなかつたんですの。それはあたしがわるかつたことがよくわかりますわ。どんなに惡い罪だつて懺悔しなくちやならないんですもの。でもあたしにはできませんでしたの。だけど、昨夜になつて、もう何もかも……ねえ、牧師樣！」

彼女は、思ひ出が突然現實になつて、さしこみのやうに襲つて來たものゝやうに、恐怖のあまり、兩手を眼の前に投げだした。身體は熱くなつて、神經は極度に高ぶつて來た。彼女は、感情をかくすために、刻々にふくれ上つて來る胸を右の腕でおさへた。アンジェロは、彼女の腕をそつとひいて、自分がついてゐるから安心せよといふ意を示した。だがその拍子に、彼の長い二本の指の端が、××××××××××××にこすれたので、彼の××に物狂ほしい飢ゑが燃え上つた。彼女が眞つ白に溶けて、彼のまはりに、渦を卷いてだん〳〵迫つて來、彼

の肉を狂氣のやうに鞭打つやうに思はれた。彼の指は、むづがゆいやうな熱で、ぴり〳〵痛み、熱く燃えた。タータリアン！　この名前が無意識に、迷つたものゝやうに、欲しもしないのに、不思議に氣まづく、彼の唇に浮んで來た。そしてひとりでに口の先で繰り返されてゐたが――やがて彈丸のやうに、彼にとびかゝつて來た。彼は理性をとり返さうと思つて指を嚙んだ。彼の齒は護謨のやうに皮膚にあたつた。

「牧師樣」ミリアムは、彼の指の、しづかな、思ひがけない、親しい愛撫に氣づかずに言葉をつゞけた。「かういふわけでございますの。御承知のとほり、あたしが十六の娘の時分に――」

彼女はまたはじめた。はてしのない過去のことを言ひ出した。彼女はいつまでもそれを忘れないのだらうか？彼女はいつまでもそれを彼に繰り返すのをやめないのだらうか？

「さう、貴女が十六の時に、さう、さう、さう、貴女は結婚して、病氣になつて、夫のもとから逃げだして、裁縫女になつて、身體を賣つて、魂を汚して――さう、さう、貴女は氣が狂つて、さう氣が狂つて（いつまでも氣狂ひのまゝでをればよかつたのにね、）それからそれが治つて、ジョセフにあつて、心を入れかへて、教會へ歸つて、私のところへ懺悔に來て、百度も、何百度も來て、いつも同じ話をして、同じ罪を懺悔して、同じですよ、何もかも同じですよ――ちつとも變らなかつたし、變ることができなかつたんです――」

かうした言葉が、彼の頭を打つまゝに、それを彼女に投げつけてやることができさへしたらよかつたらうに。彼は彼女をこれ等の言葉で埋めてやりたかつた。彼はもはやこんな言葉を重ねて聞くことができなかつた。それでも彼女は相變らず、同じやうにつゞけて行つた。そして彼はそれをやめさせることができなかつた。どうする

こともできなかつた。

「サミノに捨てゝおかれたのが、まだ十七の時でございましたの。あたしは、ひとりで食べて行かなくちやなりませんでしたのよ、牧師樣。」

その通り、彼はよく知つてゐた。こんなに同じことを繰り返すのは彼女の病氣だつた。サミノ、彼は彼女がサミノのことを話したのを幾度び聞いたことだらう。サミノ！　彼女はこんなに同じことを繰り返して言ふことに何か罪のある喜びを感じてゐるのにちがひない。それとも、彼女はもう一度さういふことをして見たいのだらうか？　いや、彼女は、それを恥ぢてゐた。神は、もう今までに、彼女を許してしまつてゐたのだ。

「だが、ミリアム、貴女が一番最近に犯した罪を話して許されて、悔悟するがいゝでせう。」

たうとう彼は口をきつた。

「さうですわ、牧師樣、ですけれど、貴方ジャック・ラーモンのことをおぼえてゐらして――この前にお伺ひしたときに申し上げた人のこと？」

それを――彼女は彼の言葉は聞いてゐなかつたのだ――また繰り返さうとしてゐるのだ。

彼は不精々々うなづいた。そして、少し位置を動いて、息をするたんびに彼の方へふくれ上つて來るやうに見える彼女の乳房から眼をそらさうとした。その乳房は實にいやなものだ――と彼は考へつゞけた――彼はそれを侮蔑した。皮膚を取り去つてしまへばきつと恐ろしいものになるに相違ない。すると、人間の身體の中で、最もいとはしいものが悉くその場所にはみ出して來た！　それは惡魔が人間を墮落させるための、醜惡な、ねぢま

がつた肉の塊りに過ぎなかつた。それでゐて、彼の指は、それに觸つて見ると、またむづ痒さを感じた。一體彼はどうしたんだらう？　彼女は何を言つてゐたんだらう？　彼は、彼女が何分間も話してゐる話を一語も聞いてゐなかつた。だが、そんなことはかまはない――同じことの繰り返しなんだもの！　女がさういふ裝ひをしてゐるときに男が弱くなるのに何の不思議もないのだ。彼等は中世時代にやつたやうに、今でも魔女を燒いてしまふべきだ。何故彼は彼女の乳房を恐れるのだらう？　彼がはじめて、牧師になつた時、彼は、女の肉に誘惑されないことを自分で證明するために、わざと大理石の女人の像の乳房に觸つたではないか？　さうだ――彼はその頃は恐れるものがなかつたから强かつたのだ。今では、彼は恐れてゐる――恐れてゐる、さうだ彼自身を恐れてゐる。彼は、自分が乳房を輕蔑してゐることを示すために、彼が恐れてゐないことを示すために、また彼女の××に觸つた。

「惡魔の門！」

此の言葉を聞えないやうにそつと口にすると力が湧いて來た。

「牧師樣、でジョオがはひつて來たときは、まるで、世界が終りになつたやうでございました。ジャックもあたしも、あの人は、朝まで歸つて來やしまいと思つてゐたのでございます。あたしたちが罪を犯してゐたのだつてことはよく存じてをります。でもどうにも仕方がございませんでした。牧師樣、どうして貴方には、あたしをこんなに狂氣のやうにさせたのがおわかりにならないんでせう！　あたし、三晩の間、貴方が仰言つたやうにしてゐましたの、そして一週間ジョオを遠ざけてゐたんですの。でも、そんなことをつゞけたら、あたし死んぢまつたと

思ひますわ！　ほんとに恐ろしうございますわ！　貴方にはおわかりになりませんのね。三日目の晩でしたわ、牧師樣、あたしもう、電信柱にでも、街燈の柱にでも、何にでもいゝから抱きついて、何かしらあたしの腕にあるものゝ力を自分で感じたくなりましたの。あたしまるで狂人のやうでしたわ。ある晩貴方の夢を見たことすらありますわ。翌る日それを思ひ出したときあんまり恥かしくて聲を出して叫びましたの。

「牧師樣、どうしてそんな妙な眼をしてあたしを御覽になるんですの？」

一體彼はどんな眼をしてゐたんだらう？　彼は、彼の眼に何か妙なとこがあるなんてついぞ知らなかつた！だが、ひよつとすると――ひよつとすると、それは、彼に新しい勇氣が生じて來たからかも知れない。彼はいま彼女の××に觸つて、××なんてものがどんなに醜いものであるかを彼女に言つて聞かせようとしてゐたところだつた――ひよつとすると、そのことが彼の眼にあらはれたのかも知れない。

「何だつて、ミリアム？」アジエロは平氣な風を裝ひながら言つた。だがそれはとつてつけたやうで、しつくりしてゐなかつた。

「何でもないんですの、牧師樣、あたしの氣のせゐですわ、きつと。だけど、今ちよつと、貴方があたしに跳びかゝらうとなさつたやうに思ひましたの。貴方の眼が、あたしの魂の中へ跳びついて來さうに思へましたの。許して頂戴、牧師樣、あたし今神經が昂ぶつて氣が顚倒してゐるんですから。でも、お話をしまひまで申し上げなくちや――

「で、ジョオがはひつて來ました時、ジャックとあたしとは×××にはひつてましたの。恐ろしかつたですわ、牧師

樣、あたしたちはどうしていゝかわかりませんでしたの。最初、ジャックは扉に鍵をかけようとしましたの。でもあたしには、そんなことをしても何んにもならないことがわかつてゐましたわ。ジョオが怒つたりしたら、扉なんかわけなくぶちこはしてしまふんですもの、必要があれば、家中叩きつぶしだつてしますわ。で、あたし一秒間のうちに何もかも考へて見ようと思ひましたの。あたし、キモノを着て、部屋から出てジョオにあふことにしたんです。勿論あたしがジョオを中へ入れないやうにしておけば、そのまに、どうにかしてジャックは逃げるだらうと思つたんですわ。ところが、惡いことには、牧師樣、ジャックがまだあたしに×××しようとするんですの。あたしこんな時に歸つて來たジョオが全くいやんなつちやいましたの、あたしそのすぐ前に、ジョオはわざと歸つて來たんだつてことがわかりましたわ。あの人は何か疑つてたんです。であたしが何か言へば言ふ程、却つてあの人を荒だてる一方でしたの。あの人はあたしの言ふことにはてんで耳をかさないで、あたしの言葉を一語も聞かないやうにして、それであたしを恥ぢさせようとしてゐたんですわ。あたしあの人の上着にしつかりしがみついて、動けないやうにしてゐましたの。その時ですわ、あの人があたしを打つたのは。そして、あたしは殆んど氣を失つて床の上に倒れちまひましたの。そのあとで起つたことは、あたし、扉越しにきいてたゞけですのよ。でもずゐぶんひどい喧嘩がはじまつてたにちがひありませんわ。あたし半分意識を失つてゐましたけれど、たしかに誰か倒れる音と叫び聲とを聞きましたの。そしてそれはジャックだつてことがわかりましたの。兎に角ジョオの方が腕つ節が強いんです。ジャックの倍も力があるんです。だけど、ジャックを打つたのはまだいいとして、その上あの人を、さん〳〵な目にあはせて、ひどいなりで外へ追ひ出さうとしたので、わたし我慢が

できなくなりましたの。あたしは、やつと力を出して起ち上つて、ジョオに向つて、若しジャックをそんな姿で追ひ出したら殺してやるとわめきましたの、尤もその時は、そんなつもりぢやなかつたんですけれど。もしあの人がジャックを追ひ出さなかつたら、あたし、一晩中介抱をして——キッスもしてあげたかつたんです、えゝ、あたしどんなことがあつてもさうしたと思ひますわ。だけど、あの人が、いよ〳〵ジャックを追ひ出してしまふと、あたし、あの人が憎らしくて憎らしくて、もしその時ピストルをもつてたら、あたし、手も慄はさないで、あの人を射ち殺してしまつてたでせう。貴方にはこんな心持はおわかりになりませんのね！　だけど、そんなことは、そのあとで起つたことゝ比べると何でもありませんの。ジョオはまるで氣狂ひのやうでした。あの人は、あたしを、まるで人間ではなくて、材木の切れつぱしか何ぞのやうにひつつかんで、兩腕で抑へつけて、醜い、太い指で力一ぱいしめつけるんです。あたしは大聲でわめきましたけれど、あの人は、あたしが誰なのかまるで知らないやうに、たゞ笑つてゐるんです。そして、あたしが痛さのために死んぢまひさうになるまで、ぎゅう〳〵しめつけてゐました。

「『馬鹿、氣狂ひ！』——あたしは口からでまかせにのゝしつてやりましたが、それでもあの人は、たゞげら〳〵笑つてばかりゐるのです。でも、それつきりぢやないんです——あたしを半殺しにするまでしめつけて、あたしがもはや聲もたてられなくなつて、全身が鋭い針になつて心臓をつきとほしたやうになつてしまふと——牧師樣、何といふひどい人でせう、あの人はあたしを戸棚の中へ入れちまつたんです。狹い戸棚の中へ。そして入れただけぢやなくて、中へ入れて鍵をかけてしまつたんです。それはほんたうに小さい戸棚だつたので、はじめあ

たしはちつとも息ができませんでした。そのうちに、いくらか元氣づいたので、聲を限りに出してくれと叫びながら、手がうづばれて火のやうに熱くなるまで、どん〳〵戸を叩きました。それでもあの人は笑ひながら行つちまひました。しばらくすると、あたし、その中にべつたり坐つちやいましたの。中は暗くて、それに實に小さいのです。まるで、大きな建物が突然倒れかゝつて來て、たゞ黒い棰木の外は何んにも見えず、指一本動かすことができないやうな工合でしたの。ちやうど、その時でしたわ、何か恐ろしいものが、あたしに襲ひかゝつて來たのは。あたしこんなことは、それまで知りませんでしたの。それは何かしら冷たいもので、それにぐん〳〵しめつけられるのであたし恐ろしいやうな氣がしましたわ。あたしは何かあたしでない別のものになつてたんです。牧師樣、あたしは昂奮のあまりいろんな恐ろしいことをいたしました。だけど冷やかに決心して惡事をはたらいたことはまだございません。それだから、その時あたしはあんなに恐ろしかつたんです。あたしは自分が恐はかつたんです。この冷たいものがだん〳〵あたしの心の中で強くなつて來るにつれて、自分が恐くてたまりませんでした。それは、あたしの頭の中をかきむしつて、たうとう、あたしの中にあるものが何もかも、冷酷な調子で『ジョオを殺してしまへ、ジョオを殺してしまへ、』と言ふやうになりましたの。この言葉にもちつともあたしは昂奮しませんでした。それが困つたことだつたんですわ、牧師樣、もしあたしが、この言葉に昂奮してたら、しばらくすればそれをおさへることができたに違ひないんですから。だけどそれは、おさへることのできない冷やかな言葉でしたの。それは免れることのできない言葉でしたの。時々はげしい言葉が、ぐゝつとぶつかつて來ることがありますが、この言葉は、あたしの前にたちどまつて、冷やかに、苦りきつてあたしをじろ〳〵見つめてゐる

んです。まるで心の手捻のやうでしたの。こんな狀態が何時間もつゞいたにちがひありませんわ、お祖母さんが、戸棚の戸をあけてあたしを出してくれたのは、今朝夜が明けてからでしたもの。お祖母さんは昨夜一晩中このさわぎを聞いてたにちがひないんですの。あたしは戸棚から出て來たときは、眼が眩むやうで、お祖母さんにお禮も言ひませんでした。まるで自分が夢遊病者のやうな氣がいたしました。自分の身體が自動機械で、あたしではなくて、何かほかのものが動かしてくれてゐるやうなんですの。あたしは爪立ちをしてゞしたけれど、まつすぐにジョオの室へはひつてゆきました。かういふ時はいつでもさうだつたんですが、別に氣にかゝることはございませんでした。床もきしみませんでしたし、扉は開けつぱなしになつてゐたので、開ける世話はございませんでした。今でもあたし、あれが夢であつてくれゝばいゝと思つてゐますけれど、夢ぢやなかつたんです。あたし、いまどんな氣がしてゐるか、貴方に申しあげることもできませんのよ。牧師樣、たゞもう恐ろしかつた、こはかつたといふきりより申し上げられませんわ。ですからもう二度とお邪魔はいたしませんと申しあげたのに、またこちらへお邪魔したんですわ、牧師樣——」

「それで、どうしました？　あの人を殺したんですか？」

アンジェロの言葉は鐵砲玉のやうに鋭かつた。彼の心中の苦悶は、一刻も早く最後の悲劇を要求してゐたのだ。何か起つたにちがひない。彼女は氣の遠くなる前に喘ぐ女のやうな息づかひをしてゐた。彼女の乳房は、ふくれてブラウズから突出した。たとひ彼女が、彼を殺したにしたところで、彼は恐れなかつたゞらう。彼は恐れなかつた。

何故彼女は彼に返辭をしないのだらう？

彼は、彼の手で彼女の肩を下へ撫でた。彼の手が觸れると彼女は、すぐに、いくらか落ちついた。彼は彼女の首を撫でた。彼女は苦しさうに息をついてゐた。彼が彼女の××××××やれば、多分彼女はもつと落ちつくだらう。彼はもはや彼女の乳房を恐れてはゐなかつた。以前に抱いてゐた恐れはもうすつかり消えてしまつてゐた。もう少し、もう少し下を、――何故彼女はあんなにせはしない息づかひをしてゐるんだらう？ もう少し――何故彼は恐れてゐるんだらう？ だが、彼女はまだ彼に答へなかつた。彼が彼女の××××××してやれば、多分彼女はもつと落ち着いて、もつと樂に、苦しまずに答へることができたのであらう。彼女が彼にもたれかゝつてゐる姿は美しかつた。彼の力に彼女を安心して頼らせるためには、彼は、それを恐れてゐないことを證明しなければならぬ。彼女は本能的に前へ屈んで彼によりかゝるやうに見えた。彼が指を彼女の乳房へ近寄せると、乳房の上方の曲線が徐々に、しかし避けがたく、彼の掌の凹みの中へ辷つて行つた。彼は彼の指をみまもつた。じつと見つめた。まるで、それが彼の身體からはなれて、意志なしに動き、それ自身の、不思議な、奇妙な生命で生きてゐる妙なものでゝもあるかのやうに、指は神經的に震へてゐた。そして見てゐると氣味がわるかつた、時々、彼は、自分がその指には全く責任がないやうな氣がした。その指は事實上彼ではなかつた。それは彼が欲しても欲しなくても動いた。彼はそれがこはいやうな氣がした。それは彼を支配した。さうだ、彼はもう彼ではなかつた。彼は彼の指になつてしまつた。彼の指が彼の魂を吸收してしまつた。

「牧師樣、あたし、貴方に申し上げなくちやならないんですけれど、何だか恐ろしいんですの。何もかもがこは

いんですの。あたしピストルのあるとこを知つてゐました。あの人はいつも、ピストルを簞笥の一番上の抽斗にしまつてゐたのです。あたしは實際抽斗をあけてそれを探す前に、もうきら〳〵光つたピストルが眼に見えました。あたしは見る前にそれに觸りました。あたしは、つめたい金屬がひやりと皮膚に觸れたとき、ぞつとして、手をひつこめました。しばらくの間、あたしは落ちついた氣持ちになつて、あたしが何をしてゐるのかつてことがわかつたやうな氣がしました。だけど牧師樣、すぐあとで、何かしらわたしのうちにあるものが、わたしの手をまた抽斗の中へつゝこませたときには、もうすつかりそれを忘れてゐました。あたしは氣が狂つてゐたんですの。でも、今度は冷たい表面が溫くなつて、前よりもずつと氣がしつかりしたやうに思ひました。ジョオは獸のやうに鼾をかいて寢てゐました。カバーもかけてゐません。あたしは、大きな、不恰好な脚を、半分だらりとベッドの側へぶら下げて、そこに眠つてゐるジョオを、そのまゝ殺してやつたらどんなにいゝ氣持ちだらうと思ひました。あたしは、ピストルがほんものであるのをたしかめるかのやうに、指を曳き金にまきつけました。それからあたしはジョオを起して、彼が聲を出したら殺してやらうと思ひました。さうです。彼を殺してやらうと思つたんです。さう思つたんです、牧師樣！」

ミリアムは半ば氣が遠くなつた。そして姿勢をふみはづして少しアンジェロの方へ倒れかゝつた。彼は、やさしいといふよりも寧ろ情熱的な氣遣ひから、兩腕で彼女を抱き支へた。彼は、彼女を正氣に返さうとする熱心のあまり、最初、急に手足が痙攣して動かすことができなくなつた。彼の腕は金縛りにされたやうに動かすことができなかつた。だが、しばらくすると、すぐに筋肉がほぐれて來て、彼の眼が彼の手を見ないうちに、彼の指は、

彼女の肩や腕を夢中にさすりはじめた。彼女の×は、彼の手の中で生きた焔のやうになつた。彼はそれを無理矢理に彼の指でにぎりしめた。そのために彼女の×は灼けた金屬のやうに赤くなつた。彼はそれをすつかり、狹い掌の中へ握りこめたくなつた。彼はそれを彼の唇へ、彼の眼へ、彼の耳へ、彼の胸へ、彼の全身へおしつけたくなつた。

ミリアムは彼の腕に抱かれたまゝ、半ばは氣絶からさめて、半ばは彼の身振りに驚いて顏をそむけた。だが、彼女は、まだ、彼女自身の感情の昂奮にぼうとしてゐたので、彼の動作の性質を十分にさとることはできなかつた。彼は彼女に、彼がどれ程深く彼女の罪を理解したかを見せたかつたのだらうか？　それとも、どれ程完全に彼が彼女をゆるしたかをあらはしたかつたのだらうか？　だが、彼は、彼の指で彼女を痛い程抱きしめてゐた。彼はこれまでにこんなに彼女にやさしくしたことはなかつた。それでゐて、彼のやさしさは、以前の彼の冷やかさと同じ位、彼女を恐はがらせた。

彼女が徐々に顏を上げ、彼女の眼が彼の眼を追うて上へあがつて來るのを彼が感じたときに、アンジエロは、恐くなつて、しばらくの間、彼女を抱きしめてゐた手をゆるめて、彼の內心の欲望と衝動とをすつかり見すかされないやうに、身じまひをなほさうとした。それは彼には並大抵の努力ではなかつた。彼の指はまだじつとしてはゐなかつた。彼女の身體の殘りの部分を握りつゞけてゐた。彼女はもう話をしないのだらうか？　彼はまだ、その晩の出來事を聞きたかつた。少くも彼はそれを知る義務があつた。或はそれを聞きたがる義務があつた。兎に角、何かを知る義務があつた。

彼は彼女に無理に言葉を出させようとするやうに、急に、はげしく彼女の身體を搖ぶつた。

彼女は吃驚したと同時に、彼の慘酷さに驚いた。彼は彼女を恐れさせた。彼女は彼にすつかり話さうとしてゐたのだ。それが彼にわからなかつたのだらうか？

「あたしは、あの人を殺しませんでしたの、牧師樣、たゞ宙に發砲して、そのまゝ走り出したんです。でも、貴方が、これをとり上げて、救つて下さらなければ、あたしは殺してしまふにきまつてゐますわ。牧師樣、どうぞあたしをお救ひ下さいまし、でなければ、あたしは人殺しになつて、殺されてしまひます。」

アンジエロは、彼女が、肩衣からピストルを取り出して、なんにも言はずに彼に差し出したとき、ぞつとして身體をちゞこめた。そのきら〳〵した鋼鐵は、彼女の手の中で蛇のやうに光つてゐた。彼はそれに觸るのが恐ろしかつた。彼はそれに手を觸れることができなかつた。それはあまりに恐ろしく人間じみてゐた。こんな兇器をこゝへ持つて來る彼女は氣狂ひだ。彼は彼女に、それをわきへやらないと破裂したり、發射したりするかも知れないとうなづいて見せた。彼女はまた彼にもたれかゝつた。彼女の全身が彼の救ひを求めてゐた。彼女の祈るやうな眼は人を魅させるやうだつた。彼は、殆んど自分で何をしたのか氣づかずに、彼女の手からピストルをとつた。彼は片腕で彼女を抱きながら、他の片腕で兇器を受けとつた。彼女の着物は、まだ彼女の肩に亂れてゐた。彼は左の腕を彼女の肩越しに彼女の脊にのばして、右手にピストルをぶらさげたまゝ着物を眞つ直にのばしてやつた。彼女の×××××××は、また彼を××させ、××××しくさせた。彼は突然、××することのできない、ほげしい×××××××に燃えて來た。何か、手からふりほどくことのできないものゝやうに、まだピストルを握

りしめながら、彼は他方の腕を、彼女の身體にまきつけ、××のやうな、狂へる情熱をもつて彼女を自分の方へひき寄せた。しばらくの間、ミリアムは恐ぢけづいて、彼の××からのがれようともがいた。だが、一瞬間の後彼女は、不思議な、否應なしの力で、了解した。その瞬間、彼は彼女に對してもはや牧師ではなくて、たゞの男になつた。彼女の眼は、はげしく輝き、さつと自暴自棄の色を帶びて來た。彼女の唇は狂氣のやうに叫んで彼の×を追うた。彼女は、彼の肉體に近附かうとする惡魔のやうな熱意で、文字通り彼のチョッキを引き裂いた。

アンジェロは、彼自身情熱に驅られた眞つ最中であつたけれども、彼女のこのひどい變りかたに氣が附いた。彼女の身のまはりの凡てのものが、この新しい痙攣の中へどつと押し寄せて來た。彼女は文字通り氣が狂つてゐた。彼女の眼……、それは狂つてゐた。彼は狂女を抱いてゐたのだ。どうにか……何事か……起る前に、彼女は彼の耳の上に嚙りついた。彼自身の狂的な衝動は、どうしたわけか、突然變つた。彼の手は彼女の××にふかく喰ひ入つてゐた。彼女は彼を食ひつくさうとしてゐた。彼は逃れなければならない。でなければ死んでしまふ。この女……この狂女。

前には彼は彼女に抵抗することができなかつた。前には彼は彼女を×××つてゐた。今では、彼が×××はれてゐた。前には彼は自分が何をしてゐるのかわからなかつた。今では、彼は自分が滅ぼされつゝあることがわかつた。彼女の眼の最初の變化の閃きがそれを彼に告げた。彼が彼女にとつて、牧師ではなくて、たゞの男になつてしまつた、瞬間、――その瞬間にタータリアンが歸つて來た。一秒毎に、刻々と、彼はそのことをはつきりと知つてこはくなつた。彼女が彼にかたくしがみつけばしがみつく程、彼女の××は益々狂的になり、彼は益々女

が恐ろしくなつた。

惡魔の門！

「神よ、おゝ神よ、我を救ひ給へ！」彼は唇が動かないうちに頭の中で叫んだ。

彼女は宇宙の惡の權化になつた。彼女は彼女以上のものだつた。彼女は人間の破壞者だつた。彼女は純潔の冒瀆者であり、神聖の敵であつた。彼女は惡魔の使徒だつた。彼女のキッスは毒のやうであり、彼女の唇は係蹄のやうだつた。彼女は彼の許へ歸つて來ることによつて、彼をそこへひきずつて行つたのだ。否、神が神の力をためすために彼女を彼の許へ送つたのだ。おゝ、彼女が彼の耳をはなしてさへくれたら。神は、惡魔の弟子として彼女をつれて彼を訪れたのだ。

若し、彼が前に感じたやうに、冷酷な侮蔑をもつて彼女を見ることができたら。だが彼の顏は、まだ彼女の顏とすれ〳〵になつてをり、彼女にしつかりと×××られてゐた。彼は彼女をひどく憎んだ。

惡魔の門。

彼は、彼女の唇から、肩から、腕から逃れようとつとめた。もがいてゐるうちにピストルはもう少しで彼の指から辷り落ちさうになつた。彼は、情熱と昂奮との爲めに、ピストルのことはまつたく忘れてしまつてゐた、今それは異常に堅く彼の手をおさへつけた。まるで彼の皮膚の中へ喰ひ入りさうになつた。それは……

神がこのピストルを送つたのだ！　神が彼女を送つたのだ。兩方とも神が送つたのだ。彼は、いま、神聖な幻のやうにそのことがすつかりわかつた。彼女はサタンの改宗者なのだ。彼女は惡の訪れなのだ。彼は彼女を滅ぼ

すことを、女を滅ぼすことを、凡ての女を滅ぼすことを、惡を滅ぼすことを神に命ぜられてゐたのだ。

「全能の神よ！」彼は自分の立場をさとると狂氣のやうに叫んだ。そして咄嗟の間に、彼女から身をふりはなして、腕をひつこめた。そして、しばらく氣を落ちつけて、冷やかな決意をもつて彼女の兩眼を射ちぬいた。銃聲は數秒間、寺院の室々と廻廊とに反響した。

アンジェロは無言で彼女の死體を見つめてゐた。ピストルは、彼女の伸した腕のそばの床の上に落ちた。彼の手はもはや震へてゐなかつた。一言も言はずに、彼は、ひろ〳〵とした寺院の本堂へかけこんで、キリストの畫像の前に跪いて、おごそかに念珠をつまぐりはじめた。それから、眼を見ひらき、顏をあげて、ゆつくりと、しづかな聲で祈りはじめた。

「天にまします我等の父よ、御名をあがめさせたまへ、御心をなさせたまへ――」

彼は言葉を切つた。

「御心をなさせたまへり、」彼は繰り返した。「御心はなされましたり、おゝ父よ。」そして彼は、この不思議な言葉が、いま、寺院の内壁に記してあるのを見て、氣の遠くなるのを覺えながら、氣をとりなほして――その方へ歩いて行つた。

革命の娘

序

ジョン・リイドの一生は、劇的な一生だつた。オオゴン州のポオトランドの豐かな中間階級の家庭に生れた彼は、世界的詩人及び小説家としての才能と野心とをすぐれてもつてゐるやうに思はれた。そして、强壯な放浪兒的な向ふ見ずな氣質だつたので、直接に人生を經驗しようと思つて家を出た。一九一〇年、ハアヴアート大學を卒業すると、紐育へ來て、グリニッチ村で放浪者的の生活をした。そして或る賣れ行のいゝブルジョア雜誌の編輯部に採用された。だが、一九一三年に、ブルショア的成功の標準に反感をもちはじめて、その頃『大衆』(ザ・マッセズ)を創刊してゐた社會主義藝術家、作家の群にまじつた。その年に、ニュー・ジャアジイのペタースンで織物工の大ストライキが勃發した。彼はI・W・Wのオーガナイザーのヘイウッド、トレスカ、エリザベス・ガアリイ・フライン其の他の人たちと一緒にはたらいて、逮捕、收監され、紐育のマヂスン・スクエア公園で大々的な、凄い「ペタアスン・ストライキの野外劇」を演出した。その年の暮、彼は從軍記者としてメキシコへ行き、數ヶ月間ヴイラの軍隊に從軍して、革命運動についての同情のある記事をあつて、『叛亂のメキシコ』(一九一四年)を著はした。ヨオロッパで戰爭が勃發すると、彼は戰地へ派遣されて、あらゆる戰線を訪れた。美術家のボオドマン・ロビンスンとともにバルカン諸國を通過してロシアに行き、ロビンスンの挿繪入りで、『東ヨオロッパの戰爭』(一九一六年)を書いた。それから、合衆國へ歸つてルイズ・ブライアンと結婚し、彼女とともにロシアに行つた。彼は、ロシア帝制の顚覆を見ることはできなかつたが、ボリシエヴイキ革命の間ぢゆうロシアに滯在した。その頃

彼は、『大衆』の他の記者たちとともに探偵取締法で起訴されて、第二回の公判を受けるために、一九一八年の秋アメリカへ歸つた。この公判では、その年の春、彼の不在中に行はれた第一回の公判の時と同樣に、陪審官は判決に同意しなかつた。彼は、『世界を搖がした十日』を書いた。これは、彼のボリシエヴイキ革命史である。そして、彼はアメリカ共產黨の創立に重要な役割を演じ、ソウエト・ロシアに歸つて、第三インタナショナルの執行委員の一人となつた。翌年、即ち一九二〇年十月十七日彼はモスコウで、チブスのために死んだ。

彼の死の知らせによつて、紐育で開かれた追悼式の席上で、彼の友人であり『ザ・マッセズ』の同僚記者であるマックス・イーストマンは、彼について言つた。「吾々の時代の生活に於いて、ジョン・リイドの性格を、あんなに異常なものたらしめたものは、彼が、一面に於いて色々な觀念を情緒的に用ゐ、それを燃えるやうな色彩をもつた想像を起させるやうに描く力をもつてゐた――彼は詩人であり、理想主義者であつた――にも拘らず、彼は、觀念の情緒的色彩に欺かれて、それが實際の行爲の言葉に譯されたときに、どのやうな現實の意味をもつかを無視するやうなことは決してなかつたといふ點にある。彼は科學者が物事はかうであるといふ聲の冷やかな調子を知つてゐた。彼は大工業家が如何にして物事は成就されるかを言ふときの嚴格な氣分を知つてゐた。彼は科學を理解し得た詩人であつた。事實に直面し得た理想主義者だつた。

「諸君は、すべて、ジャック・リイドが、凡ての人たちから秀才とちやほやされてハアヴアート大學を出たことを知つてをられる……だが、彼は私の知るところでは、あの學校の中で彼が養はれたやうな、鹿爪らしい思想の寢床の言葉を一語だつて發したことはなかつた……ジャックはその頃、正に人氣記者としてのすばらしい經歷を踏

み出してゐた。そして、私は、彼の生命の衝動が、同時に、全く正反對の二つの方向に發展し、いつか或る頂點で、彼は否が應でも、そのうちの何れかを選ばねばならなくなるといふことを注視する機會をもつた。一方に於いては、彼のペンの盡きざる豐かさのために、そしてすべての人の愛する、世界的冒險にあこがれる大きな少年精神のために、この國のあらゆる新聞紙と通俗雜誌とは、その門戸を廣く開いて彼を迎へた。彼等は、爭つて彼の名と、彼の物語と、彼の冒險談とを求めた……そして遂には原稿料に於いても、有名さに於いても、ジョン・リイドはアメリカに於けるジャーナリズムの職業で第一流に立つやうになつた。彼はヨオロッパで戰爭がはじまつた時には合衆國に於ける最も偉大なる從軍記者として一般に認められてゐた。これが彼にどんな立身の機會を提供したかは諸君に想像することができよう……その當時、ジョン・リイドは、文壇に於けるどんな成功の地位でも、どんな利得でも、どんな當時の賞讃でも、自分で求めて、當然得られなかつたものはなかつたのである。

「だが、この同じ年月の間に、彼の胸中には、現代の世界に對する反抗の感情、吾々のジャーナリズム及び吾々が吾々の文藝と稱してゐるものを生ぜしめ、それによりて正當視され、それが淺薄な、虚僞な美の衣を着せて蔽うてゐる搾取狀態に對する反抗の感情が生長しつゝあつたのである。彼の胸中には、アメリカのための偉大なる詩と文學とを作らうとして彼が戰ふのと、勞働者がアメリカを獲得して、それを人間的にし、それを自由にするために戰ふのとは同じであるといふ感じが生長しつゝあつたのである……

「次いで……戰爭がアメリカにやつて來た。そして、プロレタリア革命のための活潑な戰ひがロシアにはじまつた。こゝに於いて、ジョン・リイドは、自由にして透徹した理智をもつてゐる凡ての人と同じやうに、資本主義新

聞の人氣もあり、收入もある僞善につくか、革命新聞の孤獨にして人にもてはやされる眞理につくかといふ選擇に直面した。そして彼は眞理を選んだのである。……そこで、若し、後年彼と親しく交つてゐた友人たちの賞讃の言葉に、私に何か附け加へることのできる特別のものがあるとするならば、それは彼がこの世の光榮と、豪奢と、富と、贅澤とを犧牲にしたといふことの證言である。現代の世界が、若き天才を誘惑するためにもつてゐる凡てのものを彼は拋ち、革命の一兵卒としての苛酷な貧銀を受けとつたのである。」

革命運動が、彼にその參加を要求する前に、彼には青年時代があつた。この時期に、彼は、ジャーナリズムと冒險との中にあつて彼の小說家としての力を示したのであつた。本書に收められた物語は（例外をのぞくと）すべて一九一七年以前に書かれたものである。前半の作品は紐育もので、紐育の下層社會で感じた自然な若々しい興味をあらはしてゐる。だが、これ等の物語は、何等「生ま煮えな」空氣をもつてゐないといふ點では青年らしくない。これ等の物語は、その臆面もない同情とやさしさと親しみとに於いて、恐らく、その中で極めて率直に祝福されてゐる人間性についての充分な理解を除いては、凡ゆるものに於いて、成熟しきつてゐる。この物語の中の或るものは個人的經驗に空想的な註解を加へた記錄であり、そしてその凡ては、正確な現實に觸れてゐる。後半の作品は、彼が新聞記者としてメキシコや、ヨオロッパやアメリカで送つた生活で見聞した事物の、あわただしい、詩的な寫しである。それ等は、本書の標題にした物語の中にあらはされてゐる、革命的情熱に對する浮浪人的侮蔑から並べられてゐる。だが、すべてに憐憫と眞實と人生の色彩とが溢れてゐる。但し、作家の力が充分に自由にあらはれてゐるものは極く少ない。

これ等の物語に、「メキシコ風景」が附加された。これは彼のメキシコ冒險の新聞記事から採つたもので、『ザ・マッセズ』誌上に發表されたものである。それから、「革命繪模樣」――ちやうどボルシエヴイキ革命の直前に彼がリガの戰線を訪れた時の記事と、一九一八年のI・W・Wの裁判の記事の拔萃とが附加されてゐる。いづれも『ザ・マッセズ』に掲載されたものだ。これ等は、革命的な新聞雜誌や、彼の革命史の中にのみあらはれてゐる彼の晩年の活動や興味をできるだけ廣くこの短篇集で代表させようと思つてとり入れたのである。日附はすべて發表された時のものである。

序でに一言しておくが、革命的刊行物は良い紙を買ふことができないので、これ等の刊行物の綴ぢこみは旣にぼろ〳〵になつてをり、本書のやうな書物にまとめてその內容を救つておかないと、將來の革命史家の手にはひらなくなるかも知れないのである。

最後に、この短篇集を、正式に、革命のテーマを取り扱つた物語だけに限る必要はないと考へられたのであるといふことを說明しておかねばならぬ。それは、藝術の言葉で、革命的作家の生長を記した記錄であつて、二十歲臺の初期の浮浪兒的、放浪者的な侮蔑が革命的情熱に深化していつた段階を示したものである。

本書の編輯と公刊とを心よく許されたルイズ・ブライアント夫人に感謝する。

紐育、クロトン・オン・ハドスンにて

フロイド・デル

革命の娘

その晩には、例のパリの雨、他の雨のやうに、降つてもちつとも物の濡れないやうに見える雨がしと〳〵降つてゐた。私たち、フレッドとマルセルと私とは、ロトンドの露臺の隅つこのテーブルに腰をかけて、ヂュボンネを啜つてゐた――十一月とはいへその晩は温い晩だつた。戰爭のために、カフエといふカフエは、みんな八時きつかりに店を閉めた。そして私たちは、毎晩、店が看板になるまで坐りこんであるのが習慣だつた。

私たちの隣には、頭をすつかり繃帶でまいた若いフランスの士官が、綠色の肩衣をかけたジャンヌの肩に、いい氣持ちで腕をまきつけてゐた。ベアトリイスとアリイスとは、ずつと向うの方に明るい電氣の光を浴びてゐた。私たちの後ろには、窓のカーテンの隙間から、煙の一ぱいこもつた部屋が見えた。その中には娘つ子たちの間にはさまつて騷々しくテーブルを打つたり歌を歌つたりしてゐる人たちや、しづかに將棋をさしてゐる二人の年老つたフランス人や、夢中になつて家へ手紙を書いてゐる一人の學生や、その學生の肩に顏をのせて見てゐる女友達や、五人のまる〳〵見ず知らずの人と給仕とに、自分の話を息もつかずに傾聽させてゐる、泥だらけな脚をした戰地歸りの兵隊などがゐた。

黃色い光が私たちの周圍に降りそゝぎ、黑い鋪石を金色にきら〳〵光らせてゐた。蝙蝠傘をもつた人たちが、ひきもきらずに、ぞろ〳〵と流れて行つた。ぼろ〳〵の着物を着た、見すぼらしい立ん坊が、こつそり私たちの

脚もとに落ちてゐる卷煙草の吸殼をさがしながら、うさんうさに歩いてゐた。外の通りでは、なれつこになつた私たちの耳には別だん耳ざはりにもならない、ぞろ〳〵歩いてゆく人たちの、ごた〳〵一緒になつた跫音が聞こえ、モンパルナス通から、光の中を横ぎつて、銃劍を斜にかついだ軍隊が通り過ぎて行つた。

この年は、ロトンドの娘たちは、みんな同じ服裝をしてゐた。みんな小さい圓い帽子をかぶり、髪は短かく切り、襟を深くくゝつた下着をつけ、足まで引きずる肩衣をまとひ、その端をスペイン流に肩、こしに後ろへ投げかけてゐた。マルセルも他の娘たちと同じ身なりをしてゐた。それに彼女は唇に眞紅にべにをつけ、頰には眞白に白粉を塗り、すまさない時には、淫らな話ばかりし、眞面目になつた時にはセンチメンタルなことばかり話してゐた。彼女は、自分が、金持の身分のある家柄の娘だといふことや、ある大公にだまされてひどい目にあつたことや、彼女が、しん底は堅い律義な娘であることなどを話して私たちを悅ばせ、彼女が通り一ペンの賣春婦などではなかつたんだつてことを自慢さうに話した……

ちやうどこの時に、彼女は、彼女の眼の前で、小さい、だみ聲で金を催促してゐる人に對して、意味深長な嫌味をたてつゞけにはさんだ。私は、マルセルがたうとう地金を出したと思つた。彼女が、人や物についてする批評は、辛辣で、はげしくて、奇拔だつたが、すぐに氣が拔けて、投げやりになつてしまつた。捨て鉢と、恥ぢ知らずの生活慾から來る緊張もほんの僅かの間しかつゞかなかつた。マルセルは、もう既に、あまりにいろんな人に弄ばれて、惡ずれしてゐたのだ。

はげしい嗄みあひの聲が聞えたかと思ふと、脊の高い、薄い橙色のセーターを着た娘が出て來た。そしてその

後から給仕が、身振り混りで、大聲で呶鳴りながらついて來た。

「しかし、貴女が註文したアニゼット八つの代金はどうしてくれるんです！」

「拂ふと言つたぢやないの」彼女は肩越しに、金切聲を出した。「これからドームへ行つてお金をとつて來るのよ」かう言ひながら、彼女は電氣の光で明るい通りを横切つて行つた。給仕（ウエーター）は、彼女の後姿を見送りながら、不機嫌な顏をしてポケットの中で釣錢をヂャラ〳〵いはせてゐた。

「待つてたつて駄目よ」マルセルが叫んだ。「ドームにはデランブル街の方へ出る出口もあるんだから！」だが給仕はそれにはてんで注意を拂はなかつた。彼は酒代を帳場へ拂つた。勿論、さつきの娘は再び姿を現はさなかつた。

「古い手よ、あれは」とマルセルは私たちに言つた。「一文なしで給仕に酒をのませて貰ふのは、わけはないことよ、代金は飲んでしまつてからでなきや請求しませんからね。何しろ戰爭で、男は少いし、それにお金はもつてないんだから、さういふことは、こんな時には知つておかなくちや……」

「だつて給仕だつて、生きて行かなくちやならんだろ！」フレッドが抗議した。

「わたしたちだつて生きてゆかなきやならないわよ」とマルセルは、肩をすくめて言つた。

「この町の近所に一人のシャンがゐましたがね」と彼女はちよつとたつてから言葉をつゞけた。「自分で、名前はマリイと言つてたの。美しい——そりやびつくりするやうな——髪をもつた女でね、それに旅行がすきでしたのよ……或る時、一文なしで、ニヂプト行きの地中海の汽船に乘りこんぢやつたの——ほんたうに着のみ着のまゝ

でね。その女が船の欄（ヒリ）にもたれてゐるとこを、一人の男が通りかゝつてね、『貴女の髪は素敵ですね』つてほめたんですつて。

「『百法（フラン）で賣つてあげるわ』とその女は後ろを振り返つて言つたさうです。それから、美しい髪をぶつりと切つてしまつてカイロへ行つちまつたんです。そしてカイロであるイギリスの貴族に會つたのです」……

給仕は大きく溜息をもらして、陰氣に頭を振りながら、扉の中へはひつた。私たちは、無言で、食事のことを考へた。雨は降つてゐた。

どうしてか知らないが、フレッドが、何の氣もなしに、口笛でカルマニヨールを歌ひ出した。はじめのうちは、私はそれに氣がつかなかつたが、そのうちに、それにあはせて歌ふ聲が聞えた。あたりを見ると、フランスの負傷將校が、ジャンヌの肩から、だらりと腕を垂れて、ぼんやり、歩道を見つめながら、鼻の先でカルマニヨールを歌つてゐた。祖國の軍隊の制服を着て、反逆の歌を歌つてゐる、この多感な顏つきをした青年は、どんな幻影を見てゐたのだらう、私が見たので、彼は、急に歌をやめて、氣がついて、吃驚して、ジャンヌをひつぱつて立ち上つた。

ちやうどその時にマルセルがフレッドの腕を荒々しくつかまへた。

「その歌は法度よ——そんな歌を聞かれたら、みんなひどい目にあつちやうわ」と彼女は叫んだ。彼女の眼には恐怖といふよりももつと強い何かの閃めきがあつたので、私はそれに興味をもつた。「それにそんな汚ない歌を歌つちやいけないわよ。そりや革命歌ぢやないの、——ごろつきの歌ふ歌よ——貧乏人の——乞食の——」

「ぢや、君は革命嫌ぢやないのかい？」と私は訊ねた。
「あたし？　勿論だわ、ちがひますとも！」彼女はやけに頭を振つた。「革命家つて惡者でせう、何もかもひつくりかへさうとしてゐる惡い人でせう！」マルセルはぶるつと胴慄ひした。
「だがねえ、マルセル！　こんな世の中に生きてゐて幸福かい？　この世界は君に何をしてくれてるかね、たゞ君を街へ追ひ出して、君の身を賣らせてるだけぢやないか？」フレッドは滔々とプロパガンダをはじめた。「革命の日が來たら、僕はどちらの陣營につくかわかつてるんだ——」
マルセルは笑ひ出した。それは苦々しい笑ひだつた。私はこの時はじめて彼女が吾を忘れたのを見た。
「お默りなさいつてば」彼女は荒々しく相手の言葉をさへぎつた。「わかつてるわよ、そんなお話は、ずつと前から耳がたこになる程聞いてるんですもの」彼女は言葉をきつて、獨りで笑つた。そして吐き出すやうに言つた。「あたしのお祖父さんは、ペエル・ラシエーズの城砦で銃殺されたのよ、コンミュンで赤旗をもつてゐたつていふので。」彼女はぎよつとして恥かしさうに私たちを見て、にが笑ひをした。「わかつたでせう。本當言ふと、私は卑しい家の生れなのよ」
「君のお祖父さんがね！」とフレッドは叫んだ。
「お祖父さんのことなんかよしませう！」とマルセルは無雜作に言つた。「あんな氣狂ひの、汚らはしい馬鹿爺さんなんか、墓の中にそつとしておいた方がいゝわ、あたしあの人のことなんか話すのは、今はじめてよ、そしてこれからだつてあんな人の魂にお燈明なんか上げてやりやしないわ」

フレッドは彼女の手をつかんだ。彼は興奮してゐた。「えらい、君のお祖父さんは！」
彼女は商賣がら、すぐに相手の心を見ぬいて、何だかわけもわからずに嬉しくなつた。返事の代りに彼女は低い聲で、インターナショナルの歌の、最後の節を歌ひ出した。
「これぞ、最後の戰ひ——」彼女は、フレッドに相槌をうつた。
「君のお祖父さんのことを、もつと話してくれない？」と私は訊ねた。
「もう話すことなんかないわよ」とマルセルは、半ばは恥ぢ、半ばは喜んで、すつかり皮肉に言つた。「あの人は、どこの馬の骨だかわからないのよ。お父さんもお母さんもなかつたんですの、商賣は石工で、皆腕のある職人だと言つてましたけれど、いつも本ばかり讀んで時間をつぶし、それに、いつでもストライキばかりしてたのよ。ずゐぶん亂暴な人で、しよつちゆう口癖のやうに『××と××ちとをやつつけろ！』つて云つてたんですつて。みんなあの人のことを『ル・ファルウ』と言つてたさうよ。わたし、お父さんから聞いたのをおぼえてるわ。兵隊がやつて來て、お祖父さんを××しにつれて行つた時のことを。お父さんは十四の頃だつたんだけど、それでも、お祖父さんを蒲團の下へ隱してやつたのよ。でも兵隊が××でその上からつゝいたものだから、お祖父さんは肩をやられて、×が見えたといふことだわ。それからお祖父さんは、その兵隊たちに演說をしたんですつて——あの人はいつも演說ばかりしてゐたさうよ——そして兵隊たちに、コンミュンを殺さないやうにしてくれと、頼んだんですつて……でも、兵隊たちは、たゞフフンと鼻の先で笑つてゐただけなんださうだわ」かう言つてからマルセルは笑つた、といふのは、その話が面白かつたからだ。

「だけど、あたしのお父さんときたら――」と彼女はつゞけた。「それはもつとひどかつたのよ。あたしはクルウゾオユ工場の大罷業をおぼえてるわ――一寸まつてね――あれはたしか、大博覽會の年だつたわね。お父さんがあのストライキを煽動したのよ。その頃兄さんは、まだほんの赤ん坊で――八つにしかなつてゐなかつたんだけれど、それでも世間の貧乏な子供たちと同じやうに、もう働いてたのよ。そして、ストライキの示威運動がある と、いつもお父さんは突然行列の外から、可愛い聲で呼びかける聲を聞いたといふことだわ――わたしの兄が、まるで同志の一人のやうに、赤旗を持つて歩いてゐたんですつて！

「『おい、とつつあん！』と、兄はわたしのお父さんに言つたのよ『しつかりやらう』つてね」

「このストライキで、ずゐぶん×たれた職工さんたちがあつたのよ」マルセルは、毒々し氣に頭をふつた。「畜生！」

フレッドとわたしとは身體を動かした。いつまでも一つ處にぢつとしてゐたので、寒くなつた。わたしたちは窓を叩いて、コニヤックを註文した。

「あたしの貧乏な家の話なんか、もう澤山でせう」と、マルセルはわざと何氣ない樣子をしようとつとめながら言つた。

「もつと續けてやつてくれよ」とフレッドが眼を光らせて鐵かれ聲で言つた。

「だつて、あんた方は、あたしを御馳走を食べにつれてつて下さる筈だつたんぢやないの？」とマルセルは、遠まはしに催促した　わたしは頷いた。「ほんとにね！」と、彼女はせゝら笑ひをしながら續けた。「あたしのお父さ

んは、こんな風にして食事したことなんかなかつたのよ。お祖父さんが亡くなると、お父さんはもう仕事がなくたつちやつたの。食べることもできないで、一軒々々食べ物を無心して歩いて廻つたの。でもみんなあの人の顏を見ると、戸を締めちやつてね。しかもお祖父さんの仲間のかみさんたちがさ『この餓鬼に何もやつちやいけないよ。あれは××されたル・フアルウの息子なんだから』と言ふんですつて。それで、お父さんは犬のやうに、カフエのテーブルの周りを、こそ〳〵歩き廻つて、パンのかけらを拾つてやつと身體と魂とを支へて來たんですつてさ。それであたし、しみ〴〵と覺つたわ」と、マルセルは短かい髪をふりながら言つた。「食べさしてくれる人には、決して逆らつちやいけないつてことをね。だからあたし、さつきの娘さんみたいに、給仕を胡麻化したりなんかしないのよ。そして誰にでも、あたしの家は立派な家だつて話してゐるのよ。お父さんがお祖父さんの罪のためにひどい目に遭つたやうに、あたしもお父さんの罪のために、ひどい目に遭ふかも知れないんですもの」

わたしには、これですつかりわかつた。そしてまたもや人間が卑しいふるまひをするのも無理がないと思へて來た。それが、マルセルを理解し、彼女の缺點と、彼女の下劣さとを理解する鍵だ。さう考へてくると、彼女をひねくれさしたのは惡德ではなくて、地球の支配者どもが、人間の精神を容赦なく墮落させたせゐだ。自由に渴してゐる者に對する、恐ろしい刑罰だ。

「あたし、おぼえてゐるわ」と、彼女が言つた。「クルウゾウのストライキがすんだ後で、ストライキの主謀者たちが、厄介な職工さんたちをどうしてふり捨てたかつてことをね。それは多だつたわ、そしてあたしたちは何週間もの間、あたしのお母さんが、外で拾ひ集めて來てくれた薪だけで、身體を温ため、組合から貰つた僅かばか

りのパンとコーヒーだけで我慢してたのよ。お父さんはパリへ行くことにきめて、それであたしたちは、歩いてパリ行きの旅に立つたの。お父さんはあたしを肩に乘せて、もう一つの肩には小さい荷物の包みをぶら下げてゐたわ。お母さんも包みを持つてゐたのよ。でもお母さんは、もう肺結核に罹つてゐたので、少し歩いては休まなきやならなかつたのよ。兄さんはその後からついて來たの……で、あたしたちは、葉の落ちた高いポプラの並木にはさまつた、少し雪の積つた眞白な、まつすぐな道を歩いて行つたの。二日と一と晩たつて……二日目の夕方暗くなつた時にあたしたちは、誰も住んでゐない道路人夫の小屋の中へ、みんなで轉がりこんぢやつたの。お母さんはひどい咳をしながらね。それから夜明け前にまたその小屋を出て、とぼ〳〵雪道を歩きつゞけたのよ。お父さんとお母さんとは、大きな聲で革命の歌を歌つてたわ

『いざ踊れ、カルマニヨールを
晉に合せて——晉に合せて——
いざ踊れ、カルマニヨールを
××の晉に合せて！』

マルセルは、禁制の歌を歌つた時、思はず聲を高めた。彼女の頰は紅く染り、彼女の眼はぴかつと光つた。そして彼女は足を踏み鳴らした。突然、彼女は歌をやめて、恐ろしさうにあたりを見廻した。だが誰も氣がついてはゐなかつた。

「兄さんはね、小さい聲だつたけれど、女みたいに甲高い聲をしてゐたわ。お父さんは兄さんが、大人の罷業職

工と同じやうに憎しみの歌を大聲で歌ひながら、しつかりした足どりで街を歩いてゐるのを見下ろして、いつも大きな聲で笑つてゐたわ」

『愉快なちびだな！　お前もそのうちに、きつと警察とちかづきになれるぞ。賭をしてもいゝぞ』かう言ひながらお父さんは、兄さんの背中を平手で叩き〳〵してゐたわ。だもんだから、お母さんは眞つ蒼になつて、ときどき、晩にそつとベッドから脫け出して、兄さんの眠つてゐる隅つこの方へ行つて、兄さんを起して、泣きながら、大きくなつたらいゝ人にならなくちやいけませんよ、と言つて聞かせ〳〵してゐたわ。或る時、お父さんが眼を醒まして、お母さんをつかまへて……だけどそれは後のことよ。パリへ行つてからの——」

「で、その時みんなの者はこんな歌を歌つてたわ

「起てよ、貧しき兄弟よ
吾等に國の差別なし
ブルジョアジイを××××
專制政治を××には
胸に高鳴る心臟と
鐵の力が必要ぞ！」

「それからお父さんは、軍隊のやうに進みながら眼を光らして前の方を見てゐたわ。いつでもあの人の眼は光つてゐたので、お母さんはそれを見ると、慄へてゐたのよ——その光の中には、警官との無慈悲な恐ろしい×ひか

でなければ、もの凄いストライキが含まれてゐたんですからね。それでお母さんは、お父さんを怖がつてゐたわ……お母さんがどんな氣がしてゐたんだらうつてことは、あたしにもわかつてよ。あの人はわたしと同じやうに、法律を堅く守つて暮してゐたんですから。そして、お父さんたらまるで横紙破りだつたんですもの」マルセルは、身慄ひした。そしてコニヤックを、一息にがぶりと飲み干した。

「あたしはパリへ來てから、やつと物事がわかりかけてきたのよ」と、彼女は續けた。「なぜつて、パリへ來てからあたしは大きくなりだしたんですもの。あたしの殆ど最初の記憶といふのは、お父さんがメエヌ街のチロンといふ石炭工場の、大罷業を指導してゐた時に、××に打たれて、胸を折つて歸つて來たときのことよ。それから家にはろく〳〵食べる物もなく、お母さんはだん〳〵身體が衰へていつて、たうとう亡くなつちやつたの。お父さんは、それから二度目の結婚をしたのよ。それは神信心な女で、しまひには暇さへあれば教會へ行つて、お父さんの不滅の靈魂のためにお祈りをしてたわ……お父さんがひどく神を憎んでゐたことを知つたものですからね

「お父さんは、毎週〳〵、夜、組合の會議がすんでから、星のやうに眼を光らして、街の中を大きな聲で神を罵りながら歸つて來てたわ。恐ろしい人だつたわ。いつでも大將株で。お父さんがモンマルトルの示威運動に行つた時のことを、あたしおぼえてるわよ。それはパリの街全體を見下ろす山の頂きにある、サクレ・クウルといふ大きな、白い、教會の前だつたの。そのすぐ下にあるバアル騎士の銅像のこと知つてらつしやるでせう？　あれは昔聖徒の行列に敬禮をしなかつた若い男の銅像なのよ。だもんだから一人の坊さんが十字架でその男の腕を折つ

て、その男は宗教裁判所で火炙りにされちまつたのよ。その人はあそこに、鎖でしばられて、折られた腕をだらりと下げて、しかも傲然と顔をあげて立つてるんです。それはまあさうとして、職工さんたちは、教會に對してそれとも何か、あたしにはわからないけれど、何かさういつたものに對して示威運動をしてたのよ。そこで演說が始まつたの、お父さんが廊堂の階段に立つてゐるとね、その時突然教會の主任牧師がやつて來たの。お父さんが雷のやうな聲で呶鳴りつけたのよ。『坊主どもを××××！　この男を燒き殺した××を！』かう言ひながらお父さんは、銅像を指でさし示したの。『きやつを××××！　きやつを××××！』みんなの者は大聲を上げて階段の方へつめよせて來たの。――すると××が、群衆にピストルを向けて襲ひかゝつて來たんです……その晩お父さんは血だらけになつて歸つて來たわよ。街の中をやつと〳〵身體をひき摺るやうにして。

「あたしの義理のお母さんは、支離でお父さんを見ると、ひどく憤つてかう言つてたわ『一體、お前さんはどこへ行つたの、このろくでなしが？』

『示威運動に行つてたのさ、それがどうしたんだい！』と、お父さんは唸るやうに言ひましたわ。

『それで氣がついたらうね』と、お母さんは言ふのです『今度こそ性根をなほしておくれだらうね』

『性根をなほすんだつて？』と、お父さんは齒のない血だらけな口で呶鳴りつけるの『この次までほね！　よからう！』

「全くそれから、ルブウフが斷頭臺でやられた時に、甲騎兵の主義者狩りがありましてね、お父さんはサーベルの先に××××××されて家へ歸つて來たのです」

マルセルは、卷煙草を口にくわへて、前へ身をかゞめてフレッドの煙草から火をつけた。

「みんながお父さんのことを『首なし』ボアツソオつてたわ――ほんとにお父さんほひどい人だつたのよ……政府を憎むことつたらなかつたわ！……或る時あたしが、學校から歸つて來て、國歌のマルセーユの歌を教はつて來たと話すと、かうなのよ。

「『もしお前が、あの裏切り者の、畜生の歌を、この近所で歌つてゐる所を見つけたら、お前の面をひんむいてしまふぞ！』拳を握りしめてかうあたしに叱鳴りつけるんです。

あたしは、この武骨な、偏屈な老戰士、百度も警官と名もない無益な戰ひをして傷だらけになつて、頭の中に人類更生の燃えるやうな幻影を抱きながら、組合の會議をすまして、汚ない街をよろけながら家へ歸つて來る、この老戰士の姿を心の中で想像した。

「それから君の兄さんは？」と、フレッドが訊ねた。

「兄さんたら、お父さんよりももつといけなかつたわよ。」と、マルセルは笑ひながら言つた「お父さんになら、たいていの話をすることができたけれど、兄さんには絶對に話すことのなできいことがあつたわ。子供の時分からそりやひどいことばかりしてたのよ。よくこんなことを言ひました『學校がひけたら、これ〳〵の教會へ僕に會ひにおいで――僕はお祈りをしたいんだから』わたしは教會の階段で兄さんに會つて、それから一緒に中へはひつて跪まづいたものですわ。わたしがお祈りをしてゐると、兄さんは、だしぬけにとび上つて、大きな聲をあげて教會の中を驅け廻るの、椅子を蹴るやら、禮拜堂に燃えてゐる蠟燭を毀すやら、大變なのよ……それから、

街の中で牧師さんに逢ふといつでも後をつけて行つて『××をやつつけてしまへ――　××をやつつけてしまへ――』と、叱鳴りつけるんです。二十度もあの人は拘引されて、懲治檻に入れられたことさへありますわ、でもいつでも逃げ出してしまふんです。まだ十五の時に家をとび出して、一年も歸つて來なかつたことがあつてよ。或る日あたしたちが、朝御飯をいたゞいてゐると、お臺所からのそ〳〵はひつて來るんです。

「『お早う』と、まるでどこへも行つてゐなかつたかのやうに言ふんです『寒いぢやありませんか、今朝は？』

「あたしの義理のお母さんはきやつと叫び出しましたわ。

「『一寸、世の中を見に行つて來たのさ』と兄さんは、しやあ〳〵して言葉をつゞけるのです。『金もないし、ひもじくもなつたので歸つて來たのさ』お父さんは、兄さんを叱りつけはしないで、たゞ外へ出さないやうにしてゐました。日の中は兄さんは、街角にあるカフェの周りをうろ〳〵してゐて、夜半になるまで歸つて來なかつたの。それから或る朝、また誰にも何とも言はないでゐなくなつちやつたの、三ヶ月たつと飢ゑて歸つて來たのよ。義理のお母さんはお父さんに、あの子供を働かせなくちやいけない、あんな横着な怠け者を、たゞ食べさしておくのはやりきれない、と言つたんです。だけどお父さんはたゞ笑つてたわ。

「『うつちやつとくさ！』と、お父さんは言つたの『彼奴も、自分のしてゐることはわかつてゐるさ、彼奴の身體にも、なか〳〵いゝ闘士の血が流れてゐるよ』

「兄さんは、そんな風にしてかれこれ十八になるまで、家をとび出したり、歸つて來たりしてたのよ。十八になるとパリで家を持つ前に、たいてい毎日働いて、家をとび出すのに入用なお金を貯めちやつたの。それからたう

とうこの土地の工場で定職にありついて、結婚しちやつたんです。

「兄さんの歌を歌ふ聲つたら、すてきだつたわ。兄さんが革命歌を歌ふと、みんなだまつて謹聽してるんですものね。夜になつて仕事がすむと、兄さんはいつも、大きな赤いハンカチを首にまいて、ミュージック・ホールか、酒場（キャバレ）へ出かけて行つたの。兄さんは中へはひつて行つて、誰か歌ひ子が舞臺から歌を歌つてゐると、突然大きな聲を張り上げて、よからう節かインタナシナルかを歌ひ出すんです。すると舞臺の歌ひ子は歌を止めなくちやならなくなつてしまひ、聽衆は、棧敷の一番後ろのベンチに起ち上つてゐる兄さんの方を振りむいて、見るんですつて。

「兄さんは歌ひをはるとどなるんですつて『どうだいこの歌は？』つて。するとみんな手をうつて喝采するんですつて。それから兄さんは又大聲で叫ぶんです。『みんな俺のいふことに賛成してるんだぞ、×××をやつつけろ！　××をやつつけろ』つて！　すると中には喝采する者もあり、口笛を吹く者もあるでせう。で兄さんがどなりつけるんです。『誰か俺に口笛を吹いた奴があつたね？　誰でもかまはん、俺に口笛を吹く奴は外へ出てこい！』それから兄さんは街へ出て、十人も十五人もの眞つ赤になつて怒つてる群集と喧嘩をはじめるんです、お巡りさんがやつてくるまで……

「兄さんもいつもストライキの大將だつたけれど、陽氣で、大膽なもんだから同志の人たちは、みんなあの人をすいてたわ……若い時分にお父さんが、あんな無茶な育て方をしなきや、兄さんは、いつか、ことによると代議士になつてたかも知れないわ――」

「兄さんは今どこにゐるの？」フレッドが訊ねた。

「どつかの塹壕にゐるんでせう」彼女は腕をのばしてぼんやり東の方を指さした。「兄さんは軍隊を實に憎んでゐたけれど、戰爭がはじまると、他の人たちと一緒に行かなきやならなかつたのよ。あの人の軍隊の勤務ぶりつたら大變なのよ、ちつともいふことをきかないんですもの。或る時、昇進しようと決心して、一ヶ月もたゝないうちに伍長になつちやつたの、頭のいゝ人でしたからね。……でも最初の日に、あの人は自分の部下の分隊に命令を與へることをいやだつていふのです。……『へん、同志に命令なんかしてたまるかい？』とかうどなるんです。『部下のものに塹壕を掘らせろつて命令を受けたんだが、一體全體奴等は奴隷だとでもいふのかい？』それですぐに兵卒へ逆戻りさせられちやつたの。すると兄さんは、すぐに反抗組をつくつて、その仲間に、士官を射つてしまへと煽動するんです。……兵卒たちもひどい侮辱を受けたので、あの人を塹壕の壁の外へ投げ出しちやつたんですつて。兄さんは全く、ひどく戰爭を憎んでゐたわよ――　三年兵役制が議會へ上程された時に、モップを煽動してバレー・ブルボンへ押しかけさせたのはあたしの兄さんよ……それだのに、今は、自分で他の者と同じやうにドイツの兵隊を殺しに行かなくちやならないんでせう。ことによると、兄さんの方が殺されてるか知れやしないわ。あたしなんにも知らないのよ――何のたよりもないんですもの。」それから彼女はとつてつけたやうに言つた。「兄さんには五つになる男の兒があつたわ。」

三代の間、飽くことなく、おぼろげな自由の夢のために戰つてきた、はげしい、自由な血。そして今四代目が搖籃の中にゐるのだ！　彼等は何のために戰つて來たか知つてゐるのだらうか？　そんなことはどうでもよい。それは理性よりも深いものだつたのだ。力でおさへつけても、道理を言つて說き聞かせても、根絶（ねだ）やしにすること

とのできない人間精神の本能だつたのだ。

「それで、マルセル、君は？」と私は訊ねた。

「あたし？」と彼女は笑つた。「あたしが大公に口説かれたんぢやないつて話をするの？」彼女はくつ〳〵と小さく苦が笑ひした。「さうすると、貴方がたはあたしを大事にして下さらなくなるわよ——貴方がたのやうな通りかりのお友達は、同じお遊びになるにしてもロマンスの織りこまれた遊びの方がお好きだつてことを、あたし知つてるんですもの。でもそれは本當よ。それはロマンチックぢやなかつたのよ。あたしは、こんな、いやな、がつ〳〵した生活をして〻、いつでも、樂しみと幸福とにこがれてたのよ。あたしは、赤ん坊の時分から、笑つたり、はしやいだりすることがすきだつたの。シャンペンを飲んだり、お芝居へ行つたりすることばかり考へて、寶石や、い〻着物や、自動車をほしがつてたの。お父さんは、ずつと前から、あたしの趣味が、さういふ方へ向つてるのを氣がついてたわ。お父さんはかう言つてたの。『お前は何もかもすてちまつて、金持ちに身を賣りたがつてるつてことが俺にはわかる。今から言つとくが、お前が一度でも過ちを犯したが最後、家を追ん出して、もう俺の娘だとは言つてやらないぞ。』

「あたし家にゐるのがもう我慢ができなくなつちやつたの。お父さんは、戀人をもつて〻結婚もしない女は、どうしてもゆるさなかつたのよ。しよつちゆう、あたしのことを罪の道へ走らうとしてるつて口癖のやうに言ふんです。あたし、大きくなると、義理のお母さんと一緒でなければ外へ出ることも許されなかつたのよ。そして年頃になると、あたしを救はうと思つて、大急ぎで夫を見つけてくれたの。或る日、お父さんは家へ歸つて來ると、

一人い〻のが見つかつたていふんでせう——それは蒼白い顔をした、跛の若い男で、同じ街の料理屋の主人の伜だつたの。あたしその男は前から知つてたの。悪い人ぢやなかつたけれど、結婚しようなんて氣にはなれなかつたわ。であたし、自由の身でゐたいと思つたの。」私たち、フレッドと私とはよぎつとした。「自由！」そのおやぢが、あんなに苦しい戰ひをして來たのも、その自由のためではなかつたのか？

「で、その晩」と彼女はつゞけた。「あたしはベッドから起き上つて、他所行きの着物を着て、その上から不斷着を着て、家を拔け出したの。その晩と次の日一日とわたしは街を歩きまはつたのよ。そしてその日の夕方、兄さんの働いてゐる工場へ、慄へながら辿りついて、兄さんが出て來るのを待つてたの。あたし、兄さんがあたしをすて〻、お父さんの家へ送りかへすかどうか見當がつかなかつたのよ。でも兄さんは、しばらくすると、仲間の者と大きな聲を出したり、歌を歌つたりしながら出て來たのよ。そしてあたしのことをじろ〳〵見てるの。

「『お前何でこんなとこへ來たんだい？』兄さんはあたしの腕をとつて言ひかけたの。『心配でもできたのかい？』あたしは家を飛び出して來たんだと話したの。兄さんはその場につ〻立つたまゝあたしを見てたわ。『お前何も食べてないやうだね』と言ふの『俺と一緒に家へ來い、そして嬶あにあふとい〻、きつとすきになれるよ。みんなで一緒に食事をしよう！』であたしその通りにしたのよ。兄さんのお内儀さんたら不思議な人だつたわ。悦んであたしをむかへてくれるんでせう。そして二人で、やつと一ヶ月になつたばかりの赤ん坊をあたしに見せてくれるの……丸々肥つた赤ん坊をね！　兄さんの家の中は、何もかも溫かで幸福だつたわ。嫂さんが、自分で御馳走をこさへてくれたのを、あたし今だにおぼえてるわ、あんなにおいしい御馳走を食べたこと、あたしなくつてよ。

食事がすむまで兄さんも嫂さんも何もあたしのことをきかなかつたわ。食事がすむと、兄さんが、卷煙草をつけて、あたしにも一本くれたの。あたし煙草をふかすのが何だかおつかなかつたわ、義理のお母さんから、煙草なんかふかしたら女はおしまひだつてきいてたもんですから……でも嫂さんはあたしを見てにこ〳〵笑ひながら、自分でも一本煙草をとつたの。

『『おい』と兄さんは言つたの。『でお前はどうするつもりなんだい？』

『『つもりなんか何もなくつてよ』とあたしは答へたの。『あたし自由でゐたいの。面白いことをして、きれいな着物が着てたいの。お芝居へ行つたり、シャンパンを飲んだりしたいの。』

『嫂さんは悲しさうに首を振つてたわ。

『『そんなことのできる女の仕事は聞いたことがないわね』と嫂さんは言つたの。

『『あたしが仕事をしたがつてゐると思つてらつしやるの？』とあたし言つてやつたわ。『わたしが一週間十法(フラン)で、工場の奴隷になりたがつてると思つてらつしやるの、それとも、平和街の仕立屋で、他の女の着物を着て、肩で風を切つて歩きたがつてるとでも思つてらつしやるの？　あたしが他の者の命令をきくと思つてらつしやるの？　いいえ、あたしは自由でゐたいんですわ！』

『兄さんは長いことあたしをじつと見てゐましたが、暫くたつてからかう言つたの。『俺達の身體には皆同じ血が流れてるんだ。お前に言ひきかせてみても、無理に押へつけてみても仕方があるまい。人間といふものは銘々自分の生活を押し通してゆかなくちやならん。お前は行つて、自分のすきなやうにするがいゝ。だがいつもお前が食

ふことができなくなつたり、氣落ちをしたり、淋しくなつたりしたら、俺の家へ來ていゝんだよ――お前が生きてる限り、いつでもこの家はお前を喜んで迎へてあげるよ、それだけのことは知つておいて貰ひたいんだ』……

マルセルは手の甲で、ぞんざいに兩眼をふいた。

『その晩は、あたし、兄さんの家に泊つたの、そして翌くる日、町を歩き廻つて、――恰度今のやうに、カフエで娘さん達と話しをしたの。みんなあたしに、ちやんとした戀人が欲しいなら働らかなくちや駄目と言つてくれたので、あたしは一ヶ月の間大きなデパートへはひつたのよ。すると戀人ができたの、アルゼンチンの、男であたしにきれいな着物をくれたり、お芝居へつれて行つてくれたりしたの。あたし、あんな幸福な事はなかつたわ！

『或る晩、二人でお芝居へ行きがけに、兄さんの家の傍を通つた時、あたし、ちよつと兄さんとこへ寄つてあたしが、素敵な生活を送つてゐることを知らせてあげようと思つたの。あたしは、青い、うつとり見とれるやうな上着を着てたのよ――今でも憶えてゐるけれど、ほんとにいゝ上着だつたわ！　それから、踵の高い、しめ金のぴか〳〵光る靴を履いて、白い手袋をはめて墨い駝鳥の羽根のついた大きな帽子をかぶつて、ヴエールをつけてたのよ。ヴエールをおろしてたので助かつたの。何故つて、あたしが兄さんの借家の玄關へはひつてゆくと、お父さんが階段に立つてゐるぢやないの！　そしてお父さんはあたしをじろ〳〵見てるぢやないの。あたし立止まつちやつたわ。心臓はぴたりととまつちやつたの。でもあたし、お父さんがあたしだと氣がついてゐない事を看てとつたの。

『『あつちへ行きやがれ！』お父さんはかうどなりつけたのよ。『貴様のやうな奴が、こんなところで、勞働者の家なんかで何してるんだ？　どういふつもりでこんなとこへやつて來て、ぺら〳〵した絹や羽根なんかつけて、

俺達を侮辱しやがるんだ？　そんなものは　貧乏な工場の職人と肺病の細君と、死にかゝつた子供等との汗でできてるんだぞ。行つちまへ、このばいた奴！』

『あたしは、お父さんが、あたしのことを氣がつきやしないかと思つてはら〳〵したわ！

「そのあとで、あたし、たつた一度きり、お父さんにあつたことがあるの……あたしの戀人はもうどつかへ行つちまつて、あたしには別の戀人ができてたのよ……兄さんと嫂さんとはサン・ドニのお父さんの家の近くへ働きに行つてたの。あたしは時々兄さんの家へ行つては、晩に、みんなで、赤ん坊をあやしたりなんかしてたの、赤ん坊はぐん〳〵大きくなつてたの。あの時分はほんとに樂しかつたわ。それから、あたしは、お父さんにあはないやうにと思つて、夜が明けるとすぐに出てゆくことにしてたの。或る朝街へ出てゆくと、お父さんが、夜のひき明けに、辨當箱をぶらさげて、仕事に行くとこぢやないの！　お父さんはあたしの顏は見なかつたのよ、たゞ、前へ前へと街を歩いてさへ行きやよいのでね。まだ五時頃で、あたりには殆んど人はゐなかつたのよ。お父さんはあたしのうしろから歩いて來たの。すぐに氣がついたんだけど、お父さんは歩を速めてたのよ。それから低い聲で云ふぢやないの。『お嬢さん、ちよつと待ちねえ、あんたも同じ方へおいでになるやうぢやな？』私は急いで歩いたわ。『あんたはきれいなお嬢さんぢや、わしも、そんなに年寄りぢやないぜ、二人でどつかへ行かないかい？』あたしはうろたへちまつてはら〳〵してたの。お父さんに顏を見られやしないかと思つてこはくて、こはくて。あたし横顏を見られやしないかと思つて、横町を曲ることもできなかつたのよ。まつすぐに、ずん〳〵まつすぐに、何時間も、何哩も歩いて行つたの……いつお父さんが立ち留つたか知らないのよ……兄さんにきくと、お父さん

は、あたしのことをちつとも口に出さなかつたんですつて」……

彼女は話をやめた。今まで、ちつとも聞えなかつた街の騷音が、以前の倍も騷々しく、私たちの耳に聞えて來た。フレッドは昂奮してゐた。

「實に素敵だ！」と彼はテーブルを拳固で打ちながら叫んだ。「同じ血だ、同じ精神だ！　だがまあ見たまへ、一代毎に××といふものが、どんなに、前よりもよくなり、廣くなつてゐるかを！　君のお父さんには、てんでわからなかつた自由を、君の兄さんはよくわかつてゐるぢやないか！」

マルセルは吃驚したやうな眼をして、彼を射るやうに見た。「それはどういふ意味なの？」彼女は訊ねた。

「君のお父さんは――一生自由のために戰つてたんだぜ――それでて、君が君自身の自由を欲したといふので君を追ひ出したんだ！」

「貴方がたにはわからないんだわ。」とマルセルは云つた。「あたしだつてあたしのやうな娘をもつたら同じやうにするわよ。」

「君にはわからないのかね？」フレッドが叫んだ。「君のお父さんは男の自由は欲したが女の自由は欲しなかつたんだつてことが。」

「そりやその筈ぢやないの」彼女は肩をすくめた。「男と女とはちがふんですもの。お父さんが間違つてたんぢやないわよ。女は――はしたないまねをしちやいけないんですもの！」

「女の番はもう一代先だね」フレッドは憂鬱さうに歎息した。私はマルセルの手をとつた。

「君はそれを殘念だと思ふかい？」私は彼女にたづねた。
「殘念ですつて、あたしの生活を？」彼女は誇らしげに顏をあげて、ちらりと後ろをふり返つた。「いゝえ、あたしは自由よ！」……

忘れてしまつた世界

一九一四年作

セルビヤの、オブレノヴアツツの町は、赤い瓦屋根と、白い球莖狀の塔との塊りだ。それが帶のやうにつながつた陸の上に、綠の木々の間に隱れてゐて、そのまはりをサヴア河が、大きく迂回して流れてゐる。後ろの方は綠色のセルビヤの小山が、靑い山脈に連らなつてゐて、山の頂きには、今でも機關銃の彈で、蜂の巢のやうに孔の開いた木の株の間に、死體の山が埋葬もせずに、うつちやつてある。そして飢ゑた犬が兀鷹と一しよに、喰屍鬼のやうにそれをあさつてゐる。半哩程離れた黃色い河岸に、百姓あがりの兵隊が、水のたまつた塹壕の中へ、膝まで脚を沒して、三百ヤード離れた對岸の、オーストリア兵に向つて、射擊してゐる。その間に、ボスニアの山々が、西の方へどこまでも大波のやうに續いて、オブレノヴアツツの町を、破壞しようとして見おろしてゐる大砲を隱してゐる。一體、この町そのものが、小高い、狹い土地の上に建つてゐて、その周りの沼は、河の水嵩がふえてくると汎濫し、そこにはこういのとりが、戰爭をさげすむやうな顏つきで、のそり〳〵と忍び足で藺の間を

歩いてゐる。小山といふ小山には、新綠が萠えいでゝ、煙のやうに梅の花が咲いてゐる。大地は、淺綠色の草の芽が出たり、木の芽が伸びたりするので、何となく無數の極く小さい音で、ざわ〳〵してゐる。そしてぜんまい仕掛けのやうに規則的に、思ひ出したやうな砲聲が、氣のつかぬ間に起つては、物憂い空氣の中へ消えて行く。九ヶ月間といふものそんな風だつた。そして戰爭の物音は、今では自然の偉大なコーラスの一部分になつてしまつてゐる。

私たちは司令部の將校たちと一緒に食事をした——この將校たちは、人の好い大男たちで、百姓や、百姓の息子ばかりだつた。私たちの靴を、ひざまづいて磨いてくれたり、固くなつて立ち上つて、私たちの手に水をかけたりしてゐてくれた傳令と、食事の時に、非常にすばしこく、しかも丁寧に、私たちに給仕をしてくれた志願兵たちとが、コーヒーが出て、皆の紹介がすんだ時にはひつて來て、席に着いた。彼等は大佐の親しい友だちだつたのだ。

食事がすむと、誰かゞコニヤックの瓶と、本物のハバナの葉卷の箱とを出した。——それは二週間前に、オーストリヤの軍隊から、分捕つて來た物だと、イオウアノヴイッチは笑ひながら言つた——それから私たちは、ぶらぶらと砲臺見物に出かけた。

西の方、ボスニアの連山の上の方に、力のない春の太陽が、淺い靑空に低くかゝつてゐた。赤金色や、眞紅の色や、朱色や、淡紅色や、灰色の小さい雲の條が、大空に燃えてゐた。小鳥は眠さうに囀づり、軟らかなすがすがしい風が西の方から吹いて來た。

イオヴアノヴイッチは、私の方をふりむいた。

「貴方は、セルビヤの社會主義者と話がしたいんでしたね」と彼は言つた。「恰度いゝ鹽梅ですよ。これから見に行く砲臺の隊長は、セルビヤの社會黨の領袖なんです。――すくなくも、平和の時にはさうだつたんです。いや私にはあの人の主義はわかりませんよ。私もこれで青年急進黨員です」彼は笑つた。「吾々は、大セルビヤ帝國を信じてゐるんですな」

「社會主義者が、皆ターキッツのやうだと」と、大佐は氣持ちよさゝうに、葉卷をふかしながら言つた。「私は、社會主義について、何も文句はありませんな」

廣場の隅つこを横ぎつて、半圓形にうねつてゐる深い塹壕の中に、四門の六吋砲が、柳の若樹の蔭にうづくまつてゐた。大砲の上には、廣場の地面と殆ど同じ位の高さの屋根ができてゐた。そしてその屋根の上には、芝草がおいてあり、草や灌木が生えて、飛行機から見えないやうに、大砲を隱してゐた。哨兵の聲高かな誰何に對して、大佐は大きな聲で「ターキッツ！」と、答へた。砲坑の中から膝まで泥だらけになつて、帽子もかぶらない一人の男が出て來た。彼は、脊が高くて、肩幅が廣かつた。色のあせた軍服がだぶ〳〵してゐるところを見ると、以前には太つてゐたらしい。もじや〳〵した櫛の齒を入れない髭が、頰骨のところまで、一面に彼の顏を蔽うてをり、二つの眼は溫和しさうで、正直さうだつた。

彼等は、この男に何かセルビヤ語で言つた。すると、彼は笑つた。

「ほゝう」と、彼は眼をしばたゝきながら私の方を向いて言つた。そしてフランス語で話しだしたが、永いこと使はないとみえて、行きづまつたり、言ひよどんだりした。

「ほゝう、貴方は社會主義に興味をもつてゐらつしやるんですか？」

私はさうだと言つた。「あんたが、この國の社會黨の領袖だつたと聞いたもんですから」

「さやう、さうでした」と、彼は特に、でしたといふ言葉を强めながら言つた。「だが、今では――」

「今では」と、大佐が横から口をはさんだ。「この人は、愛國者です。立派な軍人です」

『立派な軍人』はよかつたですね」と、ターキッツは言つた。私は、彼の聲の中に苦々しい影がさしてるやうに思つた。「ごめんなさい。下手なフランス語でお話しして、何しろ永いこと外國の方と話したことがないものですから――これで以前には、フランス語で演說したこともあるんですがね――」

「で、社會主義の方は？」と、私は訊ねた。

「さやう、お話しませう」と、彼はゆつくりと始めた。「少し、その邊を散歩しませう」彼は、自分の腕を、私の腕の下へ入れて、しかめつ面をして地面を見つめてゐた。急に彼はふりかへつて、何か考へこんでゐたが、やがて、砲坑の中にゐる、外からは見えない誰かに向つて叫んだ。「ピーター！　第一號の大砲の後身部に、油を差しておけ！」

他の連中は、いかにも食事がすんで滿腹した人のやうに、笑つたり、肩越しに後ろをふり向いて、何か話し合つたりしながら、先の方へぶら〳〵歩いて行つた。夜は西の空まで迫つて行つて、夕燒け雲を消してしまひ、滿天を覆ふ上着のやうに、星の群を呼びよせた。どこか遠くの方の塹壕で、慄へ聲で、ステファン・ダッシャン皇帝の帝國の光榮をたゝへた、マケドニアの歌を歌つてゐる聲がする。そして、ジプシイの乞食が、伴奏のヴァイ

オリンを掻き鳴らしてゐた。遙か河向うの敵國の小山の、夕闇にかすんだ勾配の上で、炎の火花が赤くふるへてゐた。

「御承知の通り、この國は貴方のお國とは違つてゐるんです」と、ターキッツは始めた。「吾が國には、金持ちもなければ、職工もないので、小數者の手に集中してゐる資本に對して、勞働者が大きな組合を作るといふやうなことはまあむづかしいと思ふんです。」彼は、一寸言葉をきつて、くす〳〵笑つた。「貴方にはおわかりにならんでせうが、こんなことを今頃またお話しゝてゐると私は實に妙な氣がしますよ！」……

「で、吾々の黨は、社會主義の原理を吾が國に適用するためにつくられたんですな。——つまり、みんな自分の土地をもつてゐる農民の國に適用するためにですな。吾々は生れながらの共産主義者なんですよ、吾々セルビヤ人はですな。どの村へ行つて御覽になつても、富裕なザドルガスの家がありますよ——ザドルガスといふのは同じ家が、代々、結婚した親戚ぐるみ、財産を合同していつて、それを共有してゐるものゝことですがね。吾々はインターナショナルなんかにかゝはつて、暇つぶしをする氣はなかつたんですよ——そんなものは吾々の邪魔になりますからな——吾々の綱領の障碍になりますからな。吾々の綱領といふのは、凡てのものを生産し、凡ての生産手段を所有してゐる人民の手に、分配の手段も與へよといふのだつたのです。政治的の綱領はもつと簡單で、できるだけ廣い普通選擧と、發案權と、一般投票と、法律の撤回權とによる、ほんたうのデモクラシーを、吾々は目ざしてゐたんです。御承知の通り、バルカン諸國では、政權をもつてゐる、野心的な政治家と、さういふ連中を選擧する大衆との間を、大きな溝がへだてゝゐるんです。政治が、だん〳〵分離した職業になつて、よくな

いことを考へてゐる法律家に獨占されてゐるんです。吾々はこの階級を打ち破らうとしたんですな。吾々は總同盟罷業なんか信じませんでしたよ。そして世界の被壓迫産業大衆なんかは、たゞ、彼等の經濟綱領を徹底させるために、吾々を利用するといふ點をのぞいては、吾々と沒交渉でしたよ。そして彼等の經濟綱領なるものがそもそも、セルビヤの國狀には、何の關係もないものだつたんです。」

「貴方がたは、戰爭には反對されたでせうな？」

彼はうなづいた。「吾々は戰爭には反對しましたよ——」と、彼ははじめた。そして、一寸言葉をきつて大きく笑ひ出した。「どうもね、すつかり忘れちやつて……何しろ吾々は、セルビヤの國民、つまり百姓ですな、その百姓が、いつでも戰爭をやめようとさへ思へば、たゞ、戰爭するのは厭だと斷るだけで、戰爭をやめることができるんだと、考へてゐたんです。ところが、吾々のやうな考へをもつてゐる者は、ほんの僅かでしてね——ドイツやフランスのやうに、勢力のあるしつかりした勞働階級といふものはありませんのでね。——それでも吾々は、それができると思つてゐたんです。」

「で、今は——どうお考へですか？」

ターキッツは、ゆつくりと私の方に向きなほつた。彼の兩眼は悲しさうで、それにいかにも辛らさうだつた。「どうもわからん。どうもわからん。今貴方にお話しゝたのは、戰爭前の私なんですよ。こんな古い、時代おくれのことを言つてゐる私自身の聲を聞いてると、氣が變になつて來ますよ！　今になつてみると、實に無意味ですからな！　私は何もかもすつかり、やりなほさなくちやいかんと、考へるやうになつて來たんです——文明をたてな

ほさなくちやいかんと。吾々はもう一度土を耕やし、普通の政府の下で一緒に生活し、もう一度暗い、意地の悪い顔をして、吾々と異つた言葉を話す他の民族と、國境を越えて、友達になることを學ばなくちやならんです。この世界は、暗黒時代のやうに、混沌の場所になつてしまつたんです。それでゐて吾々は、矢張り生活してをり、する仕事をもつてをり、天氣がいゝと幸福を感じ、雨が降ると侘しく感じてゐるんですぜ、今のところ、このことが何より大事なことなんです。後になれば、野蕃狀態から、極端な反動で、人間がものを考へたり、推理をしたり、自分の生活をもう一度意識的に組織するやうな時代も來るでせう……だが、それは吾々の時代にはやつて來んです。私は、さういふ時代を見ずに死んでしまふでせう。——それは吾々が愛してゐた世界で、そして失つてしまつた世界なんです」

彼は、ひどく感動して私の方を向き、燃えるやうな黑い眼をして、私の腕をしつかりと握つた。「つまり、問題はこゝにあるんですよ——悲しいことですがね、それは、以前に私は法律家だつたんです。此間大佐が私に、何でもない法律の事柄を、訊ねられましたが、私はそれを忘れてしまつてゐたんです。いま貴方と私の黨のことに就いてお話してゐても、私はすつかりぼんやりして——何が何だかわからなくなつてきましたよ。貴方も私の話が、實に不得要領で、雲を摑むやうなのにお氣がつかれたでせう？　何つまりですな。私は、私の主張を忘れてしまつたんです。そして、私の信仰を失くしてしまつたんです。

「四年の間、私はセルビヤの軍隊で戰つて來ました。初めのうちは、戰爭を憎んでゐましたよ。やめてしまはうと思つてゐました。その不合理さ加減に壓倒されてゐました。ところが今では、戰爭が私の仕事になつたんです。

私の生命なんです。私は一日中、あの大砲のことばかり考へて過ごして來ましたよ。夜も眠らないで、砲臺の兵隊どものことを氣にしてゐましたよ——誰それが、忠實に見張りをしてゐるかどうか、砲兵隊の跛の馬の代りに新らしい馬をとりかへねばならぬかどうか、第三號の砲のちよつとした反衝の缺點を、どうしてなほしたらいゝか、といふやうなことにばかり氣をもんでゐたんです。こんな事柄や、食べ物のことや、ベッドのことや、天氣のこと——それが私の生活なんです。たま〳〵休暇で家へ歸つて、家内や子供等に逢ふと、その生活が實に退屈で、この世からかけ離れたものゝやうに思はれるんです。すぐに飽き〳〵してきて、休暇がすんでこちらへ歸つて來て、私の友達と、私の仕事と——私の大砲とを見ると、ほつとしたやうな氣がするんです……實にこれは恐ろしいことですよ」

彼は話をやめた。そして私たちは默つて歩いて行つた。大きな翼をしたこうのとりが、羽ばたきしながら、彼の巢くつてゐる小屋の屋根へ降りて來た。遙か河下の方から突然合點のゆかない銃聲が起つて來たが、やがてそれもやんでひつそり閑としてしまつた。

一九一六年作

ブロオドウェイの夜

彼は、ブロオドウェイと、四十二番街との角に立つた。胡麻鹽の頰鬚を生やして、おとなしさうな口をした、小ざつぱりした男で、鼻の先に人の好さゝうな眼鏡が、ちよこんとのつてゐた。見たところ人道的な立場から軍

備に反對してゐる牧師らしい樣子をしてゐた。だが、彼の高い山高帽の前には「結婚新報」と書いた紙片がくつつけてあつた。それから、同じ紙片がもう一枚胸に下つてをり、更にもう一枚、伸ばした右腕からぶら下つてをり、左の手には、その紙片を山のやうに積んで持つてゐた。少しづゝ間をおいて、彼の口は機械的に開いた。そして牧師のやうな口調で、節をつけて言つた。「えゝ、結婚新報はいかゞで。奥さんか、旦那さんの欲しい方はありませんか。一册十錢。えゝ結婚の樂しみが、白銅一枚。一生の幸福がたつた二十錢の半分」

彼は、全く無表情で、かう言ひながら、通りがゝりの群衆に、おとなしく笑顔をふりまいてゐた。

光りの洪水——白、綠、眞鍮がゝつた黃色、はでな赤——が、彼の身體にふりそゝいだ。彼の頭の上には九呎もある猫が、とてつもない大きな赤い糸の糸卷きにじやれついてゐた。途方もない大きな鷲が、ゆつくり羽ばたきしてゐた。おそろしく大きな齒ブラシが、物々しい前兆のやうに空に現はれた。綠と、赤と、青と、黃との、家の高さくらゐあるスコットランド人が、默つてホーンパイプを踊つてゐた。一人のシャツを着た大男が、幅一ヤードもある手袋をはめて拳闘をしてゐた。きら〳〵光るビールが瓶から白い泡をたててコップの中へ注がれてゐた。眼に見えない指が、眞暗な空に、炎の文字で、家具の名前を書いて行つた。そしてその文字と文字との間には、色のついた炎が、漣をたて、渦を卷いてゐた。

「えゝ奥さんか、旦那さまの欲しい方はありませんか。結婚の幸福が白銅一枚」と、眞鍮のやうな聲がやつて來た。

彼は早瀨の中に立つてゐる岩のやうに、身動きもしないで立つてゐた。劇場は恰度(はね)捌場るところだつた。ダイナマイトをしかけた丸太の群のやうに、二列に、烟を出し、音をたてゝゆく自動車の流れが、ブロオドウェイと

七番街と四十二番街とを充たして、進んだり、とまつたり、また動き出したりしてゐた……電飾された蛇のやうに、電車が、とまつて、がん〳〵音をたてた。

歩道には、春の氷が溶けるやうに、群集が、すれ〳〵になつて、急ぎ歩で岸から岸へ押しつぶされて行つた。白鼬のやうな顔をした、きやしやな男たち、顔の白いきやしな女たち、白いシャツの胸の光、シルクハット、うなだれた花のついたつば廣帽子、黑い髮の上からかけてゐる銀色のヴェール、朱色のダップのついた堅い小型の黑い帽子、繻子のスリッパ、チョッキの端、ゴム靴、赤靴、エナメルの靴、つぎはぎの靴。淫蕩な、刺戟的な香水の匂ひ。金色と青に光る卷煙草の煙。カフエ、レストラン、めつたに聞いたことのないリズミカルな音樂。光、音、汎速な、熱病的な歡樂……はじめ洪水は徐々にやつて來たが、やがて滿潮の勢ひで——ロシアのよりも贅澤な毛皮、東洋のよりも贅澤な絹、パリのよりも贅澤な寶石、ありとあらゆる人々の顔と、眼と身體と欲望——それから急に引き潮になる。そして淫賣婦だ。

「えゝ一册が十錢。一生の幸福が僅か二十錢の半分。」

「君はそれを保證するかい？」と私は訊ねた。

彼は、おとなしい、親切さうな眼つきで私を振りむいて見て、白銅を手にとつてから答へた。

「二頁を御覽下さい」と彼は私に言つた。「寫眞があるでせう？ 讀んで御覽なさい『若き美人、年齡二十八歲、身體頗る健、財產五十萬弗、獨身の殿方と通信を望む、よき配偶者が見つかれば結婚の目的』この新聞で幸福になつた方は何千あるかわかりませんよ。もしうまく行きませんでしたら」——彼は眼鏡の上からじろ〳〵覗いた

――「もしうまくゆきませんでしたらこの白銅はお返しします。」

「君は自分でためして見たのかい？」

「いゝや」と彼はよく考へて答へた。「ざつくばらんに申し上げませう。私はためしたことはありません。」彼はちよつと言葉をきつて、通行人によびかけた。「えゝ結婚新報は如何で、奥さんか旦那様のほしい方は……」

「私はためして見やしません」と彼はつゞけた。「私は當年とつて五十二歳でしてな、五年前の今日女房に死なれたんです。人生といふものはもうすつかりわかつとりますからな、ためして見るわけがありませんよ。」

「馬鹿なー」と私は叫んだ。「近頃は五十二やそこらで人生がしまひになつてたまるかい。ウオルト・ホイットマンやシュザン・ピー・アンソニイを見たまへ。」

「わたしや、貴方が仰言るやうな御夫婦はまだ知りませんがね」と結婚新報の賣り子は眞面目で答へた。「だがね、若いの、「人生の終る時期てえのは、その人がどれだけ生活して來たかどうかによつてきまるんですよ、ところでわたしは十分生活して來たんで」彼は又私から顔をそむけて叫んだ。「えゝ一册が十錢、結婚の樂しみが白銅一枚……」

「わたしの兩親は勞働者でした。おやぢは中央公園の貯水池のポンプ小屋の節動器で殺されちまひ、おふくろは家で内職をやつてたゝめに、肺病にかゝつて死んぢまひました。わたしは或る小間物屋の御用きゝをしたり、ホテルのボーイに住みこんだり、それから夕刊新聞の配達車の運轉手になつたんですが、喧嘩をしてひどくぶんなぐられちまひました――わたしは身體はあまり岩疊づくりぢやなかつたんでね――それから夜學へ通つて事務員に

なりました。方々の事務所をうろつきまはつて、たうとうスミス・テルフェア商會の事務員になつたわけです。これはブロオド街の六番地にある銀行とブローカーとを兼ねた商會です。こゝでまあわたしの生活はほじまつたんで。」彼はまた、几張面に、急ぎもしないで、結婚新報の效能をしやべりたてた。

「二十七の歳に、わたしは、はじめて戀をしました。これが一生涯ではじめての戀でしたよ。そして、そのうちに結婚しました。結婚當時ひどく困つたことや、はじめての子供の生れたことなどは詳しく申し上げますまい。尤もこの子供はまもなく死んぢやつたんですがね――それといふのも、大部分は、わたし等の暮し向きでは、病身な子供を日あたりのよい、風通しのよいところに住ませてやることができなかつたからですがね。

「しかしそれから、暮しむきも大分よくなつて來ました。わたしは、スミス・テルフェア商會の首席事務員といふ格にあがつたんです。その頃までに二番目の子供が生れてゐました――これは女の子でね――でホワイト・プレインズに小つぽけな家をもつたんです。そして家計の方はひどく切りつめてだん〳〵家の代金を拂つていつたんです。」ここで彼は言葉をきつた。「わたしはよく思ふんですがね、自分の經驗から言つても、儉約をするといふことはほんたうによいことかどうかわからないと思ふんですよ。もつと生活を樂しんだ方がよかつたやうに思ふんです。結局は同じところに落ちつくんですから。」彼は深い瞑想に沈んでゐるらしかつた。上の方では混沌とした神經的な光がきら〳〵と亂舞してゐた。白い、踵の高い靴をはいた二人の女がこそ〳〵話しをしてゐる二人の男を肩ごしに振り返りながら通りすぎた。わたしの相手は、又もや自分の商品を呼び上げた。

「でも、どうかかうか、娘は大きくなりました。わたしどもは、ピアノを習はせて、いつか大音樂家に仕立てゝ

この町に電氣の文字で名前の出るやうにしてやらうときめたんです」彼は腕をあげてブロオドウェイの方を指ざした。「娘が五つになつた時に悴が生れました。これは軍人にしてやるつもりだつたんです、軍隊の將官にね。娘は六つの時に死んぢまひました。町の下水管のせゐでね――この工事を引き請けた請負師が買收で仕事をやつたものだから窒扶斯が流行しましてね。」

「娘は死んぢまつたんです――マーといふ娘でしたがね。それからといふもの、家内はすつかり變つちやひましたよ。そこへ運がわるく、また姙娠しちやつたんです。今度子供なんか生んぢや、身體がもたないことがわかつてましたので、八方子供を生まないやうにする手段をさがしたんです。何か方法があるとは聞いてたんですが――それがわからないんです。醫者も何ともしてくれません。で子供は死産、そして家内も命をとりとめることはできなかつたんです。

「あとにのこつたのは、わたしと、赤ん坊のハアバアトです――これはさつき申し上げたやうに將官にする筈の子供です。ちやうどこの時にテルフェアさんの代がかはりましてね、息子さんの方があとをつがれたんです。この人は學校を出たてゞ、能率主義と事務所の整理といふ頭で仕事にとりかゝられたんですな。で私がイの一番に解雇されたといふやうなわけです。何しろ頭はもう白くなつてゐましたからね……それから月掛建物會社へ泣きついて、六ヶ月間代金の支拂を延期して貰つて、そのうちに別の仕事を見つけようつてつもりだつたんです。ハアバアトは十四でした。それに、この子はウエスト・ポイントの試驗を受さけせるつもりだつたのでその準備のために、どうしても學校をひかすわけにはゆかなかつたんです。

「わたしは、市内を隅から隅までさがして見たんですが、新しい事務員の就職口は見つかりません。たうとう銀行地區の近所にある、ペンキと革の會社の夜番になつたんです。勿論給料は以前に貰つてゐたの〻半分にも足りません。家の月掛代金はまた拂ひはじめましたが、とてもつゞかないので、たうとう、うつちやつてしまひました。

「私はハアバアトをつれてこの町へやつて來ました。悴は公立學校へ通ひました。そして十六になつたと思ふとちやうど二ヶ月前のことですが、悴のハアバアトは猖紅熱で死んぢまつたのです。それから、間もなくこの仕事にどうやらありついて、これでまあ安樂に食べて行つとるやうなわけです。」

彼は話をやめた。そしてまた通行人に向つておとなしく呼びかけた。「え〻、結婚新報はいかゞで。結婚の樂しみが銅貨一枚、一生の幸福が二十錢の半分」……

ぎら〳〵光る名前、大袈裟な刺戟的な火焔、跳びはねてゐる娘たちの白い脚――各劇場の正面を飾つてゐる光といふ光――は一つ一つ消えて行つた。模造寶石店のショウ・ウインドウのイリユミネーションはぱつたり消えてしまつた。細君連や、許嫁連はみんな家へ歸つて、あとには女優や多勢の蓮つ葉連が眩ゆいやうに明るい酒場の中でシャンペンを飲んではタンゴを踊つてゐる時刻だつたのだから。家庭科學と、人隱衞生とはまだ空に燃え上つてゐた。だがブロオドウェイはだん〳〵暗くなり、だん〳〵靜かになつた。そしてあやしげな娘たちが、一人づつ、又二人づゝ、八方に眼をくばりながら、おびきこむやうに、明るい所から暗い所へ動いてゐた。暗い所や、町かどには男の連中がこつそりかくれてゐた。彼等は上着の襟をたて、帽子を眼深かに下ろして、けはしい眼で女

どもを貪り食ふやうに見ながら街を歩いてゐた。彼等の口は干乾び、女をあさる熟と昂奮とでふるへてゐた。

「ちよつと、一册頂戴」錆びた鐵のやうな聲が言つた。廣い、短いスカートの、肥つた女で、後ろを編み上げた、踵の高い、灰色の靴をはき、ボタン位な大きさの淡紅色の帽子をかぶり、汚れた白い手袋をはめた太い指で、白銅貨をつまんで出した。暗い通りを三軒もはなれた後ろから見ると、若い女と思はれるかも知れない。だがそばへ寄つて見ると、白茶けた髪に銀色の條がまじつてをり、一面に紅で染めた下には血のけのない死んだ肉の塊り——凹みや皺が眼についた。

「今晩は」と我が友は丁寧に帽子をあげて行つた。「相變らずお達者で結構です。今晩は景氣はどうですね？」

「はじめてわたしがブロオドウェイへ出た頃から見ると、すつかり駄目」と女は首を振り〳〵答へた。「近頃は、ひやかしや文無しばかりよ——全く。シャンリイのそばで、ふりの若い男がやつて來て——食事をしないかつていふでせう。ほんとにあきれちまふぢやないの？　わたしをからかつてるのよ、あとでわかつたんですが。わたしだつてもとは他の娘つこにひけをとらない時もあつたんですからね、馬鹿にして貰ひますまいよ。四十五番街で會つた男が、『どつかへ行かうか？』つて言ふでせう。「わたし『七番通りにいゝとこがあつてよ』つて言ふと『七番！』つとその男は言ふんです。『七といふ數は俺には鬼門だ、ぢや、おやすみ！』とかうなんです。全くお話になりませんさ！」彼女は人の良さゝうに身體を搖ぶつて笑つた。その時に私は彼と彼女のそばに並んだ。

「この若い人はだあれ、ビル？　紹介してよ」と彼女は言つた。「ちよいと、お兄さん、遊んでゐらつしやらない？いや？」彼女は金圓を出して欠伸した。「さうそ、もう歸つて、耳輪でもはづしてやすまなくちゃ。」

「旦那でもさがしながらだらう？」と私は結婚新報を指さしながら訊ねた。

「さうですとも！　夫を探さない娘さんが一人だつてあつて？　あんたも百萬弗も持參附きの可愛いのが見つかつたら、ちよつとこのビルさんにことづけしといてね。ビルさんにや毎晩あひますから。」

「だつてあんたが結婚新報を買つて下さるのは土曜日の晩きりですね。」とビルは言つた。

「日曜に讀むためですもの」と彼女は答へた。「わたし日曜にはほんとに休むことにしてるのよ。安息日にはなんにもしないわ、——なんにもよ。」彼女は誇らしく顔を上げた。「どんなに落ちぶれてたつて、それだけはしたことがないの。嚴格な家庭で育つて、宗教のことにはやかましいんですから。」……彼女は大きな尻をふりながら行つてしまつた。

結婚新報の賣り子は、新聞をたゝんだ。

「どれ、わたしももう歸つて寢ますかな、若いの」と彼は言つた。「おやすみ。あんたは、これから酒と女を漁りあるきになるんでせう」彼は少し憂鬱さうにうなづいた。「まあすきなことをしなさるがいゝ。わたしや、誰が何をしたつて、とがめやしませんよ。」

私は、光と闇との交錯した、頸飾りと耳輪ときらめかしい襟止めに飾られた、襤褸屑と紙屑との散らかつた、地下鐵工事のために穴のあいた、女の袖引が見張りをしてゐる、喧騒の街をぶら〳〵さまよひ歩いた。私の前に、脊の高い、痩せぎすの娘が歩いてゆくのを私は見まもつてゐた。彼女の顏は死人のやうに眞つ蒼で、唇は血のや

うだつた。私は、彼女が三度男に話しかけるのを見た——三度彼女は男の中へ割りこんで、鷹のやうに顔をつき出して、口の隅から彼等に囁いた。

私は足をはやめて、彼女をやり過した。ちやうど私が彼女と並んだ時に、彼女は私を見て、そつけない態度で亂暴に私をひつぱつた。

「やあ！」と私は足をおそめながら言つた。だが彼女はいきなり立ちどまつて、憎々しげに私をにらんで、そつけなく身をひいた。

「あんたは一體誰に物を言つてらつしやると思つてゐるの？」彼女は荒つぽい聲で訊問した。

「これが」と私は言つた。「所謂自然淘汰つていふやつだな！」……

次の女はそれほど箸にも棒にもかゝらぬ代物ではなかつた。三十七番街の角の邊に彼女は立つて私を待つてゐるやうな樣子をしてゐた。私たちは磁石と鐵とのやうに吸ひ寄せられた。そして手を握りあつた。

「どつかへ行つてのみませうよ」彼女は言つた。

彼女は太つた、若い、熱心な女で、見るから精力絶倫な女だつた。私たちが行つたレストランでは、誰一人彼女のやうに踊れるものはなかつた。誰もかもが、彼女をふり向いた——つまらなさゝうな顔をした、厚かましいボーイどもや、葉卷を噛んでゐる胸の平たい男どもや、凡ての物は自分たちを引き立たせるためにつくられてゐるんだといつた風に、不滿足な樣子をして坐つてゐたはでな女たちまで、みんな彼女をふり向いた。彼女は、宵

羽根飾りのついた麥藁帽子をかぶつて、少しすりきれた茶色のスコッチの着物を着て、その場の、生暖かい、金と、鏡と、ヒステリックなラグタイムのはやしの中へ、無法な風のやうにさつとはひつて行つた。

私たちは壁にもたれて、上氣した人たちの顏や、眞白なきやしやな肩をながめ、調子はづれに高い笑ひ聲を聞き、卷煙草の煙やシヤンペンを飲みすごした時の味のやうな匂を嗅いでゐた。二つのオーケストラが、代るゞ〳〵喧ましくわめきたてた。客のダンス——それがすむとプロフエッショナルのダンサーとシンガーとが、テムポの早いリズムにあはせて、痙攣的に脚を動かし、力のない聲で意味のない言葉をわめいた。それから舞臺のスポットライトだけをのこしてすつかり灯が消える。そして醉ひどれの暗闇の中で、私たちは熱いキッスをした。ピカツとまた灯がつく、喧騷が爆發する。わめきたてる言葉、言葉、言葉の渦、パートナーが、ダンス場へかけつける。オーケストラが亂痴氣騷ぎに調子をつける。肉體と肉體とが、亂暴に調子をあはせて振れあひ、しやくれあふ……

彼女の名前はメエと言つた。彼女は自分の名前と住所と電話番號とを名刺に書いて、彼女がかはいがつて貰つてゐる南アフリカの外交官に、若し就職でも頼みたいことがあるならと言つて、紹介狀をこさへてくれた。……メエは新聞といふものをついぞ讀んだことがなかつたので、戰爭のあつたことは、ほんのぼんやり氣がついてゐたゞけだつた。だがプロオドウェイのことゝ來たら何でも知つてゐた。三十三番街から五十番街までのことにかけては生き字引だつた。自分の世界のことには完全に精通してゐた。

彼女は、テキサス州のガルヴエストンから來たのだと自分で言つてゐた——母親はスペイン人だと言つてゐた。そして父親はジプシイだつてことを口籠りながら承認した。彼女はそのことを恥ぢてゐて、これまで誰にも滅多

に言つたことはなかつたのだ。

「だけど、お父さんはこゝいらにざらにゐるジプシイみたいに、うろ〳〵道を歩きまはつて、盗みをしたりするやうな浮浪人ぢやなかつたのよ」とメエは附け足して、彼女の先祖が立派な家柄だつたことを主張した。「あの人は立派なジプシイの家の生れだつたのよ」……

一九一六年作

アメリカ人——マック

私はメキシコのチフアフアの町で大晦日の晩にマックに會つたのだつた。彼はまだメキシコへ來てほや〳〵のチヤキチヤキのアメリカッ兒だつた。私たちがチイ・リイ軒でトム・アンド・ジェリイ酒を一杯やらうと思つて、ホテルを跳び出した時に、古寺のこはれた鐘ががむしやらに、眞夜中の彌撒を知らせてゐたのをおぼえてゐる。頭の上には暑い沙漠の星が光つてゐた。全市中から、ヴイラの軍隊の駐屯してゐる屯所から、遠くの裸山の前哨陣地から、新年を祝ふ嬉しさうな砲聲が聞えて來た。一人の醉つぱらひの士官が私たちの前を通りすぎて思ひちがひをして『キリストのお生れ！』とわめいた。次の街角には一群の軍人たちが、卷布で眼まで包んで、火を取り卷いて『フランシスコ・ヴイラの朝歌』といふはてしのないバラードを唄つてゐた。歌ひ手は、この大將軍の勳功について、自分の番がまはつて來るたびに、新しい歌の文句をつくらねばならなかつた……

教會の正門に、薄暗い廣場の道をとほして、暗い街路の口に、黑衣の女たちが、罪を洗ひ去らうとして集つてゐる氣味の惡い姿がちらほら隱顯してゐた。そして寺院の中からは、薄い赤光が流れ出し——妙なインデイアンの聲が、私がスペインでしか聞いたことのない歌を歌つてゐた。

「中へはひつて祈禱を見ようか」と私は言つた。「きつと面白いにちがひないよ。」

「とんでもない、いやですよ！」とマックは、少し緊張した聲で言つた。「わつしや、他人の宗教におせつかいするないやでさ。」

「君はカトリックかい？」

「いゝえ」彼は答へた。「まあ何でもないでせうよ。何しろ何年も教會へはひつたことがありませんからな。」

「豪勢だね、そりや！」私は叫んだ。「ぢやかつぎやぢやないんだらう、君は！」

マックは少し不機嫌に私を見た。「わつしや信心屋ぢやありませんさ」彼は唾を吐いた。「だが、そこらぢう神樣を打ちこはしてまはるな眞つ平でさ。危いですからな、そんなことをしちや。」

「どうしてあぶないんだい？」

「何故つて、貴方が死ぬとですね——わかつてるでせう……」彼は今度はいやな顏をしてぶり〳〵怒り出した。

チイ・リイ軒で、私たちはもう二人のアメリカ人にあつた。この連中は、何か言ひ出す前には「俺はこの國へ來てから七年になるんで、この國の人間は底の底までわかつてるんだが」と必らず言ふやうな種類の連中だつた。

「メキシコの女と來たら」とそのうちの一人が言つた。「まづ世界で一等ひどい奴等だね。何しろ、一年に二度し

か身體を洗はないんだからな。それに貞操と來たら――まづ絶無さ！　結婚さへしないんだぜ。誰でもすきな野郎をくはへこむのさ。メキシコの女は、何のことはない、みんな淫賣さ！」

「俺は、トレオンで可愛いインヂアンの小娘をものにしたがね」とも一人の方がはじめた。「隨分罪な話さ。何しろ、相手は、俺がそいつと結婚するかどうかなんてまるで問題にしとらんのだぜ！　俺は――」

「みんなその手さ」と相棒が口を出した。「だらしがないよ！　まつたくだらしがない。俺はこの國へ來て七年になるが。」

「貴方、御存じかね」と一方が私の方へ嚴しく指を振つた。「メキシコの野郎どもにこのことを云ふと、奴等は、貴方を笑ふだけですよ！　奴等は全く汚いスカングどもですよ！」

「奴等には誇りつてものがないんだね」マックが陰氣に言つた。

「まあ想像して見ろよ」と第一の同國人がはじめた。「若しお前さんが、そんなことをアメリカ人に言つたら、どんな騒ぎがもち上るかつてことを！」

マックは拳固でテーブルをドンと叩いた。「アメリカの女と來たら、立派なものさ！」彼は言つた。「どいつにしろ、俺にアメリカ女の美しい名を汚すやうなことをぬかしたら、俺はたゞぢやおかねえんだ。」彼はぢろりとテーブルを睨みまはした。そして私たちのうちで、誰一人、大共和國の婦人の名聲を汚すものがなかつたのでつゞけた。「アメリカの女は清らかな理想さね。そして俺たちがさうもりたてゝ來たんだ。俺の聞いてるとこで、誰かアメリカ女の惡口でも言つて見るといゝんだがなあ！」

私たちはガラハド人の會議の嚴かな正義に從つて、トム・アンド・ジエリー酒を飲んだ。

「おい、マック」第二の男がだしぬけに言つた。「お前は、俺とお前とがカンサス・シチイで、あの多せしめた二人の娘つ子のことをおぼえてるかい？」

「俺がおぼえてるかつて？」とマックは唸つた。「それぢやお前がこつちもさつちもならぬ板挟みになつたつもりでゐたことがあるね、あのことをおぼえてるかい？」

「忘れられるもんかい、あれが！」

第一の男が口を開いた。「へん」と彼は言つた。「お前たちは、可愛いメキシコ女のことをさんざ自慢するがいゝさ。だが俺は、きれいなアメリカの小娘を貰ひてえもんだな。」……

マックは六尺ゆたかの大男で、亂暴で、若いものに有り勝ちのとても鼻つぱしの強い男だつた。彼はまだ二十五だつたがいろんな土地も見てゐたし、いろんなこともやつて來た。線路工夫の監督もやれば、ジョージヤで森林の監督もやる、メキシコの炭坑で技師の親方もやれば、牛の檢査係もやり、テキサスで副シエリフをやつたこともあるといつた風だつた。彼はもとヴアーモントから來たのだつた。四杯目のトム・アンド・ジエリイをひつかけながら、彼はぽつ〳〵彼の過去の經歷を話しはじめた。

「わつしが、パーリントンの材木工場へ働きに行つたときは、まだ十六かそこらの小僧つ子だつたよ。兄はもう一年も前からそこで働いてたんで、兄にひきとられて、同じ家で食べることになつたのさ。兄は俺より四つ年が

上でね――矢つ張り俺と同じで圖體は大きかつたよ。だがちつとやさしい方で……しよつちゆう喧嘩をしちやいけないと口癖のやうに言つてたね。さういふたちだつたんだね。俺を打つたことはなかつたね――かんしんに怒つた時でも打つたことはないんだ。俺の方が小さいからだと言つてたよ。

「ところで、その家に小娘がをつて、ずつと前から兄と關係をつゞけてたんだね。それで俺はひどく不機嫌だつたのさ」マックは笑つた。「どうしても腹の蟲がをさまらねえんだ、その娘つ子を兄から横取りしてやらなくちやねえ。で、まもなくさうしたんだ。ところで諸君、その娘つ子がどうしやがつたと思ひますかい？　兄がそいつに接吻をしてる時に、だしぬけにかう言やがるんだぜ『おや、貴方の接吻のしかたはまるでマックとそつくりね！』……

「兄の奴、早速俺んとこへやつて來たよ。喧嘩はしないなんて考へは、勿論どつかへ吹つ飛んでしまつてね――誰かわからない位だつた――眼は火山のやうに火を噴いてゐる。そしてかう言やがるんだ。『畜生俺の娘をどうしやがつた？』兄は圖體が大きかつたので、しばらく俺は怖ぢけづいてゐたよ。だがそのうちに兄は氣だてがやさしくて俺はきかん氣だつてことを思ひ出したのさ。『あの娘が氣に入らんなら出してしまへばいゝぢやないか？』と俺は言つてやつたんだ。

「實に物凄い喧嘩だつたよ。兄は俺を殺すつもりだつたし、俺は兄をやつつけてしまふつもりだつた。大きな、赤い雲が俺の上にのしかゝつて來たんで、俺は、殺氣だつて、狂氣のやうに武者ぶりついて行つたんだ。見たまへ、この耳を？」マックは耳の瘡痕を指でさし示した。「兄がやつたんだよ。俺も、兄の片つ方の眼に一つ喰らはしてやつたんで、それからその眼は見えなくなつたがね。それからまもなく、二人とも拳固をつかふことをやめて、ひつ掻いたり、咽喉をしめつけたり、噛んだり、蹴つたりしあつたんだ。何でも兄は一分毎に牛のやうに呻いてたといふことだが、俺はしよつちゆう、口をあけてわめいてたんだ……それからまもなく、俺が兄の急所を蹴つてやつたもんだから、兄は死んだやうになつて、倒れちまつたんだ。」……マックはトム・アンド・ジエリイを呑みほした。

誰かがもう一杯註文した。マックはまたつゞけた。

「それから、しばらくして俺は南の方へ來るし、兄は西北の騎馬巡査になつたんだ。おぼえてるだろ、ヴイクトリアで六口徑のピストルでインデイアンが人殺しをやつたのを？　兄はそいつの逮捕にやられて肺を射たれたんだよ。ちやうどその時俺は國へ歸つてたのさ――家へ歸つたのはこの一度つきりだ――その時に兄が家へ死にゝ歸つて來たんだよ。……尤もよくなつたがね。今でもおぼえてゐるが、俺が立つ日に、ちやうど兄が床上げしたんだつた。兄は停車場まで俺と一緒に歩いて來て、俺にたつた一言でいゝから物を言つてくれつて頼むんだ。手を出して握手をしてくれつて言ふんだ。しかし俺はくるりと兄に背を向けて言つてやつたよ。『こん畜生ッ！』つて。それからしばらくたつて兄は仕事に歸つて行つたが、途中で死んぢまつたんだ……」

「へえ！」と第一の男は言つた。「西北の騎馬巡査だつて！　そりやいゝ仕事にちがひないね。いゝ鐵砲があつていゝ馬があつて、インデイアンには禁獵期つてえのがないんだから！　それこそ俺のいふ獵といふやつさ！」

「獵といへば」とマックは言つた。「世の中で一番素敵な獵は黑ん坊狩りさね。おぼえてるだろ、俺は、バーリントンを離れてから南の方へ流れおちたんだ。俺は、世の中のてつぺんからどん底まで見ようと思つて家を出たんだ。そして行く先々で喧嘩をして歩いたんだよ。喧嘩があれば中へ割り込むのさ……さうさね、何しろ俺はジョオジアのヂクスヴイルといふ所の近所で綿畑に雇はれて、野郎どもがみんな監督にびく〳〵してるもんだから、ストライキをやつちやつたのさ。」

「その晩のことはよくおぼえてゐるね。俺は部屋の中で國の妹に手紙を書いてたからね。妹と俺とはいつもうまく氣があふんだが、二人は家の他の連中とはどうも一緒にやつて行けさうにないんだ。去年のことだが、妹のやつ、行商人といざこざをはじめやがつてね——俺がそれをとつちめてたらなあ——ところで、今言つたやうに、俺は部屋の中で、石油ランプの光で手紙を書いてたのさ。蒸し暑い夜でね、窓のカーテンはまるで袋のかたまりみたいにのたくつてるのさ。それがそこらぢゆうに爬ひまはるので俺は氣がむしやくしやしてたんだ。突然俺は耳をそばだてちやつたよ、頭の毛はすつかり逆立つて來てね。犬なんだ——ブラッドハウンドなんだ——犬が闇の中で吠えてるんだ。犬が人間を追ひかけながら吠えるのを君たちは聞いたことがあるかどうか知らんが……どんな犬でも夜吠える聲つたら、これ位淋しい氣味の惡いものは世の中に先づないね。ところでこの犬はそれどころぢやないんだ。まるで闇の中に、誰か果し合ひに來る相手を待つて立つてゐて——逃げるといふわけには行かない時のやうな氣がするんだ！

「かれこれ一分間といふものは犬の吠える聲だけしか聞えなかつたが、そのうちに誰か人間かそれとも何物かが

俺の家の生墻へどさりと倒れかゝつて、重い聲吾が、ちやうど俺の窓のとこを走つて通り過ぎ、息をする音が、聞えるんだ。知つてるだろ、强情な馬が綱で首のまはりをしめつけられる時に出す息の音を？　ちやうどそんな風なんだ。

「俺は一足跳びに玄關へ飛び出したよ。ちやうど、犬ともが墻へはひ上るところなんだ。その時、誰か姿は見えないが、わめく奴があるんだ。ひどい皺嗄れ聲で、物を言ふのがやつとやつとなんだ。『野郎どこへ行つた！』『『家のそばを通りすぎて歸つて行つたよ』と言ひながら俺は駈け出した。俺たちの仲間はかれこれ十二人位なんだ。俺はあの黑ん坊の奴が何をしたのかたうとうわからなかつたよ。多分みんなわからなかつたんだろ。そんなことはどうでもよかつたんだ。俺たちは、狂人のやうに、綿畑や、洪水で沼のやうになつてゐる森やを走り拔け、河を泳いで渡り、墻を飛びこえて、普通の人間なら百碼も走ればへと〳〵になつちまふくらゐの勢で追ひかけたもんだ。それでちつとも疲れなかつたんだからね。口からはしよつちゆう涎がたれてゐる——それだけには、ちよつと參つたよ。その晩は、滿月の晩だつたので、廣い場所へ出るたんびに、誰かゞどなるんだ『野郎、あそこへ行きやがる！』で俺たちは、犬が間違へてるんだらうと思つて、影の後を追つかけて行つたんだ。犬どもは、相變らず鐘のやうにキヤン〳〵吠えながら、先に立つてゐる。ところで君たちは、ブラックハウンドが、人間を追ひかける時の聲を聞いたことがあるかね？　まるでラッパだね。俺は二十も生墻を越したんで、向う脛に怪我をする。ジョウジアの樹といふ樹に、頭をごん〳〵ぶつける。それでゐてちつとも氣がつかなかつたんだぜ……』

マックは、チエッと舌うちをして、盃を飲み干した。

「勿論」と彼は言つた。「俺たちが、その野郎に追ひついた時には、犬どもが寄つてたかつて、野郎を八ツ割きにしてるとこだつたよ」

彼は、素晴らしい思ひ出にふけりながら頭をふつた。

「君は、妹さんに出す手紙を書いちまつたのかい？」私は訊ねた。

「書いたとも」マックはぶつきらぼうに言つた。

「俺はメキシコなんかに住みたくないね」マックは膝をのり出して言つた。「この國の奴等には、人情つてものがないよ。人間といふものは、アメリカ人みたいに、親切であつて欲しいもんだなあ」

一九一四年作

エンディミオン

テキサスのプレシディオは、グランデ川畔の荒涼たる草原の灌木林の間に、十二軒の乾燥煉瓦造りのぼろ家と、一軒の二階建の組立家屋の商賣屋とのちらばつてゐる寒村である。北の方には砂漠が、萎びて默々としてゐる大地を、ギラ〳〵する青空へ向けて、ゆつたりとうねり上げてゐるし、平坦な鳶色の河筋は、百ヤードと離れてゐない砂洲の間を、怠けもの〻蛇のやうに、のた打つてゐる。川向うにはメキシコの町、オヒナガの小高い丘が聳えて――古風な教會の白壁や、平らな屋根や、圓屋根が群がつてゐて、この上に回教寺院の尖塔さへあれば、さながら

東洋の町である。その南には、凄然たる荒野が投げ出されて、砂と茘の木とサルビヤの叢とを、大きく盛り上げた平原を展開し、その突端には、とげ〳〵した低い波の皺を地平線上に描き出してゐる。

オヒナガには、勝誇つたパンチョ・ヴィラが進擊して來たので、チフアフアから驅逐された敗殘の聯邦軍が駐屯してゐて、安心の出來る國境附近で、敵を待受けてゐる。「北方の虎」の野蠻な傳說に責めさいなまれた幾千もの市民等は、あの恐ろしい四百哩もの炎熱の平野を横切つて、退却軍の後を追つて來てゐるのだ。彼等避難民の大部分は、プレシディオの周圍の灌木林にキャムプを張つてゐるが、こゝに駐屯してゐる米國騎兵隊の兵站部から食糧がもらへるので、窮乏はしてゐても幸福で日中はすつかり寢て暮し、夜は、夜通し歌を歌つたり、戀をしあつたり、喧嘩をおつ始めたりしてゐる。

プレシディオには、戰爭成金の氣分が素晴しくて、それがたつた一本しかない軍用電線によつて、外界に報道せられる新聞通信に現はれてゐる。砂漠のほこりを被つて灰色になつた自動車は、七十五哩も北の鐵道線路から、運搬道路をうなりながらやつて來て、その邊の原始的な無心さを臺なしにしてしまひ、從軍記者の一團は、こぼしながら、砂地にしやがんで、日に二回づゝ、とても騷々しい記事を二百語だけでつち上げてゐるのだ。國境を越えて逃げて來た金持連中も、こゝに落着いて、自分等の財産の運命を決定する戰爭の開かれるのを待つてゐるし、憲政軍と聯邦軍の密偵共は、そこいら中で、お互ひに陰謀をたくらみ合ひ、米國の大利權會社の代表者共は、取つて置きの袖の下をばら撒いては、しよつちゆう暗號電報を飛ばしてゐる。それから兵器會社の註文取り共は、革命に關係したり、革命をたくらんだりしてゐる者になら、武器を卸でゝも、小賣でゝも、渡してやつてゐるのだ。

それは喜歌劇のプログラムでゝもあるやうに――相手が、市民であらうと、巡警軍隊、代理長官、または米國騎兵であらうと、それとも賜暇歸國中のフエルタ派の士官や、稅關吏や、附近の牧場の牧牛業者や鑛山屋や其他誰であらうと問ふところではないのだ。

ドイツ系の商人のシラー老人は、腰に大形の短銃を縛りつけて、そこら中を吠え廻つてゐるが、彼はだんだん裕福になつてゆくのだ。激增した住民に、食物や衣服や道具や藥品を賣りつけるばかりか、運送業は自分の獨り舞臺なんだから。それに世間の噂だと、彼はポーカー勝負の胴元もやるし、奥の間には內密で酒場も開いてゐるし、店の床や帳場には、一人頭に二十五仙づゝ取つて、六十人もの男を寢させてやつてゐるといふ事なのだ。

わたしは、弓足の、顏に雀斑のあるカウボーイと散歩した。バッカナンといふ男で、サンタ・ロザリアの麓の牧場で働いてゐるんだが、事件が解決して歸れるやうになるのを待つてゐるといふのだ。バックはメキシコに三年もゐるといふのに、メキシコ人が英語を話さないのを氣に病んでゐる外には、これぞといつて、彼が精神的に受けた印象を見出す事が出來ない。(彼の操れるスペイン語といふのは、本能の滿足に役立つ五六語だけなのだ)。そんな彼なのに、時々十二の時に貨物列車に乘つて飛出して來た、オハイオのデイトンの事を口にするのだつた。

見たところ、彼はこの邊では一向珍らしくない型の男で、軀は頑強で、勇敢で、頑固で、上品な感情にはいさかゝ動じないといふ手合だが、その彼から、逢つて間もなく、先生の話を聞かされたものだ。バックにはせると、先生はブレシディオ草分けの住民で、素晴しい外科醫で、それ以上に世界有數の音樂家の一人だとの事である。だが、何よりもわたしの目に立つたのは、バックが自分の友達の事を話す時の誇りと愛慕の情とであつた。

「先生は足の折れたのを、木片れと馬の毛を搗り合せた繩で癒す事が出來るんでさ。」バックの話は眞劍だ。「毒蜘蛛に刺されたのなんざあ、俺等が一杯やらかす程のこともねえんです。――それから音樂と來た日にやあ、何だつて奏けるんですからね。本當に。俺等はさう思ふんだが、ニュー・ヨークやクリーヴランドからやつて來た人だつて、先生の音樂を聽いた日にやあ、ブレシデオの砂漠の中でぢあなしに、今直ぐにでも歌劇場に出てやれるつて思ひますよ。」

わたしはつり込まれて、「先生つて誰のことなんだよ?」と聞いて見た。

バックは、驚いたやうな顏をして「先生は先生でさあ。」

その夜、夕食後に、わたしは、砂原を乾燥煉瓦造りの先生の家の方へ出掛けて行つた。素晴らしく星の輝いてゐる夜だつた。何所やら川上から、五六發のだらけた銃聲が流れて來た。灌木林では、到る處に避難民の焚く火がはためいてゐて、女達は鼻聲で、子供達に歸つて來いと呶鳴つてゐたし、娘達はまつ闇な中で笑ひこけ、男達は拍車をガチヤつかせて、砂の上を通つて行つた。そして低音で伴奏をつけるやうに、密偵共がシラーの店の玄關口でコソ〳〵といつ迄も謀し合はせてゐた。まだ近くに來ない內から、壞れた手風琴で、耳慣れたタンホイザーの序曲をやつてゐるのが聞えた。やがて間もなく家の前まで來たのだが、そこですんでの事で、眼深かに肩掛を被つて、二列になつて固くなつて聽きとれてゐるメキシコ人に躓くところだつた。

白壁の室の中には米國騎兵隊の士官が二人、高尙な餘興と心得てゐるものを、享樂してゐるのだといつた恰好で、眼をつぶつて坐つてゐた。彼等は風雅な文明から遠く離れた國境にある事八ヶ月なのだから、この種の音樂

を聞くことに、文明に浴するやうな氣がするのだ。バッカナンは、玉蜀黍の軸で造つたパイプを吹かせながら、膝掛椅子にのび〳〵と掛け、足はストーヴの上に置いて、先生の指が鍵盤上で跳躍するのを、いかにも嬉しさうに眼を輝かせてゐた。當の先生は、こちらに背中を向けて坐つてゐたが、白髮頭のづんぐりした哀つぽい小柄な軀である。ところで手風琴の樂鍵だが、いくつかは丸で音を出さないし、その他のにしたつて、かすかに喘ぐやうに鳴るのや、調子外れなのばかりだ。先生は奏きながら、嘆れ聲で歌つては、樂の調べに有頂天になつてゐる人のやうに、軀を前後に搖るのだつた。

室の樣子も大したものだ。片隅には精巧な硝子張りの手術臺の殘骸が置いてあつて、その後には、錆びついた外科の手術器具の並んでゐる箱が立つてゐる。その一番上の棚には、丸藥壜がぎつしりつまつてゐて、その箱と並んで、ピアノに編曲された歌劇拔萃曲と、四重奏用に編曲されたベトーヴエンの交響樂曲の一部と、實用診斷學が二册、それに手製のモロッコ皮で表裝したボロ〳〵のジョン・キーツの詩集との五册が立てかけてある本棚がある。紙を積み上げた机もある。そしてその外の所には、壞れた程度の一樣でない樂器——手風琴や、ヴァイオリンや、ギタや、フレンチホルンや、コルネットや、ハープが置いてあるのだ。それから片方の眼が白內障にかゝつてゐる毛の拔けた小さなメキシコ犬が、先生の足下で、鼻を天井に向けてしつきりなしに吠えてゐる。

先生は、鍵盤上に躍る節くれ立つた指に合はせて、口の中で歌ひながら、次第に激しく奏き出したが、突然、雷鳴のやうな曲調のまつ只中で、ぱつたり止めて、半ばこちらへ軀を向け、口髭の間でぶつ〳〵やりながら、兩手を突出して、

「わしの手は短か過ぎるて、わしには碌なものがないのぢや、あゝ」と溜息をついた。「フランツ・リストの指も短かゝつた。が、わしの程ぢやなかつた。頭の指は短かうはなかつたて……」と後は譯のわからぬつぶやきとなつて仕舞つた。

バックはガタンと足を落して、膝をたゝき

「先生ー」と呶鳴つた。「お前さんの手が大きかつたら、何だつて出來ねえものはねえんだ！」

先生は退屈さうに、床を見てゐた。小犬がその膝の上に足を乘せて、啜り泣きをやると、老人はふるへる手をその頭の上に置いてやつた。二人の士官はぶつきら棒に出て行つた。と、突然、先生は大きなパイプに火をつけて、唸るやうにブツ〳〵と獨語をやつたので、煙は口髭の間から、鼻から、眼から、耳から滲み出た。

バックは、一種尊敬の念をもつて、わたしを紹介した。先生はうなづいて、見えさうもない眼で、わたしを見た。丸い膨れぼつたい顏一面に、白い鬚の剃りあとがあつて、黃色いむしや〳〵の口髭の間からは、教育を受けた人の發音が、意味の判らぬ事をしやべり出すのだつた。先生は強いブランデーの香をさせてゐた。

「成程——お前さんは、この邊の——砂蚤とは違ひますわい。ムニヤ〳〵」と先生は、眼をくしや〳〵やりながらいつた。「文明世界からですな。文明世界から。わしの評判もほんのちよつとだつたと傳へて下さいよ。ムニヤムニヤ。」

誰も、先生の事は、醉つ拂つてゐる時に、しやべるのより外に知つてゐなかつた。先生自身でさへ、自分の過去を忘れてゐるらしいのだ。先生の治療を受けるのは、大部分がメキシコ人だが、その連中の間では、とても先

生は好かれ者で、その證據には治療代の拂ひが良かつた。先生はいつだつて、どんな治療にでも同額の請求しかしないで——挫傷の手當にだつて、手足の切開手術にだつて、分娩にだつて、咳止めの水藥を一服盛るのにだつて、一律二十五錢なのだ。だがその先生が、ロンドンのこと、クイーンス・ホールや音樂院のこと、それから印度や埃及にゐたことや、ガルヴストンへ病院長となつて赴任して來たことなんかの話をするのだ。その他には、メキシコの町の名や、譯のわからぬ人のことしかいはないので、プレシディオの人達が、先生に關して知つてゐる事といへば、マデロ革命當時、風來坊然として、醉つ拂つて國境を越えて來て、以來相變らず風來坊然として醉つ拂つて滯在してゐるといふだけなのである。

先生は突然「マイダンでな、あの連中の馬車に乘つてな、こゝへ……」と、暫く出鱈目をしやべつてしやつくりを始めた。「さうだよ、彼女はそれで殺られたのだよ、だがわしは無事ぢや……」

わたしは腰を降して、先生の過去の生活を開く鍵を、探り當てようと、話しかけて見た。

「先生は、ロンドンの音樂院と御關係がおありだつたさうですが？」

先生は飛上つて、兩手を握りしめながら、邊りをギョロ〳〵見廻して「誰がそんな事をいひましたかい？」と唸るやうにいつたが、また腰を降して「ところが今ぢやあ、プレシデイオの年を喰つた旅醫者ですよ」といつて、別段嫌な顏もせずに、笑つて口を閉ぢた。

わたしが埃及のことで、鎌をかけて見ると、「あの頃にやあ、アレキサンドリアの港には、帆檣が林のやうに立つてましたよ。ぎつしりとな……」といつた。次に印度の話をすると、たゞ「ダージリングぢやあ——芝生の大

きなヒマラヤ杉のところに、あゝ、ムニヤ〳〵」と口ごもるだけだつた。

「ガルヴストン！」と叫んで、先生は突つ立つた。「さうだ、ガルヴストンにゐた時に、大水が……女房は溺れて……」といつたが、大して感動してゐる樣子もなく、ヒョロ〳〵と本棚の方へ行つて、まるで子供のするやうに一册の實用診斷學を取出した。その見返しを見ると、「一九〇一年九月十八日、ガルヴストン」と書いてあつて、その下に洪水に關する新聞の切拔が氣違ひじみて貼つてあつた。わたしはそれをもとの本棚に返して、さり氣なくジョン・キーツの詩集を取上げて開いて見た。表紙裏に、殆ど消えかゝつてゐるが、インキで

「一八七八年六月

エンデイミオンに贈る——

わが身をも魂をもこめて——

エー・ド・エチ・ケイ」

と書いてあるのであつた。

エンデイミオン——彼が！　曾て、いかなる婦人に對して、この老いさらばへた敗殘者が、エンデイミオンだつたのであらう？　一八七八年といへば、彼が二十五六の、多分、美しい、理想家だつた頃だが。

一種うめくやうな唸り聲が聞えた。そして立上つた先生は、前かゞみになつて、不思議相にわたしを凝視るのだつた。

「お前さんは、何をお持ちぢや？　何を、下へ置きなさらんかい」と、わめかんばかりにいつて、わたしの方へよ

ろめきながらやつて來たので、ソッとそれをもとに返すと、今度はわたしの兩手を握つて、眼のあたりまで差上げ、それから落すやうに下へおろして、くるりと背中を向けた。

「何でもないのぢや、わしは忘れてしまうた……モンテリーで失つたのぢやあ」とつぶやいた。がそれでもぢつと立つたまゝ、獨りでブツ〳〵やり出した。「三十年も溺れ死んでゐたのに——どうして生へ還つたんだ？　も一度溺れつちまへ！」それからしやがんで例の樂器の間から、古びた手風琴を取出し、も一度椅子に腰を降して、突然、ベートヴェンの第三交響樂と思はれるのを彈き初めたが、素晴らしいものだ。

が、それもほんのちよいとで、直ぐ止め、頭を振つて「エロイカ！」と溜息をついていふのだつた。「エロイカ！　ムニャ〳〵。お前達みたいな砂蚤には、高尚な悲劇が判るもんかい。わしは年を取つた。一生かゝつて求めたが、見つからなかつたのぢや——。」では先生は何を求めたのだらう？　名聲か？　財産か？　戀か？　それとも眞理か？

翌晩、先生とバックとわたしの三人は、メキシコ流に一室しかない料理屋で、夕食を共にした。そこの主人は以前川向うで小牧場を持つてゐたが、エンリク・クリールが儲けて、ウイリアム・ランドルフ・ハーストに賣りつけたのがそれなのだ。

拍車のついた長靴をはいた、日燒けのした大男達が、次ぎ〳〵にはひつて來たが、みんなテーブルの角のところで、足をとめて「先生、今晩は」と挨拶した。メキシコ人の給仕も、先づ最初に先生のお給仕をしたが、その朝

自動車でやつて來たばかりの金持の家畜屋が、その給仕をつかまへて「怠け者のメキシコ野郎」とどなりつけたので、地廻り連中の一人は、その家畜屋によりかゝるやうにして、腕のところをたゝきながら、

「やい、新米、お初は先生に行くんだい。手前なんざあ、それからなんだ」と早口にやつてのけた。

先生は、その朝二日醉氣味でおそくなつて起き、アガーデイエントを既に六合ばかりもやつてゐたが、一向その利目がないので、むつつりして、みんなの挨拶にも、うなり聲で答へるのだつた。

わたしの隣にゐたのは、町から來た人間で、顎のくぼんだ、はき〳〵した小男だつた。商賣はカンサス・シテイーの炭筆引伸家庭寫眞會社の代理人で、プレシディオでメキシコ人の註文を受けたり、寫眞を撮つたりするのだが、なか〳〵繁昌するので、すつかり上機嫌だつた。一座の連中は、彼が顏こそ生眞面目だが、內心はホク〳〵しながら、他愛のない自慢話を吹き飛ばすのを謹聽してゐた。後でバックが聞かせてくれた事だが、メキシコ人は寫眞に寫るのが大好きで、だから何だつて註文するし、何にだつて署名するのだが——金を拂ふのは、いやなのださうだ。

「寫眞に撮るにやあ、メキシコ人は素敵ですぜ。十五分間もじつとして、動かないんですからね」とこの代理人もいつてゐた。

先生は、突然頭を上げて、ちつと許り譯の判らぬ事をブツ〳〵いつてから、今度ははつきりと

「だから、わしのは仕上らなかつたんだよ。フレッデイ・ワットの註文通り、じつとしてゐるのは、容易じやないからな。ムニャ〳〵」といつた。

わたしは、すかさず「ロンドンでの事ですか」と訊いて見た。

「ハムステッドさ」と先生は、ぼんやりして答へて、「あの男のスタディオは、ハムステッドにあるんだ。」

で、先生がポーズをとるだけの辛抱が出來たら、先生の肖像は、ウイリアム・モリスや、ロセッチや、ジョーヂ・メレディスや、スウインバーンや、ブラウニングなんかのと一緒に、ナショナル・ギャラリーにかけられてゐたかも知れないのだ。

そこでわたしは、しんみりと「先生は、ウイリアム・モリスを御存じですか」と訊ねた。

「まやかし者だよ」と、先生は突然テーブルをなぐりつけて叫んだ。わたしは熟心に、その他の連中の事を聞いて見たが、先生はまるで聞いてゐないやうな樣子で、相變らずばくついてゐた。が最後に、「デイレッタント共だ——けちな素人の世の中さ」とどなつて、それつ切り何もいはなかつた。

寫眞會社の代理人は、一座の連中の方を向いて頭をたゝいて見せ、先生の方へは拇指をぐつと引つぱつて見せて「正氣の沙汰ぢやありませんな」と、わざと齒をむき出していつた。と、じいつと敵意をこめて睨む眼が、彼の眼と出喰はした。テーブルの端の方にゐたむつつりしたカウボーイなんだが、それが代理人の方にパンのかけらを突出して、手短に

「やい、唐變木野郎、默つてる方がいゝぜ、先生はおいらの仲好しなんだし、手前なんかゞこれから覺え込むよりやずつと澤山忘れちやつたんだから。」

先生は、一向氣にもとめぬ風だつたが、やがて外に出た時に、何だか砂蚕共の事をブツ〳〵やつてゐた。わたし達は、プール臺の置いてある丸太小屋の方へ出掛けたが、道々先生が「文明世界」から落ちて來たのは、何時の事だか探つて見ようとした。が、先生は、バスチュールの名前には返事をしたが、エールリッヒや、フロイドや、其他近世醫學者の名前は、先生にとつては何の意味もないものだつた。音樂に關しても、サン・サーンは、確に面白い青年だといふだけだつたし、シトラウスだの、デビュッシー、シエーンベルヒだのはもとより、リムスキー・コルサコフさへもが、先生にはギリシヤ語同樣だつたが、どういふ譯か、ブラームスは嫌だつた。

わたし達がはひつて行つた時分、プール室では勝負が始まつてゐたが、誰かゞ「先生の御入來だよ」と叫んだので、やつてゐた連中はキューを置いてしまつた。先生とバッカナンとが、グラ〳〵するテーブルでやつてゐる間、わたしはその傍で腰を掛けてゐた。老人の腕はとても大したもので、球が見えさうもないのに、どんな難いところでだつて、決してミスをしなかつた。だからバックの方には、なか〳〵番が廻つて來ないのだ。高い廣つばの帽子をかぶつて、恐ろしく色のはげた肩掛と、一弗銀貨ほどの大きな締鐵と拍車をつけたメキシコ人達は、ぐるりと壁を圍んで地面にギッシリと列を作つて見物してゐたが、先生がうまくやる度に、靜かな賞讃の合唱を放つた。そして先生が、手さぐりした拍子にパイプを落しでもすると、十本もの手が、それを拾ふ光榮に浴せんものをとからみ合ふのだつた。

軟かな、深い、びろうどのやうな夜の中を、わたし達は砂漠を拔けて家路についたがかなり行つた時分に、急に先生は立止つて

「來いよ、トビー！　來いよ、トビー！」とまつ闇な中で、體をかゞめて、四邊をのぞくやうにして叫ぶのだつ

た。「わしの犬にはぐれたぞ。何所にゐるんぢやらう？　プール屋へ歸つたに違ひないて、トビー、來いよ！　わしは、引返して見付けて來にやあならんわい。」

「先生、いやになつちやうな。お前さんの犬は無事に歸つて來ますよ。おいらが代りに行つて、連れて來ますよ、お前さんは疲れてゐるんだから。」バックは、我慢が出來ないでいつた。

先生は、ブツ〳〵いひながら頭を振つて、「わしの犬は、わしが見つけにやならんわい、わしでなきやあ、誰にも見つかりはせんよ、兩方で探し合ふんだて——人手をからんでな、」と引返していつた。

バックとわたしとは、路傍にしやがんで、煙草の火を點けた。二人の周りには、音と香の豐かなエキゾーティックな夜が深かつた。バックは不意に話し出した。

「おいらは、親父の事は何にも憶えてゐねえんだ。ばくれん女の息子だつて事の外はね。だが、年寄りつて奴はみんな親父みたいだと思ふんだ。實際、おいらは、先生に出喰はすまでに、間違つた事をしねえ男つて奴を見た事あねえ。耶蘇教の人だまかしなんてものは、今日の日まで、おいらに用はねえんだ。だが、こゝの先生はね、素晴らしくいゝ所と、しよつちう地獄のやうな責苦とが、一緒になつてゐるつていふ風の人なんだ——さうだ、おいらには分らねえんだが——だが、おいらは——おいらは先生が好きなんだ。それから偉いや——先生は、ほんたうに偉い人なんだ。何所だつて偉いんだ。こゝいらの馬鹿野郎は、先生は氣違ひだつてやがるが、おいらは時々、さう思ふんだ。おいらの方がみんな氣違ひぢやあねえかつて……先生はしようちゆう酔つてまさあ、先生はね、だが先生のいふ事は何だつて、どんな非道い事だつて、おいらには神様の眞理のやうに、胸にこたへるんだ。」

バックは口をつぐんだ。先生のづんぐりした姿がよろめきながら近づいて來るのが、その蹠のところでヨチヨチやつてゐるトビーと一緒に、ぼんやり闇の中に現はれて來た。わたし達は、獸つて立上つて、先生を中に挾んで歩き出した。先生は、わたし達には氣をとめてゐない風で、ひとりでブツ〳〵いつては、しやつくりをやつてゐた。が、突然、とてつもない溜息をついて、兩手を前に突出し、そして貧弱なかすんだ眼を天上に向けて、いつた。

「ヤレ〳〵。異教徒の夜は、イスラエルの子等の畫なり！」

一九一六年作

メキシコ風景

一、冒險屋

市場のそばで、わたしは、小な塊になつてベンチにより掛つてゐる五人のアメリカ人に出喰はした。その中でゲートルを着けたきやしやな青年と、平べつたいメキシコ帽を被つて聯邦軍の士官服を着てゐる男だけは別だが他の連中の服裝と來ては、とても非道いぼろばかりだ。足は靴からはみ出てゐるし、靴下といつてもほんの名ばかりのものだし、鬚はのび放題。まだ子供の一少年など、ぼろ毛布で造つた吊革に劍をぶら下げてゐるのだ。連中は、わたしの爲に、席を譲つて呉れ、わたしを取卷いて、何所を見てもいやなメキシコ野郎ばかりの中で、ア

メリカ人に逢ふのは、何ていゝ事だらうとわめくのだつた。

「君等は、こゝで何をしてるんだね。」わたしは訊ねた。

「僕等は戰爭當込みの冒險屋なんですよ。」腕を負傷してゐる少年が答へた。

「いや――」別のが口を挿んだ「僕等は――」

「つまりこんな風なんでさ」と軍人らしく見える青年がやり出した。「僕等はザラゴサ旅團に加はつて戰爭してたんですよ――オヒナガの戰爭にだつて何だつてね。ところが、今になつてヴイラから、兵卒級のアメリカ人をみんな免職して、國境に送還しろつて命令が來やがつたんでさ。怪しからん話ぢやありませんか。」

「奴等は、昨夜、光榮ある免職を喰はせて、兵營からおつぽり出しやがつたんだ。」赤毛の片脚しかない男がいつた。

「だから、僕等にあ、寢る所もなけりや、食ひものもねえんですよ。」みんなから少佐と呼ばれてゐる灰色の眼をした少年が、突然口をはさんだ。

「止せやい。仲間に物乞ひするなんざあ。」と、ブリ〳〵して兵隊が叱りつけた。「俺等は、今朝、メキシコ銀で五十弗づゝ受取るんぢやあねえか。」

わたし達は、近くの料理屋へ出掛けて行つて、暫くそこにゐたが、やがてまた前のところへ歸つて來ると、わたしはみんなに、これからどうする心算なんだと聞いて見た。

「僕は慕しき米國へだー」いま迄何もいはなかつた色黑で男つ振りのいゝアイルランド人が先づ口を切つた。「桑

港へ行つて、も一度トラックを運轉するんでさ、メキシコ野郎にも、ろくでもねえ食ひものにも、良くねえ戰爭にも、もううんざりでさ。」

「僕は米國陸軍から、二度名譽の免職を喰はされたんだ。」軍人らしい青年が、自慢さうにやり出した。「僕は、スペイン戰爭中、ずつと軍隊にゐたんだ。だから、こん中ぢやあ、たつた一人の軍人なんだ。」他の連中は、せゝら笑つたり、佛頂面をしてゐた。「僕は、國境を越したら、も一度軍隊に入らうと思ふんだ。」

「俺は違ふんだ。」と片脚の男がいつた。「俺は殺人罪を二度やつたつてんで、お尋ね者なんだ。――だが俺は、神かけて、そんな事あやらねえんだ。――皆が仕組みやがつたんだよ。俺は、可哀想にアメリカぢやあ、めぐり合はせが良くなかつたんだ。みんなは俺に、飛んでもねえ濡衣を被せねえ時にやあ、浮浪人だつてんで、牢屋にぶち込みやがるんだ。だが、俺にや、曲つた事なんかちつともねえんだ。」彼は眞劍だつた。「俺は稼ぎ人なんだが、ただ仕事にぶつゝからねえんだよ。」

少佐は、嶮しい小さな顏と眼を上げて「僕はウイスコンシンの感化院を飛出して來たんです。」といつた。「だからエル・パソではお巡りにねらはれてるやうな氣がしたんです。僕はしよつちう誰かを鐵砲で殺つゝけたかつたんで、オヒナガぢややつて見たんですが、まだ物足りないんですよ。みんなは、メキシコの市民證に署名すりや、こゝにゐられるつていふんですから、明日の朝、署名しようと思ふんです。」

「馬鹿な。」他の連中が叫ぶやうにいつた。「くだらねえ事だよ、米國の干渉が始まつて見ねえ、手前は同じ國の人間に鐵砲を擊たなくちやあならねえぢやねえか。手前だつて、おいらに、メキシコ野郎になれつて署名させる氣

はあるめえが。」

「そいつあ、何でもねえこつた。」少佐はいつた。「僕が米國に歸へれば、僕の名前がこゝに殘つてるだけなんだ。僕は賭博でしこたま稼いでから、ジョージアへ歸つて、少年工をつかつて工場を始めようと思ふんだよ。」

突然も一人の少年が泣き出して、「僕はオヒナガで、腕を打ち貫かれたんです。」とすゝり上げた。「だのに今になつて、僕を一文なしで追つ拂はうつてんです。僕は仕事が出來ないんです。エル・パソに行かうものなら、お巡りに監獄へ放り込まれるでせうよ、僕はお父つつあんを手紙で呼寄せて、カリフオルニアの自家へ連れてつて貰はうと思ふんです。折角去年飛出して來たんですのに。」

「ねえ、君」と、わたしは忠告してやつた。「ヴイラが兵卒級のアメリカ人を追出すつてんなら、こんな所にゐない方がいゝよ。干渉にでもなつたら、メキシコの市長だつて事が、ちつともよかあないんだから。」

「多分、お前さんのいふ通りですよ」と少佐は考へ深さうに賛成した。「やい、ジヤック、泣くのを止さねえか。僕は大至急ガルヴストンへ行つて、南米行きの船をとつつかまへるんだ。ペルーに革命がおつ始つたつてえからな。」

軍人は三十歳前後、アイルランド人は二十五歳、他の三人は十六歳から十八歳の間といふ年配だ。

そこでわたしは、「君等は、何が望みで、こんな處へやつて來たのだ？」と訊ねて見た。

「刺戟でさ」と、軍人とアイルランド人とが答へた。

三人の少年は、饑餓と辛苦のまざ〳〵と見える顏を、じつと眞劍にわたしの方へ向けて、同時に「分捕品なんです」といつた。

わたしはこの連中のぼろ〳〵の着物を——幾月も給料が渡らないのに、強烈な欲望を抑へて、愉快に叫ぶぼろ着の義勇兵の一團が、市場を練り歩く姿を、ちらと見た。……自分達のやつてゐる戰爭の原因を輕蔑し、貧乏やつれのした國民でゐながら陽氣なのを（それはとんと彼等にはのみ込めない事なんだが）せゝら笑ふ彼等こそ、この情熱の國では、哀れにも似つかはしくない存在なのではある！　わたしはそこから行きがけに「ついでだから聞き度いが、君等の所屬團體は何ていふんだね、君等は自分で何ていつてるんだね？」と聞いて見た。

それに答へて、赤毛の青年はいつた「外人志願兵つてんでさ。」

二、日傭取り

わたし達は、黑い灌木に被はれて、處々にヒョックリと仙人掌が生えてゐる、盛り上つた一聯の砂地を越えて擴つてゐる砂漠に入り込んでしまつた。……夜は、頭上一點の雲なき天心めがけて押迫つてゐるが、地平線はまだどこも明光に輝いてゐた。がやがて、晝の光は拭はれて、星が狼煙のやうに、天空に輝き出でた。

眞夜中になつた頃、わたし達の進んでゐる道が、突然灌木の茂みの中で消えてしまつてゐるのを發見した。どこかで本道から、外れたのだが、騾馬がヘト〳〵になつてゐるので、水のない露營をやるより外はなかつた。

そこで騾馬を解いて、飼料を當てがつてから、火を焚いたが、その時、どこやら矮柳林の中で、忍びやかな足音が聞えた。

「誰だ」アントニオがいつた。

茂みの中から、さゝやかな込み合つた音がして、それから人の聲で、遠慮勝ちに「何驚の人かね？」と訊ねた。

「マデロ黨だ」といつたアントニオが、續けて「行け！」

二人のぼんやりした姿が、殆ど音もなく、火影のやつととゞくあたりに現はれた。近づくと直ぐ、ズタ〳〵の毛布にしつかりとくるまつた二人の日傭取りなのが判つた。一人は皺だらけで腰の曲つた老人で、手製の草鞋をはき、ぼろ〳〵になつたズボンが、萎びた脚にぶら下つてゐる。いま一人は、非常に背の高い、裸足の青年だ。二人は、慣れ〳〵しく、太陽のやうな暖かさと、子供のやうに熱心な好奇心を持つて、近づいて來て手を差伸べた。わたし達は、念の入つたメキシコ流の作法で挨拶して、かはる〴〵二人と握手した。

最初、彼等は一緒に食事をしないかといふのを、丁寧にことわつた。が強つてすゝめたので、結局わづかばかりのオムレツと肉薬椒とを受取つた。二人とも恐ろしく腹が減つてゐるのに、それを見せまいとする有様は、滑稽にもまた慘めであつた。

食後、彼等は全くの親切氣から、水を一ぱい汲んで來てくれたが、やがて暫く焚火のそばに來て、わたし達の卷煙草を吹かしながら、火に手をかざすのだつた。わたしは、二人の肩掛が肩にかゝつてゐた樣子や、その前がはだけて、結構なぬく味が痩せた體にとゞいた樣子や——老人ののばした手が、とても節くれ立つてゐて時代のついたものだつた事や、赤い焔が若者の頸のあたりを輝かせ、その大きな眼に火を燃えたゝせた事などを今でも思ひ出す。……わたしは、ふとこの二人の人間こそ……慇懃で、愛想がよくて、辛抱强くて、貧乏で、とても永い間の奴隷で、なか〳〵の理想家で、間もなく自由になるこの二人こそ、メキシコの象徴だと思つた。

「初めお前樣方の荷馬車が、こつちさ來るの見やした時にやあ、氣が減入りましたゞよ」と老人がニコ〳〵していつた。「お前樣方を兵隊だ、大方、何疋も殘つてねえ山羊を徵發に來たゞと思ひやしたよ。この二三年の内に、どつさり兵隊が來ましてな——どつさりな。大抵は聯邦軍でな——マデロ軍はひもじくならねえぢや、來やあしやせんよ、可哀想なマデロ軍でがすよ。」

「さうでがすよ」と青年が口を挿んだ。「わしがとても可愛がつた弟は、トレオンの近所で、十一日も戰爭をやつて、殺されやしたよ。メキシコぢやあ、死人が何千も出やしたが、まだこれからも何千人かやられるこんでせうて。三年の月日は、長うござんすよ。長過ぎるでなあ。」

老人はつぶやくやうに「やれ〳〵」といつた。

「だけんど、その内にやあ……」といふのは青年だつた。

「北の方の米國ぢやあ、わし等の國が欲しいつて事ぢやねえでがすか——メリケンの兵隊共がその内にやつて來て、おしめえにやあ、わし等の山羊を奪つて行く事でがんせうて」といふ老人の聲は震へてゐた。

「金持のアメリカ人が、わし等からひつたくつて行くだ」と青年が後を續けた。「金持のメキシコ人がわし等の物をとるのと、ちつとも違はねえだよ。」

老人は身ぶるひして、やつれた軀を火の傍へ持つて行つて「わしはいつも不思議に思ふだがねえ」と穏やかにいふのだつた。「どうしてまあ、金持は、しこたま持つてゐるのに、そんなに欲しがるんだかねえ。それに貧乏人は、何一つ持つてねえのに、一向慾がねえんだかねえ、ほんの四五頭も山羊がありや……」

彼のつれは、貴族然と顎をしやくつて、物靜かに笑ひながら「わし等あ、この小つちやな國から、外へ出た事がねえでがすよ、ヒミネスにせえ行かねえんでがす」といつた。「みんなのいふにやあ、北にも、南にも、東にもどつさりいゝ土地があるつてこんだが、こゝはわし等の土地で、わし等はこゝが好きなんだて。祖父さまから、親父から、わし等の代まで、長年の間、金持共は穀物をかき集めちやあ、わし等にや食はせねえでしつかりと握つてゐるだよ。奴等の同胞の方さ、その手を開かせるにや、××れ騷ぎでもやるより外はねえんだ。」

焚火は燃え落ちてしまつた……。

一九一四年作

小國民の權利

ブカレストのブルガリア領事館で、旅券の査證を受けてゐた時、フランクも同じ用件でやつて來たのだが、一目見るなり、わたしには、彼が米國人だといふことが判つた。彼の性格は、すつかり潮のやうに流込む移民の感化を受け、その鼻と顎の恰好は、レイエンデッカア兄弟の影響を受け、その顏つきと歩き方とは、うぶで擦れてゐない。毛はブロンドで、若々しいし、體格は恰好がよく、ルーマニアの仕立屋が好んで使ふ英國製のスコッチ紡ひの服につゝまれてゐる軀は、野獸のやうに經濟的に組立てられてゐて、まだ弱つてゐない大學の短距離選手のそれであつた。

彼は注意して人を見るといふ方でなかつたので、たゞ動物のやうに本能的に、わたしを同國人だと嗅ぎつけてアングロ・サクソンが外國人や劣等國民の前で挨拶する時の、あの優越感で聲の調子を變へて、「やあ」と話し掛けて來た。彼は、米國人をさへ邪推するやうになつた程、長いこと本國を離れてゐるので、とても話好きで、わたしが一時半の列車で、ソフイアに行くのなら、一緒に出掛けたいものだといふのだつた。彼は、スタンダード・オイルの傍系のロマノ・アメリコ石油會社の社員で、プロエシチ附近の油田に、二年間勤めてゐたのだが、やがて肩をならべて街を歩いてゆく道すがら、彼は英國へ行つて、軍隊に入つて出征するつもりだといつた。

わたしは驚いて「どうしてかね？」と聞いた。

彼は、まご〳〵した眼つきで、わたしの方を見て、頭をふりながら眞顏で「實はね」と切り出した。「プロエシチの郊外には、大分英國人がゐるんだが、僕はその連中から、すつかり聞いたんだよ。僕はどうだつていゝんだがね——多分僕等のキャムプで、みんながいふやうな出鱈目かも知れないんだが、僕は行かなくちやあならないんだ。ベルギーの中立を冒すなんて、唾棄すべき策動だと思ふんだから。」

「ベルギーの中立だつて！」わたしは、人類の陷りかねない途方もない考へに、恐縮してしまつた。

「さうだよ」と彼はブツ續けた。「ベルギーのやうな小國と、ドイツのやうな弱いもの虐めをやる大國の事を考へると、僕はカツとして來るんだ。怪しからん事だ。英國は小國民の權利を擁護すべく蹶起したのだ。だから僕はほらわたのある人間なら、じつとしてゐられまいと思ふのだ。」

數時間後、わたしは、ステーションのプラットホームで、彼が、黃色い綿服をまとつた瘦せ形の取り立てゝい

ふ所のない娘と話してゐるのに逢つた。娘は泣きながら、一方では鼻に白粉を塗つてゐた。彼はしかめた顔を赤くして、頑丈な男が、犬や、下男や、細君にどなりつけてゐる時のやうな恰好で、はき出すやうな物のいひ方をしてゐた。娘は單調に泣きながら、時々おど〳〵した腹の減いた身振りで、彼に觸るのだが、彼はその手を拂ひのけた。

彼はわたしを見つけたので、そつ氣なく娘をはなれて、恥しさうな樣子でやつて來たが、持て餘して、ブリブリしてゐるのが眼に見えるのだつた。「あの女を捌いたら、直ぐやつて來るよ」と動物的な男らしさでいつて「どだいうるさくつてね。」

彼は卷煙草に火を點けながら、氣取つた樣子で、娘がじつとレールを凝視めながら、ハンカチを口に押込んで一生懸命に自分をおさへようとして立つてゐるところへ歸つて行つた。娘は、その年ルーマニアの淫賣の間に流行つた度外れに踵の高い上靴をはき、革の手提げを提げてゐたが、どこを見ても見すぼらしかつたし、若々しい胸は、平べつたくて、饑じさうだつたし、束髮にした髮は、薄くて艶がなかつた。世界のどの都市よりも、街角には男より淫賣の方が多いのを自慢にしてゐるブカレストでは、餘程人目を引かない娘でないと、食ふに困らないのだ。

娘の眼は、無意識に男の顏に飛んで行つた。娘はブル〳〵震へ出してゐるのだ。フランクは、不機嫌にポケットへ手を突込んで、紙幣束を取出し、その中から二枚だけ引拔いた。娘は、固くなつて、白く硬張つた樣子だつたが、眼は燃えるやうだつた。フランクは、金を掴んだ手を、實彈をこめた鐵砲のやうに、突出した。が、その時突然、くすんだ赤色が、苦しさうに娘の頰に浮んで、紙幣を掴むと、わつと泣き出した。娘も、結局は生きて

行かねばならないのだ。

わたしの友人は、こちらへは、おどけた自暴くその顏を向けたが、娘には睨みつけて、「何が欲しいんだよ」とげ〳〵した不愉快なルーマニア語でうなるやうにいつた。「君には何も借りがないんだからね。それに何で喚くんだい？　さあ、家へ歸りな、さよなら。」彼は、娘を不器用につきのけたので、娘は二足、三足歩いたが、もう歩く力もなさうにして立止つた。一種の本能といはうか、それとも思ひ出といはうか、彼はハツと理解した。で、咄嗟に、娘の肩に手をやつて、口に接吻をしてやつた。「さよなら」娘はとぎれ〳〵にいふと、駈け出して行つた。

わたし達の列車は、むさくるしい藁葺の泥小屋の寒村をいくつも通つて、白いぼろ〳〵のリンネルをまとつた從順な窶れた百姓達がポカンと口を開けて列車を見てゐる小驛に、いく度か長い間停車しつゝ、南下して行つた。消耗熱に罹つたやうにまつ白なブカレストは、人々が何の當てもない困窮の内にあつて飢ゑてゐる世界から、忽然と消えて行つた。

「どうも女のことは判らないよ」と、フランクは切り出した。「用が濟んでからだつて、手が切れないのだから。僕は、あの娘と九ヶ月許り一緒にゐたんだ。住み具合のいゝ家は當てがつてやるし　今までに食つた事もないうまい物は食はせてやるし、それから金なんだが——あいつ、着物や帽子や郵便切手に、百五十弗ばかりも遣やがつた。それでも有難いと思つてゐたと思ふかい。大違ひさ。僕があいつにうんざりした時分なんか、あいつは抵

當を取つた心算になりやがつて――出て行くのは嫌だつていふんだよ。だから突出すより他はなかつたのさ。すると、今度は哀つぽい手紙をよこし初めたのだ――僕から金を捲上げようといふだけの事さ。その手に掛つたかつて無論掛りやしなかつたさ。そんなにお目出度くはないんだから！　今朝は、汽車に乘らうと思つてやつてくると、パツタリ出遭つたのさ。あんな女と一日中附合つてゐるなんて事は、斷じて出來ないよ。泣かれてさ――いやなこつた。」

「ぢやあ、何處であの娘を手に入れたんだ。」私は聞いて見た。

「あの娘かね？　いや、プロシエチの通りで拾つたのさ……あいつが男を知らなかつたなんて事があるものか！　そいつが危いんだ。」彼は、わたしに眼をやつたが、自分のした事に間違ひはなかつたと思ひ度いやうな不愉快な色がぼんやり見えた。「油田地方へ行くと、誰だつて自分の家を構へてゐるのは君も知つてるだらう。無論、食事や洗濯の世話や、掃除をしてもらう必要があるからさ。だから、みんな娘を置いて、料理や、洗濯や家の片附けをさせたり、同居したりするのだ。が、すつかり自分の氣に入るやうな娘を手に入れるのは容易ぢやあないんだ。僕なんか三人試して見たが、六人も八人もやつて見た奴さへゐる。先づ呼んで來て、試驗して見て、蹴飛ばすんだ。

「給金だつて？　一文だつてやりやしないさ。まづ殿御と一緒に暮せるんぢやあないか？　それから家があつて食物があつて、着物は買つて貰へるんだ。給金のことなんか問題になりやしない。金を持たせたら、直ぐ飛出しちやうんだ。あいつ等を正直にさせて置かうといふには、金をやらないのが一番だ。それでいふ事でも聽かなかつ

たら着物を買つてやらねばいゝのさ。」

わたしは、こんな同棲生活は、永續きするだらうかと聞いて見た。

と、フランクは、「ジョーダンといふ男がゐるが、その男の家は、君も見た筈だが僕等の中ぢやあ一番立派なんだが、先生の生活たるや極めて寂寥たるものなんだ。獨身者しか訪ねて來ないし、時たま女房持ちが來る事はあつても、決して細君を連れて行かないんだ。ジョーダンは同じ娘と十一年も同棲してゐるんだからな――僕等同樣にして手に入れたルーマニアの娘だがね――無論誰も彼とつき合はないんだ。彼は會社中ぢやあ、一番頭がいいんだが、そんな生活をしてゐる間は、昇進させてもらへないんだ。こゝで幹部級にならうといふには、多少社交的でなくちやあいけないんだからね。だから先生は何年も昇進しないで、自分に比べりや四半分の値打もない奴が、後から後からと、追越して行くんだよ。」

「ぢやあ、何故その娘と結婚しないんだらう？」

「何だつて？」と、フランクは驚いた風だつた。「そんな女とかい？　ずつと同棲してしまつてからかい？　誰だつて一緒になんかなりやしないよ。だつて行儀が惡いんだから。」

「女と同棲したりなんかして、將來の妨げになりやしないかね？」

「いや、そいつは全然別だ。女を人前にさへ引つ張り出さにやあ、みんなそれでいゝんだと思つてるんだから。君、僕等は若いんだぜ。結婚するのは、三十前後で結構さ。僕なんかまだ二十五だもの。」

「ぢやあ、もう五年したら――」

彼は、黄色な頭をうなづいて見せた。「結婚の事を考へ初めるよ。それにしても、純然たる取引問題だよ。結婚する必要はないんだから――無論男である以上、たまには女が必要だつて事は判つてるが、僕のいふのは、自分を束縛する必要がないといふのさ――その事から何かいゝ物が引出せれば別だがね。僕は申分のない美人で、仕事の上で役に立つやうな社會的の引きをもつてゐる女を手に入れようと思つてるんだ。南へ行きやあ、そんな娘がどつさりゐる。女の持參金なんかどうだつていゝんだ――二三年もする内には、かなりの月給がとれるやうになるし、その上、細君が自分の收入を持つてゐると、どうも勝手な事をしたがるんでね。君はさうは思はないかい？」

「そんな風に考へるのは、怪しからんことだと思つてゐるよ」と、わたしはかつとなつて答へた。「僕は、結婚してゐるにせよ、してゐないにせよ、娘の子と同棲する以上、經濟上にも、その他いかなる點においても、僕と同等に待遇し度いね。」フランクは笑つてゐた。「それから君の結婚計畫だが、君は愛してない女と結婚が出來るかね。」

「愛つてかい！　いや、どうも、君のやうにセンチメンタルぢやあ……」と、フランクは面白くなさゝうに肩をゆすぶつて、窓外に眼をやつた。

なすべき事

一九一五年作

太平洋岸から、わたしが乘つて來たルカラス特急といふのは、諸君も知つてゐられる通り、ある大鐵道會社が

自慢にしてゐるもので、有力な重役會の玩具なのでもあるが、それが一運轉毎に費消する額は莫大なものである。その列車には、ホテルやクラブにある、一切の慰安設備がとゝのつてゐて――理髮店、浴場、速記者、眞空洗濯部、無料新聞閲覽所は無論の事、展望車ではお茶が出るのである。四時半頃になると、一隊の堂々たる黑人給仕が、宴會用の茶瓶とコツプを捧げて繰込み、おど〳〵してゐる家畜成金の細君といつたのをつかまへて、初對面の連中に茶の給仕をしてもらひ度いと頼むのであるが、こゝにおいて階級別が判然として來るのである。家畜成金の細君が、頓狂に「まあ」と叫んで逃出すと、その時分、子供達に伸縮自在の袖止めをひつぱらせながら、シヤツの袖の下で鼾をかいてゐた亭主の方も、目を醒まして、やたらに軀をゆすぶり、やがて、子供達を從へて、喫煙室の方へ出掛けて行くのであつた。呢懇な給仕連は、今度は、ワイオミングのウイロー市の婦人クラブ會長に白羽の矢をたてたので、會長はいら〳〵しながら立上つた。彼女は咄嗟に、事務服のまゝ片隅に陣取つてゐた牧牛業者にじつと眼を据ゑたが、「クリームですの、それともレモン？」と聲高にいつた。彼は返事をしようと努力したが、獸目だつた。で、額を赤くもらせて「どつちも澤山でがすよ」といつた。教養のある紳士然たる連中が、ブリ〳〵しながら、助け舟を出すのであつたが、その手合が、かうした席に一向不慣れな連中を叱りつけるやうな、これ見よがしのしやれた態度で、さま〴〵の社交上の儀禮を振り廻す光景は、見てゐて愉快なものである。やがて優秀な文明で結び合はされた一團だけが、まるで自分達の客間にでもゐる樣な恰好で、極めて氣輕にしやべり始めるのだ。この事あつて以來、階級線は劃然と引かれて、儀禮に通じない連中は、自分等の仲間以外のものと附合はなくなつた。

わたしが、あの英國人に注意し初めたのは、かうした席上でゞあつた。例によつて、お茶の時間に出たのは、僅かしかなかつた。我々米國人は、非文明で、笑草となるのを恐がつてゐるからであるが、西部へ行けば行く程更に臆病になるのである。ところで今日の午後、恐ろしい豫備試驗が濟んで、退役將校の細君が給仕役を仰せつかつた時には、その英國人は讀みさしの雜誌を置いて、退屈さうな人待ち顏であつた。彼は、體格のきつちりした若者で、色つやはいゝし、口髭は端麗だし、服はキツカリと身に合つてゐて、とても大き過ぎる靴をはいてゐた——先づ申分のない典型的な男である。

軍人の細君は、彼に眼で訴へるやうにして

「お砂糖はお一つ？　お二つ？　それからクリームは？」

家畜成金や小麥王や、その細君連や小供たちや、カウボーイや註文取り達は、英國人をじつと見据ゑて、一語も閑き洩らすまいと、ポカンと口を開けてゐる。この連中は、かういふ場合何と答ふべきであるかゞ知り度いのだ。

「有難う」と、英國人は、聲にも顏色にも、何等動ずる所なくいつた。「一つ。それから、クリームをどうか。」

觀衆の間からは、安堵と賞讃の聲が聞えた。五六人の子供達は、おど〳〵しながら、クス〳〵笑つた。平凡な手合共は、少々餘計な事をやつたと思ひ初めたが、それでも英國人が、お茶を受取つたらどうするだらうかを見究めるやうと、立去り兼ねた。それが濟むと、連中は廊下や展望車の歩廊に出て行つて、後には、英國人が實例を示して呉れたのに感謝してゐる選ばれた連中だけが殘つたが、その數はもう八人許りしかなかつた。

軍人の細君は、後で、英國人の態度はとても立派だといつてゐたが、英國人は決して立派にしようといふ考なんか持つてゐなかつたに違ひない。無論さうなのだ。彼は、それが自分の住む世界の不變の法則の一部だつたから、茶を受取つたのであつた。

その後も、わたしは五六度彼に出逢つた。彼は殆ど誰にも話しかけなかつた——我々風情と附合ふ必要がなさうだつたのである。がそれも、自分が社會的に優越だといふ意識を持つてゐるからではなくて——單に、獨りでゐる事に全然滿足してゐるからなのである。彼が讀書してゐることも、滅多になかつた。讀書の必要がなかつたのである。だから、時には四時間も喫煙室の椅子に腰を降して、パイプを吹かしながら、默想してゐるのであつた。

わたしが、歩廊や、ちよいと停車するステーションのプラットホームやを歩いてゐる時などに、彼に出逢ふと彼はパイプを口から取つて、頭を斜に振りながら、ちよつと笑つて、「お早う」といつた。わたしが、社交上知合つてゐるので話しかけたつて差支のない軍人の細君と、彼が話をしてゐる所へ、顏を出して驚かせたのは、それから二三日してからであつたが、

「あの人はどんな話をしました？」と細君に物好きにも聞いて見た。

「クリケットと瑞西の事なんですの。」細君はうつとりしていふのであつた。「瑞西にゐらつした事がおありなんですつて。でもね、わたし、たゞあの方の發音をうかゞつてゐるのが好きなんですの、あの方、とてもお靜かでゐらつして、その次に仰つしやる事が、ちやんと判るんですのよ！」

わたしは、彼が瑞西の話をしたと聞いて、驚いた。自分の行つた處の話をするなんかは、英國人としては感心した趣味ではないのだから。英國人は自分の知つてゐる人の事もいはないものだし、理論めいた事なんかも話さないものなのだ。實際、教養のある英國人で、天候以外の事に關して、他人と議論をやつて、威嚴を失しないやうな人は、滅多にないのだ。

ところが、喫煙室は、殊にルカラス特急なんかの喫煙室では、アングロ・サクソンでも時には寛いで、自分だけが判つてゐる問題について、意見を吐く事もあるやうだ。だから、一夜、わたしは、英國が最近參加したばかりの歐洲大戰について、彼に二三の質問を發して見た。

「戰爭の原因は、何にあるのでせう？」とわたしは聞いたのである。

彼は、わたしの社會的の地位を計りでもするやうに、冷やかにわたしを見廻してゐたが、最後に

「わたしは、その問題については、何等の考へも持合はしてゐないのです」と、よそ〳〵しく答へた。

わたしは冒險的に、それは歐洲の覇權に對するスラヴ族とチユートン族との鬪爭であるといふ意見を述べて見たが、彼は微笑しながら、頭を振つて

「戰爭は、オーストリアとセルビアとの間に行はれてゐるのですよ」と靜かに說明してくれた。

「だが、セルビアの背後には、明かにロシアがゐるし、オーストリアの背後にはドイツが……」

「それは全く、歐洲のある國々は、眞摯にして、約束を破らないといふ事實によるものです。」

わたしは、ちよつとの間、この意見に面喰つてしまつた。多分、彼の言葉の中には、わたしの全然見落してゐたうまさがあつたのであらう。

「では、英國のベルギーに關する行動は？」

「英國は、ドイツがベルギー侵略によつて、フランスを威嚇した爲、餘儀なく戰亂の渦中に投じたのです。」

「ぢやあ、英國は偶然的に？」

「違ひます」と答へたゞけで、それ以上はいはなかつた。

「わたしは、戰爭の內部的な原因についていつてゐるのですがね。」

「今申し上げた事以外には、何もありません」と、彼は穩かに言葉をつゞけた。

「では、ベルギーの中立を保證する條約の、根本をなしてゐるのは何なのです？」

「條約？」彼は聲を張り上げた。「馬鹿な、ベルギーの中立を保證する條約なんか、ありはしませんよ。英國は、條約を結んだりしません。無論米國だつて、歐洲列强間には祕密の諒解以外、何ものかゞ存在すると信ずるほど愚劣ではありますまい。」

「よろしい」わたしも、我慢が出來なくなつて叫んだ。「ぢや、その祕密の諒解とは、何の事なのです？ その根本は何なのです？」

それに對して彼は「外交政策は、わたしの領分ぢやありません。何等の考も持つてゐないのです。理論上の問題で……」といふ驚くべき答を發してから、横柄に默ると、窓外をみつめた。

「では、この戰爭の結果として、民衆の叛亂が起る可能性があるとは、お考へになりませんか？」

「さうは思ひません。」

「戰爭反對の革命的な勞働黨の分子がかなり優勢なのですから、戰爭が長引けば、彼等の愛國心も消滅するだらうと、わたしは考へるのですが。」

「歐洲に勞働黨がですつて？」と彼の反問は、愕然たるものがあつた上に、傲慢さも見えたので、わたしも熱して

「英國にさへあるではありませんか。あなただつて、斷じて革命の恐怖から解放されてはゐないのですよ——事實、英國が攻勢戰爭に引きずり込まれた以上は」と答へた。

「馬鹿な」彼の答には、大人が子供を叱る時の、あの鋭さがあつた。「君は、英國の事を一向御存知ないんだ。だから、自分の國の事だけ考へてゐて貰ひたいものですな。」

「あなたは、炭坑罷業や鐵道爭議の事をお忘れではありますまい。大學豫備校やオックスフォードの學生だつて時代の兆候を認識するのは嫌だなんていふ程鈍感ぢあないでせう」と、わたしは更に突込んで行つた。

「キャムブリヂですよ、わたしは」と、彼は平然と答へて「あの二つの罷業の時には、わたしも義務につきましたがね。」

「巡査としてゞすか。」

「いや」とたしなめるやうな顏付で「違ひます、無論、義勇軍の副官としてゞす。」

「で、罷業者の心理がお判りでしたか？」

「判りませんでした。わたしに判つた事は罷業者は我々一人に對して百人もあつた程優勢だつたのに、鬪爭を恐れてゐたといふ事だけでした。のみならず革命はたゞ民衆が、壓迫される場合にのみ起るものぢやありませんか。」

「さうです……」

「ところが、英國の勞働者は、壓迫なんかされてはゐません。階級相當に、十分な給料を貰つてゐるのです。」

彼は、規則的に平然と語りつゞけて、英國人一流の身分相當のパイプを吸ふのであつた。

この時わたしは、ある考へに行き當つたので「あなたは、軍隊にお入りになるために、御歸國の途中ではありませんか」と聞いて見た。

「さうです」と、彼は答へたが、自分から話し度い樣子はなかつた。しかしわたしに看破られたのを、不快に思つてゐる風はなかつた。

「戰爭することを、どうお考へですか？」

「何ですつて？」と彼は明かに驚いた風であつた。

「何故ドイツ人と戰爭をなさり度いのです？　フランス人に同情を持つてゐられるからなんですか？」

「何といふ事を、英國人にお尋ねになるのです！　フランス人に同情ですつて？　滅相もない。」

「ぢやあ、どういふ譯なんです？　ドイツ人に對する憎惡からでせうか？」

「斷じて違ひます。わたしはドイツ人が好きです。わたしが出征するのは——左樣、英國人は、常に國民皆兵なのですから。」

それを最後にして、彼は口をつぐんで仕舞つた。そしてその後の旅行中も、わたしには、教養のある短い言葉

しかいはなかつた。明かに彼は、自分が趣味の限度以上に、自分自身をさらけ出したと思つてゐるのであつた。

彼がわたしの事をどう思つてゐるかといふ事については、例の軍人の細君が、その翌日、彼からわたしの事を紳士なのだらうかと尋ねられたとの事であつた。

こんな風で、わたし達はシカゴで道を分ち、彼は母國へ向つた。彼がプラットホームを歩いてゐる時など、なかなか立派なもので、英國青年の精華であり、その行爲について何等の意識もなく、空前の大帝國を造り上げたかの有名な支配階級の精髓でもあつた。彼は、何の恐るゝ所なく、端然としてまた平然と、百六十ポンドの筋骨と優雅な血液とを運んで、榮譽を掴みにか、又は墓場へと向ふのである。が、その頭蓋の內部には、宛然初期ヴイクトリア朝時代の客室さながらに、大人の玩具と、馬巢織の家具と、レースの窓掛けとがあるのだ。そこで、わたしは瞬間こんな怪しからぬ事を考へたのであつた。といふのは、恐らく印度を征服した精神は、朝になつて水浴をとる爲に、猛火と血潮の間を貫いて、もがき進むのと同じやうなもので——それこそは、なすべき事なのだから……といふのであつた。

資本家

十一月の濕つぽい霧の夜の、ワシントン・スクエアは、諸君も知らるゝ通りであるが、あの灰色の輝かしいバ

一九一六年作

ステル畫の霧圍氣は、裸の木々や鐵柵のぎこちない輪廓を夥しくやはらげ、物の影のきつかりした端をぼかし、高い所にある電球には、銀色の暈をかけてゐるのだ。みんな眞つ直ぐなコンクリートの歩道は、黑い縞瑪瑙のやうで鋼色の雨水をためた小さなくぼみが、寶石のやうに點々としてゐる。空中には手應へのない雨が充滿してゐて、頰や手の甲を、しつとりと冷くはさせるが、それでゐて、レインコートの胸をあけて、三度スクエアのまはりを歩いて見ても、少しも濡れるといふ事がないのだ。

ウイリアム・ブース・レンが、何處から何處へといふ當てもなしにぶらつきながら、有金を勘定して見ようと、ワシントン・アーチのそばの、二つのアーク燈の下まで來て足を止めたのは、丁度かうした夜であつた。大方、眞夜中だつたが、ウイリアム・ブース・レンは、やつと今しがた仕事の（仕事は何だつていゝぢやあないか）報酬を受取つたばかりなのだ。その總額六十五仙、勘定するのは、これで三度目なのだ、

特別の注意を拂はないで、ほんの一目見たところでは、レン君は平凡な境遇の平凡な青年、多分は飾り立てた雜貨店の店員だと思はれる事だらう。赤靴には近頃磨いたばかりの光が殘つてゐるし、山高はグニャ〳〵の英國製の生地で出來てゐるし、レインコートはしつかり身に合つてゐて、贋揚な霧が、この印象を助けてゐるのだ。一體ニューヨークで、職を求めようとする手合なら、こんな恰好をしてゐなくてはならないのだ。ところが、もう一つ傍へよつて見ると、高いカラが擦り切れた上に、汚れてゐるのが目につくし、上衣の下をのぞく事が出來たら、カラは一向シャツともいへさうもない袖なしのぼろつ布に、くつついてゐるのを發見するし、その上に靴の底まで檢査する事が出來たら、大きな穴が二つパクリと口を開けてゐて、ずく〳〵の靴下がはみ出てゐるのを見

出すだらう。レインコートにしたところで　裏側は少々焦げてゐるし、英國製の帽子にしたつて、雨に逢つたら直ぐくつつけた所が離れるんぢやないか。

財産の勘定が濟むと、ウイリアムはその一枚を拋り上げた。表が出た。そこでポケットの中で、愉快さうに金をじやらつかせながら、スクエアを横切つて、右手の方に歩いて行つた。

その路に立つてゐる二箇のアーク燈の間には、固い木のベンチが淋しくならんでゐる。彼は薄ら明りの内に、路の兩側に向ひ合つて腰をかけてゐる二人の人影を認めた。一人はぐでん〳〵の醉つ拂ひで、市役所で疲れた宿なし共の寢床にさせない爲に目釘の打つてある、鐵の肘掛けに、窮屈さうにもたれかゝつてゐるのだが、その男の脹れ上つた顏は、盲人のやうに空の方に向けられて、怒つてゐるやうな鼾をかいてゐる。こまかな水滴が、その男の軀一面にくつついてゐて、胸がふくれたりひつ込んだりする度に、キラ〳〵と光るのだつた。も一人の方はお婆さんで、強いウヰスキーの臭を發散してゐて、露で光つてゐるチーズ袋製の絲色の襟卷は、少しばかりの白髮をつゝんで、顎のところで結んであつた。

女は歌つた。

わたしのラヴさん(ヒック)歩きつぷりで判る
わたしの(ヒック)ラヴさん、話しつぷりで知れる
わたしのラヴ(ヒック)さん、宵服着てる
若しもラヴさんに、捨てられたなら(ヒック)

女はウイリアムのじやらつかせる金の音を聞いたらしく、急に歌をやめて「おいでよ」といつた。

ウイリアムは、立止つて、振返つて、丁寧に帽子を脫つた。

「奥さん、失禮しました。」

「おいでつて、いつてるぢやあないか。」そこで彼は、女の傍に腰をかけて、珍らしさうに顏をのぞき込んだ。ところで女の顏だが、丁度貸事務室のビルディングが退けた後で、折々見かけるひどく年をとつた掃除婦のやうに、恐ろしく皺のいつた、ひきつつた、そしてやつれた顏で、その下唇と來ては齧碌してブル〳〵震へてゐるのだ。女はギヨロリとした光澤のない目を向けて

「いやなこつた」といつた。「あいつやあたいに聞えよがしに、(ヒック)お金をじやらつかせるより他に藝がないのかい？」

ウイリアムは、につこりして

「いやどうも、奥さん」と第一公式で切り出した。

「奥さんだつていやがらあ」老婦人はいふのだつた。「お前さんが金持だつて事は判つてるよ。お前さんなんか、きつとお金を儲るためにちよつとの間も働かないのさ——お父つつあんが殘してつたんだろ——ぢやあない？きつとさうだよ。あたいは知つてるんだから、お前さんは——」といつて、適當な言葉をさがしてゐたが「資本家なんだよ！」ウイリアムの顏一面に、悅しさうな滿足の色が漂つた。で、おだやかにうなづいて

「どうしてお當てになりましたかね？」

「當てるだつて！」女は不愉快さうに笑つた。「當てるだつて(ヒック)あたいが立派なお家に奉公した事がないとでもお思ひかい？　娘の時には、お金持の若い衆が、あたいにだつてあつたんだよ。お判りかね？　お上品な様子をしながら、お金なんかじやら〳〵やつてさ！　それにじやうだんでなきやあ——お前さんなんかゞ、あたい見たいな婆さんに帽子なんか脱るものかね。」

「奥さん、決して——」

「默つてお聽きつたら！　あたいだつて娘時代にはね、立派なお金持の若様に、澤山いゝ人があつたよ。みんな帽子を脱つて、それから——」

ウイリアムは、こんないやらしい老ぼれにも、綺麗な時代があつたのかと思ふと、自然想像を逞しうさせられた。

「わたしが娘で(ヒック)あつた時——

「わたしのラヴさん——」

「ね——え、あたいはお金のじやら〳〵いつた時に考へたんだよ——持つてるものをじやらつかせるなんて、馬鹿なこつた。お前さんがやりやあ——あたいもやる——みんなやるよ。さうさ、あたいの考へてゐるのはね(ヒック)

どつかへ行つて遊ばない？」女は彼の方にしなだれかゝつて、横目をつかつたが、それこそ彼女若かりし頃の大したポンチ繪だつた。そして安いウキスキイの臭が、彼の鼻先にからんで來た。「おいでよ、ね、樂しましておくれよ。(ヒック)ね、どつかへ行つて遊ばない？」

「いや、今夜はどうも。」ウイリアムの答へは感懇だつた。

女は齒をむき出して「きつとさうだよ、お前さん、資本家なんだよ。あたい達が働き度くない時に仕事をくれてさ、働き度い時には、仕事を寄越さないんだよ(ヒック)ポケットから、手を出してくれよ。穢ならしいお慈悲なんかにあづかり度かあないんだから。……お慈悲は澤山さ、あたいはお給金を貰つて働くんだからね、(ヒック)ちやんとした女なら、お前さんなんかのお慈悲を受けたりしないよ……おいでよ、面白い目を……」

「どうしていつまでも、こんな處にゐるんです？　風邪を引きますよ。」

「どうして——どうしてこんな處にゐるんだとお思ひなんだよ？　こんなお天氣のいゝ夏の晩に、家の中なんかにゐられるもんかね……だ——お給金さへ貰つてりや、こんな處にゐるもんかね。畜生」女は氣違じみた聲でどなつた。「お前さん、市役所のお役人かい？」

ウイリアムは頭を振つて、ポケットから安つぽい煙草入れを出して開けた。二本はひつてゐる。

「煙草を吸つても構ひませんか」と丁寧にいふと、女はジロリと見返して

「お前さんが煙草を吸ふのを構つてなんかゐられるかい？　そんな事いはなくつたつていゝよ。お前さんが吸はうと吸ふまいと、あたいの知つた事ぢやあないんだ——いゝだろ、一本貰ふよ——」ウイリアムは、マッチをつ

けた。

女は口元で煙草を震はせながら「お前さんは資本家だよ。何とかしようと思つてるから、そんなに丁寧なんだよ——ちやんと知つてるんだから——お前さん、市役所の役人ぢやあないやね、だつたらお給金を貰つてるんだあたいは(ヒック)市役所に勤めてるんだけど、お給金を貰はなかつたんだよ——これ御覽よ。」女は胸のあたりをさぐつて、蒼色のカードを取出し、アーク燈の光りに照さうとかゞんだ。彼が讀んで見ると

「サラ・トリムバル夫人、向後一ヶ月間、息女訪問のためランドル島への渡船を許可す」

「あたいんだよ。」トリムバル夫人は、一種アルコール性の誇りをもつていつた。「あたいは、ランドル島へ行つて、看護婦さんや、お醫者さんのいひつけ通りに、あれやこれやの仕事をするんだよ(ヒック)。それで今日は給料日なんでね、市役所三界まで出掛けてゝたんだけれど、三時を五分過ぎてたんで、お金が渡らないのさ。お判りかい。だから次の金曜までは、お金が取れないんだよ。(ヒック)馬鹿にしてるぢやあないか。看護婦さんやお醫者さんは、五時までなんだからね——自分の給金が取れないなんて——あたいの寢る所がないつて事あ、みんな知つてる癖に……だからあたいはいつてやるのさ、よござんす、公園へ行つて寢ますからつてね。お前さんが來るちよいと前にさ、のつぽのお巡りさんがやつて來て『あつちへ行け』つていふんだよ。市役所ぢや、あたいが稼いだお給金を臭れないんだもの……だからあたい、市立公園へ寢に來たのに——市役所のお巡りが、逐出すんだよ——あたいは一體どこへ行きやいゝんだね、畜生、こゝは遊び場ぢやあないか(ヒック)。」

「娘さんは、あそこにゐるのですか?」

「娘があるんだよ……十六のね。も一人こんなのがゐるのさ(ヒック)。あたいがあすこで働かなきやあ、娘を置いてもらへないんだよ。ところが、あすこで働いても、娘を置いて貰ふにやあ、一週間に二弗要るんだからね。」

「ぢやあ、何故そんな所で働くのです?」ウイリアムは横柄に抗議するのだつた。「あなたのやうな氣の毒な方に對して、法外千萬な怪しからん事だ——」

「懶け者の癖に、默つといでよ。」女もかつとなつていつた。「お前さんは、あたいが時々娘に逢ひ度くならないとでもお思ひかい? そんならどうすりやいゝんだよ。娘は、あたいが年を取つたら、町へ來て働いて、養つてくれるにきまつてるんだから。」

「無論、娘さんはさうするでせうが、しかし……」

「あたいにだつて、どうして娘をあんな風にして、しまつとくんだか判らないんだよ。別に譯は(ヒック)ないんだけど。お前さんにやあ、あたいが娘を、あたいみたいな人間にし度くないつていふ譯がお判りかい? あたいは、いつだつて、いゝ目を見て來たんだよ。いつだつて仕合せだつたんだよ。……何故みんな、自分の子を自分みたいな人間にし度くないんだかねえ? 娘は、あたいのために稼いでくれるに違ひないんだよ……でも、あたいは、娘をあすこに置いとくんだよ、あたいみたいにならないやうにね……どれだけ違ひがあるんだかねえ(ヒック)? でも、あたいが死んぢやつたら、娘はどの道、きつと……。」トリムバル夫人は、咳をし出した。初めは大した事はなかつたが、段々激しくなつて、終ひには全身を撚ぢらせて咳くのだつた。霧は、小歇みもなく降りて來て、ウイリアムも、體に沁みるかすかな冷氣を感じた。路向うで眠つてゐた男は、突然とてつもない鼾を

のみ込んで、くさみをして、のつそり立上つて、

「畜生、何で眠らせやがらねえんだい。うるせえ咳なんかしやがつて」とつぶやいた。

「あゝあ」發作が止んだので、トリムバル夫人は、元氣のない聲を出して「一口飲み度いねえ。」

「一體、室代はいくら位なんです」ウイリアムが突然訊ねた。

「二十五仙、お前さん、室が要るの？　あたい、四番街のすぐ先ん所で、いゝ所を知つてるよ……さ、どうしてくれるんだよ？　お前さん、室なんか要らないよ……」

「わたしは要らないが、あなたは要るのです。ちよつと待つて下さい。わたしは、あなたにお慈悲をかけようといふのぢやありませんよ。」といつて彼は二十五仙銀貨をさし出した。「わたしからお借りになればいゝのです。わたしもあなたから借りる事がありませうから……で、お給金を貰つたら返して下されればよろしい。」彼は、女の震へてゐる手に落してやつたが、握り損ねたので、銀貨は鋪道の上に落ちて轉んだ。と、光のやうな素ばしこさで、長いぼろ着の腕が、向側のベンチから飛出した。例の寢てゐた男は、貴重なめつけものを握つて、よろ〳〵と逃出して行くのだ。

トリンバル夫人は中腰に立上つて、金切聲で「のんだくれ！　泥棒野郎！　返さないか」とどなつた。

「いゝですよ」ウイリアムは、女に手をかけていつた。「家にやあ、あんなのはどつさりあるんですから。こゝにもう一枚ありますよ。」今度は、女も落さなかつた。

「まことにどうも有難うございますよ」トリムバル夫人は勿體振つていつた。「友達同志の間ぢやあ、借りたつて

いゝんですのね、（ヒック）でもどうぞ、お住所だけ聞かせて下さいましな、お返ししますから」さういつて手提げの中から、大分齒がたの入つた鉛筆と紙とを探り出した。「大方、もう一つ下さいますわね。そしたらわたし、一杯ひつかけて溫まれますから。」

ウイリアムは、ほんのちよつと躊躇つたが、「ようございますとも」と承知した。それから頓智を働かせて、以前讀んだ新聞の日曜附錄の社交欄から思ひ出さうとした。そしてその紙の上に

「カーシー・ド・ベイスター・スチユイベッサン　ホテル・ブラツア」

と書いてのけた。

それを見ると、老婦人は叫ぶやうに。「わたいがいつた通りでしよ？　存じてゐたのですよ。だから、もうお返ししませんわ。あなたは親御さんからお金を貰へますし、わたしは一週間に七日といふもの一生懸命に働くんですからね。こんな身分にや、なりたかないでしよ？——わたしみたいなお婆さんと、ちよいとそこいらまで附會つて下さるのは、お嫌や？　カーシー・デイー・バイスター、スチユイベッサントさん。」

「どういたしまして、喜んでお伴しますよ。」ウイリアムは固くなつて立上つて、老婦人の腕をとつた。彼は身震ひした。腰かけてゐたので可成り暖つてゐた背中を、急に立上つて寒さにあてたからであらう。

「ねえ、あなた」トリムバル夫人がいつた。「わたし達は、みんなで合衆國の大統領を選擧するでしよ——萬事いいやうにしてやるつて約束してくれる人をね（ヒック）ところが大統領を選擧したつて、わたし達には、たゞ警察しか……」

ウイリアムは勿體振つて、どなりつけるやうに「だが、奥さん、我々は社會の秩序は保たなくちやあ……」

トリムバル夫人は、目差す家の門口で振返つて「あなたは、資本家にしちやあ、立派な青年でゐらつしやいますわ。譯が判つてらつしやるですよ。それに御希望だつて、ほんのちよつとした骨折りで濟むんですものね……」

「あなた方勞働階級の方が、無茶さへなさらにやあ、老後の用意位貯金が出來ますよ……」

ウイリアム・ブース・レンは、スクエアへ引返した。足は無感覺だつたが、薄い服と全身にしみ渡つた濕氣とでじつとりして寒氣がした。彼はポケットの中に殘つてゐる白銅をいぢりながら、今しがた立つて行つたベンチを捜して坐つた。座席の下の、鐵と木に挾まれた乾いた隅つこに、自分のすてた煙草の吸殻を見つけたので、マッチを擦つたが、四本目に漸く、濕つぽいマッチから青い焔が出た。彼は煙草に火をつけて、グーッと肺に吸込んでから、マッチで手を暖めた。

丁度その時、藥囊のいゝ、マントをひつかけた巡査が、棍棒を振りながら出て來て、

「あつちへ行つた！　そこにはゐちやあいかん」と手短かにいふのだつた。

ウイリアムは、も一度煙草の煙をプッと吹いて、じつとしたまゝ、うるささうに傲然といつた。「君は、僕がどんな者か知らないんだね？」

巡査は汚れたカラと、安物の帽子と、ずぶ濡れの靴をじつと見てゐたが、その眼は、老婦人のより鋭敏だつた。そこで彼は、前かゞみになつて、ウイリアムの顔をのぞき込んで

「左様」といつた。「よく知つとるよ。昨夜既に二度も、吾輩がこゝから逐つ拂つた男ぢやあ。さあ立つんだ。でないと逐つ拂ふぞ。」

戸主

一九一二年作

展望車の歩廊だ、わたしは、眼の青い、顎のくぼんだ、鷄胸の小男の隣りに腰をかけたのだが、太平洋岸のレデー・メードを一着に及んだその男は、爪先に縞のついた靴をはいて、一九一三年型のつばの狹い山高の下からは、薄いじめ〳〵した髪の毛がはみ出してゐた。要するに一幅の悄然たる敗殘者の繪で、殊にわたしに向いて、元氣はないが、それでもなれ〳〵しく歯をむき出して笑つて見せたところは、一層その効果を強めた。

「失禮ですがな」と、彼は殊更にはつきりといつた。ウヰスキーの強い臭ひが、プンと鼻を打つた。「失禮ですがな、キュナード汽船會社の船は、いつニューヨークを出帆するか、御存知でせうかね？」

「知りませんね。」

「いやどうも」と口籠つてから、彼は「以前には、キューナードやホワイト・スターは、サン・フランシスコ・エキザミナーに出帆日を出したもんですがな。ところがこの三週間、一言ものらないんですよ。大方——」といつてこんな事をいつてもいゝかしらといふ風に、わたしを見廻したが「大方、ハーストが自分の新聞にのせないん

ですな――ドイツ畠(ひい)なもんで――でなきやあ……それとも汽船會社の方で、アドヴァテイズメント(廣告)を引込めましたかな――こゝぢやあ、アトヴァタイズメントといはなきやなりませんでしたな」と、半ば皮肉に、半ば謝やまるやうにして、歯をむき出して笑つて「キヴイス　ロマイヌス　スム」(予は羅馬市民なり。)

「キヤムブリヂの御出身ですね。そんな風なラテン語を敎へる所は、あすこしかありませんからね。」とわたしは尋ねた。

すると上機嫌になつて「さうなんですよ。」

「お國へ歸りですか？」彼は默頭(もくとう)いた。「戰爭に出られるんですね？」

「さうですよ。つまり軍醫ですな。醫者なんで……」彼はグシヤ〳〵になつた數通の手紙を盲目滅法にさぐつたが、それからつぶやくやうに「もうじつとしてゐられなかつたんですよ。弟は二人共出征しますし――ヒユバートなんか、負傷さへしたんです。それにわしは惣領なんですからな。……どうもなか〳〵決心がつかなかつたんですよ。どつかこゝに手紙がありますが」と方々を探つて見たが、見付からなかつた。「まあ、いゝや。そこで、年寄りの後見人へ手紙を出しましたよ。サーゼントといふ男なんですが――意見を聞いて見たんですて。すると、その返事がな――『英國は一人も剩す所なく男子を必要と致し居り候間、一切を放擲して至急御歸國相成るべく候』つていふのでな、實はこゝまでやつて來てるのですよ。」

わたしは、何だか哀訴されてゐるやうな氣がして、

「無論、それがお望みなら」と、いつた。「それで御家内はおありなんでせうね？」

「ありますよ。」

「お子さんは？」

「お子さん？」と答へた彼は、氣迷ひ氣味に微笑して「どうしまして、それほど老いぼれちやあゐませんよ。わしのやうな者の後繼ぎなんか、澤山ですでな。」彼は、滅入つて、手の上に視線を落した。手は震へてゐるのだ。

その話は、それで打切つて、暫くは二人とも無言でゐたが、その時、二人の足の下からはギラ〳〵するレールがぐん〳〵延びてゆき、灰色の空の下の索漠たる砂漠は、そのそばをいつ迄も流れて行くのだつた。

そこで結局わたしの方から「米國には長くお住ひですか」と、訊ねて見た。

彼には、はつきりした記憶がなかつた。「二年半ですよ。落着き場所を見つけようと、米國中を歩き廻つたやうでしたがな。最後に行つたのが、カリフオルニアで、今は製材會社の醫者をしてるんです。」といつて突然口をつぐんだが、やがてまた「いやどうも、どうしてあなたには、こんなにお話しをするんでせうな。一體わしは、ウキスキーをひつかけん事にやあ、物がいへないんですがな」と、今度は物靜かに「わしは、キヤムブリッチとロンドンの學位を持つてゐるんですよ――そのわしが、製材會社の醫者だなんて！」といつた。

一體、わたしは西部育ちなので、西部の事ならすつかり心得てゐる。だから製材會社の醫者なるものは、フオール・リヴアー汽船の乘組醫者や、レインスロー・ホテルの抱へ醫者同樣だといふ事もちやんと承知してゐる。この種の醫者は、製材會社からは月給を貰はないで、職工の給金から、毎月一人頭一弗づゝ集めたのを受取り、その代りに治療をしてやる事になつてゐるが、木挽工場は危險な場所なのに、會社では殆ど何等の事故防止策を講

じてゐないのだ。さてさうした所の醫者だが――左樣、やつと三ヶ月勤めたばかりで、四百弗ほどの借金を踏倒して夜逃げした男がある位だから、相當分別のある男なら、製材會社の醫者なんかには、成らないものだ。

「一切合財濟んでしまひましたらな。」彼は何か新規な事を思ひ出して、頬を染めながら、話をつゞけた。「アンシントン教會の家族席の上に、もう一枚眞鍮の板がかゝるんですよ。それが今でもすつかり、わしの目に見えるんですて。つまり

ロージヤー・レウエリン　一八〇五年ヴイクトリー艦上にて戰死せり
トーマス・レウエリン大佐　一八五六年セバストポールにて負傷し死亡せり
トレヴオア・レウエリン　一九〇〇年レディースミスにて戰死せり

とかいてある板がな。」

「それから」と目を輝かせ、わたしの肩をポンと叩いて、「その次にまつさらなピカ〳〵の板があつてな

陸軍々醫モーチマア・レウエリン　一九一六年フランダースにて戰線勤務中戰死せり

て書いてあるんですよ。

「親父がいつもの癖で、五六分遲れて、日曜日の朝に、テク〳〵と教會へやつてくるのが見えるやうですよ――レウエリン家の戸主が――レウエリン家の教會へな――すると牧師さんは、親父が坐るまで、神妙に、お說教をやめてゐるんですよ。親父は、ゆつくりと、うちの戰死者の記念の眞鍮板を見上げて、お終ひにモーチマア・レウエリンのにブツ突かるんですな。みんな磨いてあるんですよ！　みんな磨いてあるんですよ！　これなら死ぬる

値打ちがありやあしませんかな？　えゝ、何ですつて？」と聲高にいつて、額の汗を拭つた。

「それでは、あなたの奥さんは……あなたに行かれちやあ、お困りでせうが。」

彼は肩をゆすぶつて「何で女房が、心配しませうかい」と、吐出すやうにいつた。「女房には三月分だけの家賃が渡してあるんですよ。それから先は、扶助料が渡つて行きますよ――いろんな事が、これで片附くんでしてな、くよ〳〵する事はないんですよ。苦勞はなくなる。體面を繕ふ事も要らなくなるんですからな。何せ、三年も二人で慘めな暮しをやつて來たんでな、三年も、いやはや」と考へ込んだが「女房がいふにやあ、何もかも失敗だつたてんです。大方さうかも知れませんて。後になつて、間違つてゐたか、間違つてゐなかつたかの、見きはめをつけるのは容易ぢやありませんでな。それをも一度繰返すんだつたら、わしは……」

「濟んだ事で、くよ〳〵するのは時間を浪費するといふものです」わたしは、譯も判らずにいつてのけた。

彼は、その言葉を聞いてゐなかつた風だつた。「女房は、デヴオンの家畜屋の娘なんでな、わしの内ぢや承知しなかつたんです。わしは惣領なもんでな、いつかは戸主にならなくちやあならなかつたんですから」といつた時には、彼の悲慘なねじけた魂が、その兩眼にまざ〳〵と現はれてゐるのだつた。「わし達はアメリカで暮しを立てようとやつて來たんですがね、それにいま國へ歸るんですよ。お判りでせうかな。」

わたしにだつて、その邊の事はよく判つてゐたが、「いや、判りませんよ」と力をこめていつてやつた。「あなたは曾て、呪ふべき因襲を破棄されたんだ。それなら、何故意地を張り通さないんです？　この新世界で、獨力で新しい住家を造り、お望み次第で新に一家の傳統をお造りになるべきだ。舊式なぼろ〳〵の足場なんか、頑迷な

人達の足下で粉碎させて置かれりやいゝんだ！」

彼は頭を振り、氣まぐれに微笑して「あなたは米國人なんで、お判りにならんのぢや、初めてこの土地に來た時には、わしも解放されたと思ひましたよ。所が、戰爭がわしを家へかへらせるんです。そして結局、家といふものは、大切なもんだといふ事が判つたのですよ。何せ血筋なんですからな。關係が絶てないんですすて。わし共の一家は、千三百年以來、ずつと清淨潔白で、不名譽といふものを知らないんですからな。一五九一年、丁度エリザベス女皇時代の事ですがな、リチヤード・レウエリンがアングルシーの長官、つまりアンシンガムのレウエリンになつたのですよ、親爺のリチヤード・レウエリンもさうなんでしてな。親父に手紙を出す時の宛名は、カーナヴォンシヤア、治安判事リチヤード・レウエリンと書きますよ。それが英國ぢやあ、わし共一家の事なんですから。」

「ぢやあ奥さんを何故伴れて歸らないのです？」

彼は急に眞顏になつて、そんな事を聞いて吳れなくてもといふ樣子だつたが、それでも「二人分の船賃がないんですよ。一人分さへ覺束ないんでな。親父のところへ、リヴアプールまでの旅費を送つてくれつて、電報を打たなくちやならんのです。その上に女房をアンシンガムへ、伴れて行けないんですよ。じやあ、女房だけデヴォンシヤアの實家へ歸して、わしはコツソリ家へ歸る？ そんな事は尙更ですからな。」彼は傲然と頭を振つた。そして不意にちよつと、他所々々しいお辭儀をして「わしの惡い癖なんで、惡しからずな」といつて、何處へか行つてしまつた。

その後も、時々、列車の中を落着かぬ樣子でぶら〳〵してゐたり、座席にしやがんで、戰時外科病理學といふ

表題の讀める雜誌の論文を讀んだりしてゐる彼に出逢ふ事があつたが、度を越えて熟いこのブルマンの中なのに、彼はすり切れたオヴアコートとぐしや〳〵の山高を着て、その上幾日も鬚を剃らずにゐるのだつた。そして他所他所しい丁寧さで、うなづいて見せた。

晝食に出掛ける途中、座席の前を通つたので、食堂へ行きませんかと尋ねて見たが

「有難う、後で行きますよ」と、ぎこちない返事をした。

晩飯の時にも、さそつて見ると

「折角ですが、丁度濟まして來た所なんですよ。」

ところが、食堂車で顏を合はせる事は一度もなかつたので、先生食堂車へは行かないんだなと判つた。何時、どうして食事をするんだか、それこそ一の不思議であつた。

列車は、その夜ヘレナで十分間停車したので、わたしは嚙みつくやうな寒風に吹かれながら、足早やに、五六度プラットフォームを上下した。レウエリンも同樣に歩いてゐたので、何度も行違つたが、その内に見えなくなつた。やがて列車が動き出したので、洗濯室へ入つて行くと、先づ目についたのは、レウエリンなのだ。腰掛の上に、ぶざまにブツ倒れて、帽子は床に落ち、上衣ははだけ、口は開いて、鼾をかいてゐる。三合壜を握つた兩腕は、徐々にほぐれて行き、壜は列車の動搖につれて搖れるので、臭ひの惡いウヰスキーが、胸のあたりに滴れかゝるのだつた。わたしは壜を網棚の上にのせてから、彼を搖り起した。

「何――」と我武者羅に起上らうとした彼は「おや、おや〳〵〳〵〳〵」といつて、じつとわたしを見上げ見下

してから、いとも丁寧に微笑して「あなたつて事を、よく知つてましたよ。まあ掛けて下さいよ。しこたまウキスキーをやりましたんでな。」

「御機嫌はいかゞですかね、レウエリン家未來の戸主さん」わたしはじやうだん半分にいつてやつた。

「いやどうも、わしは碌でなしですよ」とはめを外して快活になりながら「だがそんなぢやあないんですよ。戸主にはヒユバートがなりませうよ。ヒユバートは戸主振りを心得とりますでな——それにマリー令孃とも約婚が出來とりますし……ところでわしの事になると、みんなは默つちやゐないでせうよ」と、こゝでわたしの背中をたゝいて「モーチマーは惣領なのに、フランダースで戰死をしてくれたつてな。え、何ですつて？」

ちよつとの間、彼は物思ひにふけつてゐる樣子でじつと前を凝視めてゐた。出眼の、軟い貧弱な黑い鬚で、一面にくすぶつてゐる小さな元氣のない、それでゐて氣の立つてゐる顏の形が變つてゐた。

「わしは、アンシントンで晩餐の席につきませうて、ブルークスなんか——あの男の親爺の代には、わしの祖父の厨僕だつたんですがね——その年寄りのブルークスなんか、わしが歸つて來たんで、毀り上げてゐますよ。その席にはお袋と親爺だけが坐るんでせうが、あの老人がこゝにゐでもするやうに、眼に見えるんですよ。あの男は、何故歸つて來なすつたなんて、聞きはしませんよ。それよりやあたゞ坐つて、例のもじやくしのしかめ眼で、わしを見てゐるだけですよ。お袋は、すつかり黑裝束で、テーブルの端つこの所で、あすこの革張りの椅子のやうな——靑い顏をしてゐませうて。お袋が、例の靜かな死人のやうな聲で、『ヒユバートは聯隊についてサルニカへ行つてるし、デイックは、ウイツチカーチで教練を受けてゐるんだよ。モーチマー、お前はどうするつもりなんだね？』つていつてるのが、見えるやうですよ。」レウエリンはこゝで口をつぐんだが、その顏は嶮しかつた。「お母さん、わたしは明日出征するんです！」

そして、わたしには何もいはないで、よろくしながらドアの方へ行つて、出て行つてしまつた。わたしが、齒をむき出して笑つてゐる驛夫とブルマンの車掌とが、(わたしには彼のだと判つてゐる) 上部寢臺へ、前後不覺の男の軀をかつぎ上げてゐたのを見たのは、それから後の事だつた。

爾來、毎夜彼は規則的に一杯聞し召して、話しかけて來たので、彼が經驗し且つ愛した過去や、勅任判事がアツシスの週に、巡回して來ると開かれるといふアンシンガムでの宴會や、中世の城妃然と病める村人を慰問する彼の母親や、クリスマスの前夜に臺所で溢れてゐるビールや醉拂ひの小作人や、それからキヤムブリッチの學生生活やなんかの生々した物語を聞く事が出來た。或時など、ロンドン病院で助手をやつてゐた時の事や、醫學生等と馬鹿げた放蕩をした事や、しようちゆうウキスキーを離さなかつたので、病院にゐる時にも、家にゐる時にも、手がブルくく震へて困つた事なんかもしやべり出した。それから、彼の生活を更生させ且つ癒してくれた戀愛事件の話まで出て來た——彼は、かうしたとり止めのない生活から、救つてくれる唯一の事件として、我武者羅にそれにしがみついたやうだつた。ところが家からは斷然たる反對だ——それで瓦落——米國、といふ事になつたのだ。彼は少しも脈絡をつけて話してくれなかつたので、わたしはこれらの斷片的な話を纏合はさねばならなかつたが、それでもそれこそは一個の人生の印象的な繪畫を構成するものであつた。

やがて、シカゴで別々の列車に乘つたので、彼の姿を見失つて仕舞つた。

その後五日經つた日に、ニューヨークのわたしの室の戸をたゝく者があつた。レウエリンなのであつた。彼は剃刀こそ當てゝゐたが、帽子とオーバーコートとは以前にも增してみすぼらしく、カラなんかはこれでも白いといへるだらうかといふ位で、相變らずウキスキーの臭をさせてゐた。

「御免蒙りますよ」何か申譯のない事をしたといつた樣子ではひつて來て「列車でこちらの御住所をうかゞはせていたゞいた事を御記憶でせうかな、何か役に立つ事があつたらと仰言つて下さつた事をな——」

「だが、あなたは船に乘られた事と思つてゐましたよ。あれから二艘も出帆しましたからね。」

「いや、それは知つとりますがな」とボンヤリ答へて「實は、少々お恥しい事なんですがな——電報を二本も打つたんですが、返事が來ないんですよ、まだ間がありましたかな。」

そこでわたしは、色々考へた擧句、多分戰時狀態だから電報が遲れるので、この際何をして貰ひ度いのかと聞いて見た。

彼はもぢ〳〵しながら「お願ひするのは嫌なんですがな。それにあなたが大學出の方でなきゃ、こんな事をお願ひする男ぢやあないと思つていたゞき度いんですがな。わしも大學出なんで、二人共特別の階級の者なんで——いはゞ兄弟同志なんでな。それでも一度親爺に電報を打ちたいんですが……ところが……ところが……この所ちよつと困つとりますんでな。若しやあなたが——」

ぢやあ、彼の爲に電報を打つて見ようといふと、彼は元氣になつて

「いやどうも有難い事で……金が來たら必ずお返ししますよ——來なかつたにした所で——女房に、家賃の中から二十弗送れといつてやりますでな……」

「來なかつたにした所で、ですつて？　だがお父さんはきつと——」

「送つて來ないかも知れませんよ」レウエリンは微笑しながら、疑はしげに頭を振つて「親爺はどだい舊弊人でな。御存知の通り、以前わたしを勘當しましたでな。片意地な連中ばかりですよ。」

「ぢやあ、お父さんから金が來なかつたら、どうなさるんです。カリフオニアへお歸りですか？」

「いや」と考へ〳〵「いや、歸らうなんて思ひませんよ。こゝにゐるつもりなんでな、カリフオニアとは緣切りですよ、女房なんか、わしがゐなくても結構仕合せですて。」

「それにしても、どんな風にしてこゝにゐますかね。金はないんだし、それに——」わたしはとても仕事が見つかるまいといつてやる心算りだつたのだ。英國は一切の男子を必要としてゐるが、米國はさうでないのだから。

「どこでも住めば都ですて」レウエリンは謎のやうにいつた。

「判りました。では返事が來なかつたら、知らせて下さい。多分何とかして上げられるでせうから。」そこで握手して別れた。

一週間後に、五弗の爲替だけしか入つてゐない封筒を受取つたので、汽船會社に電話をかけて見たが、ドクター・モーチマー・レウエリンなるものは、英國行きの汽船に乘込まなかつたとの事だつた。——捜し廻つた擧句にやつとの事で、彼の逗留してゐたホテルが見附かつた——郊外の衣服商が卸屋へ仕入れに來る時によく泊る、古

ぼけた宿屋だつたが。

「レウエリンですつて？」番頭はいつた。「あの人のお友達ですかい、あなたは？ 六日前に勘定を踏倒して、出て行きましたよ——トランクが取つてありますがね。中には汚れたシャツしかはひつてやしませんよ。」

わたしは、彼の弟で英國、カーナヴオンシヤア、アンシンガムのレウエリン家未來の戸主なるヒユバートに手紙を出すべきであらうかと迷つたのであつた。

一九一六年作

情けのあるところ

「二枚！」古ぼけたデイナーコートを着た大男が、肩越しに、切符賣窓の方へ叱鳴る。この男は、白髮でどつしり太つてゐて、ローマの元老院議員のやうな顏をしてゐる。彼は、入場者が辭つばらつてゐやしないかどうかと、じろ〳〵調べながら、入場者の手に持つてゐる切符の上の方で、喧嘩腰で拳固をかためてゐる。それからいつでもぶら〳〵ゆれてゐる色ガラスのドアを押して開けると、ヘーマーケットの光りと運動、やかましいダンスのリズムが、棒か何かで打ちのめすやうに、がんと頭を打つ。

輕業師のビルも、矢つ張り普段着のまゝで、諸君と客席との間を隔てゝゐる欄干にもたれて、もし相手が顏馴

染みであれば、拳闘師のやうに、相手を見て齒をむき出して笑ひ、相手が知らない顏だと、しかつめらしくうなづいて、じろ〳〵樣子を見てゐる。ビルはなか〳〵行儀がいゝ。大きな聲で歌を唱ひ出す若い學生や、いゝ年をして作法をちつとも知らないのらくら者や、じやら〳〵じやれつくダンサーや、不作法に、大つぴらで卷煙草をふかしてゐる娘どもは困つたものだ。ヘーマーケットは、町中で一番上品な場所だ。

中は、壁に張り詰めてある鏡の反射で、壹よりも明るい。やかましいオーケストラの底拔け騷ぎ、調子はづれな聲で會話をする人の金屬的な調子、何とも言ひやうのない極端に派手ななりをした女の姿、うよ〳〵人の混み合つてゐる客席で、凡ゆる不自然な姿態の限りを盡して、ゆつくりワルツを踊つてゐる男女の群……圓い木製のテーブルは、そこら中にあつて、山高帽の流れが絶え間なくそろ〳〵と出たりはひつたりしてゐる。ちよつと立ち止つて、この雜然たる印象を纒めようとすると、忽ち八方から眼を驚する。廣間全體から、欄干のすぐそばにあるテーブルからも、棧敷の椅子からも娘たちが新らしくはひつて來る客を一人々々じろ〳〵見張つてゐる。綺麗な凄い娘たちで、着附けの拙いのや、馬鹿にけば〳〵しいなりをしてゐる者はあるが、貧弱ななりをしてゐる者は一人もない。これ等の娘さんたちの眼は招くでもなければ、挑むのでもない。惡口を言つてゐるのでもない。たゞ、じろ〳〵と猫が鼠を見張つてゐるやうに、物欲しさうに諸君を見つめるのだ。

ところで私は、何ヶ月ぶりかで、ヘーマーケットへやつて來た。相變らずいつもと同じだつた。「ビル」私は言つた。「御機嫌よう」實際彼は機嫌がよかつた。「マルサはゐるかい？」

ビルはうなづいた——彼は口數の少ない男だ——そして拇指を後ろの部屋の方へしやくつた。だが、そこには

黄色い芝居のビラや、亡者喜劇の寫眞や、めい〳〵一人づゝ娘のついたテーブルが一杯おいてあつて、彼女はそこにゐなかつた。勿論、彼女はどこかへ變つたのかも知れない。それでも私は、二階のバルコニーへは行かないで、舞踊場へ通ずるドアをくゞつて、一つのテーブルに腰をかけた。給仕がやつて來た。私は彼にさゝやいた。すると、暫くたつてから、一人の女が廣間の向う側で立ち上つて、私の方へ歩いて來るのが見えた。それがマルサだつた。彼女は、すんなりしてゐて、黒ずんだ青い着物を着け、帽子には薄い黄色の羽を着けてゐた。

「あらまあ」と彼女は言つた。これが、ヘーマーケットの挨拶の仕方だつた。それから彼女は小さい手で私に握手をして、上品に、につこり笑つて椅子にかけた。彼女の髪はまだ軟かくて黒く、彼女の顔は卵形で、ほんのり赤味を帶び、彼女の眼は正直で曇つてゐないことに私は氣が附いた。

私たちはビールを註文した。

「あら、」彼女はだしぬけに言つた。「貴方に前にお眼にかゝつたことがあるわね」

「まだ四年にもならないぢやないか」私は彼女に言つた。「僕は君を知つてるよ」

「さう〳〵、」彼女の眼は昔馴染の眼のやうに光つた。「隨分前だつたわね。あの時分には、メー・マンロウもこゝにゐたでせう。それからローラ・シュヴァリエも、それからベーブ・テーラーも、みんな昔の仲間なのね。その仲間から離れたのは、あたしだけぢやないかしら」

「その間中君は一體何をしてたんだい」彼女は肩をすくめた。「何も別に。同じよ……さう〳〵ちよつと待つてね！　この前貴方にお眼にかゝつてから、あたしヨーロッパへ行つてたんだわ」

「ヨーロッパへ！」私は不思議に思ひながら言つた。彼女は微笑しながらうなづいた。ダンスが暫く止んで、けば〳〵しい舞臺で、二人の男と一人の女とがありつたけの聲を張り上げて『ターキートロット』の歌を歌ひながら、太鼓とシンバルとを鳴らしてゐた。ありふれた下劣な樂器の音が、めちや〳〵な人間の聲と、恐る〳〵慄へながら調子を合せてゐた。耳がつんぼになるやうな騒がしさだつた。歌手の身體は、臀の邊りから、神經的なグロテスクなリズムをつくつて動いた。全體の其の場の空氣は、何となくめちや〳〵にやけくそで、それでゐてまんざら不愉快でもなかつた――何かしらけはしい眼をして、おつくりをした女たちや、鏡と調和するものがあつた。彼等は「熊だ！　熊だ！　熊だ！」節を歌つた。

「あれはたしかにいゝ歌ね」とマルサは夢見るやうな眼をしながらさゝやいた。「さうね。ヨーロッパへ行つたのよ――貴方あちらへいらしたことあつて？」

「うん」私は微笑した。「君は、きつとムーラン・ルウジュや、アベエや、ロンドンのグロウブなんかを見て來たらうね？」

「いゝえ、あたしあんまり遊び場の方へは行かなかつたわよ。さういふ場所はもう見飽きてるもんですから」

「マルサ」私は不思議に思ひながら言つた。「何のために君は外國へ行つたの？」

彼女は額に皺をよせた。「さうね。あたし何か知りたいと思つてだわ。貴方だつて子供の時分に、學校の本でいろんな事を憶えたでせう。ロンドン塔だとか、ストラットフォードにあるシエークスピアの家だとか、さういふものが、そこにあるんだつてことは信じてゐなさるでせう。でも本當にあるつてことを確かめようと思へば、

それを見なくちやならないでせう」

私はちよつと驚いた。だが、要するに、ヘーマーケットの娘たつて、他の人と同じやうに、シエークスピアの家を見たがつてはならないといふ法はないんだ……

彼女は續けた。「あたし、いつも貯金してたのよ。何をしようつて當もなかつたんだけれど。たゞいつか田舍で、小さい別莊を買つて鷄を飼つてみたかつたの。お金がすつかり貯まつたらさうしようと思つてゐたわ。所が去年の春、ふつと考へちやつたの。そして或日、銀行からお金を引き出して、新しい着物を一着買つてルシタニア號に乘つちやつたの——一等船室よ。いゝえ、賭をしたつていゝわ。あたしそんな安つぽい旅行なんかしないわよ。」

「でも、そんなにお金があつたのかね——？」

マルサは笑つた。「たゞロンドンへ行つて、本當の旅客のやうに、一週間程滯在するだけのお金があつたの。それから先どうなるかなんてことは、勿論知らなかつたわ。たゞ、ゴードを當にしてたのよ。船の中でね、優しいお人好しの年寄りの夫婦に逢つたの——きつと牧師の夫婦だつたらうと思ふわ——そして一緒にロンドンへ行つたの。この夫婦は全くいゝ人たちで、あたしのことを、女學生だと思ひこんでたのよ。あたしがいつでも、溫和しいじみな身なりをしてゐるでせう。それが好きなんですの。派手な身なりをしてゐる娘は、はじめから分が惡いわ。あたしたちは、ロンドンでワルドウフに泊つたの——それは、地獄のやうに靜かな、上品な宿だつたわ。そして、あたしたち三人でロンドンの町をすつかり見つくしちやつたの。ロンドン橋も、ウエストミンスターも水晶宮も、町の方は、區切りをして、手分けをして見て歩いたの。全くお上りさんでしたわ。さうね、たしかに。

アランブラや、グロウブへも行つたわ。あたしの附添人が、耳をうつてる間に。だけどイギリスの娘さんは、ひどい氣取りやね。」

彼女は昔を思ひ出すやうに、瞑想した。「あたしあの一週間のことを、いつまでも忘れられないわ。樂しかつたの何のつて、あたしまるで、二つの赤ん坊になつたやうだつたわ。噂に聞いてゐたものを皆見たんですものね。」

私たちの先の方で、樂隊が吼えるやうな「ゲービー・グライド」を囃してゐた。客ひきのビルは、こはい顏をして欄干にもたれてゐた。私は一度、彼がハットピンで給仕を刺した娘を、客席の外へひきずり出して、ドアの外へはふり出したのを見た。私たちのすぐそばに一つのテーブルがあつて、若い新參の娘が、顏を赤くしたり靑くしたりしながら、こは〴〵山高帽に話をしてゐた。新らしいのが……だが私は、マルサの冒險に夢中に聽き入つてゐた。一人ぼつちで、ロンドンへ——勉强に。

「しかしお金の方はどうしたの？」私はぶしつけに訊ねた。

「今そのことをお話しようと思つてたとこなのよ。或る朝起きてみると、もう財布の中に七志（シリング）しかないんでせう。その日、あたしがハイド・パークでのらくら時を過してゐると、若いアメリカ人があたしに話しかけたの。あたしもどのみちロンドンにはうんざりしてゐたでせう。で、その晩、例のお婆さんにおやすみのキッスをすると、自分の部屋へ歸つて荷造りをしちやつたの。そして二人で、その朝の二時に拔け出しちやつたのよ。翌日お婆さんがどう思つたらうと、思ふことが時々あるわ。そんなわけで、あたし巴里へ行つちやつたの。二人はグランドホテルに陣取つて、まるで二人の王樣のやうな生活をしてゐたの。貴方、五時頃に、カフエーの正面の歩道の上に

坐つて、小鳥があちこち飛びまはつてゐるのを見たことがあつて？　あたしそんな風だつたのよ。隨分、怠け者だとお思ひになるでせう。賭をしてもいゝわ。あたしカタログを手に持つて、ルウヴルを歩きまはるのに、三足の靴をへらしちやつたわ。その男ですか？　何でもないのよ。あたしに綺麗な着物を買つてくれてね――貴方黑い絹を御覽になつたことがあるでせう。でも、ちつともぴかゝしないのよ。巴里にゐるアメリカの娘たちの中には、自分で生活しなければならない人が隨分あつてよ。あたし二週間巴里にゐる中に、或る日、あたしの友だちが、ドロンをきめこんぢやつたの。あたしその次の日から、もう路傍へおつぽり出されちまつたらうと思ふわ。あのイギリス人のところへ行かなかつたら……

「そのイギリス人は、六十位のお爺さんで、ビヤ樽のやうなお腹をしてたの――だけど、あたしには、たしかに綺麗につきあつてくれたわ。あたしたちは、ベルギーや、オランダを廻つて、ブリュセルや、ハーグやオスタンドへ行つて、それからドイツめぐりをしたの。あたしいつも欺され通しだつたわ。ワーテルローでは、一日中歷史の本を讀んで過ごしたのよ。どういふものかあたしベデイカアの案内書に書いてある所をすつかり見てしまふまでは、もどかしくてしやうがなかつたの。だけど、それから暫くして、シュトラスブルグまで來ると、その人が、あたしにひどくあたるやうになつて來たの。『おい、食堂車の材料があるだらう。あれをちよん切つておいで、お前に出來ないかい？』とかうあたしに言ふんです。それであたし或る晩、綺麗さつぱりとその人と別れて出てしまつたの。あたし誰のだつて犬になんかなる氣はないでせう。で、巴里へ行く旅費だけを持つて巴里へ行つちやつたの……でもあたしどうにかなると思つてたわ。巴里へ着いた最初の晩、あたしモンマルトルへ行つて

或るアメリカの娘さんのとこへころげこんだの。その娘さんが自分のベッドへあたしを睡らせてくれたのよ。アメリカの女は、皆助けあつてゐるんですからね。あたし、どの仲間へもはひつてみたわ。モンマルトルはまるでニウヨークのやうなの。たゞ、ニユウヨーク程正直ぢやありませんけれどね。あたしの言ふ意味はおわかりでせう。全くあたし運がよかつたのよ。その次の晩ピガールで、何だか薄氣味の惡い男と踊つたの。でもその男はさうぢやなかつたのよ。あちらにはそんな男はないことよ。そしてその男はあたしに名刺をくれて、一緒にブラジルへ行かないかつて言ふんでせう。名刺には小さな王冠がついてゝね、『マヌエル・ダ・ボルタレス伯爵』と書いてあるんです。

「あたし僞伯爵や何かで可哀想な娘さんたちを欺した話を、隨分聞いてるでせう。で、マアベルに逢つた時に、その名刺を見せて、その男がかたりぢやないかと聞いてみたの『大丈夫よ。』とマアベルはいふんですの。『金づるを逃がしちや駄目よ！』それでもあたしまだすつかり安心できなかつたの。その晩はちつとも眠れなかつたのよ。わかるでせうあたしの氣持ちが。だつてその男が、あたしをどこかへ連れて行くでせう。あたしは言葉もわからないし、誰もアメリカの言葉なんか話しやしないでせう。そしてあたし一人おいてきぼりにされたらどうでせう？　だけどあたし、一か八か、運を天に任せて行くことにしたのよ。船で二週間かゝつたの――そしてリオへ着いたのよ。あたし世界中でリオくらゐ美しい所はないと思ふわ。ほんとにあの時分は素敵だつたわ。金曜日の晩にはいつも上流倶樂部へ御飯を食べに行くでせう。そして土曜日には、夕飯がすむと町中の者が晴れ着を着て――假裝して、ね――そして貸し馬に乘つて歩き廻るでせう。あたし四ヶ月もあの町に滯在してたわ……

「いゝえ、あたし大して幸福ぢやなかつたことよ。貴方だつて不思議なものばかり見てると、しまひには馴れつこになつちまふでせう。外國のものは何でも、思つてたよりもずつと立派でせう。それにしよつちゆう聞いてたものを見ると、興奮しちやふでせう。あんまり神經を刺戟して、しまひにはぼんやりして來るでせう。あたし一年近くもリオにこびりついてゐたのよ。だけどあたし……

「今でもはつきり憶えてるわ。ある晩倶樂部で、大きな舞踊會があつた後で、少し張りつめた氣持ちで歸つて來たの。マヌエルはすぐ眠つちやつたけれど、あたしどうしても眼がふさげさうにないのよ。恰度それは四月のことで、窓が明けつぱなしであつたもんだから、空がずうつと何百萬哩つて向うまで、まつすぐに見えたわ。あそこの星は熊座と猫座のの邊にあたるでせう。どうしてあたしプロウドウエーのことなんか思ひ出したのか、わからないんですけれど、蝙蝠座のずうつと向うの邊に、プロウドウエーが、電氣の光りでうね〳〵してるのが見えるやうな氣がしたのよ。活動小屋の看板から、氣のない顏をして出て來る群衆や、劇場からシャツの前をはだけて出て來る群衆にまじつて、恰度その時、アイリッシュ・ラッグを彈いてゐる絞絃琴の音が聞こへるの。あたし古びた正直な元氣のないニウヨークが犬のやうに厭になつちやつたのー　外國では、皆元氣がいゝでせう。それから昔馴染みのマーケットが見えるの。娘さんたちがそこら中に坐つて、ビールのしみの着いたテーブルがあつて、スイート・カップの煙草の煙がたちこめてゐるマーゲットよ。その頃には、學生さんはお休みで皆やつて來るでせう。皆下町へやつて來るでせう。そして勿論皆マーケットへぞろ〳〵はひつて來るでせう。あたしそこにゐる大男のビルが、ほんとに懷かしくなつて來たの。で、あたしマヌエルをつゝいてやつたの『どうしたんだい？』とマヌエルは言

ふの『あたしニウヨークから電報が來たのよ。大切な電報なの。一日にコニー・アイランドが開けるんですつて。次の船は何時でせうかしら？　あたし立つことにするわ』かう言つてやつたの。

「伯爵は、几帳面な人だつたわ。あの人はあたしに一等の切符を買つてくれたの。『次の船は何時なの。あたし來年又來るわ。』あたしかう言つたの。その時の船の旅は、あたしの一生中で一番樂しい旅だつたわ。あたしほんとに獨りぼつちなんでせう。そして船の中で一人も男を近よせなかつたわ。本ばかり讀んで誰にも話をしなかつたの……

「それから、昔馴染みの町が、入江の空に霞んで見えはじめると、あたし興奮して話も出來なかつたわ。痛いやうだつたわ。あたし何にも待つてゐなかつたの。上陸するとすぐ荷物をチエキで、エリー停車場へ送つておいて渡し船へ乘つちやつたの。それから高架鐵道で二十八番街まで行つて、こゝへまひこんぢやつたの。外でおやぢが言ふんですよ『おい〳〵切符がなくちやこゝへはひつちやいけないよ。』それから傍へよつて來て見て、『おやおや、これは……一體お前さんどこへ行つて來たんだい？』あたし返事が出來なかつたわよ。あたし、聾で啞で、盲目の馬鹿みたいに、つつ立つてぼんやりしてたの。するとおやぢがドアを開けてあたしを中へ入れてくれたの。するとそこにビルがゐたのよ。そしてその後ろには多勢の者が踊つてて、小さいテーブルが澤山あるのよ。家だ！　これが家だ！　家だ！　大男のビルが、マルサつて呼んでるのが聞こえるの。『人氣娘が歸つて來たよー』全く貴方にはとてもわからないわ。あたしテーブルにぐたりとよりかゝつて、わめいちやつたの……『さあ踊りましよう』つて。」

一九一三年作

正義の味

暗くなつて來ると、すぐに若い娘等が、例の街角をぞろ〳〵通りはじめる――づんぐりしたきつい顏の「安つぽい」娘等が、羽でしつかり包まれた、埃だらけの小鳥のやうな娘等が。彼女等は、十四番街から、アーヴイング廣場へやつて來て、十六番街で、ユニオン・スクエヤの方へまがり、十五番街を、ぞろ〳〵下つて（又、例の街角を通つて）第三廣小路の方へ行き、そしてぐる〳〵廻りして、いつも例の街角へ引き返して來るのだ。何かしら不思議な引力が、彼女たちを十五番街と、アーヴイング廣場との街角へ引きつけてゐるのだ。多分この場所には、冒險とか、幸運とか、ことによると、戀愛といふやうな因緣があるのだらう。どうしてそんな意味をもつやうになつたんだらう？　男たちもさうだといふことを知つてゐる。夜になると、その界隈の物影といふ物影には、山高帽がぞろ〳〵集つて、大膽な奴になると、アーク燈の光を全身に浴びて、厚がましく立つてゐるのもある。彼等とすれ〳〵に、お臀をこれ見よがしに振りながら、商賣柄で、おつそろしく馴れ〳〵しい言葉を、動かない唇で囁やきながら、娘たちが通り過ぎて行く。

この土地には、お巡りさんがゐて、どうしてもそれを逃れるわけにはいかない。彼は娘たちと同じ足どりで歩いてゐるが、もつとゆつくりと、勿體ぶつた歩きかたをしてゐる。すると娘たちは、しよつちゆう歩きつゞけてゐなければならない。どこかへ用事があつて行くやうな風に思はせなくちやならない。社會は、惡事を安心させ

てやらせてはおかない。もし女が立ち止まると、どんなことになるだらう？　巡査が街角へ姿を出すと、そこいらにもぐ〳〵してゐた女たちは、魚の群のやうにばら〳〵に逃げ去つてしまふ。そして巡査が歩き出すまで、彼女たちは通りの暗い側に待つてゐる。もしその中の一人が捕まつたら？「留置場行きだ！　そして頭の髮を切られちやふんだ！」だが巡査もおどけ者だ。彼は卑怯な眞似はしない。たゞ暫く立ち止つて、自慢さうに棍棒をひねくり廻して、それからおもむろに十四番街の方へ歩いて行く。女どもが散り〳〵に逃げて行くのを見るのが、彼に非常な滿足を與へるのだ。

彼の廣い背中が、闇の中へ消えて行くと、娘たちは又ひき返して來る――通りを横斷つたり、又後戻りをしたり、通り過ぎたり引き返したりして、足まめに歩いてゐる。

その街角に立つて、小さい喜劇を見守つてゐる私の耳には、方々から低い私語や、ぞろ〳〵足をひき摺る音が聞こえて來る。彼女たちは、晩飯をすましてゐるかゐないかによつて、私を罵つたりひやかしたりする。その中に巡査がやつて來た。

彼の堂々たる肩が、十四番街の薄暗がりの中から、悠々とゆれながらやつて來た。まるで專制君主のやうに、滿足しきつた、横柄な態度だ。娘たちは音もたてずにすうつと消えて行つた。そして街角に殘つてゐる生き者はたつた三つしかなくなる。しゆう〳〵燃えてゐるアーク燈と、巡査と、私自身と。

彼は暫く立ち止つて、棍棒をひねくり廻しながら、むづかしい顏をして、あたりを見まはしてゐた。何か物足りない樣子だ。ことによると良心に苦しめられてゐるのかも知れない。その中に彼の眼は私の上に落ちた。そし

て額に皺をよせた。
「行かんか！」彼は横柄に首をしやくつて命令した。
「何故？」私は聞き返した。
「何故でもいゝ。わしが行けと言ふから行くんぢや。こつちへ來い」彼はゆつくり私の方へ歩いて來た。
「私は何にもしてゐませんよ」と私は言つた。「市民が乘り物を見つけるまで、街角に立つてゐるのを、禁止する法律は私は知りませんね。」
「默れ！」巡査は棍棒を私の方へ見せつける樣に振り乍ら言つた。「さあ行かんか。行かないと打ちのめすぞ！」
私は、中年の男が、包みを小脇にかゝへて急いで歩いて行くのを見つけた。
「ちよつと待つて下さい」私は言つた。それからその見知らぬ人に向つて、「おそれ入りますが、貴方はこのことについて、證人になつていたゞけますまいか？」
「いゝですとも、」彼は元氣よく言つた。「一體どうしたんです？」
「私はこの街角に何にもしないで立つてゐたんですよ。するとこのお巡りさんが私に行けと命令するんです。何故行かなくちやならないのか、私には分らないんです。この人は私が行かなければ棍棒で打つと言ふんです。それで私が抵抗してゐないといふ證人になつて頂きたいんです。もし私が何か悪いことをしてゐたんなら、私を拘引して、夜間裁判所へ連れてつて欲しいですね。」巡査は、ヘルメットを脱いで、困つたやうな樣子で頭を掻いた。
「そりや御もつともものやうですね」見知らぬ人は齒を出して笑つた。「私の名前を申し上げましようか？」

だが巡査は、その笑ひを見た。「ぢや來給へ」彼は、私の腕を荒々しく摑まへながら、うなるやうに言つた。見知らぬ人は私たちにおやすみ、と言つてまだ齒を出して笑ひながら去つて行つた。巡査と私とは、二人とも何も言はずに、十五番街の方へ歩いて行つた。私には、彼が困つて、私を放免しようと考へてゐるのがわかつた。だが彼は齒ぎしりをしながら强情にずん〳〵進んで行つた。
私たちは、煤ぼけた、物々しい夜間裁判所へはひつて行き、廊下を通り過ぎて、欄干で圍まれてゐる場所へ通ずるドアのところまで行つた。そこには罪人どもが、ベンチの前に立つてゐた。ドアが開かれた。すると法廷の向うの方に、ばら〳〵になつて腰をかけてゐる物見高い見物人の、ぼんやりした人影と、鳶色の假髪をつけて、罪人の出て來るドアの方をじつと見つめながら、いつまでも待つてゐる一人の年とつたユダヤ人の女とが見えた。高くて、暗くて、マホガニー擬ひの鏡板のついた天井には、いつものやうに少ししか明りがついてゐなかつた。それは室内を崇嚴にするつもりなのだが、たゞ陰氣にしてゐるだけだつた。正義といふものは、いつも光りを避けなければならぬものと見える。
私の前に、もう一人の被告がゐた。それは痩せた、娘々した姿の女で、彼女の腕をつかまへてゐる警官の肩までもとゞかなかつた。彼女のスカートは皺くちやになつて、びつたり臀にからみついてゐた。靴はひゞの入つた、だぶ〳〵の靴だつた。大きな、羽根飾りが、帽子の上にぐにやりと垂れてゐた。裁判官は黑衣の腕を上げた——私には彼の言葉は聞えなかつた。
「賣淫誘惑罪」警官が皺嗄れた聲で言つた。「第六廣小路の二十三番街の附近で——」「拘留十日——次は、」

娘は頭を後ろへひいて、臆面もなく笑つた。

「貴方は――」彼女は金切り聲を出して又笑つた。だが巡査は、亂暴に彼女を自分の前へひき寄せて、二人は別のドアから出て行つた。

それから私は、彼女の笑ひ聲がまだ耳の中に殘つたまゝで、前へ進み出た。

裁判官は紙片に何か書いてゐた。そして顔も上げずに、ぶつきら棒に言つた。

「罪名は何ですかね。警官？」

「警官抵抗罪です」巡査は膨れつ面をして言つた。「私が行けと言ふのに、此奴が行かないと言ふんです――」

「ふむ。」裁判官は氣の抜けたやうに、呟やきながら書きつゞけて行つた。「行かない。えゝ？　それで、君の方に何か言ひ分があるのか？」

私は答へなかつた。

「何も言ひたくないんだな？　それでは多分君は――」

その時、彼は顔を上げてうなづいた。そして微笑した。

「やあ、リード君か！」彼は言つた。彼は毒々し氣に巡査を眺めた。「今度君が僕の友人を引つぱつて來たら――」彼は思はせぶりに、嚇しの文句をしまひまで言はなかつた。それから私に向つて「君ちよつとこのベンチに腰かけてみないか？」

一九一三年作

お人好し

その娘が、正直な娘だつたのか。どうかジョオジには今だにわからない。そんなことは五分間も話してみれば、普通わかることなんだ――いづれにしろ、ジョオジにならわかることなんだ。それにこの事件が、ます〳〵重要な事件であるわけは、ジョオジといふ男は、さうした事柄には、むしろちやんとした考へを、もつてゐる男だつたからだ。彼は人好きのする、人一倍親切な男で、御多分にもれず女に對しては甘い方で知られてゐたんだが、かうした女の社會的の地位については、嚴格な考へをもつてゐた。それに附け加へて言つておいてもいゝが、彼は自分の金や、同情を當てこんで來る奴には、非常に敏感で、相手のトリックをすつかり見ぬく男だつたのだ。

何でも、彼が四十四番街の倶樂部から出て來た時に、一人の娘が傍を通り過ぎたものらしい。彼女は、頭の髪のけばだつた、極く小柄な娘で、安つぽい青色の、出來合ひの服を着て、まつすぐに羽根のつゝたつた圓い小さい帽子を被つてゐた。ところで、女が四十四番街をぶら〳〵歩くなんてことは、あたりまへのことなんだ。しかし、小さい、見すぼらしい、出來合ひの服を着た娘が、そんな所をうろついてゐるのは、たしかにほめた散歩ではない。私は警官がどうして彼女をとめなかつたのか、不思議に思つてゐる。

兎に角、彼女はそこにゐたんだ。そしてジョオジが、ぐいとドアを押して外へ出ると、彼女はひどく眼につくほど、歩調をゆるめて、彼を見てにつと齒を出して笑つたんだ。こゝが、この話の實に驚くべき部分なんだ。ジョオ

ジは、彼女と歩調を合せて、並んで歩き出したものだ。そんなことは別に大したことぢやないやうに思はれるかも知れないが、それは、四十四番街倶楽部へはひつてゐない人の考へだ。何故つて言ふと、吾々は、倶楽部の前では決して娘を拾ふやうなことはなかつたんだから。それに、ジョォジがそんな眞似をしたのは、その時がはじめてだつたのだ。彼は今、その時のことを考へて、あの娘は、最初から彼を催眠術にかけてゐたのに違ひないと言つてゐる。

「どこか用事で行くの？」彼は紋切型に訊ねた。

彼女は卒直に彼を見上げた。その時彼は、突然彼女の眼が、素晴らしく無邪氣な眼であることに、氣がついた。

「えゝ」彼女は、少しにや〳〵笑ひながら答へた。「御一緒に參りますわ」彼女は息をついた。ジョォジは、はじめて、もしや自分の友だちが見てやしないかと氣にした。「あたし、たいてい毎晩のやうに歩いてるのよ。メエシイの婦人室へ行つて、人に見つかつて起されるまで、二時間程眠つてる時の他は。」

「どんな用事があるの？」ジョォジはポケットの中へ手を入れながら訊ねた。その時分には、もう既に彼女と並んで町を歩いてゐるのを、かなり恥ぢてゐた。彼女は答へなかつた。彼が眼を上げて見ると、彼女は眼に一杯涙をためてゐた。彼女は歩道のまん中で立ち止つて、彼の顏をぴたりと見ながら、小さい頭を、物々しさうに左右に振つた。

「いけないわ」彼女は言つた。「いけないわ。あたし貴方にお金を出していたゞいて貴方を離してしまふのはいや。貴方にお話がしたいわ。」

ところで、もしジョォジが、いつものやうに、氣がたしかだつたら、彼は腹を立てゝ彼女を叱鳴りちらすか、それとも、その界隈に澤山あるホテルへ、彼女を連れて行つたことだらう。さうしたホテルは第六廣小路から五六歩も行けばあつたのだ。だが、或る全く新しい感情が、彼の顏を赧らめさせたのだ、（ジョォジが顏を赧くしたんだ！）そして、さうする代りに、彼は自分でかう言つたのだ。「中央大停車場の待合室へ行かう。あそこでなら話ができるから。」そこで彼等は、あたりを見まはして、引き返して倶楽部の前を通り過ぎて、第五廣小路の方へ歩いて行つたのである。實に大變な話ぢやないか？

私にはこの二人が默り勝ちに歩いてゐた姿が眼に見えるやうだ。――ジョォジの方は、彼女と一緒にゐるのを見られやしないかと思つて氣が氣ぢやない。それに、そんなことをしてゐる自分が何となく腹だゝしくもなるし、ひよつとすると、彼女がどんな女かとあやしんでゐたかも知れやしない。そして彼女の方は、頤を上げて、身のまはりの空氣や、塵埃を飲むやうな樣子をして、じつとビルヂングの天邊を見つめてゐたのだ。それは、冬のはじめの、眞つ靑に晴れた、鋼鐵のやうな日だつた。

ジョォジは眼尻で、ちらり、ちらりと彼女をぬすみ見しつゞけた。彼は不思議な氣持ちがしてゐたんだが、それでゐて、こんな小娘に大して訊ねることはなかつた。

「家はニウヨオクなの？」彼は訊ねた。さうでないことは明らかにわかりきつてゐたのに。

「い……え」彼女は口籠つた。「さうでもないの。あたし、オハイオ州のチリコスから來たのよ。でも、あたしこの町が、素敵に好きよ。摩天樓を見てると、貴方だつてくすぐつたくなるでせう？」

「くすぐつたく？」

「知つてらつしやるくせに」彼女は說明した。「後ろへ身體をそらして、一番高いとこを飛んでゐる鳥よりももつと上まで、すつかり金色に聳えてゐる摩天樓の櫓を見てゐると、何かしら、内からくすぐられるやうな、身内で囀ずるやうな感じがして、お笑ひになるでせう。」かう言つて彼女は嬉しくてたまらないやうにちゆう〳〵と鳴くやうな聲を出した。

「成る程ね」彼は途方に暮れながら私語いた。

「あたしそれが見たいばかりで來たのよ」彼女はつゞけた。「それと何百萬といふ人が見たいために。」

「すると、貴女は、澤山の人間と摩天樓とが見たいためにニウヨオクへ來たといふんだね？」ジョォジは皮肉に訊ねた。君も知つてゐるやうに、ジョォジはそんな話を聞いてゐる程馬鹿ぢやないんだからね。

彼女はうなづいた。「何だかあたし、生れてから今まで、ずつと、ニウヨオクの話ばかり聞いてたやうな氣がするわ。サイモンドへ蹴手がやつて來るたんびに――サイモンドてあたしの働いてたとこなのよ――それからペテイさんが多物の仕入れに東部へ行かれた時に、みんな、エレヴェーターに乘つた話や、地下鐵に乘つた話や、摩天樓の話や、ブロオドウエイの話ばつかりするでせう。あんまりそんな話ばかり聞かされるもんだから、あたしビルヂングの塔のことや、騷々しい明るい町のことを考へて眠ることもできなかつたわ。それであたし、こちらへ出て來たのよ――」

「だが、どうして――」

「あたしのやうな娘がどうしてこゝまで出て來るお金をもつたのかをかしいでせう」彼女は小さい顏で小鳥のやうにうなづきながら言つた。「でもあたし、これで十七よ、そして、あたし十一の時から貯金をはじめたのよ。五十弗貯金したわ。」

ちやうど此の時、彼等は停車場の大廣場へはひる東側の扉をくぐつてゐた。

ジョォジは彼女を荒々しく見た。「今いくら持つてるの？」

「ちつとも」彼女は答へた。そのうちに、大理石のテラスや、立派な階段や、不思議な金色の十二宮が動いてまはつてゐる星の空を象どつたいかめしい天井などが彼女の眼の前にぱつと現はれた。「まあ！」と彼女は叫んで、無骨な指で、かたく大理石の欄干をにぎりしめた。「あたしこんな美しいものをこれまで見たことがないわ！」

「そんなものはどうでもいゝ」ジョォジは彼女の腕をとりながら言つた。「こちらへおいで、話したいことがあるから」彼女は却々テラスを立ち去ることができなかつた。彼女はその場の景色に夢中になつて、何もかも忘れてしまつたやうだつた。彼女はそれが何であるか知りたがつてゐた。みんなあの人たちは何をしてゐるのだらう？彼等はどこへ行くのだらう？　何故彼等は互ひにぶつかるやうにして歩いてゐながら物も言はないんだらう？若しこれが停車場なら、汽車はどこにあるんだらう？　そして何故こんなに美しいんだらう？　十二宮つて何だらう？　そして外の空にはなぜないんだらう？　オハイオ州のチリコスから來たといふ女が、中央大停車場のことをちつとも知らないといふのは、どうも變だといふ考へが突然ジョォジの心を打つた。

「ところで」と彼は言つた。「君の汽車はオハイオ州から來たといふのに、この停車場へ着かなかつたのかい？」

「着かないわよ」彼女は無造作に投げ出すやうに言つた。「あたし渡し船で河を渡つて來たのよ。」彼女は話を濁した。ジョォジは大急ぎで彼女を待合室へつれて行つた。彼はひどく怒つてゐた。こんな大嘘つきにかゝつたことがないと彼は思つた。

「ねえ、おい！」彼は彼女のそばに並んで腰をかけながら言つた。「君はいつからニウヨオクにゐるんだい？」

「かれこれ二週間前からよ——だつてまだ半分も見ないんですもの——」

「多分、何か仕事はないかと方々歩きまはつたんだろ」ジョォジは言つた。「それで仕事がないもんだから、たうとう室をおつぽり出されて荷物を押へられたんだろ！」

「さうよ」娘は少しどぎまぎしてうなづいた。「その通りだつたわ。でもちがつてるとこがあるわ。あたし仕事が見つからなかつたのぢやなくつてよ。仕事なんか探しやしなかつたわ。あたしね、毎日ずつとニウヨオク遊覽自動車に乘りまはしてゐたの。一度乘るのに二弗かゝるでせう。それにつれてつてくれないとこが隨分あるでせう。」

ジョォジは狂氣のやうになつた。「おい」彼は言つた。「君はそんな話を僕が信じるとはまさか思やしまいね。僕はこの町の者だよ。（ジョォジはニウヨオク兒であることをひどく自慢にしてゐた。）僕に本當のことを言ひたまへ、さうすれば助けてあげないものでもない。」

娘は、びつくりして心もち身體をしやくつた。そして眼を圓くして彼を見た。

「そりやね、おつ母さんがいつもあたしのことを恐ろしい嘘つきだつて言つてたわよ。だから、ことによると、ほんたうのことゝいくらかちがつたことを言つてるかも知れないわ。だけど、あたし貴方がどういふおつもりで

そんなこと仰言るかわかるわ、」彼女はおとなしく言葉をつゞけた。「貴方は、あたしが——あたしが——だけどそんなことはないわよ、ないわよ。」彼女は首を振つた。「あたし世の中のこと何でも知つてるわよ。でもあたしは品行のいゝ娘よ。」

ジョォジは心臟にはげしい痛みを感じた。彼は自分で自分を傷つけた。娘の方はといふと、彼女は、今の出來事をけろりと忘れてしまつてゐるやうだつた。しばらく話がとぎれた。

「これからどうしようていふの？」彼はたうとうつゝけんどんな聲で言つた。

「そのことについてあたし貴方にお話しゝたかつたのよ。」彼女は少し昂奮して彼の方に向きなほつた。「昨夜あたしが自分の部屋へ歸らうとすると宿のお内儀さんがあたしを入れてくれないでせう、そしてびしやりと戸をしめちまつて、戸の中から、もうあたしの着物を渡さないつて言ふでせう。それであたしどうしたらいゝかと思つてぶら〳〵歩いてたのよ。しづかな街を、夜、夜明けに歩いてると、あんまり面白くて、つい、どうしようかといふことをあんまり考へるのを忘れちやつたの。それから少しばかりメエシイで眠つて——そして——あのう——さう、貴方のお姿を見て、急に決心しちやつたの。」

「ふむ、どう決心したんだ？」彼はいら〳〵しながら訊ねた。

「さうね、あたし、ニウヨオクのまだ見ないとこをすつかり見たいと思ふの。でもそれにはお金がいるでせう。食べたり眠つたりしなくちやならないでせう。いづれにしても、食べるだけは食べなくちやならないわ。」こゝで彼女は可愛らしい小さい額に少し皺を寄せた。「そのことについて貴方の御忠告を承りたかつたのよ。」

この娘の單純な、向う見ずな考へにジョォジは呆氣にとられてしまつた。聞けば聞くほどわざと嘘をついてゐるのでもないらしい。それに、どうして彼がこの話を疑ふ氣になれよう！

「さうさね！」彼は言つた。「君はチリコスへ歸りたまへ。それが僕の忠告だ。家へ歸るんだ。君はこの町がどんなに恐ろしい町かつてことを知らないんだ！（ニウヨオク兒は、彼等のサドムとゴモラとが好きなんだ。）君はすぐに飢ゑ死にしちやふよ。それから――さうだ、君がこの町の他の奴等に會はなかつたのは運が好かつたんだよ。うむ！（ジョォジはバビロンに巣くつてゐる恐ろしい奴等のことを考へてぞつとした。）もしこれが僕でなかつたら。他の人だつたらどう考へるかわかつてるかい？」

「さうね、」彼女はむつゝりして言つた。「貴方のお考へになつてるとほりに考へるわよ。それに、他の人だつたら、貴方より、もう少し何かして下さるわよ。あたし世間の人をちつともこはくないの。あたしいつも人樣を信じてるわ。そしてあたしをいぢめた人は一人もなかつたわ。あたしこれまでにもずゐぶんいろんな生活をして來たけれど、お腹が空いても大して困つたことがないの。いつも、誰か助けて下さるんですもの――それは、あたしが眞心をもつてるからよ。」

「君は歸つた方がいゝ！」ジョォジは荒々しく言つた。「君は自分で言つてることがわからないんだ！　僕が汽車の切符を買つてあげる。それからお辨當を買ふお金をあげる。急いでお母さんのとこへお歸り、さうしないと旋風にさらはれてしまふよ。（ジョォジは彼の比喩を少々得意になつてゐた。）君が歸りたくないのはわかつてゐる。君が健氣な娘だつてこともわかつてゐる。だが、君が歸らなければ、僕は――」彼が養育院へ入れてやると

いつて彼女をおどかさうとすると、彼女が急に兩手で顏を蔽うて、肩をゆすつてゐるのが彼の眼についた。彼女は彼を嘲つてゐるのだらうか？　彼は亂暴に彼女の腕をとつて顏から手をはなした。彼女は、涙は出してゐなかつたが、どうやら獻欷（すゝりな）いてゐたらしかつた。かはいさうに、ジョォジはどうしていゝかわからなくなつてしまつた。

「御もつともですわ」彼女はとぎれ〳〵に言つた。「あたし、かへります。あたしあんまり一圖に考へ過ぎてしまつたわ。どうぞあたしを家へ歸して頂戴。」

ジョォジは彼女に汽車賃はいくらかとたづねた。そしてやつと彼女の考へで、二十弗ばかりだといふことになつた。そして、彼女の乘る汽車が出るまでに、もう十五分しかないこともわかつた。

「さあお出で」ジョォジは言つた。「これから切符を買つて來よう。」

ジョォジの話では娘は不自然な程突然、泣くのをやめて、今まで泣いてゐた樣子はけろりとなくなつてゐたといふことだ。

「いゝえ」と彼女は言つた。「あたしにお金を頂戴、あたしが自分で買つて來ますから。」ジョォジは皮肉な顏をした。「貴方はあたしを信じて下さらなかつたでせう。あたしを信じて下さらなくちやなりませんわ。でなければ、あたしどなたか他の方を見つけなくちやなりませんわ。ぢやこれでお別れしましようね。」

ジョォジはちよつと躊躇した。それから彼は獨りで考へた。「この女が俺を一杯食はしたつて何だ？　俺の金をもつて四十二番街の家へ行つたつて何だ？　いづれにしろ俺は今までだつて、しやうのないお人好しぢやないか。」そして、彼は彼女に金を渡した。

彼女は彼が考へたとほりにしたにちがひない。といふのは、彼女は妙な獨特の手つきで握手をして、じつと彼を見つめてゐたからだ。

「貴方は疑ぐり深いのね」彼女は言つた。「でもいゝわ。貴方は親切にして下すつたから、あたしのニウヨオクの住居を申し上げるわ。そちらへいらつしやいね。」……

彼女が彼を待合室にのこしたまゝ行つてしまつてから、彼は歸つて來て、輕卒にも吾々一同にその話をしたのだ。勿論吾々は、彼のセンチメンタルな赤ん坊じみた行爲を散々冷やかした。それで彼は自分の武者修業が少々氣恥しくなつた。しかも彼は全くそんなたちの男ぢやなかつたので益々もつて恥ぢてゐた。

晩餐の時にバアジエスが、彼とその話をしあつた。

「僕もそんなのを知つてるよ」とバアジエスは威丈高に言つた。「きつとその女は別れぎはに、君にあつさりと接吻したらう?」

「いゝや」ジョオジは答へた。「しかも妙なんだよ、僕はしてほしかつたんだからね。君だつて考へるだらう、恩になれば——」

「さうかい、では、君の名前と住所とを書きとめていつて、いつか御恩返しをすると言つたんだね!」

「どうしてその反對さ。自分で自分の居所を教へたよ——そこにすつかり荷物が預けてあるんだつてね。それで、後になつて、いま〳〵しくなつたもんだから、僕はそこへ行つて見たんだ、何もありやすまいといふことは

わかつてたがね。」

「で何もなかつたかい?」

ジョオジは肩をすくめた。「いまこの廣間においてあるあれつきりさ。あのスートケース。すつかり——すつかりあの娘の言つた通りさ。」

「僕は卒直に認めるがねえ」バアジエスは言つた。「こんな話は今までに聞いたことがないね。だが二十弗も金がはひつたのに、この町を去つてゆくやうな娘は——男にしても——先づないね。きつとさうぢやないよ。その娘はその近邊にうろついてゐるよ。風來坊だからきつとそこへ舞ひ戻つて來るよ。若し君が、相當長い間その邊へ行つて見てゐたら、大抵毎晩、第六廣小路の三十三番街の近くで會ふよ、僕は賭けをしてもいゝ。」

そこで彼等はそのことで五弗賭けた。尤も私はそんなことを眞面目にとつてはゐなかつたが。

それから三週間ばかりたつたある晩、ジョオジは、はひつて來ると眞つ直ぐにバアジエスのそばへ進んで行つた。「何で?」バアジエスも吾々と同樣、すつかり忘れてしまつてゐたので、かう訊ねた。

「娘に會つたんだよ」ジョオジは誰の眼も、まともに見ないで口の中で言つた。「第六廣小路と三十三番街の角で。」

「話してくれたまへ」バアジエスは内心は冗談で言つた。そこで吾々はその話の後日譚を聽くことになつた。

ジョオジは休日をロング・アイランドで過して八時十分の汽車に乘つた。彼は九時十五分頃にヘンジイ驛で降りて、それからぶら〳〵歩いて行かうと思つた。すると、三十三番街と第六廣小路との角で、ばつたりぶつかつ

たのが、他でもないその娘だつた。ジョォジの話によると、彼は何か考へごとをして、うつかり歩いてゐると、誰か彼に呼びかけたのださうである。

「どこか御用でいらつしやるの？」

突然顔をあげて見ると、それが彼女だつたのだ。彼女は二三歩彼を追ひこしてから、歩道の眞ん中でぴたりと向きあつて、小柄な洗濯女みたいに兩手を腰にあてた。彼は少々むつとした——だが、あの事件からもう大分たつてゐる。で彼は皮肉にからかつてやらうと決めた。

「一緒に行かう」彼は靜かに眞似をして、彼女と一緒になつた。「君はどこへ行くつもりなの？」

彼女は返事をするかはりに、彼のそばへちよこ〳〵とかけ寄つて彼の兩肩をつかみ、ぢつと彼の顏に見入りながら、ゆつくりと首を前後に振つた。

「あたし何か食べたいのよ」彼女はこれだけ言つた。ジョォジは肩をすくめて、ペエバア軒へ行つてはどうかと言つた。彼女の物ほしさうな顏つきが彼にはひどく不愉快だつたので、二人で並んであるきながら、こつそり彼女をぬすみ見た。彼には何だか彼女が此の前よりも痩せて、榮養不良になつて、小さく、見すぼらしくなつたやうに思はれた。しかし無邪氣なところは變りがなかつた。それは彼女が罪をおかしてゐる證據だつた。といふのは、誰だつて五週間も町をぶら〳〵歩きまはつてゐて汚れに染まずにはゐられないからだ。で、彼女もしよつちゆう汚されてゐたにちがひない。それでゐて、他の娘なら誰でも早速言ひわけをはじめるだらうのに——彼女は、潔白な、屈託のない表情をして彼とならんで歩いてゐた。（ジョォジは稀な人間性の分析家だつた。）

「貴方にお目にかゝつて運がよかつたわ」彼女は言つた。「あたし今日は何も食べてゐないんですもの。」

「何故特に僕にだい？」ジョォジは皮肉に言つた。「他の人だつていゝぢやないか？」

「さうよ」彼女はしづかに言つた。「いつも誰かしら、あたしをランチにつれてつて下すつたり、他のものをおごつて下さつたりするのよ。だけど今日は一日中お腹が空かなかつたのよ。あたしドックへ行つて船を見て來たの、あそこへ行つて見ると、まるで世界の繪を見るやうよ。船といふ船がみんなどつかの國の匂ひがしてるんですもの。」ジョォジは、二人がこの前會つた時のことを言はないで、彼女に復讐してやらうと決めた。若し彼女が良心をもつてゐるなら、それは彼女を苦しめたぢらう。「ねえ、ちよつと」彼女は、すぐに、すつかり思ひ出した。「貴方、あたしのお友達でせう。だからお願ひしてもいゝわね——あたし着物を註文したんで十弗いるのよ。あたしまだ古い着物を着てるのよ。これぢや寒いわ。」

「ふむ！」ジョォジは喘ぎながら言つた。「隨分思ひきつたね！」

「えゝ、あれを註文したのは、少し思ひきりがよかつたかも知れないわ」娘は同意した。

ジョォジは、健氣な決心をしたものだ。ペアバア軒の給仕頭が、ジョォジのシャツの白いのを見て、ほつと安心すると、可哀想なジョォジは、好奇心で矢も楯もたまらなかつた。彼女は何と言ふだらう？　彼女はどう言ひ拔けるだらう？　それとも、彼女はあつさりと、詐欺を白狀するだらうか？　ジョォジを、あれやこれやと推測させておきながら、當の相手は彼のそばから離れて、おちつき拂つて、滿足しきつて、部屋の中を見廻つてゐた。彼はもはや我慢ができなくなつた。

「僕は、君がチリコスへ歸つたんだと思つてゐたよ」ジョォジの調子は、ひどく皮肉だつた。彼女はちらりと彼を見た。そして彼は、彼女の眼にかすかな樂しみの光と、かすかな憂鬱の影とを見たやうに思つた。

「あたし忘れてたわ。貴方が最初にそのことを聞きたがつてゐらつしやるだらうつてことを」彼女は言つた。「さうよ。あたし貴方に別れてから、汽車に乘つたわよ」——彼女は彼の顏色を見ながら、ちよつと言葉を切つて、それから又繰り返した——「あたし汽車に乘つたわよ——そしてアルバニイまで行つたの。すると、立派な男がやつて來て、あたしのそばに腰をかけて。そのうちに二人で話をしはじめたの。その人は背の高い赭ら顏の、黃色い髭を生やした人で——貴方よりづつと年上で——そしてトムつて名前だと言つてたわ。その時あたし一人でつく〳〵考へてたのよ『お前は、おつ母さんに冬中働らいて、着物をこさへて貰つておいて、着のみ着のまゝで歸らうとしてゐるんだ。お前は、あの下宿屋から荷物を受け出すまでは、ニウヨオクを去つちやいけないのだ。』それであたし、荷物を持たずにチリコスへ歸つて行くのが氣がゝりになつたの。それであたしトムにそのことを話したの。するとあの人が言つたのよ。『ぢや、アチカで降りなさい。さうすれば、僕がニウヨオクまで連れて行つて、お前の下宿に殘してある着物を受け出してあげるから』つて」

「これは又話が變つて來たね」ジョォジは言つた。

「わかつたでせう?」彼女は晴れ〳〵しく答へた。「あたし貴方に言つたでせう。ニウヨオクの見殘した場所を見なくちやならないつて。恰度あつらへ向きにトムが現はれて來たのよ。で、あたしたちはこちらへ引き返して來て、トムは自分でしてやると言つたことを、すつかりしてくれたのよ。ところが下宿へ行つてみると、着物が

もう失くなつてゐるんです。さうして下宿の人たちは、若い人が來て持つて行つたつて言ふんです。あたしてつきり貴方だと思つたのよ。でも、貴方はどこにゐらつしやるかわからなくて困つちやつたの」彼女は彼の顏を見て微笑しながら語りつゞけた。「で、しやうがないから、この前貴方にお眼にかゝつた場所の前の方を、あちこち歩き廻つてみることにしたの。するとトムが、そんなことをしちやいけないつて言ふんでせう。トムは全くあたしに親切でしたからね。あの人はあたしに部屋を借りて、二週間分先拂ひをしておいてくれたの。そして、いゝ着物も買つてくれたわよ。毎晩二人で外へ食事に出かけて行つたの。」

「そのトムはどうしたんだね?」ジョォジはちよつと皮肉な調子で訊ねた。

しかし、娘はその皮肉には氣がつかなかつたらしい。と云ふのは、彼女は前よりも、もつと優しい聲でつゞけて言つたからだ。「氣の毒だわトムは、あの人にはわからなかつたんです。あたし何故だか知らないけれど、あの人にはわかりつこはないと思つたわ。あの人病氣か何かだつたに違ひないと思ふわ。何故つて、これまであんなに親切にしてくれてゐたのに、それが急に——わかつたでせう。あの人がどんな野心を起したかつてことは、氣の毒だわトムは!」

「これはお惚氣だね」ジョォジは身體をゆすりながら叫んだ。

彼女は、彼の顏をじつと見つめながら考へこんだ。「あたし、貴方だつて矢つ張りわかつて下さらないんぢやないかと思ふわ。さうぢやなくつて?」彼女は訊ねた。「あの人が惡いんぢやないのよ——あたしわかつてるわ。あの人はそんな卑しい人ぢやないわ。たゞ、わからなかつたんだわ。だけと勿論あたしは、そこにゐるわけにはい

かないでせう。そしてあの人に戴いた着物を着てるわけにはいかないでせう。それであたし或る晩家を飛び出しちやつたの。それは一週間前のことよ。」

「で、今どこに住んでゐるの？」

「今んとこ、あたし部屋がないのよ——」

「何だつて！」思はず彼は叫んだ。「まる一週間も？　だが——」

娘は合點のゆかない微笑を洩らした——ひよつとすると、腹の中でせゝら笑つてゐたのかも知れない。「夜になるとね」彼女は靜かに言つた。「あたし、見かけの立派な家をめがけて、玄關のベルを鳴らしたの。そして、疲れて行くとこがないから、一晩眠らして下さいつて頼んだの。」

「それで——？」ジョオジは、どうなつたことかと、はら〳〵しながら訊ねた。

「それで相手がわかつてくれなかつたことは、一度しきやないわ。その時には、又外の家へ行かなくちやならなかつたのよ。」

ジョォジは、テーブル越しに彼女に向つて指を突き出した。「僕は、何故君の話を眞面目で聞いてゐたのかわからない」彼は荒々しい聲で言つた。「だが、多分君も心の底は、まつすぐな女に違ひないと思つたからだらう。どうだ。ほんたうのことを僕に話してくれないか。娘が仕事にありつくのは、むづかしいつてことは、よくわかつてゐる。だが君は、ほんたうに仕事を探してゐたの？」

「仕事を探すんですつて？　あたしが？　いゝえー」彼女は、びつくりしたやうな顔をした。「あたし、こゝで働

らかうなんて、氣はないわよ。あたし、いろんなものが見たいの。そして、見たり感じたりするものがいくらでもあるでせう。昨日、あたし町を歩いたのよ——隨分遠くまで歩いたわ。朝早くから、お晝近くまで。あたし、大きな、ゆら〳〵ゆれる鋼鐵の蜘蛛の巣の間から、屋根の上まで登つて行く、長い立派な通りまで行つたの。さうすると、たうとう何哩も何哩も先まで、煙つた町が平たく擴がつてゐるのが見えたわ——そして、通りといふ通りは子供等で湧きたつてゐたわ。考へてごらんなさい！　それは皆、見なくちやならないんですもの——そして、あたし、どれがどの通りなんだが、ちつともわからなかつたのよ！」

ジョォジは、自分ながら、妙な、狐につまゝれたやうな氣になつたと、言つてゐる——と言ふのは、暫くの間彼は、ほんたうに彼女を信じたのだ。彼は、自分では夢にも思ひまうけなかつた世界——彼があまりに、知り過ぎてゐるので、永久にその中へ、はひつて行けない世界、を見てゐるやうな氣がした。彼は胸が痛くなつた。娘は、彼を燃やし盡す、小さい白い炎であつたのかも知れない。それで彼は、苦しさのあまり、すつかり彼女にそれを言つてしまはなければならなかつた。だが、彼女は小さい頭を、尤もらしく振つた。

「いゝえ」彼女は言つた。「それは、貴方が知らなさ過ぎるからですわ。」

だが、この不思議な氣持は、勿論、ほんの一瞬間しかつゞかなかつた。それから、彼は自分の常識に還つて、自分の思つてゐることを彼女に話して、彼女と別れた。

だが、一番不思議なことは、彼女が、彼に別れたことだ。彼の言ふところによると、彼女は、彼の言ふことを、小鳥のやうに頸をかしげながら、すつかり聞いてゐて、彼の話が終ると、前へ寄りかゝつて、兩手で彼女の一つ

の手を握つて、それを彼女の胸に押しつけたと言ふことだ。それから、彼女は、眼に一杯涙をためて、今にも泣き出すかと思つてゐると、突然、笑ひ出した。

「又、お眼にかゝりましようね」彼女は、きつとした聲で叫んだ。「あたし、是非、貴方にお眼にかゝりたいと思つた時に、又お眼にかゝるわ——」

それから、ジョオジは、ぶり〳〵しながら家へ歸つた。

「なる程」バアジエスは話がすむと、五弗紙幣を、びら〳〵見せびらかしながら言つた。「あんまり面白い話だつたから、聽き賃を拂ふよ。僕が、あの十弗の半分持たう——」

「十弗つて何だい？」ジョオジは、相手の話をさへぎつた。

「ほら、君が、その娘の着物代にやつた十弗さ」かう言ひながら、バアジエスは、五弗札を差し出した。

ジョオジは、その場に立ち上つて、眞つ赤になつて、私たちが笑つてゐやしないかと思つて、私たちの方を見た。それから、彼は詰まるやうな聲で、「有難う」と言つて、それを受け取つた。

一九一三年作

もう一つの恩知らずの話

夜おそく、第五廣小路を歩いてゐた時、私は、二つのアーク燈の間の、薄暗い歩道で、彼が私の前にゐたのを

見た。ひどく寒い晩だつた。彼は首を兩肩の間にちゞこめ、兩手をポケットへ突つこんで、足を決して地面から上げずに、ずる〳〵引き摺りながら歩いてゐた。私の見てゐる眼の前で、彼は肱暈をしたやうに、ふら〳〵と横を向いて、風をよける角になつてゐる、或る建物の壁にもたれた。はじめ私は、彼が風をよける場所を探してゐるのだらうと思つた。ところが、そばへ寄つてみると、彼の足が不自然に硬ばつて、頰を冷たい石の上に押しつけて、アーク燈の光が、ちら〳〵彼の落ちこんだ、閉ぢた二つの眼の上を、照らしてゐるのに氣がついた。その男は眠つてゐたのだ！　眠つてゐたのだ——薄い着物の隙間や、ぼろ〳〵になつた靴の穴から、冷たい風がひゆう〳〵はひつてゐるのに。硬い壁に、立つたまゝもたれて、癲癇患者のやうに足を硬ばらせて、眠つてゐたのだ。こんなに、ぐう〳〵眠つてゐるところは、何となく野獸的な感じがした。

私は、彼の肩をゆすぶつた。彼は、私の手よりも、もつと亂暴な手で、しよつちゆう眠りを覺まさゝれたことがあるかのやうに、恐縮しながら、ゆつくり眼を開いた。そして、殆ど、意識があるのか、ないのかわからないやうな樣子で、私をじろ〳〵見た。

「どうしたんだ——どこか悪いのかね？」私は訊ねた。

彼は、かすかにもの憂げに、何か口の中で言つた。そして、それと同時に、足を踏み出して、どこかへ行かうとするやうな樣子をした。私は、彼の口のところへ耳をもつて行つて、何を言つたのか訊ねてみた。

「二晩、眠らないんです」太い聲が聞こえた。「三日の間、何にも食はないんです」私が手でさわつてゐると、彼は從順にそこに立つて、少し身體をふら〳〵させながら、こはゞ〳〵眼を開けたり、閉ぢたりしながら、ぼんやり

私を見つめてゐた。

「さうか、それぢや來給へ」私は言つた。「何か、食べる物を見つけて、君をベッドの上に乘せてあげるから」彼は夢中の人のやうに、ふら〳〵して、前へのめりかゝつては、ちよこちよこと身體の平衡をとりながら、おとなしく私の後からついて來た。時々、彼の厚い唇から、皺嗄れ聲で、何かむにや〳〵譯のわからない言葉が出た。「どうも、歩きながら眠つてゐたのぢや。」彼は、何べんも繰り返して言つた。「しよつちゆう追ひ立てられ通しで。」

私は彼の腕を取つて、或る終夜食堂の、白いドアの中へ連れて行つた。彼をテーブルにつけてやると、彼は、すぐに正體もなく眠つてしまつた。私は彼の前に、ローストビーフと、マッシュドポテトーと、二つのハムサンドイッチと、コーヒ一杯と、パンとバタと、大きなパイの片とを並べてやつた。それから、彼を起した。彼は合點のゆかないやうな顔つきをしながら、私を見上げた。心からの感謝と、愛と、眞情とが、一杯あふれてゐた。私は自分の血管に、キリスト教的博愛の血が、熱く流れるのを感じた。私は椅子に背をもたせて、彼が食べるのを、じつと見てゐた。

最初の中は、彼は日頃の習慣を忘れてしまつたやうに、不作法に食べてゐたが、機械的に少しばかり、食事の作法を使つた——多分、母親が彼に教へこんだのだらう。彼は、ぶきつちよに、ナイフとフォークを、右手から左手に持ち代へ、それからナイフを下において、左手で美味さうなパンの片を取り上げた。コーヒーを飲む前に茶碗から匙を出して、パンにバタを薄く、骨を折つて擴げた。彼の動作はまるで夢遊病者のやうで、私は、何だ

か人間といふものが、出來上るのを見てゐるやうな、不思議な感じがした。

食事が進むにつれて、樣子が、がらりと變つて來た。暖かさと、食物とが、彼の淡い血液に、熱と榮養とを與へ、餓ゑきつた身體の、神經中樞に氾濫した。彼の二つの頰は、忽ち眞つ赤になり、全身が見る〳〵眼覺めて來て、眼はぎら〳〵光つて來た。少しばかりの上品なところは、あとかたもなくなつた。彼は、亂暴にパンをスープの中へつつこんで、大きな片を口の中へはふりこんだ。コーヒーは一息にぐつと飲み干してしまつた。彼は人類の子孫ではなくて、一個の個人になつた。野獸のゐたところに、精靈が住んでゐた。彼は人間だつた！

この變り方が、あまりひどかつたので、それに氣を取られて、私は彼のことをもつとよく知るのを待つてゐることが出來なくなつた。それでも、私は彼が食事をすますまで、じつと我慢してゐた。

最後のパイが失くなつてしまふと、私は卷煙草の箱を出して、それを彼の前においた。彼は、それを一本取つて、私のつけてやつたマッチで火をつけた。「有難う！」彼は言つた。

「一晩寢るのに、いくらかゝるかね——二十五仙？」私は訊ねた。

「はあ」彼は答へた。「有難う！」

彼は少し苛々しながら、テーブルを見て、大きな煙の雲を吐き出した。私はその機會を捕へた。

「どうしたんだね——仕事がないの？」

彼は食事をはじめてから、はじめて、じつと私を驚いたやうな樣子で見つめた。「さうでさあ」彼は、ぶつきらぼうに言つた。私は彼の眼が、茶色だと思つてゐたら、灰色だつたので、少し驚いた。

「しやうばいは何だね？」

彼は暫くの間答へなかつた。「煉瓦積みでさあ」彼は、ふくれつ面をして言つた。一體この男は、どうしたつて言ふんだらう？

「君はどこから來たの？」

同じ調子で「アルバニイから」

「こちらに長くゐるの？」

「へん」私の客は、身體をのり出して言つた。「一體全體、君は、僕を何だと思つてるんだね。速記者とでも思つてんのかい？」

暫くの間、私はびつくりして、ものも言へなかつた。「なあに、僕は、ほんの君に話がして貰ひたかつたんだよ」私は力のない聲で言つた。

「さうぢやない。君は、僕に一握りの物をくれて、何かあはれつぽい話を聞かうつてんだらう。君にそんなことを問ふ權利があるのかい？　僕あ、君がどんな男かつていふことを知つてるんだ。金がはひいつたもんだから僕に御馳走して、それで僕を買ふことができると思つてるんだらう。」……

「馬鹿な！」私は叫んだ。「僕は、全く慾得を離れてやつてるんだよ。君に御馳走して、それで僕にどんな利益があると、君は思ふんだい？」

彼は、私の卷煙草に、もう一本火をつけた。

「思ふ存分の、利益を得てゐるぢやないか」彼は、微笑した。「いゝかね、君は、貧乏な飢ゑた奴の命を助けりや、いゝ氣持ちになれると思はないかね？　ちえつ！　君は、一週間もいゝ氣持ちで、ゐられるぢやないか！」

「ふん、君は實に妙な男だね」私は憤つて言つた。「僕は君の頭の中に、恩といふ考へが、少しだつてあるとは信じないね。」

「恩だつて、ちえつ！」彼は、づけ〳〵と言つた。「何のための恩だい？　僕は、僕の幸運を感謝してゐるんだ。君に感謝してるんぢやないんだぜ――わかつたか？　僕でなくたつて、誰でもよかつたぢやないか。僕を捕まへなきや、誰か他の行き倒れを、君は探したらう。いゝかね。」彼は、テーブルの上へ、身體をもたせかけて、說明した。「君は、今夜誰かを助けなきやならなかつたんだ。僕にはわかる。僕もさういふ道樂をもつてゐるんだ。同じ穴の貉さ。」

そこで私は、この恩知らずの煉瓦積みに別れて、たゞ一人私を理解してくれてゐる、ドルシラを起こした。

一九一三年作

革命繪巻

〔これは小說ではなくて、ボリシェヴイキ革命直前にリガの戰線を訪問した記事である。〕

一、戰線への途中で

ペルチック驛の驛長は「アメリカ使節」一行のために、特別に一等車の車室（コムパートメント）を一つとつておいてくれた。彼は私たちのことをさう呼んでゐたのだ。塹壕へ、志願して出かけてゆく一人の正教會の牧師が、丁寧に私たちと一緒に旅をさせて貰ひたいと頼んだ。彼は、大きな、丈夫さうな男で、廣い、素朴な、ロシア人風の顏をして、にこ〳〵笑つてをり、赤い大きな髭を生やして、無闇と話をしたがつてゐた。

「まつたく」と彼は歎息を洩らしながら言つた。「革命のために教會の民衆をつかむ力は衰へましたよ。豫備兵の帽子には、十字架と、『信仰と、皇帝と、祖國とのために』といふ言葉とが記してあつたものですが、信仰といふ文字も他の文字と一緒にかきむしつてしまひましたからな……」彼は頭を振つた。「以前の教會の祈禱書には神を『天の皇帝』になぞらへ、聖母を『皇后』になぞらへてありましたが、吾々はそれにもうお別れをしなくちやならなくなりましたからな。——民衆は神を侮辱するのはいやだといふんです。彼等の言ひ草を聞くと……」

私たちが、彼の軍隊での仕事の話をつゞけてゆくと、彼の顏は無限にやさしくなつて來た。

「聯隊で祈禱をするときには牧師は各國の平和を祈るんです。すると兵士どもが『無併合、無賠償』と附け加へろと叫ぶんです！」それから旅をしてゐる人、病氣をしてゐる人、惱んでゐる人のためにお祈りをすると、兵士どもは「戰爭のために荒された人たちのためにもお祈りをしろとどなるんです……兵隊たちの希望どほりお祈りをしない牧師はひどい目にあつちやふんです！」

各驛毎に列車は長時間停車して、旅客が、待合室でぽつぽと息を吐いて、うれしさうにがや〳〵騷ぎながら何杯もお茶を飲んだり、たらふく食事をしたりする時間を與へてゐた。その合ひ間に全くの見知らぬ人や、士官や

非戰鬪員等が、一緒くたになつた。

牧師は、トランス・カスピアのタシケントに住んでゐた。そこに彼は細君と五人の子供とをもつてゐた。彼は盜難局といふ風變りな制度の話をした。盜難にかゝつた人たちは、そこへ行つて、盜まれた品物を、價格の二割引で回收することができるやうになつてゐるといふことであつた。痩せつぽちの、小柄な學校の教師が、この夏ドン河畔のロストフで盜人大會が開かれ、ロシア全國から代表委員が集まつて、警官の暴行と、背德とに對して政府に正式の抗議を送つたといふ話をした。すると肥つちよのボルコウニクが、ドイツとオーストリアとの戰時俘虜大會がモスコウで開かれて、八時間勞働を要求して——それを貫徹したと話した。

戰線の軍隊が十月一日に塹壕を出てペクロフのお祭りに歸るといふ噂さがあつた——それからまだ四日しかたつてゐない。誰も彼もこの途方もない荒廢が今にも起りはしないかとびく〳〵してゐた。……何百萬といふロシアの軍隊が戰爭をやめて、めいめいの町や、首府や、村へ歸つたら一體どうなるだらう？　年取つたボルコウニクは呟いた。「もう駄目だ。ロシアはまけだ。それに暮しが不自由になつて、生きてゐる甲斐もない。もう何もかもやめちまへばいゝんだ。」この男と、フランス語を話す、理論だけでは革命家の將校がひどく熱心に、しかし丁寧に議論してゐた。牧師は、百姓娘に、子供を將校にしてやると言つて口說いたある軍人の、他愛もない話をしてゐた……

明りは薄暗く、その上、ぼつ〳〵しかなく、しかも車内には火の氣はなかつた。牧師は慄へてゐた。「ふむ」彼はたうとう齒をがた〳〵いはせながら言つた。「これぢや寒くて起きてなんかゐられやしない！」かう言ひながら

彼はその場に、長いスカートの外に何もかけずに、ごろりと横になつて、すぐに鼾をかきはじめた……

私たちは翌朝非常に早く起きた。身體は硬くなつて痺れてゐる。太陽は霜の降りた窓ごしにきら〳〵輝いた。小さい子供がお茶をもつてはひつて來た——砂糖のかはりにチョコレート・サンデーがついてゐた。列車は豐穣なエストランドを横ぎつてつき進んで行つた……

二、ヴェンデンの革命自治體

二階のがらんとした敷物もしいてない大きな室の中で、忙がしさうな速記者の騷ぎと、給仕や委員の右往左往する中で、第十二軍の神經中樞がはたらいてゐた。それは革命の勃發當初に、兵卒たちによつてつくられた、自然發生的な民主的な機關だつた。猶太人らしい顏つきをした、品のいゝ青年將校が、テーブルの後ろに立つて白い條のまじつた頭髪の間へ手を入れて、心配さうに指を走らせてゐる。その間に、緊張した無數の不平が、彼のところへ押し寄せて來る。二人、將校がまじつてゐるだけで、大部分は兵卒ばかりの、塹壕の聯隊から派遣された四組の委員が、一度に革命自治體（イスコソオル）に要求を持ちこんで來てゐた。或る聯隊には殆んど靴が一足もなくなつてゐて、イスコソオルは六百足の靴を送ると約束しておきながら、六十足だけしか送つてゐなかつた。ひどくぼろ〳〵の服を着けた、別の委員の非公式の代表者は、砲兵には冬着の毛皮の外套が配給されたが騎兵はまだ夏の制服のまゝでゐると訴へた。……まだほんの子供みたいな一人の下士官は、イスコソオルは口さきでは大層なことを言つてゐるが一向實行してゐる樣子がないのはけしからんと憤慨して叫んでゐた。

「さうだ、さうだ」と青年將校はぼんやり答へた。「すぐに人民委員に文書を出しておかう……」

小さいテーブルの上には、パンフレフトや新聞紙がうづ高く積まれた。その中には、エリゼ・レクリユの『無政府と教會』が眼にとまつた。そばの壞れた椅子にすわつてゐる一人の兵卒は、ペトログラードの全露ソヴエート實行委員會の正式機關紙イスヴエスチアの新政府成立に關する記事を聲を出して讀んでゐた。そして彼が立憲民主黨の閣員の名を讀み上げると、聽者は一齊に笑ひ出したり、皮肉に、萬歳と叫んだりした。窓の側には、第十二軍の副官ヴオチンスキイが襟までボタンをつけた半軍服を着て立つてゐた。彼は、小柄な男で、青い眼は、厚い眼鏡のうしろに鋭く光つてをり、頭髪も髭も針金のやうな剛毛だつた。この男は、有名なシベリヤへ流刑にされた男で、『七死刑囚物語』よりももつと恐ろしい『スメルトニキ』といふ書物の著者だ。

「私の仕事はね」と彼は私たちに言つた。「リガを奪回するための軍事機關をこしらへることなんです。ところが、こちらの條件は實にひどいんです。軍隊には何もかも缺乏してゐるんですからね——食糧も、被服も、靴も、彈藥もですね。それに道は大變な道で、おまけに二週間も雨が降りどほしでせう。輜重用の馬は、榮養不良で疲れきつてるし、たゞ吾々が飢死にしないだけのパンをとつてくれる位がせい〳〵なんです。しかし戰線で不足してゐるものゝ中で一番重大なものは、靴と、パンフレットと新聞とです。御承知のとほり、革命後は軍隊で、書物や宣傳文書を無限に吸收して、それでゐて、まだ〳〵渇を醫やすことはできないんです。それが今ばつたり中斷されたでせう。吾々は軍隊内へ凡ゆる書物がはひつて來ることを禁止してゐないばかりか、むしろ奬勵してゐるんです——軍隊の士氣を維持して行く上にそれが必要なんです。コルニロフ事件以來、特に民主黨大會以來兵

卒はひどく不穩になつてゐます。さうです、たゞ武器をすてゝ歸鄕した者も隨分多いのです。ロシアの軍隊はもう戰爭がいやになつてゐるんです……」

ヴォイチンスキイは三十六時間も眠つてゐなかつた。それでゐて彼は精力が少しも衰へないで、吾々に挨拶をして、階段をかけおりて泥だらけの自動車に乘つた——この自動車は深い泥濘の道を、しかも今にも嵐がやつて來さうな空模樣の下を、これから士官と兵卒との紛擾を裁くために出かける彼をのせて一時間四十哩の速度で走らうとしてゐたのだ。

三、ヴェンデンにて

外では雨が降つてゐた。そして泥だらけな街路の歩道は無數の靴に踏まれて、歩くのも困難だつた。市中は敵の飛行機に備へるために暗くされてゐた。たゞシャッターの隙間を洩れる僅かの明りと、ブラインドがぼんやり赤く染まつてゐるだけだつた。狹い通りは思ひがけなくまがつた。暗がりの中で私たちはたえまなく、卷煙草の火をちら〳〵光らせた通つてゆく軍人とぶつつかつた。すぐそばを闇の中に雷のやうな音をたて、扇形に泥を跳ねとばしてゆく大きな軍用のトラックが幾臺も幾臺もつながつて通つて行つた。私のすぐ前で誰か燐寸をつけた。それで、一人の兵卒が壁に何か紙片を貼りつけてゆくのが見えた。イスコゾオルの一員である私たちの案內者は聲を出しながら懐中電燈を照して、そこへ走つて行つた。それには次のやうに書いてあつた。

「同志兵卒諸君！

ヴェンデンの勞兵ソヴェートは、九月二十八日木曜日四時公園にて集會を催す……」

× × ×

小さいホテルで、そこの主人は、半ばは敵意から、半ばは踏み倒されやしないかと恐れて空いた室がないと言つた。

「あの室はどうしたんだ？」私の友人は指でさし示しながら訊ねた。

「あれは司令官のお室です。」彼はつつけんどんに答へた。

「それは自治團（イスコゾオル）で徵發する。」と相手は言つた。私たちはその室へはひることになつた。

レットランド生れの百姓の婆さんが、私たちにお茶をもつて來て、もみ手をしながら、ベラ〳〵ドイツ語を話して、たゞれた眼で私たちの樣子をぢろ〳〵見た。「旦那樣方は外國のお方ですね。」彼女は言つた。「有り難い、當節のロシア人と來たら、汚ならしくて、お拂ひもしませんので、」彼女は前屈みになつて囁嗄れ聲で私語いた。「ドイツ兵がも少し急いで來れたらいゝのですが、わたしどものやうな正直者は、みんなドイツの兵隊が來るのを待つとるのでございます。」

そして私たちが床につくと、閉ざした木製のシャッターをとほして、ドイツ軍の大砲が、痩せこけて、着物もろく〳〵着ない、榮養不良のロシア軍の戰線を砲擊する響が遠雷のやうに聞えた。ロシアの軍隊は疑ひと、恐怖と、不信とに、惱まされ、革命はそのために治まるだらうと聞かされてゐたので、そこで、雨にうたれて、死に朽ちてゐたのだ。

四、戰線からの歸途

私たちがプラットフォームに腰かけて、ペトログラード、列車を待つてゐたとき、「アルバート・ライス・ウイリヤムスか、不要の卷煙草をくれてしまつてもいゝと考へついた。そこで、彼はトランクに腰をかけて大きな箱をとり出し、ざく〳〵音をさせた。あたりには數百人の兵卒がゐたにちがひない。僅かばかりの連中がこは〴〵前へ進んで來たが手を出しかねてゐた。大部分の兵卒はずつと離れてゐた。やがてウイリアムスはだん〳〵廣くなつてゆく人垣の眞ん中に獨りぽつちになつた。兵士等は、低い聲で話し合ひながら群がつて集つた。

突然、彼の方へ、三人の非公式委員が、銃劍をもつて、恐ろしい權幕で進んで來た。「君は誰だ？」リーダーが訊ねた。「何故卷煙草をくれるんだ？ 君はドイツのスパイで、ロシアの革命を買收しようと思つてるんだらう？」

プラットフォーム全體に群集がおしかけて來て、ウイリヤムスと委員とを取り卷き、腹立たしげにぶつ〳〵言ひながら、彼を八つ裂きにし兼ねまじい樣子をした。

× × ×

私たちは、身動きもできない程ぎゆう〳〵列車の中へつめられた。定員六人の車室（コンパートメント）へ十二人詰めにされ、通路は群集で一ぱいで通ることもできなかつた。車臺の屋根には百人ばかりの兵士が足を踏みならして、凍るやうな夜の空氣の中で、甲高い聲で歌つてゐた。內部は窓といふ窓はすつかり閉ざされ、誰も彼れも煙草を喫かし、みんなが一緒になつて會話をしてゐた。

ワルクで、蓮葉な若い赤十字の看護婦と若い士官とが、窓から攀ぢ上つて、キャンデーや、ウオッカの瓶や、チーズや、ソーセージや、その他宴會用の食料を殘らずもつてはひつて來た。不思議にも彼等は、私たちの間へ割りこんで來て、すぐにはしやぎはじめた。彼等はそのうちに浮き〳〵した氣持ちになつて、接吻をしたり、いちやついたりした。私たちの車室で二組の男女が半ば座席に××××××しあつた。誰かゞ黑いシエードを曳いて電燈の明りにかぶせた。もう一人の人が扉をしめた。まるで衆人環視の中での痴態だつた……

上段の寢臺には若い大尉がしきりにひどく咳き入つて寢てゐた。しばらく間をおいては、彼はやつれた顏をもちあげてハンケチの中へ血唾を吐いてゐた。そして幾度びも繰り返して叫んだ。「ロシア人は畜生だ！」

列車のごう〳〵といふ響きと、呟の音と、底拔け騷ぎと、爭論との上に、夜どほし、ぼろ〳〵の服を着た兵卒等が、屋上で鼻唄を歌ひながら、律動的に屋上で躍りまはつてゐるのが聞えた。

一九一七年九月作

五、シカゴに於けるI・W・W裁判

大きなベンチに、痩せこけた、もぢや〳〵した白髮を生やした、生氣のない顏に二つの眼が寶石のやうにぴかぴか光つてゐる、口のところでひゞ割れた羊皮紙のやうな皮膚をした男が、ちよこんと腰を下した。死んでから三年もたつたアンドリユウ・ジヤックスンのやうな顏だ。これが、ケネソウ・マウンテン・ランデイス判事だ……この男に、社會革命を裁くといふ歷史的な役割が託されたのだ。

多くの點で、實に風變りな裁判だ。休憩後判事が入廷して來ても、誰一人起立するものがない——判事自らも、大袈裟な形式をやめてしまつてゐる。彼は、法衣をつけないで、普通の事務服のまゝで席につき、屢々席をたつて、陪審席の階段まで降りて來た、彼の一個人の命令で、被告席のそばに啖壺が置かれてあつたので、被告等は一日中嚙み煙草を嚙んでゐることも出來たし又、上着を脱いで、歩き廻つたり、新聞を讀んだりすることを許されてゐた。

被告について言ふなら、私は歴史上にかつてこんな光景が見られたかどうかを疑ふ。彼等は百一名の材木工、農民、坑夫、出版工たちだ。世界の富はそれをつくり出した人のものだといふことを信じてゐる百一名の者だ。

アメリカの社會革命家は、大部分座職に從事してゐる勞働者——被服工、織物工、印刷工等だ。少くも、大都會ではさうであるやうに私たちには思はれる。坑夫や、鐵工や、建築工や、鐵道從業員——かうした勞働者はすべて、ジエー・ビー・モルガンと同じやうに、かたく資本主義制度を信じてゐる總同盟に屬してゐる。ところがこの百一名は戸外勞働者だ。堅い岩を割つたり、材木を伐り倒したり、麥を刈りとつたりする勞働者や仲仕たちだ。荒仕事をしてゐる連中だ。彼等は工業の瘡と——社會の憎惡の瘡とのために、滿身に瘡をおうてゐる。彼等は何物をも恐れない。彼等は、資本家たちの指金で、彼等がこしらへた大きな建物や、彼等が河に架けてゐる大きな橋へ追ひやられる種類の人たちだ。

「さて」彼は言ふ。「これは吾が國に必要な勞働者の部類にはひる人たちだ。自分の仕事をわきまへてゐて、せつせと働き、階級闘爭について譯のわからぬちんぷんかんぷんを喋り廻つてゐる連中ではない。」

彼等は自分の仕事を知つて働いてゐる。だが、不思議なことには、彼等は又社會革命をも信じてゐるのだ。

彼等は、現在獄中にあつて、その通行の時に同志から喝采されてゐる九十餘名の仲間で、保釋中の同志と結んでゐる連中だ。……

その中には、顔の上に岩山のやうにそびえたつてゐる黒のステットソンを被つた巨漢、ビル・ヘイウッドがゐる。若い時のジヤック・ロンドンのやうな顔をしたラルフ・チヤップリン、俠氣に滿ちた顔をして、しよつちゆうかけてゐる綠色のアイ・シエードの上へ赤い艶のある毛髮をばら〳〵振りかゝらせてゐるレッデイ・ドオラン、ひどく物を考へるために額に皺の寄つてゐるハリスン・ジョオジ、クレシイの自由民にしたらよさゝうなサム・スカーレット、眼にスラヴ嵐の溢れてゐるジョオジ・アンドレウイッチ、肥つたバックのやうな顔つきをした、氣むづかしい、つむじまがりのチャーリイ・アシュレイ、西部人式の石のやうな顔をした、若いグロヴァー・ペリイ、ジム・トムスン、ジョン・フォッス、ジエ・エー・マクドナルド、ブース、プランクナー、ロスフイッシヤー、ジョハンスン、ロシエフ等の面々がゐる。

法廷の欄の中に、彼等はごつちやに群がつてゐた。多くの者は上着を脱いでをり、或る者は新聞を讀んでをり、どろりと寢そべつてゐるものも一二人あつた。坐つてゐるものもあれば立つてゐる者もあつた。勞働者の顔や、闘士の顔が大部分だが、辯士の顔もあれば、詩人の顔もあり、外國人の敏感な情熱的な顔もある——だがみんな强さうな顔で、何かしら希望をもつた顔だ。大抵は傷痕のある顔で、中にはきびしい顔をした者も幾分かある。アメリカで、社會革命を代表するにこれ程適した顔を百と一つ集めることはできない。法廷へはひつて來る人々は

言つてゐる。「こりや裁判ぢやなくて會議のやうですね。」

ロシアから歸りたての私には、かうした光景は不思議に親しみがあつた。長い間私は、これはどうも前に見たことのあるやうな光景だと思つた。急に私の頭にある考へが閃いた。

シカゴの聯邦裁判所で行はれてゐるI・W・Wの裁判は、ペテログラアドで開かれた全露ソヴエト中央執行委員會の會議のやうだ！　私にはこの人たちが裁判を受けるのだとはどうしても思へなかつた。彼等は、ぐづ〳〵もしてゐなければ、恐はがつてゐない。泰然として、面白がつて、人間らしい理解をもつてゐる……ボリシエヴイキの革命裁判所みたいに……しばらくの間、私はアメリカのソヴエトの中央委員がランデイス判事を——さうだ反革命運動の罪名で裁判してゐるのを見てゐるやうな氣がした。

一九一八年作

——了——

昭和六年六月一日印刷
昭和六年六月五日發行

不革命思議な戀の人娘

飜譯者　平林初之輔
發行者　佐藤義亮

定價壹圓四拾錢
郵送料拾錢

東京市牛込區矢來町
發行所　新潮社
電話牛込（代）八〇九八番　八〇八八番　八〇七八番　八〇六八番　八〇五八番
振替（東京）一七四二番

東京小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

定價各壹圓參拾錢

アメリカ尖端文學叢書

■世間知らず

フロイド・デル著　寺田鼎譯

エロを展開して讀者を魅了する

純情無垢の少年が、寒村の貧家に生れ、幾多勞働の體驗をなめて、社會主義に目覺め、やがて文筆で立つに至る半生を描く。興味に於ては漱石の『坊っちゃん』に對比し得べき大衆讀物的價値あると共に、社會意識を明かにし、エロ氣分を横溢せしめてゐる。

■夜會服

ハーゲス・ハイマー著　宮島新三郎譯

近代的感覺の亂舞の中に肉の香を

爛熟の極點にある一女性を拉し來って全裸體にし、これを解剖し暴露するその筆の憎きまでの鮮かさ、寢室の睦言。ダンスホールの醉ふやうな雰圍氣。近代的な感覺の亂舞——これ程に現代の魅力あるマダムの行動や心理を描いた作品が他にあらうか。

アメリカ尖端短篇集

周到にアレンジされた「アメリカ文學第一時代」のヒローのオールスター・キャストだ。ジャズとスピードと、エロとグロと、黄金神とアジテーターと、白と黒、どこから見ても『尖端短篇集』の名に背かぬ脈動的一大レヴューだ。

ワイオミングの酒　ヒーミング・ウエイ　阿部知二
暗殺者　ヒーミング・ウエイ　三土漠
遠來の選手　ベン・ヘクト　三土漠
短篇集　アンダソン　長野兼一郎
マイケル・ゴールド集　マイケル・ゴールド　早坂二郎
結婚式　スコット・フィツゼラルド　草加帶
中西部戰線異狀なし　ジョン・リッデル　堀敏一
呆れた愛蘭土人　ジェムタリー　松本正雄
村の醫者　ドライザー　松本正雄
小モオパッサン　ドライザー　堀敏一

附錄　黑人文學集　新山居室　格靜譯

アプトン・シンクレーアの三名著

眞鍮の貞操切符

暴露された米國の正體

世界の謎であるアメリカその資本主義の中に棲息するジャーナリズムを生きながら解剖し、掴み出した五臟六腑を血の滴りと共に讀者の前に投げつけたのが卽ち本書である。その內容は、手に汗握らする、戰慄すべき事實を以て掩はるゝも、一毫の誇張なく、一筋の虛僞だも無い。著者は斷然神明に誓つて、一切は眞實であると絮叫する。

忽ち三十六版!!

價壹圓九拾錢・送十二錢

早坂二郎氏譯

金が書く!!

プロ文學者の立場から、アメリカ現代文壇を批判せるもの。而もブルジョア文藝の深刻なる解剖である。俎上に上せられたる作家無慮百數十名、生きながらにその心臟を剖けば滴り落つる鮮血の一滴一滴に、悉く、金分が沈澱してゐる。

富田正文氏譯

文學戰線に力強く投げつけられた一大爆彈はこれだ!

第十版出來

價壹圓四拾錢・送拾錢

現代人の生活戰術

早坂二郎氏譯

時代は急テンポで進む。不斷の進展、俄然急旋回する展望。端倪すべからざる眼まぐるしさの裡に現代人の思想生活、經濟生活は、複雜化して行く。資本主義文化の價値批判進歩的現代人の常識として、現代社會組織の謳歌者たると排擊者たるとを問はず、齊しく諒抑に味讀すべき「生命の書」であることを闡明する。

1精神讀本　2戀愛讀本
3人體讀本　4社會讀本

第十七版出來

價壹圓八拾錢送料拾錢

本町通り（メーンストリート）

シンクレア・ルイス著
前田河廣一郎譯

忽ち十三版

ルイスの頭上に
ノーベル賞
を飾つた傑作!!

燦然光芒を放つ
アメリカ文學の
北極星を仰げ!!

この一作が彼の輝かしい出世作となり、歐洲の讀書界まで風靡し盡したのは何故か？　古いアメリカニズムへの忠實無比な、寫寫的案内記であるばかりでなく、新しいアメカニズムの爆彈貯藏庫の祕密地圖でもあり、鬪爭プログラムでもあるからだ。現代アメリカ作家の何人と雖も企て及ばぬデテールの精緻を極めた描寫と、鋭い諷刺的機智と、繪畫的な地方色と、そしてそのすべての上に渾然たる藝術的氣品を醸し出したフイニッシング・タッチの鮮かさがその價値を數倍させた事はいふまでもない

すべての道は**ローマ**に通ずると云ふのは昔の諺だ。今、日本のすべての都市の、あらゆる**メーン・ストリート**は**アメリカ**に通じ**ルイス**の「本町通り」に通ずる。

▼四六判特製▼定價貳圓
▼紙數七百頁▼送料拾八錢

80-4